

浦原喜助の兄に転生し
て夜一の許嫁にされた
俺の話

ちーむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

漫画パラ読みした程度の男が転生したら。浦原喜助の兄となり。

気づいたら。あの——四楓院夜一と許嫁になっていた。

『イケメンに生まれたんだから遊びまくるしかねえ』

男のロマンとかっこよさを追求し生きていく

死神・日常生活のお話

モチベのためにどんどん感想を書いてってくださいな。

※タグを一通り見てからの閲覧をお願いします

微クス主人公注意

※原作崩壊

一部独自設定。

昔の時代なのに横文字使ってる所あったり、時系列が数年ズレてたりします。

現世編開始

目次

可愛い弟ができたのと夜一さんとの出	
会いの話	1
得意な話	12
剣の天才と京楽隊長がきた話	24
将来の夢と始解の話	37
進級とマツドサイエンティストの喜助	
の話	53
気になる子の話	63
剣の天才と贈り物の話	78
死神になった俺の話	
死神になった俺の話と白哉坊ちゃんの	160
聞商人みたいな事してたら、にわかで	
も知ってた人が来た話。	99
取引した話	104
改めた婚約の話	112
お見合いとベタな交換条件の話	
122	
碎蜂の話	131
藍染と闘うことになった話	136
弟子の成長と友人と平子副隊長の話	
148	
微シリアス注 母上と隊長の話	

	まずい状況の話	175
	隊長になった夜一さんの話	196
	恋愛話と技名の話	207
	猿柿ひよ里と戦った話	220
	惣右介に相談されたのと増えた弟子の話	233
	潜在能力の鬼の話	248
	副隊長時代	
	副隊長になったのと最新機器の話	
260	スマホの話	271
284	歴史は——と新たな技術者の話	
	身体壊した話	294
	市丸ギンと隊長推挙の話	305
	調査と脱走者の話	317
	ずるい俺の話	333
	魂魄に何かを埋め込まれた話	349
	子供は可愛い話と俺の変化の話	356
	事件の話	364
	男の娘と霊圧制御の話	375
	魂魄消失事件	
	魂魄消失事件の始まりの話	388
393	夜一さんのヤキモチと心の内の話	

	魂魄消失事件の話	402
	100年間のお話編	
	隊長になった俺の話	419
428	白哉坊ちゃんと緋真ちゃんの話	
437	改造魂魄の話と緋真ちゃんの話	
	講師の仕事の話	445
	ルキアと言う少女	454
466	俺だって息抜きが必要だって話	
476	霊刀の話と流魂街の天才児の話	
	日番谷冬獅郎の話	484
	剣八という男の話	494
	入隊の話	504
	頭を抱えた話	513
	志波一心にとっての師範と消えた霊刀	520
	浦原維助という男の話	540
	原作開始	
	紫流という子供の話	549
	逃亡した紫流の話	560
	黒崎真咲の話	574
584	朽木ルキアの話と修行開始の話	

職権乱用と旅禍の話	603	現世の話	714
ちよっかいかけた話と紫流の話	618	先生はやっぱり先生の話	728
藍染死す?と、合わせる顔がない話	632	黒崎真咲の話2	740
黒崎vs維助、夜一との再開…?の話	644	黒崎家	749
		A5ランクの肉の話と、最上位大虚の話	759
応えを聞こうかの話	658	浦原維助参戦の話	772
処刑が始まる話	668	砕蜂vs夜一??ドタバタ装甲車の話?	784
ヴァストローデの話	679	装甲車とRPGと記憶の話	798
浦原喜助との再会の話	693	破面の話と料理の話	810
共同作業の話	702	修行の話	833
現世の話 日常&仮面の軍勢		藍染の笑いの話	844

これだから——の話——

ザエルアポロの話——

ウルキオラの話と惣右介の話——

理想の霊刀と初代霊刀の話——

915 890 875 862

可愛い弟ができたのと夜一さんとの出会いの話

俺は浦原・いすけ維助。

普通の専門学生として自分の好きなことを仕事にしたいくて

そろそろインターンや就職活動が始まるという時期に

俺は死んだ。死んだ理由は覚えてない。ただただ病院で家族に見送られたことは覚えてる。事故か病気が……まあこの際どうでもいい

気づいたら死後———とか小さな男の子に転生した。

前世とは面影もなく、名前も変わった。髪はミルクティー色だし、目は青色で。髪は母親譲り、目は父親譲り。

そして弟の名を聞いて頭にひとつの漫画が思い浮かんだ

弟の名は浦原喜助。

浦原……喜助?? BLEACH……の? あの変な帽子の店主の??

俺は小学生の頃にBLEACHのアニメをちろつと見たりする程度だったけど、さす

がに覚えてる。死神、尸魂界、浦原喜助。いやこれ間違はなくBLEACHの世界だ。

どうやら俺はBLEACHの世界に浦原喜助の兄として転生したらしい。

弟は俺と3歳ほど離れている。まあ、死神にあんま年齢関係ないけども。

こんなことになるならもつと漫画とか読むべきだったなと後悔。

さすがに主人公とヒロインは覚えてるけど。俺の知識中途半端で——つと前世を少し後悔する。

でも、弟は可愛い。前世は兄弟いなかったから嬉しいわ。

弟は俺と同じ髪で、目は母親譲りの色素の薄い色を遺伝したようだ。

俺と似た猫っ毛で、兄サン、兄サンと付いてくるのは可愛い。もう可愛い。

俺の家、浦原家は上級貴族に位置する。

使用人は多いし、毎回お偉いさんが父上と話し込んでるのをよく見る。

そして家庭教師がついている。

霊圧制御の稽古、剣術の稽古、歴史、そして一般的な教養、芸やマナーなど。本当に幼子にやらせていいものなのか？ってぐらい詰め込んである。

「維助兄サン。またサボったんスカ」

「だって、だるいもん」

また怒られるツスよ？つとため息を吐く喜助。

俺と喜助は人間でいう13と10程に成長した。

俺は詰め込んだ教育に耐えきれずサボり魔として興味のない稽古は全てバツかれるという問題児に成長している

「まあ……維助は馬力はあるのにねえ」

つと、頬に手を添えた母上が困ったように眉を下げてた。申し訳ない。

三味線の稽古はいいけど、横笛は嫌だとか。

体術はいいけど剣術はめんどいか。選り好みしてる俺に困ってるようだ。

弟と言えば上がちゃんらんぼらん下がしつかり効果が本当なのかは知らないけど、苦手分野はあれどちゃんと授業を受けてちゃんと結果を出してる。

喜助は興味あることはとことんやり尽くすタイプで、少し疑問に思ったことがあれば3日書齋に籠って調べたり研究したりとクリエーター気質だった。

まあ、俺も俺でガラクタ集めてくつつけてロボット作ったり、機械作って配線ミスって爆発させたりと好き勝手してるんだけどね。

そして俺の家、さつきも言っただけど上級貴族なんだけど。

なにやらあの四大貴族の四楓院家と親しい関係らしい。

祖父、曾祖父よりも前からの付き合いらしく――

俺らも大きくなつたし、粗相しないだろうと正式に四楓院家の集まりに参加することになった。

「うわあ……喜助みろよ、人多いな。死神も多いし」

「維助兄サン。あんまりジロジロみると失礼ツスよ。」

四楓院家はすげー貴族なだけあって、護衛の死神や他の家柄のお偉いさんたちが集まっていた。

よく話聞いてなかったけど、なんか14歳になった四楓院の姫さんの成人祝いだとか。

なんだっけ、名前……

「夜一樣ツスよ、四楓院夜一樣。ちゃんとか挨拶する時無礼のないようにするんスよ？いつも使用人と話すみたいに、可愛いとか綺麗ツスねくなんて言った日には父上に殺されますからね？」

つと念押しされた。さすがに分かつてるって。

父上に呼ばれて2人で寄るとそこには、褐色の肌の女の子とスラリとしたイケメン男性。

「この子が維助、こっちが喜助。俺の可愛い息子らです」

つと父がそれぞれ俺ら頭に手を乗せて、紹介する

「浦原維助です。」

「浦原喜助です。初めまして夕寝様、夜一様」

男の人は夕寝、女の子の父親らしい。

うーん夜一……夜一なんか聞いたことあんだよな……。

それに見た事あるような……引つかかるといふことはまあBLEACH関連で出てくる人なんだろうな。

「それで、この前の話なんですけど、どうでしょう？」

つと父上、何の話だ？つと喜助と目が合ってお互い首を傾げる

「はは、のりすけ則祐に似て本当にいい男に育ちそうだな。髪は2人とも母親譲りなのか。ほうほう。幼いながらに霊圧も高いし、ふむ、」

つと何故か俺を見て何やら品定めしてるようだ。則祐とは俺の父上の名である。

「よいよい、しょうせい小生も気に入った。よし、いいだろう。上はたしか13だったか、15になつたら縁を組ませよう」

「はは、こんな美人な子を貰えるだなんて良かったな維助」

……ん？本当に何の話だ???

本当に何がなにやら分からないまま、後は大人の話ししてるからどこか行つてなさいと開放された俺ら。

「え、喜助、さっきのなんの話だった？」

「縁談ツスよ縁談。つまり維助兄サンと夜一様が許嫁になるんすよ」

つて呆れたように俺を見る。え、そんな話だったの？

「ええ？いきなりじゃね？」

「貴族はそんなもんす」つと本当に10歳か？こいつ、

実は身体は子供頭脳は大人の名探偵だったりしないか??

暇なので庭に来た俺ら。

四楓院家はバカ広いな。大きな池、俺の家の倍あるぞ？

しかも高価な立派な鯉が泳いでやがる。

俺も育てたいな鯉。

なんて池を覗いてると、チヨイチヨイつと裾を引つ張られる

「んだよ、喜助」

つと振り向くと、遠くからこちらに向かつて、

あの女の子。夜一、あー夜一様が歩いてきてた。

目の前まで来ると、何故かムスツとしてる彼女

「お主、維助と言ったな？」

「ああ、はい」

横から兄サン！つと俺の態度が悪いらしくそう注意された。

「お主との縁談、儂と主の親が決めた話。じゃが儂はそちに嫁ぐつもりは無い！」

つと宣言した彼女

「はあ……」

「儂は四楓院家、初の女当主になるんじゃ！女が当主などできぬなどという常識を儂が塗り替える!!なので、主も立場上縁談は断れないであろうが、表向きには保留って事にしておいてほしい」

「はあ……わかりました」

何かすごいな、幼いながらに強い意気込みを感じる。

「じゃが、せっかくの縁じゃ、その……儂と友達になつてはくれぬか？」

つとさっきの威勢はどこへやら。モジモジしだした。

うん、俺は子供趣味じゃないけど。可愛いな、

「俺も急な縁談でちいと戸惑ってたところなんすよ、友達ならくぜひつ。グハッいった、なにすんだよ喜助」

いきなり横腹小突かれたと思つたら

「敬語！」つと怒られた。細かいなあ

「よいよい、俺は堅苦しいのは苦手だな、そのような態度でよい。維助のような者は初めてじゃー！」つと楽しそうだ

「まあ、そういうことなら」つと、納得したような喜助。

「改めて、俺は維助。こっちは弟の喜助だ。弟共々よろしく」

「ああ、俺は四楓院夜一。よろしく頼む」

「よろしく夜一さん」

これが俺と夜一の出会いだつた。

それからたまに遊んだり稽古したりと仲良くして

人間で言うところの俺が15、喜助が12となり、俺が成人した。

「維助兄サン。元服の日ぐらいきちんとしてもらわないと」

元服とは成人の儀の話である。

長々しいものに飽きて俺は抜け出してきたんだが、さすが俺の弟。一瞬で見付かつて捕まえられた。

「喜助は死神になるのか？」

「なんスか急に、そうツスねえ〜鬼道衆でもいいんスけど、維助兄サンもスよね?」

「まあ、可愛い子と出会いあるし。金も貰えるだろ?」

「はあ、全く……維助兄サンはもう成人、いいっスか? その女にだらしない生活いい加減改めましょ? 兄サンのせいでも何人使用人入れ替わつてると思つてんスか」

「いやあ、だつて可愛い子多いんだもん、そりやちよつかいかけないわけなくない? お前も男ならわかるだろ?」

「興味ないっス」

つとバツサリ。

俺は両親が中々の美形なのもあり。ミルクティー色の髪に淡い青色の瞳。

そして美形に上級貴族。

15となつて普通に人間で言う高校生ぐらいに成長した俺はまあモテるモテる。色男の優男として人気だった。自分で言うけど事実である。

いや、遊ばないわけじゃないよね!!

弟といえば、イケメンでしつかり美青年なのに、身嗜みは適当で女には全然興味無し。あつても遊ぼうなんて考えにはならないタイプ。

可愛い使用人が世話役なんかになつて、一人口説いて遊んでみたいの繰り返し返したら。他の使用人からの嫌がらせやら何やらで消えてく人多数、続かないんだよなあ。

「えつ、夜一さんと一緒に真央霊術院に入学？」

「ああ、もうお前も成人したし、通うといい。霜月11月にある試験受けてお前も入学しちゃいなさい」

喜助とガラクタイじつてたら突然来た父上にそう告げられた。

「急だな、霜月11月つてあと2ヶ月じゃん」

「お前なら落ちることないだろう？やる気はないけど、才能はある。いやありすぎる。霊圧ももう既に隊長格はあるだろう？」

「いやそれは大袈裟。あ、ならついでに喜助も入学させようよ」

「ついでつて……」つとジトーつとこつちをみてる喜助

「ほら、喜助兄さんと離れて寂しいだろうし？ほら、一緒に入学しちゃった方が楽だよ、成人してからくつつか規則もないし。どう？父上」

「いや、ボクは別に「そうだな！そうしよう、喜助も受けなさい」ええ」

つと半ば無理やり、俺らは突然ではあるけど試験を受けることになった。

2ヶ月とはあつという間で、まあ試験は余裕。

元々一般教育+αで色々仕込まれてたのもあつて、余裕で合格した。

ちなみに夜一さんは試験にはいなかった、もうなんか決まっていたらしい。推薦？AO
的な？

喜助と俺でそれぞれの項目の首席争いをする感じになった。

座学は全体的に負けたけど、剣術、体術系は俺の圧勝。喜助は鬼道がめちゃくちゃ得意だな。俺は普通。

そのうち浅打という死神が使う斬魄刀の元となる刀を貰って、
斬術の訓練も入ってくるようになるらしい。

まあ、大丈夫つしよ。

得意な話

男勝りな夜一さん、たまに稽古やらなにやらで仲良くなつたつて話はしたと思う。

そんな夜一さんと出会つてかれこれもう数十年

彼女は人間でいう16程になりどんどん身体が成長し、普通の女性のようになつて行つた。

女の子大好きな俺だけど、夜一さんが男勝りな性格なせいか絡みすぎて慣れたのか。全然そう言う欲はわかず。

好きと言つても全く恋愛の意味は持たないし。

相手も全くない。まあ仲良い異性、親友みたいな関係だ。

喜助とも仲良くしてくれてるし、いい人だとは思ふ。

「どうじゃ、維助、喜助。調子は」

「まあまあつスねー」「まあーまあーだなあ」

「全くお主らはそつくりじあの」

「維助兄さんと一緒にしないで欲しいんすけど」

「おいこらまで、喜助どういふ事だ」

最近喜助が反抗期かもしれない。

それより、調子というの浅打、斬魄刀との対話で喜助は順調、俺も順調に対話してなんとかそろそろ始解できそうな段階まで行ってる。

斬魄刀の能力何かなー楽しみ

「あ、それより維助兄サン、次の休み部屋片しに行くんで」

「あー頼むわ」

「まてまてまて、維助。喜助に部屋を片付けさせておるのか??」

っと驚いた表情。

「いや、俺からは頼んでねえよ??なんかこの前。俺の部屋見て掃除し始めてさ、ゴミ屋敷っすか??なんてすごい剣幕で言うもんだから」

「いや、ボクも人のこと言えない部屋なんすけど兄サンのはもう、散らかってるとかそういう次元じゃないんす。寝る場所ないんすよ??」

「実家は全部使用人がやってたからなあ」

後でやろう後でやろうってやってたら、本は出しっぱなし、

機械類は放置、ガラクタ部品は床に散らばり大惨事だ。

「適当さは相変わらずじゃの……」

するとそこへ

「あ、維助さん！またお昼作りに行きますね〜♡」

「ありがとう〜」つとすれ違つてそう言つた女の子に手を振る

そして別の女の子も来て

「維助さん、これこの前部屋に忘れてつたやつ」

「あーそうだった、わざわざありがとうな」

「いえっ！いいんですよ」

なんて顔を赤くした可愛い子から俺が忘れてつた上着を受け取る

「なんじゃ、お主入学して日が経つておらんに友が多いの？」

つと、去つていく女の子の後ろを見ながら首を傾げる夜一さん

「そうなんだよねえ〜交友関係が広いと色々助かるからいいよ」

「ふむ、農もお主を見習わないとな」

「いや、兄サンのは真似しない方が……」

まあ夜一さんは遊びとかしないタイプなのであの女の子達が俺に恋愛的な好意を持つてるとかは考えてはいないらしい。

普通に友達多いやつ認識である。そして喜助余計なことを言うな

喜助を小突いて黙らせる

話は変わるが俺ら3人は特進学級

試験において優秀な成績を取めたものは特進クラスである一組に集められていて

入試試験は俺ら兄弟で争ってたけど、普通の院の成績では3人が争い合うというかたちになっている。

座学は喜助に勝てないんですけどね。

夜一さんといえば、「拳（白打）」「走（歩法）」が得意らしく、白打は俺の方が勝ってるけど瞬歩は負ける。

「怪力女」

なんて零すと

「なんじゃと？もういつペン言ってみろ、ん??？」

つとメあげられた

「うそ、しまってる！首首!!ごめんつい心の声が出ただけだから!!」

って言ったらヒートアップした夜一さんに意識落とされかけた

「はあ……擁護できないっス」

俺は「拳」と「斬」を得意とし、あんなに家庭教師でめんどくさかったのに、今では斬魄刀を手にしてから特技と言えるぐらいまでに成長していた。

得意なのは抜刀術。一步も動いてないように見える早業で切りつける。

そして元の鞘に戻す。喜助でさえ刀身が見えないと言わせるほどにまで俺は極め抜いた。

いやこれ男のロマンでしょ。

白打は男だからか怪力女と夜一さんをバカにしながらも俺の方が強い。

さすがに女の子相手に殴りつけるのは躊躇してしまうので男女別にしてくんないかな。

そして研究熱心気質の喜助はというと、霊子分析して新たな鬼道を作ったり、論文書き上げたりとなんかガチ研究者ぽい。

俺はと言うと喜助が考え作った仕様書通りに機械を作る役目を担っている。

なかなかどうしてこれが楽しい、喜助も作りがいのある仕様を細かく作ってくるもんで、試作品作っては兄弟で試して、たまに大爆発起こしてなんか楽しくやっている。

そして次の休み喜助が部屋を掃除しに来たついでにまたメカ作り。

「あの、鋼を手で曲げるのどうなんスか」

つと呆れたように言う喜助

「え？なんで？」

俺の手元には鍛え上げた耐久性の高い鋼。

機械作るのに必要なんだ。

「いや、金槌あるでしょ。」

「いや、隣に迷惑じゃん」

「嫌だからって手で曲げて、鋼鉄ワイヤー引きちぎって手で捻りあげるとか……原始人じゃないんだから道具使いまししょうよ道具」

「いや、道具ぐらいつかうわ、バカにしてんのか。長さとかちゃんと測る測り使ってるし、重さもさ。」

「いや、そういう道具じゃなくて……つてかなんで鋼鉄なはずの金属素手で曲げれるんスか？なんかこつちからみるとアルミみたいに見えるんスけど」

「なわけないだろ、ほら硬いぞ」

「ゴングンゴングンと叩いて硬さを確かめてみせる、あ、ちよつと凹んだ

いやでも、金槌まじうるさくて最初となりに注意されたもん。

だから手で曲げて手で引き裂いて、つてやつてる

あと、ワイヤーペンチでやるとたまにどつか細かいの飛んでつちやうんだよね。それ足に刺さるとまじ痛いから。ほんと。

だから手で引きちぎってる。普通に粘土ちぎるみたいに見えるからペンチ要らん。

なんか天を仰ぎ始めた喜助。悩みあるなら聞くぞ

「女の子が足りないんだよ女の子」

「は？何がどうなってそんな話になったんスか？」

ガチトーンのは？でお兄ちゃん心に傷入った

「いや、喜助さく俺に顔似てるんだし、まあ俺の方がかつこいいけどな??ちよつと身だしなみ整えろよ、なんだよそのボサボサ。」

「いや、わざわざ兄サンの部屋行くぐらいで髪整えませんで」

「そんなこと言つて次は外出るぐらいだし、とか学校行くぐらいでくなんて言つて一生整えないんだよ」

「まあ、それは……」

なんて口籠る、

「あ、ほら出来たぞ。さすがに素材がな、重いけど耐久性は保証するよ。」

なんか特殊な霊子に耐えてそれを分析する機械を作つて欲しいみたいな依頼で、さつさと作つたものだ。

「いや、耐久性つて……さつきグネグネ曲げてるの見て信用ならないんすけど。」

「大丈夫、大丈夫。感想は使つてからな」

「また爆発しませんよね？」

「あー……」

つと言つた俺にさつきとその場で機械を動かし始める、おいこら俺の部屋で爆発したらどーすんだ

つて思つたけど成功したよう

「さすががっスね兄サン」つと喜んだ表情。

「はいはい。じゃまた後でメンテナンスしに行くから」

喜助の部屋にある機械道具類はほとんど俺が作つたもので、俺が定期的にメンテナンスして確認している。まあ喜助の研究の手助けになるならつて事で無償にしている。楽しいし、喜んでくれるしね

次はドローンとか作つてみようかな。流魂街の被害とか多いし、死神の手の回らない

ところの監視なんか出来たらいいものになりそう。

喜助に相談したら仕様は考えてくれるだろうし。

まあ今は材料資材が足りないから、死神になつてお金沢山持つてからになるかな……
ふは楽しみ。

「んじゃ俺湯浴みしたら出かけてくるから」

「まーた女性と逢い引きデイトつか？夜一さんにバレたら怒られますよ？」

「いや、夜一さん俺に男としての興味ないじゃん。」

「いや、それはそうとも言えないんじゃないっすか？」

「今日は、なにちゃんだっけなー、名前忘れたけど可愛い子なんだよー」

話聞いてないし、なんてため息はいた喜助。そんなにため息吐くと幸せ逃げるけど。

湯浴みして服をビシツと着替えた俺。

いやさすがに制服はないわ、ダサいし

「えつと、また遊んでくれる？かな」

つとモジモジした可愛い子。ふわふわした黒髪にクリンつとしたおめ目。うん可愛い。
い。

「当たり前だよ。また遊ぼう。でも俺帰りたくないな……」
「えっ。」

つと顔が赤いまま俺の方を見上げる

「これから飲みに行かない？もう少し話したいな。どう？」

そしてコクンつと頷く女の子

——イケメンは全てを解決させると言っても過言では無い。

ギャルゲーか？これは天国か？って感じ。

まあその後普通に、まあ寝て——、疲れて眠った子のそばに置き手紙してさっさと帰ってる所だ。

リピはないかな。なんかヤンデレっぽい。途中怖かった

「なんじゃ維助、今から帰りか？ん？」

つと声が聞こえたと思ったら、塀の屋根の上に真っ黒な装束を着た夜一さんが立っていた。

隠密機動の任務の帰りらしい。隠密機動つと言っても家業の手伝い程度でまだ、正式

なものでは無いらしいけど

「こんばんは夜一さん。任務すか〜お疲れ様〜」

「ああ、今日は大分手こずつての。こんなに時間がかかるとは思つたらんかったわ」

つとぐるぐる肩をまわしてる夜一さん

隠密機動の任務に院と忙しい人だな。

ふわりと扉から降り立ち隣にならんで寮へ向う俺ら

「のう、維助、なぜ白打の授業の場で儂に手加減をする?」

なんで突然言い出した。なんか気づいていたらしい

おれはこめかみをポリポリかいて正直に言うことにした。

「怪我させたくないから」

「……?!!怪我ぐらい、何度もしとるわ今更怪我がなんだと言うんじや?」

つと首を傾げる

「いや……夜一さんに怪我して欲しくないんだよ。

女の子だからつて言われるの嫌いかもだけど。なんか自然に手加減しちゃうんだよ

ね、ごめん。

でも俺特に夜一さんは大切だし俺のせいで痛がつてる姿とか見たくないんだ」

舐めとるのか!!なんて怒られると思つたが

「そ、そうか……お、お主なりの気遣いだったんじゃない。えっと、その礼を言うぞ維助。」
　　つと顔を赤くして視線をそらされた。

　　なんで照れるんだ?!

　　まあ夜一さんはこうやって面とむかって言ってくれる人居ないからな。

「ごめんな、許して欲しい。ほら女子寮ついたぞ」

「いつのまに……」

　　つて着ていることすら気づいてなかったのか。

「じゃ、おやすみ夜一さん」

「ああ、おやすみ維助」

劍の天才と京楽隊長がきた話

喜助 side

「君、君が浦原くん？」

「はい？」

授業終わりに突然呼ばれ後ろを振り向く喜助

声をかけてきたのは三度笠さんどがさを被り女物の羽織を羽織った

「あつ、無礼をお許しください。京楽隊長」

なぜこんな所になんてそんな疑問は口にする前に謝罪が出た。

「いやいや、いいんだよ、君が浦原維助くんかな？」

ああ、兄に用だったのか。

それにしてもなにか兄サンなにかやらかしてしまったのかと、冷や汗が出る

「ボクは浦原喜助。維助の弟です」

「そうかそうか、弟くんか、ごめんねくじやあ維助くんどこにいるか分かる？ちよつと用があつてさ」

「ああ、兄ならすぐ……」「おーい喜助、教本わすれてるぞ」

後ろから自分の教本片手に走ってきた兄が、隊長をみて首を傾げる

頼むから粗相はしないでくれと心の中で願うが。

「あ？んだあんだ」

つという開口一言目にて無礼なセリフを吐いた兄に膝から崩れ落ちそうになるがグツとこらえ、兄の耳を引っ張り

「京楽隊長つスよ維助兄サン。兄サンに用があるとかで……流石に無礼はやばいんで

……ね？」

つと察しさせると、面倒くさそうに頭をかく

「あー、京楽隊長？俺になんか御用でしようか」

つと渋々つていうようなあからさまな態度で、

隊長も苦笑いをこぼす。

「ごめんね急に、講師が噂する千年に一度の剣の天才つて聞いてさ。見に来たんだよ」

「はあ……千年に一度……？」

つと首を傾げる兄。

兄は自覚は無いが刀を握って5年かそこで引退した元死神の家庭教師や、現役で戦場を走り回る死神ですら舌を巻くほどの剣の天才。

た。1000年に1度は大袈裟に言い過ぎだろうが、天才であることには間違いなかった。

「まあ次の講義斬術の講義なんで、隊長さんもきたらどうでしょ。」

つとスタスタと歩き出す。

それにしても今日は兄の機嫌があまり良くないようだ。

態度に出やすく、イライラしている時の癖なんかも出ている。

きつと昨日あたりメカの不調で寝れてないとかそんな感じだろうな。

これはボクがフオローするしかないようだ

「すみません、兄の無礼をボクが代わりに謝罪します」

すると、首を横に振る隊長

「いやいや、いいんだよ。ああいう子が意外と上に立つもんさ」

つと、色々意味が含まれるであろう言葉を零して兄と後を追う京楽隊長に続く

京楽side

「こりやなかなか、金の卵……だねえ、どうも」

斬魄刀を使った実践のような講義。

初めて刀を振るうもの、そうでないものも斬魄刀の使い方、そして刀を振るう覚悟や意味を学ぶ場で、彼は特殊だった

僕の何十分の1しか生きてない彼は。現役で隊長をしている僕ですら

刀身が見えない抜刀術を披露した

いつ抜いたのかも分からない。

気づいた時には刀が鞘に収まる音が響き、

巻藁を綺麗にスツパリと切って見せた。

「君、維助君。是非卒業したら僕の隊にこない？」

そう汗ひとつ流してない彼に話しかける

「貴方の……京楽隊長の隊にですか？」

「そうそう、君なら卒業してすぐに席が貰えるほどの実力あるし。どうかかな？」

「いえ。すみません御遠慮します」

そうまつすぐと目を向けて断った彼に驚く。

「ええ、先約があるとか？」

「まあ、家柄上、四楓院家との絡みとかそんなんで二番隊に入る予定なんです。」

途中で説明めんどくさくなったなこの子、つと感じて笑いそうになる。

「四楓院家かゝ四大貴族様が絡んでくるなら仕方ない。

でも他の隊に移ることだつてできるから僕は諦めないよ？

ぜひ今度手合わせも願いたいものだし、また遊びに来るよ」

ニコリと笑つて去つてつた隊長。

なんだつたんだ、本当に見に来ただけなんだなつと感じた。

「兄サン」

そう背後から聞こえて、振り向かなくてもわかる。

喜助の声。それは怒りが含まれていて

「あーえつと〜」つと、言い訳を考えながら振り向く

「兄サンいいっスか??自由なのはボクも一緒なんで文句は言わないんスけど、態度!態度をちゃんとしましよ??夜一サンとか京楽隊長みたいに心広い人だからまだ良かったものの!!」

つと肩を揺さぶられながら喜助の小言が始まる。

ヘラリとしているのは喜助も一緒なのに。何が違うというのだ。

「わーつたわーつた気おつけマースー!」

「そこ!! 浦原兄弟!! 講義はまだ終わってないぞ!!」

つと講師から怒号が聞こえてくる

「ほらみた、怒られてやんのー」

「それは維助兄サンもっス」

喜助の成長は早い。まるでスポンジのようで俺が教えたことをきちんと理解し噛み砕きそ咀嚼して自分のものとしてしている。

上段の構えは様になっている。

俺は感覚でやってるのであまり真似はしないで欲しくはなかったんだけど、喜助は喜助なりに自分に合った型をみつけたらしい。

さすが俺の弟!!!

まあしかし——俺には勝てない

バシツつと音を立て斬魄刀が壁に突き刺さる

おれが喜助の斬魄刀を飛ばした

「はい、俺の勝ち〜峰打ちじゃなかったら腕チョンパだぞ喜助」

俺が喜助の小手を払ったら斬魄刀が喜助の手から離れすっぽ抜けたんだ

「痛いんすけど」

つと赤くなつた手をさする喜助。

「ごめん」

つと軽く謝ればジトーつと見られた。許せ喜助。

抜刀術は実践向きで、本気で弟を斬る訳には行かないので抜刀以外の技も身につけているのだが、なかなか楽しい。

つというより、俺は力でゴリ推してる感じだ。上段から打ち付ければ力に負けて相手の体制が必ず崩れるし。床もヒビが入る。

いやー楽しい。愉快愉快。

「機嫌治ったんスね」

「機嫌？俺はいつも機嫌いいよ」

「んなわけないでしょ、さっきまで不機嫌でイライラしてたじゃないっすか。」

「ええーまあ少しイライラしてたかも……??でも不機嫌ってほどでは」

「似たようなもんス。」つと両断

「いやあ……実は自動で清掃してくれるメカ作ってたんだけど。動くし指定の場所まで捨てたりとかちやんとできるんだけど。誤作動すごくてさあゝたまに俺の首根っこ掴んでゴミ箱に捨てようとすんだよね」

「それ機械に遠回しにゴミって言われてませんか？」

「しつこつっつれいだな、喜助！そんなわけないだろ。それと、靈力なくても使えるようにしたいんだけどなあ」

「なんでっつか？動力は靈力でしょう？それなければ動かないじゃないっつか」

「だって、めんどくさいじゃんいちいち靈力込めるの。」

「ええ……？」つと困惑した様子

「めんどくさいのを更にめんどくさい工程を得て「楽」を手に入れる！そうだとは思わない？喜助！」

「ま、まあ言わんとしてることはわかるんすけど……はあ、まあいいっす、動力どうこうは置いといて、とりあえず誤作動を何とかしましよ、ボクも原因見てみますから」

つと喜助。

喜助は機械類の事は詳しい、ちゃんと配線や電気……つても代わりに電力化した靈力だけど、その性質も理解している。

なのになんで喜助が機械作らないのかって言うと、技術がないからだ。

筆の使い方、絵の具を混ぜてどの色が作れるかはわかる。

けどそれだけで画家のように綺麗な神秘的な絵が描けるか？

答えは否だ。

それと一緒に機械も作るには技術力って物がある。

だから喜助は俺に頼んでるんだ。

逆に俺は薬品とかだいたい分かるけどそれを作る技術がない。

なんか混ぜると煙立つし、こぼすし、もう触るなと言われたことがある。

その後喜助と一緒に機械を見直したら、

俺自身がゴミとして a i プログラムに何故か認識されてたのが原因だった。
なんでや。

別の日。

「え？明日？」

「そうなの、お願いく明日出かけない？」

つと教室に入ろうとしたら女の子に引き止められた。

誰だったかなこの子。見たことあるけど

いつ遊んだかも何したのかも覚えてない。もちろん名前も。

「明日かーうーん」

「何か予定ある……？」

俺は日付をまたぐ遊ぶ約束が苦手だ。忘れるからだから直近とか数時間前とかにして欲しい。

「明日分かんないんだよね〜今日は無理なの?」

「今日はあく床屋に行くからだめなの。」

つと腕にすり寄ってくる。うん。おっぱいでかい

廊下で荷物もって俺の事を待つてる喜助から冷たい目が飛んでくる。

「維助君は短いのと長いのとどっちが好き?」

「えっ、でかいのかな」

「え?」

お胸のことを考えてたせいで、そのまま出てきてしまったがすぐに修正する。

「いやなんでも、うーん長い方かな。短いのも似合ってたら好きで嫌いってわけじゃないんだけど、長い髪が揺れるとあー可愛いなあ綺麗だな〜って思うことが多いんだよね」

「ええ! そうなの? あー床屋別の日だったかも〜今日遊ばない? どう?」

「今日〜もちろんいいよ〜今日なら空いてる空いてる。買い物する? 呑みに行く?」

「買い物して〜呑みに行きたくないあ」

「わかつた〜じゃあ酉いさの刻ときぐらいに寮の前きて、まつてるね」

「うん！楽しみ〜」

そう言つて離れてつた女の子。あー胸離れちやつた

「なにデレデレしてるんスカ」

つと荷物を押し付けてきた喜助

「ごめーんごめん。いや〜胸デカイなあつて。」

「あの子知り合いつスカ？」

「いや、見たことあるけど名前も何も知らないけど」

「はあ……そのうち刺されても知らないつスよ」

「なにが、胸デカイじゃつて？」

つと背後から聞こえた声に。ゲツつと声漏れる

「あー、いやー……夜一さんの胸がでかいなあ……つて」

「この助平が!!」「鼻が痛いっ!!」

振り向いた瞬間。

顔面に蹴りが飛んできた、踵が鼻に……痛い……!!

「鼻血、床が汚れるんで」っと手拭いを渡してくる喜助。

ちよつと、床の心配しないで俺の心配しろや。

「ふん、」

っと仁王立ちしてふんぞりがえった夜一さん

最近、性とか胸とかかそういうのに理解が出てきて。

恥ずかしい事とか分かるようになってきたらしい。いや遅いつて……

「その、さつきのおなごと出かけるのか……?」

っと鼻血が落ちて着いて立ち上がった俺にそう言った夜一さん。

さつきと違い目は合わない

「え? うん、出かけよーって言われたし。ちようど買いたい部品あったし。」

「そ、そうか……約束しているなら仕方あるまい。の、のう今度儂とも出かけぬか?」

「え? 夜一さんと? 珍しい。隠密の仕事は?」

「その隠密の仕事が休みになった時に遊ばぬかということじゃ! 何度も言わせるな

!」っと怒る。

いや何度も言っていないけど……

「うーん、そうだな、休みになった日に言ってくれればいいよ、俺日を跨ぐと忘れちゃうからさ。」

「!!本当か!ならばよい!儂とも出かけよう」

「にしても久しぶりだなあ!3人で出かけるの、入学後以来か?」

「えっ」

つと横から喜助の声が聞こえた。

何故か夜一は俺の隣の喜助をギロツつと睨んでおり。

喜助はぶんぶんぶんつと青い顔をしながら首を振っていた。

「え?ふたり喧嘩でもしてんの?仲良くしようよ。ほらその日俺奢るし。楽しみだなあ!3人だと楽しくて仕方なんだよ俺。あ、その日写真取りに行こうぜ!写真、ほら記録残したいし」

つと言うと、喜助が手で顔を覆つたため息を吐いた

「ま、まあ……お主がそこまで楽しみにしているなら仕方あるまい」

「おう!写真撮ろうな」

将来の夢と始解の話

将来の夢

小学生・中学生・高校と、そんな目標や将来の夢なんか書かされた事がある人が大半であろう。

俺は小学の頃は低学年で《サッカー選手になりたい》から

中学で《金持ちになりたい》

高校《赤点回避出来ればなんでもいい。二ト希望。》

専門では自分の学んでる系に携われる専門系の会社に行きたいな、なんて目標や将来の自分が見えてきた頃だった。

そして今世もそう言った時期になって来たようだ。

今回このまま死なずに院を卒業すれば死神となる訳だが。

「維助君は死神を目指すんだらう？」

「まあ……はい、そうですね」

何か紙に書いている講師。

いわゆる面談だ、鬼道衆を目指すか死神を目指すか、その他か。

確定では無いけど生徒の進路を確認しておきたい。みたいな感じだろうか。

「君はやる気ないけど、それでも優秀だからね。どこの隊に入っても何しても上手いと思うよ。」

なんて笑う。

その後困った事や相談しにくいことなんかも聞かれたけど特になしと、言つて相談室から出る。

「あれ喜助、待つてたの？別に待つてなくていいのに」

生徒が沢山いるので、同時進行で喜助も別の部屋で行われていたんだが、先に終わつたら先に帰つてていいって言つてたのに部屋の前には喜助がいた。

「ボク、鬼道衆もどうかと言われたんす。」

突然そう言つた喜助。とりあえず帰りながら話そうとゆつくり足を進める。

「それで？なんて返したの？」

「鬼道衆には鉄斎サンもいるし上手くやれるとは思うんすけど。ボクは死神になりた
い」

「へえ、まあいいんじゃない？何でも」

「なんでも……つて少しは相談乗つてくれても」

「それ相談だったの？死神になりたいならなればいいじゃん鬼道は死神も使えるじゃ

ん。」

「いやそうなんすけど……。」

何かしつくり来てないような喜助。

「まどろっこしー。何に悩んでんの？」

「兄サンは剣を極め、現段階でこの院内で右に出る生徒・講師はいないっすよね」

「え、まあ……そりゃ全員と戦ってみないとわかんないけど」

「かつこいと思ったんす。1つの事を極めて全てを圧倒する力……ボクは兄サンにはきつと一生剣は勝てないでしょう。ボクも兄サンのようになるなら鬼道を極めた鬼道衆に——なんて。考えたんすけど」

喜助の話をきくと、それは俺に相談と言うより、自分自身の中で整理している口調のようにも聞こえた。

きつと喜助の中でどうしようか迷っているのだろうな。

「でも俺、オールマイティな死神怖いよ。刀も上手く扱えて鬼道も使える死神。俺そっちの方がかつこいいな、何気に戦闘中鬼道飛んでくんのめんどいし」

つと思つた事を言うと。

しばらくして考え込んでたように俯いていたが、ふと顔を上げる。

グラグラしてた喜助の中でハッキリ進路が決まったようだ。

「うん、そうっすね。うん……ボク死神目指します。死神になって維助兄サンを支える……いや抜かします。」

「おつ、言うじゃん喜助〜!」

肩を組んでワシワシと片手でその頭を撫でると、重いつすつて言われた。酷いなあ

「ねえ、喜助、喜助は将来の夢ある?」

「はい? 死神……つて答えは求めてないんすよね。将来の夢……ねえ」

「そうそう、死神になったとしてその先の話だよ。例えば総隊長を超える強さを手に入れるだとか。世界を変える伝説になりたいだとか」

「そういう兄サンは?」

「俺? おれは——尸魂界で伝説になるよ。」

二番煎じじゃない、俺だけの俺にしか作れない機械を作つて、あの伝説の浦原維助ですか!! なんて知らない人はいないぐらいに有名になってキヤツキヤウフフされたい」

「なんすか、最後の方もうただの願望じゃないっすか」

「いいんだよ、願望でそれが将来の夢だろ? たとえ実現しようのないものでもいい。こゝうありたいという思いを残すつて大切だと思ふんだよね」

「ボクは……そうっすねえ……好きな事を好きただけ研究できる研究者になりたいっす。未知の物を全て知り尽くしソレを扱えるぐらいの」

「おつ、いいねえ！そうでなきや。

兄が尸魂界で一番の剣の達人で機械技術士！

弟が鬼道、剣、なんでも出来るオールマイティの科学者！

いいじゃん、俺ら兄弟最強だな」

少しスツキリしたような喜助の顔。

實際口に出したこと以外にも悩みはあったんだろうな。

喜助に悩みなんであるのかなんて失礼な事を考えてたが流石に口には出さなかった。

「あ、喜助明日休みじゃん？なにか予定ある？まあ無いと思うんだけどさ。明日斬魄刀と対話しよ。」

「ええ？なんスかそんな人を暇人みたいに」

「実際暇だろ」つと言うと黙ってしまった。

「はあ……まあいいっすけどなんで急に？」

「いや、ほらかっこよくない？それに俺らと夜一さん来週3回生に混じって特別に現世の魂葬の授業混じれる事になったろ？」

その時に始解できてた方がもし何かあった時とか……ね？」

「兄サン、説明面倒くさくなつて途中で投げ出す癖なんとかしてくんないっすか？まあ……そうっすね、兄サンがそこまでやる気になつてなら付き合つてあげてもいいっ

ス

そう、来週講師に呼ばれて優秀な3人だし早く卒業させてあげたいから、特別に3回生が現世に行く授業でお前らも混じって行ってこいと。

経験をより積ませてあげたいという講師の思いの元、現世行きが決まっていた。

現世は瀟靈廷と違って、虚がバンバンでると聞いているし。

念には念を、俺の剣で倒せない虚もいるかもしれない。

始解出来ていた方が身の安全も守れるというものだ。

あとかっこいいし

結果から言うと、喜助が先に始解出来てしまった。

「なんでだよおおお!!!!」

「お先に〜」つと、ヘラリと笑う喜助。

「にしてもかつけー。」

喜助は刀から出る血の様なものを自在にあやつる斬魄刀のようだ。実際よくわかんないけど多分そう？

喜助は喜助で嬉しそうにしてる。

俺も負けてられないな……って思ってた意気込むものも
もうその日を迎えた

「はあ……結局始解出来ないまま魂葬の講義に入った……」

「ずっと言っておるの」

つと隣の夜一さんがやれやれとでも言いたそうに見てくる

夜一さんもなんだかんだ始解出来るからいいよなあ、斬魄刀使ってないけど。
対話上手くいってるはずなんだけどなあ。

俺の斬魄刀なんかプンプンしてて名前教えてくれないんだよね。

「おーい、一回生こちらへ。」

つと六回生によばれ、俺ら3人は並び、三回生と向き合う形になる

「こちら、一回生の優秀な生徒で今回は特例で参加することになった。お前らも先輩だし、もしこの子らが困ってたりしたら色々指南してあげてくれ」

つとと言って、魂葬の講義が始まる

「むっず……」

魂葬自体は簡単柄尻の部分を死者の額に押し付けるだけなんだが

「ギャアアア!!!」

つと整ブラズが断末魔を上げてしまう

「力入れすぎなんスよ……」

つと言われるがそんなに入れてるつもりは無い。

「地獄の茹釜に溺れてるような声じゃったの」

「どんな声……?」

喜助や夜一さんは案外直ぐに出来ていて、六回生もウンウンって頷くぐらいだが、俺は上手くないかない。

そーつと……そーつとつてやっていると時間かかるし。それでも少しは痛がってしま
う。

「はあ……」

溜息を吐いていると……

「!!」俺らは同じ方向を見る

重い重い霊圧……

空間を割くようにして出てきたのは――

虚――

でかいものを想像していたが案外小さい……？それでも俺の数倍はあるけど。

でもなんだ、この押しつぶされるような霊圧は。これ本当にただの虚？

「う、うそだろ!!なんで中級大虚が!!」
アジューカス

つと六回生が霊圧に耐えれず尻もちを着いた。

「アジューカス？」

「ギリアンより知能も戦闘力も数倍強いやつつよ、でも数も少なく……こんな所に現れるなんて――」

刀を構えた喜助が俺の疑問に答える。

「えっ」

あれか？ギリアンってバカでかいやつだろ？その数倍強い……？

すると、その虚は男の六回生の方を見てくるニヤリと笑った瞬間――

赤い鮮血が舞った。

「ヒイ!!」

つと悲鳴をあげるもう一人の女六回生。

男の六回生は、ふらりと、その場に倒れて地面が赤く染まっっていく。

早い、強い。しかも無駄な動きもない。これが中級？

門を開いてる暇もないだろう。このままじゃ……

「喜助、夜一さん。俺の後ろにいて。」

「じゃが!!」

「前に出ちゃダメだ、あの六回生みただろ。俺の間合いにいてくれれば大丈夫。早かつたけど反応できない速さじゃない。多分きつと恐らく!」

怖い。命の危機が迫ってる。

あんなにギヤーギヤーしてたのに突然こんなになつたら怖いに決まってる。

そして、こちらを見て笑った中級が接近し長く鋭い爪が振り下ろされる

キーンツ

つと甲高い音と共に火花が散る。

斬魄刀に重い爪が金切りの音を出しながら乗りかかる。

獣のような形をしている虚はニヤリと笑った。

「私の爪を止めるとは……ふはは、美味しそうな匂いにつられてきたがお前か。」

こいつ話せるのかよ!!! つと突っ込みたいが、そんな暇無い

「匂い？俺そんない匂いしてるかね」

「ああ、美味そうな匂いだ。」

受け答えもしつかりしてる。中級ってのはこんなんばつかなのか？

喜助は夜一さんを守るように固まってくれてて助かる。

弟に、夜一さんに大切な人達は必ず守る

俺に倒せるのなんて考えるな。

やるんだよ。それしか道はないだろう？

「俺は浦原維助!!弟を守り親友を守る俺の名を覚えて死んでけ!」

「ははは、死神でもないやつが何を」

“ 私の名を……呼んで讖句アオ”

声が聞こえる。俺の斬魄刀から……おれの精神世界から

名は聞こえない。まるでノイズまみれのラジオのように。

一撃一撃が重く、俺じゃなかったら潰れてるぞ!!

高速で近寄るそいつの爪を抜刀術で腕ごと切り落とす

直ぐにもう片方の手で薙ぎ払うようにして横からくる虚の腕を斬魄刀で止めるが。

受け止めきれず俺の肩に大きな爪が深く刺さってしまった。

「威勢がいいだけか？」

本当に知能が高いし、腕を切り落とされても断末魔すらあげない。

なんなら面白そうに笑ってる

「兄サン!!」「維助!!」

大丈夫。ここで俺が諦めたら!!ここで俺が倒れたら!!

2人はどうなる。2人は——!

「離しやがれくそ野郎」

斬魄刀で爪を上弾きその手を蹴り付けると大きく地面を削りながら壁に激突した
虚。土煙が当たりを包む

むりに弾いたせいで爪が肩を抉る形になり、さらに痛い。馬鹿か俺は。

俺の斬魄刀。応えてくれ——2人を守らなくてはならないんだ

ふと、見えないはずなのに、精神世界で女の笑った顔が思い浮かんだ

“その意思が、その強い思いがあれば聞き取れるはず
私の名は——”

「恨め——」

橋 姫

その瞬間、急接近してきた虚と俺の間に。

霊圧が固まって構築された盾のようなものが出現し虚の爪を弾いた。

「なにっ——?」

弾かれてすぐ威力は出せまい。

その隙を逃すな俺、震えるな俺
!!!!

よく、死に際や戦闘中スローモーションに見えるだなんてよく言ったものだけど。それが俺に起きた。

ゆつくりに見える、確実に確実にその頭を狙え——！
肉を斬る感触、音が耳と手に伝わった次の瞬間には——

——虚の首が飛んでいた

塵になって消えた虚。

かった……？倒した？死んだ？

刀が戻りソレを鞘に収め、バクバクと鳴る心臓を収める

「兄サン!!!」

「維助く!!無事か!」

つと聞こえたと同時に。

後ろからものすごい衝撃が走り俺は地面に強く顎を打ち付けた
「いっつ——!!!てめえら!何しやがる!俺重症!怪我人!!!」

2人が俺に抱きつくようにしてタックルしてきたんだ。

夜一さんは涙を流して、喜助も泣きそうになっていた。

「無事でよかったぞ……維助……!!!」

「今顎の方が痛てえよ……。離れる離れる。重いつて、あーよしよし泣くなつて」
無理やり起き上がつて喜助と夜一さんの頭をポンポンつと撫でる。

「ないておらん……。」つと強がる夜一さん

その場から逃げ出したい恐怖だつただろう。

2人ともまだ少し震えている。

俺を信じていてきちんと間合いにいてくれた。

安心したのか……。肩から血を流しすぎたのか。

俺の記憶はそこで途切れている――

「あら、起きましたか？」

「はあ。」

次に見た景色は、黒髪の美人。

見たことあるつてことは多分原作の人……。？

「ここは四番隊。重症だったので運ばれてきたんですよ。覚えていますか？」
優しい物言いと顔だけど、ふわふわしてる訳ではないなんかオーラがある。
怒ったら怖そうだななんて呑気だった。

顎アゴが粉碎骨折してたらしい。

顎——???

進級とマッドサイエンティストの喜助の話

顎粉砕骨折……

思い当たるのは戦闘後の2人のタックルにより地面に叩きつけられた顎。粉砕骨折する勢いって何???

もう怪我也も治って、退院していいと言われたので服に袖を通す。

顎も治ってるようだ、よかったトンガリ顎のハンサムになる所だった。

「それにしても……あの中級大虚アジューカスを実戦を1度も体験したことのない卵がたった一人です。倒してしまふなんて」

つと、俺の荷物を渡してくる女性。

「あの……」

やべえ、名前なんだっけ……喜助ー！つと心の中で叫ぶが来るはずもなく。

そこで、喜助が俺に教えた取っておきの技を使う

「俺は、浦原維助です。治療ありがとうございます」

「私は4番隊隊長、卯ノ花です。治療は我々の仕事、これからも遠慮なさらないで怪我をしたら来てくださいね」

そう、それは――先に名乗る!!

大体の人がそれで名乗ってくれるから、名前忘れたら、誰でしたっけ?なんて聞かないで、その技を使いましょ、って喜助に教えられた。

さすが喜助!!!

「あなたは…そう、いい死神になりそうですね。楽しみにしていますよ」

そういつて出ていった卯ノ花隊長

一瞬開いた目が、ものすごく怖かったのは気のせいだろうか……

瞬歩で寮の前に行くのとバツタリと夜一さんと出くわした。

と、言うより待ってたようだった。

「維助、もう大丈夫なのか?」

「もうバツチリ、四番隊つてのはすごいな。後遺症もなく直してくれるなんて」

すると夜一さんの様子がおかしいことに気づく。

なんかいつもの元氣は何処へやら俯いてモジモジしてる。しばらくするとおもむろに俺の裾を控え気味に引つ張った

「儂をおいてどこにも行くでないぞ……?」

そう呟くぐらい小さな声が確かに俺の耳には届いた。

そんなことかつと笑い声が出る。

「ふはっ！大丈夫ですって、お転婆夜一さんと馬鹿喜助を置いてどこかに行くわけないじゃんか！」

つていうと、だれがお転婆じゃ！つと腹をけられた。

「ぐ……俺元怪我人なんですけど……」

鳩尾にくらつてうずくまる。本気だつたらこれ——

それから夜一さんが暇だつたらしく喜助を呼んで約束してた写真を撮りに行った
「よう撮れておる！」つとニコニコ顔の夜一さんの手には写真が。

3人の写真と、俺と夜一さん、夜一さんと喜助、喜助と俺

の計4枚の写真を撮ってきたんだ。

「俺も部屋に帰つたら飾ろ」

俺もなんだかんだ嬉しい。

そうしてあつという間にそんな一年が過ぎた。

中級と出会い、死にかけて俺らは、優秀なものもあり1回生から6回生にまで飛び級した。

俺は功績もあつて1年で卒業できるがどうするかと言われたが、みんなと一緒に卒業しなかったたので断った。

うん、飛び級しても可愛い子多い!!!!

「みて喜助、あの子胸でかいぞ」

「はいはい、わかったツスから早くいきましょ」

俺の首根っこを引っ張つてズルズル引きずる喜助

それが実の兄の扱いか???

最近喜助が冷たいよう……

そして夜一さんといえは

「よっ！ダイナマイト、ボデぐはっ！」

俺の鳩尾に強烈な右ストレートが入る。

ポツキュポンのボディに成長していて、髪も伸びてきたようで、女らしさが出てきて

いる。夜一さん。

「まったたく……！おぬしは全く成長しないのう」

つと腕を組んだ

「いやあ、そういう夜一さんは至る所が成長しゴフツ」

「(なんで学ばないんスカねえ……)」

そして俺たちが変わった事がひとつある。

というより喜助が変わった。

「ええ……これ飲まなきゃだめ？」

「はい」

ニツツツコリつと笑う喜助。

俺の目の前には青い液体がビーカーに入っている。

飲めと言うのだ。

逃がしてくれそうもなく、恐る恐る……いや、一気に口に流し込む

味なんか感じる暇もなく喉奥に流すと

喜助はメモを取り出した

「どうです？なにか動悸がするとか。痺れとかありますか？」

「いや、特に……」

「うーん……失敗っスね」つと何かを書いている喜助

「ねえ、喜助、この液体何？」

「それは——まあ知らない方がいいっス」

「おいこら待て、そんなやばい薬なのか？」

おれは喜助の胸ぐらを掴む

「まあまあ、次はこれ、」つと懐から出した注射器。

「今度は大丈夫なんだろうな」

「はい、大丈夫っス」

つと容赦なく俺の腕に差し込み液体が流れ込む。

「多分」

つと付け足した喜助。

「おいこら待て!!てめえ……」

「はいはい、次はどうっスか？痺れとか……」

「あ、……なんか唇が痺れてきた……あ、手も……」

俺は手足が痺れて動けなくなっていく……

するとまたプスツと俺の腕に刺す喜助。

すると、途端に動くようになった。

「神経毒と、解毒薬は成功みたいっすね、あーよかったっす」
なんて呑気にメモに続きを書いていく。

「まてまてまて！神経毒?!?!」

お前なんつーもんお兄ちゃんに打ってるの!?

ねえ、さっきの液体もヤバイやつなんじゃねえのか！ゴラ!!」

「文句言える立場っすか？何でもするって言ったじゃないっすか」

そう、おれは何でもすると言ったのだ……

何故かってそれは喜助に

【借金】をしているから。

積み重なるメカの失敗で素材や部品が足りずに喜助に借りたはいいものの返せなくなり。

何でもするからチャラに！って言って今実験台になっているところだ。

どうせ危ない薬は打たないだろうと。安心してた俺。

戻れ俺！過去の俺逃げてくれ!!!

実の兄に毒やら謎の薬飲ませるなんて誰が思うか???

兄は被検体だった……? (混乱)

兄を容赦なく被検体にする喜助。俺お前に何かした……???

「だああって、こころ辺ネズミとか居ないんすもん」

「だからって俺で試すか普通?!自分でやれよ」

それは怖いんで嫌っスつと言いつつ

てめえコノヤロウ……!!!

なんとか、しばらく血液抜かれたりしたけど無事(?)に開放された。
俺虚とかよりも先に弟に殺されそうなんだけど?

そんなマッドサイエンティストみが出てきた喜助や

女性らしくなった夜一さん

俺が変わったことと言えば

気になる女の子ができたことだ

その子はクリっとした目で、いわゆるお姫様カットした女の子。

六回生の特進学級で席が隣になった。

何か無性にその子を目で追ってしまふ。

恋かは分らない、

ドキドキと胸は高ぶらないし、赤面することも無い。

ただただ、傍にいたい。触れていたい。そう強く思うようになっていく。

それは喜助が呼ぶ声も夜一さんが呼ぶ声も、講師が俺を呼ぶ声も聞こえないほどに夢

中に――

「維助君」

そう笑顔で俺の手に触れる女の子。

「もうすぐ私のモノになるね」

気になる子の話

俺がその子を気になりだしたのはいつだったか。

隣になって最初はうわあ〜可愛い子だなあ〜なんて思ってたけど。

俺から話しかけることもなかった。

でもある日。

「維助君、少し相談したいことがあって……喜助君のことなんだけど」

つと、話しかけて来た。

チラチラと喜助の方を見てるから、喜助がなにかやらかしたのか。恋をしてるのかわからないけど、相談に乗ることにした。

「ごめん夜一さん、喜助。あの子とちよつと色々話し込んじゃって、お昼今日は二人で食べてくれ！」

つと言つて、2人はまあ、仕方ないつと言う感じだった。

「ありがとう、維助君。」

その子の名前は——うん。ごめん忘れたけど。

一つ一つの仕草が上品で、多分どっかの貴族の出なのは分かった。

「それで、相談つて？」

喜助特性ただ米を丸めただけおむすびを食べながら話を聞く。

「あのね……恥ずかしいんだけど。維助君と喜助君の区別つかなくて……。ほら、六回生って隊の入隊に備えて集団行動や連携を重視して実戦に似た講義も入ってくるから区別つかないと不便だなあって」

そう、六回生は一般的な教養というより、入隊に向けた講義が中心となる。

班が適当に作られ、連携やきちんとコミニケーションが取れるか等を

入隊した時に困らないように講義に組み込まれていく。

それはそうと、喜助と俺はたまの行動・言動は似てるって言われた事あるけど、ヘラヘラしてるところとかね？

顔は似てるけどソツクリでもなく、髪型も違うし目の色も違う。

つり目とかタレ目でも区別あるし、俺泣きボクロもあるし。

つまりは、区別つかなくなるぐらいソツクリかと言われたら【否】だ。

あー兄弟でしょ？ってでは言われるぐらい

「恥ずかしいけど顔を覚えるのが苦手で……言動と雰囲気で何となくわかるんだけど……」

俺が人の名前を覚えなないと似たようなものだろうか。

まあ俺は興味無いから覚えなだけでなだけど。

でもまあどうすればいいんだろ、つと喜助みたいに飛び抜けて頭が言い訳でもないの
で2人して首を捻らせる

「兄弟が一緒にクラスに来ること無かったから……ごめんね維助君。でも班行動とかで
区別つかなくなるのは致命的になるし……どうしようか」

そこでひとつの疑問。

「なんで俺だけ呼んだの？喜助も呼べば良かったんじゃない？」

つと言うと

「それは嫌」

つと今までのふわりとした言動とは一変ピシヤリと言いつつ。

なんか、相談内容に違和感を感じる。

なにか矛盾や、疑問が出てくるし。なんかこの子……少し

つて違和感を感じていると、

その顔からまた花のような笑顔に変わった

「ごめんね、維助君。私頑張って区別つけるよ。これ、金平糖あげるね」

つと数粒の金平糖が俺の手のひらの上に転がる

「へえ、金平糖か」

なんか女の子らしいなんて思ってた金平糖を口に入れる。

ザラザラとした砂糖と、甘みが口の中に広がる。

すると、なにか流れ込むような感覚——じわつと指先から頭にかけて熱を帯びる……かと思っただけに引いていく。

なんだ？つと違和感を感じて首を傾げると

「どうしたの？大丈夫？」

つと声が聞こえた。

「いや、大丈夫……だと思う。疲れたのかな」

「そっかあ、維助君急に飛び級して大変そうだもんね。私維助さんと仲良くなりたいな。好きな食べ物は何？」

好きな食べ物、嫌いなもの、趣味。

聞き上手なのか、深堀をしてくれたり納得した様子を見せたりと

話してて楽しくなる。

こういう人は久しぶりで珍しいなっと思った。

それからだ、何かと俺に構って分からないところ教えてとか。些細な事から。お昼食べよう、班を組もう、一緒に帰ろう、買い物に行こうなど。

友人のように一緒にいるようになった。

流石に俺でも名前を覚える。千寿センジュ菊キク

という、千寿家の下級と上級のどちらとも言えない家柄らしい。

「最近千寿サンと仲良いんスね」

つと、斬術の講義で次の試合を待つてる時に喜助に言われた。

「そう？うーん…なんか違和感を覚えるというか。

気になるんだよねあの子」

「気になる…？兄サンが人のことを…？」

つとありえないとでも言いたそうな顔。

「お前俺の事なんだと思ってるの…？」

それからは普通に友人のようで、

千寿ちゃんとは、

喜助に被検体にされてる！って泣きつくぐらいには仲良くなった。

「維助、聞いておるのか維助」

グイツと耳を引つ張られ、そこでようやく夜一さんに話しかけられた事に気づく。
あれ、なんか記憶飛んでるな

「何の話だっけ」

あーそうだ。

夜一さんと喜助が来たんだった。

「ぼーつとしてるようじゃの？」

「うーん、最近疲れてるのかも」

なんかたまに視界がぼやけるし、機械の弄りすぎで目が疲れたのか、それとも普通に疲労か。

「なんか最近おかしいツスよ、維助兄サン」

「おかしい？例えぼ？」

「ぼーつとする事多くなつたし、まあ設計図考えてる時とかはぼーつとしてても珍しくないンスけど、それにしてもその設計図を書き起こそうともしないし。」

今日の白打の講義もいつも力加減してるのに、相手に大怪我負わせたりと。なんか抜けてるといふかなんというか

「え、俺怪我させたっけ」

「なんじゃ、覚えておらんのか??あんなに騒ぎになっておつたら」

「はあ…今日?それほんとに?」

本当にそんなことあったか。全然覚えていない。

「兄サン本当に一体どうしたんスか「おーい!維助君」

つと声が聞こえる

「あ、千寿ちゃん」

「帰ろ!あ…ども浦原くん、四楓院さん」

つと二人がいる事に気づいたのかべこりと会釈する千寿ちゃん。

浦原くんだなんて、前は喜助君って言ってたのに仲悪いのか?って思った。

「ごめん、千寿ちゃん待たせたかな。帰ろうか」

俺は自然と千寿ちゃんの手に触れ指を絡ませる

「!!」

夜一さんと喜助の驚いたような顔を見てハツとする。

俺が自分から女の子の手を繋いだ…?

自分が女の子と遊ぶ時や接する時に気をつけてたこと。

それは自分から触れない。だ、

その自分の行動にハツとした俺は手を離そうとするがギュツと握り返されそれは叶わない。手を振って離す訳にも行かずに戸惑っていると

「じゃ、いこうか維助君」

つと、引つ張られ連れていかれた

「あんな、不潔でだらしない弟と、下品な女と一緒にいちやダメよ」

それからだ、その子が本気で気になるようになったのは。

喜助に呼ばれ被検体にされたりして時にはまだそんなじやなかつたけど。段々と段々と目が逸らせなく、触れなくなる

「いいよ、可愛い可愛い私の維助君」

連れてこられた部屋で2人きり、変なお香が炊かれて目の前がクラクラする。

俺の本能が言ってるこの女は危険だと。

ここで女を抱いたらもう戻れなくなる気がして。

バツつと触れてくる女の手を払い除けると、

目が一瞬にしてつり上がってこちらを睨みつける

「なによ、効き目が悪いわね…いつもならもう3日で私の人形になるのに」

人形だつて？

お香を吸わないように袖で鼻を抑える。

「俺に何をしたんだ」

「私の家の秘伝の花を食べさせたの。金平糖にまぶしてね」

「花？」

1歩1歩近寄ってくる女に対して俺も1歩1歩後退りする

「そうよ。それには依存するという力があつてね…本当は食べさせたりなんかしちやダメなんだけど。ふふ、どう？私しか見れないでしょう？」

私ずっと維助君の事が好きだったの」

ドンツと俺の背中壁にぶつかりこれ以上下がれない

ずっと

ずっと

ずっと

ずっと

その目は焦点が合っているようで合っていないくて。

ニンマリと笑った顔は俺を見上げて、離したいのに目を逸らせない。

「他の女と話すだけで気が狂いそうなの。男と話すのもダメ。

なんで私だけを見てくれないの？どうしてあの四楓院のお姫さんと弟ばかり構う

の？

どうして私以外に可愛いつていうの。

でも大丈夫。あんな人達より私が一番の理解者になるの。

さあひとつになろう？

ああ、私裁縫が得意でさ、そう、約束の指。小指を交換しようよ。

大丈夫、私の指と維助君の指サイズ合わないかもだけど。

そんなの気にしないよね？私の手に維助君の指がくっ付くだなんて、ああ、考えただけで……」

冗談じゃない、この女本気だ。

手には斬魄刀があつて、スツと抜いた女は俺の手を手取る

「少し痛いけど……安心して？」

「やめろ!!」

払い除けたいのにできない。

やめてくれ

「縛道の六十一 六杖光牢」

りくじょうこうろう

その声が聞こえた瞬間6つの光が女を捕らえる

「な、なに!!」

「ダメツスよく千寿サン。ボクらの維助兄サンを好き勝手してもらっちゃ。夜一サンが
プチ切れますよ」

「そこで儂に振るな喜助」

「喜助…夜一さん…」

扉を蹴破ったのだろうか、ボロボロになった扉の前に2人が立っていた。
力が抜けてその場に座ると、夜一さんが駆け寄ってくる

「大丈夫か、維助。これ飲めるか」

つと、液体を差し出し出してくる。青い液体…

「これ…」

「そうッス。あの時飲ませた液体の完成品ッス」

そう、その液体は被検体にされた時に最初に飲まされた液体で。

「何よあんたら!!いつからなの。いつから私が——!」

つと暴れようとしても暴れられない女が叫ぶ

「ボクは兄サンと違って変な所で鈍感じゃないんす。流石に怪しすぎましたね。さつさと自分のものにしてしまおうと考えていたんだらうけどそれは無理ってもんす。

ボクがもうその花の解毒薬を開発したんで」

つとニンマリ。

「兄サンに最初に飲ませたのは、効果を遅らせる薬。流石に開発が間に合わなくてそれしか作れませんでしたが。夜一サンが持つてるのは完成品。あなたの洗脳もなにも解くことが出来ませす。」

「嫌!ダメよ!!飲まないで維助君」

その言葉に俺の意思じゃないのに夜一さんの押しつけてしまう。

「維助、ダメじゃ飲め」

つと、だけど身体が思うように動かない。

「仕方あるまい」

そう言った夜一さんは青い液体を自分の口に含むと俺の口を開かせるように手を

突っ込んだ——かと思えば

ゴクンツと、夜一さんが俺に口移した液体が嚙下する

「イヤアアアア!!!」つと女の悲鳴が聞こえる。

段々と視界がハッキリしてきて、

「ごめん、夜一さん、ありがとう喜助。」

即効薬だなんて、喜助はやっぱすげーわ。

「ごめん。千寿ちゃん。俺お前とは一緒になれんよ」

「嫌だ嫌だ聞きたくない!!」

「悪いな、おれ弟と親友をバカにされるの嫌いなんだわ。

お前の気持ちには答えられん。じゃあな」

そう言つて、夜一さんに肩を担がれながらも部屋を出る。

最後の最後まで女の悲鳴が耳に届く。

部屋に出て夜一さんが片手を上げて合図すると、隠密機動が入って行った

「ごめん、迷惑かけて夜一さん。喜助。」

「いーんすよ、迷惑だなんて今更ツス」

「そうじゃの」

「はっ、言うじゃん」

そして、俺が変わった事気になる子が居る現象は終わった。

けど

「女怖い」

人の好意に素直に従えなくなってしまうた。

貰ったものは分解してなにか無いか確認するし。

食べ物や飲み物もそいつが口にしないとしない、など。

ホント無意識下で警戒するようになってしまった。

「遊びまくってた罰ツスよ」

「そりや俺が悪いんだけど…。あの子は絶対遊んでても遊んでなくてもやってただろこれ…」

しばらく部屋で塞ぎ込んでた俺の検査に来た喜助が、自業自得とでも言うようにため息を吐く。

「つてか、あの被検体の時に気づいてたなら教えてくれても良かったじゃねーか」

「いいましたよ、ボク。多分花の効果で都合の悪い事は記憶から消えてたんでしょーね。だからほぼ無理やり飲ませたんス。」

「ええ…怖。」

記憶に無いことってこんなに怖いものなのか。

「もうしばらく女は懲り懲り…」

あの後、現行犯ともあり、危険分子として千寿家もろとも霊力と財産没収の元、流魂街に追放になったらしい。

蛆虫の巣に連れていかれないだけマシか。死神だったらあそこに連れていかれてただろうな、

「じゃあ、あの時俺の腕に打った神経毒は、もしかしてこれ関連の薬だった…？」

「いやあれは本当に神経毒ツス」

「おいコラ、ざけんな、少し感動してた俺を返せ」

それから俺の女とは遊びに行ったり話しても、

寝ることとか軽率なことは控えるようになった

剣の天才と贈り物の話

俺は浦原維助

もう六回生になってあつという間に時間が過ぎた。

もう冬である。来年になったら卒業し、入隊式も待っている。早いものだ。

俺は始解を喜助にこされたが、卍解は俺の方が習得が早かった。

橋姫を屈服させ卍解を習得した俺。

ただこれは内緒にしてる。なんでかってその方がめんどくさくないから。

だって今でさえめんどくさいのに。

「いやあく流石剣の天才。相変わらず見えなかつたよ」

「あの、もういいっすか？それと、授業中に俺の事呼び出すのやめてもらっても？」

あれから手合わせという名目で、院の訓練所を貸切にして京楽隊長にお呼ばれされる
ことが多くなった。

「なんで始解しないの？出来るって聞いたけども」

「さあ……まあ始解しないほうが強いからですかね」

これはまあ嘘である。

なんで俺が始解せずに戦ってるかって

その方がかつこいいから!!!

刀身を見せない抜刀術。それを極め、さらに極め抜いた俺は、六回生になり虚討伐の実践も全て抜刀術で全てを切り伏せる。

いやかつこよくない???

もちろん白打もつかえるし、始解と卍解を使った方が強いであろう。

でもそれじゃ面白くない!!!

せつかく前世から今世になってめちゃくちゃかつこいい事できるのにさ!!

抜刀しての攻撃が一撃から三撃に増え、隊長格ですら見えない死神見習い。

ヒュー!! ロマン! かつこいいねえ

「うーん、居合の間合いに入るのは危険だし、かと言って遠距離も切り伏せられるし……うんうん、本当に僕の隊に入る気ない?」

「それ会う度に言われてますけど、ないっす。」

「ありや、残念。楽しみだね、あと少しすれば君が死神になる……いやはや。どうも、時代が変わるかもねえ——」

それにしても治ると言っても僕の花天狂骨を切り落としてしまうなんて。

機嫌直すの大変なんだよお？」

スつ——つと切り落とされた斬魄刀の断面をなぞる京楽隊長。

俺の剣術、霊力は隊長格のそれを超えた。

ちなみに斬魄刀は持ち主の霊力が回復すると斬魄刀も回復するらしいので、折れてもそのうち治る。

その後帰って行つた隊長

「兄サン」

「喜助、どうした」

喜助が訓練所の入口に立っていた

「始解と卍解しないんすか。」

「しないよ、その方がかっこいいじゃん」

俺は喜助の手元にある手拭いを受け取る

「……それもあるでしょうけどもう一つ、理由があるんでしょう?」

「……さあないよ、俺はロマンで生きるんだ」

「夜一サンを当主にするため……ツスカ?」

「……」

そう言つた喜助は俺を真つ直ぐ見ていて

俺が先に目を逸らした

「敵わないな、喜助には」

「当主になる条件として、夜一サンの父上の夕寝さんが夜一サンに出した条件は、二番隊隊長になる事。」

隠密機動の総司令官兼、二番隊隊長となれば、四楓院家の当主とするかね。

自分が彼女の心を折らないために、彼女を隊長にするために兄サンは手を抜いているんでしよう?」

「そう、だな。半分はそれが理由だ。半分はかつこいいからつてね、

夜一さんは幼い頃――出会った頃から初の女当主になることに憧れ、あれこれ毎日鍛錬に鍛錬を重ねてる。俺は夜一さんの夢叶えさせて上げたいんだ。俺は彼女の下で彼女を支える役になりたい。」

だから喜助。」

つと名を呼ぶと遮られる。

「分かってますって、黙っている…ツスよね？」

「ああ、よろしくな」

あつという間に時が過ぎた。

俺の女の子恐怖症は治ったが、安易に寝ないようににはしてる。
胸はまだ好きである。

入隊式

俺らは無事卒業し入隊式を迎えた

初めての死覇装に身を包み、俺は祝いと夜一さんから貰った髪紐で髪を上^{うへ}に結ぶ。

「なんか兄サン胡散臭いッス」

「胡散臭い!?!」

死覇装着た俺への言葉がそれか…!?

「あ、そうだ夜一さんにはこれ、卒業の時渡せなくてすまん。」

夜一さんには、立派な紅い簪かんざし 大きすぎず派手すぎず、普段使いにはいい代物だ。
髪も伸びてきたし使えるだろう

「よいのか…もらっても」

「ああ、俺も髪紐もらつたし。」

するとその簪を大切そうにして手の平につつんだ夜一さんが、見たこともないぐらい綺麗に笑つた。

「つ…大切にする」

「あ、ああ、」

俺は喜助のところに戻ると耳打ちされた

「兄サン、簪贈る意味知つてます?」

「え? 簪に意味何かあつたの?」

「はあ…キザな事するからおかしいなあとは思つたんすけど。」

ベタっスこんの女たらし」

つと顔を片手で覆つてため息を吐く喜助

今最後悪口言わなかつたか?」

「いいツスカ、知らなかつたなんて夜一サンに言わないでくださいよ? 絶対ツスよ?」

「わかつた、分かつたつて。ほら、喜助にも贈り物だ」

つと喜助の耳を引っ張り——耳たぶに——

「イツツツタイ!!痛いっス!!!何するんスカ!!」

「暴れんなよ、外れるだろ」

「だからっていきなり耳たぶに穴開けます!?普通!!」

「声でつか、」

「こんな大声出した喜助初めてかも。俺は片耳塞ぐ」

「しかも、直接耳飾りで穴開けましたね!?痛いんスけど!!」

「だって、そうでもしないと嫌がるだろお前。」

そう、俺は喜助の耳に直接ピアスで穴開けて一瞬でキャッチをつけてあげたのだ。

「まあまあ、贈りもんだ。吉祥結びきちじょうむすびの耳飾りだ、立派に育ったお前が、これからも安らかに

に育ち健康で居られますように…ってな」

「その意味は知ってるのになんで簪かんざししらないんスカ…はあ、まあもう付けられたものは

仕方ないし貰っておきますよん」

つとなんだかんだ嬉しそうだ。

そんなこんなで色々あつた院生生活は終わりを告げ

死神としての物語が始まる。

入隊は院の成績と関係なく、二番隊は仕事を学ぶためにどれだけ成績良くても、席間は貰えない。

つまり俺らは新人ほやほや下っ端ちゃんって訳。

二番隊隊舎に引越してきたは言いものの。

「6畳かよ…せつつつま」

「文句言わないんすよ」

俺と喜助は隣の部屋になったが、1部屋6畳という狭さだ。

「席官になったら広くなるらしいッス」

「へえ、」

夜一さん追い抜かない程度に早めに出世するか…

死神になった俺の話

死神になった俺の話と白哉坊ちゃんの話

現在の二番隊長は隠密機動の総司令官を兼任している、

夜一さんの実の父親。夕寝さんだ。

彼は夜一さんが未だ21代続く四楓院家、

そして隠密機動初の女当主になる条件として、自分自身を抜かすほどの実力になり、二番隊長を奪い取れという何とも大きな課題を課した。

そして

「あの、もう出来たんすけど。これでいいわけ？」

「うむ！よいよい。立派なもんじゃな」

「そりゃ俺が3徹で作ったものですからね。」

「ここは双極の丘、半径100メートルの大きさの空間を地下の深い深い場所に3日で掘ったんだ。感謝してほしいものだ。」

「ゼエ…ゼエ…兄サン。ちよつとなんでそんな疲れてないんすか」

「あんなもので疲れるかよ」

3日を二人で掘るのは無理だ。もちろん俺の機械を使った、自動で掘ってくれる優れもの。

その間に二人で空調やら強化や振動を抑える結果やらを貼りまくって、更には機械動かすには膨大な霊圧を定期的に注がないといけないので、それも相まって疲れ切っているのだろうな。

そして夜一さんが頼み込んできて作ったこの空間。

作った理由はよりお互いを高め合うため。

名は“勉強部屋”、

「甘いぞ喜助！んなんで俺が倒せるか!!」

「倒せるわけ……ないでしょ!」

顔近くに飛んでくる喜助の回し蹴りを腕で受け止め足首を掴んで岩に投げけるが、身体を回転させ着地する喜助

夜一さんは、自分の力をより強くするため。

喜助はオールマイティになるために逃げてた白打を。

俺はその指南役として買って出た。

最初は投げ飛ばされまくってた喜助だけど、受け身と身体の使い方が上手くなった。

お兄ちゃん嬉しい…!!

俺は俺できちんと鍛錬している。

抜刀術だけでは勝てない敵が現れてもいいように。きちんと基礎から応用までを毎日繰り返し返している。

上段の構えってかっこいいよね…!

「啼け——紅姫!!」

喜助の紅姫から赤い斬撃が飛んでくるが

「せいっ!」

俺はその斬撃を手のひらで受け止める

「はあ…ダメっスか…」

つと肩を落とす喜助

俺に傷をつけるのを目標に

喜助の白打、斬魄刀も鬼道も全て使ったの模擬戦。

俺の霊圧は日を増す事に上がりつつある。

幼き頃から霊圧制御の訓練を受けていて苦手なはずはないのに。

それでも抑えきれないほどには大きくなってしまった。

そのせいで生半可な霊圧の持ち主は俺に傷をつけることすら敵わない。

なんで上がり続けているのかは分からない。喜助が調べてもダメだった。

だから俺は霊力の排出口となつている手首に霊圧を吸い取る機械を取り付けている。

その状態でさえ、喜助が傷をつけない程。

よく良く考えれば卍解を習得した時からこんな感じだな…

「維助、話がある」

「はい?」

喜助とそんなこととしてたら、夜一さんかちよいちよいと手を招いたので瞬歩で向かう。

「お主に会わせたい奴がおる」

「?」

「あの、貴方が浦原維助様ですよね! 尸魂界一の剣術の使い手と聞きました!!!」

そう慣れないであろう敬語で話し出したのは幼い12かそこらの男の子。

ここは——四大貴族の一つ

——朽木家——

目の前にいるキラキラした目を向ける彼は朽木白哉。

うん、聞いた事あるぞ？

夜一さんどんな吹聴したんだ…とりあえずは——

「あの、あんた…貴方の方が身分は上です。俺に敬称はいりませんよ、白哉坊ちゃん」

彼は朽木家の次期当主らしい。夜一さんとは貴族関係で一方的に絡んでるらしいけど。何をどうしてどう説明したのか、剣を教えて欲しいと…

「ええ、俺…型とか自己流だからあんま真似すると身体に負担あるし…」

「お願いします！それでも維助殿の技術をそばで見つけて身につけたいのです!!」

「白哉坊は、お主の噂を聞いて会いたい会いたいと言っておつてのお、感謝するんだぞ白哉坊！」

「ぐぐぐつ」

白哉坊ちゃんは夜一さんをギロリつと睨んでいて、はは、なんか関係性わかったぞ、白哉坊ちゃん夜一さんにいいように遊ばれてるなこりや

「お願いします!!!」

師匠!!」

師匠

師匠

師匠

その言葉が俺の頭の中でぐるぐると回る

「俺の抜刀術は確実に間合いに入ったものを切り、鞘に収める事。

まずは鞘に収める工程は飛ばして、自分の間合いを確実に把握しておく事。とにかく

真っ直ぐ、獲物を捕える」

俺は説明しながら、刀を抜いて間合いの説明やら何やらを始める。

目が取れそうなほど目を見開きながらこちらを凝視する白哉坊。怖い。

なんだかんだ俺は断りきれずに承諾してしまった。

いや? ベつに? 嬉しかったとかじゃないから!!

四大貴族様のお願ひ断るの怖かっただけでくそう! 師匠なんて言われて浮かれてな

いから!!!

そして、模造刀らしきもので俺の動きを真似する。

「居合の一つ抜き打ち。右上から左下にかけて斬る袈裟^{げさ}、

左下から右上に斬りあげる逆袈裟^{ぎやくげさ}。そして真つ直ぐ切り落とす水平。」

なるべく見える速度でゆつくりと巻藁を斬ってみせる。

「こうでしょうか」

「それは…片手斬りだね。鞘離れしてから手首を返してるけど、抜き打ちは鞘離れする瞬間に斬りつける。そうそう上手い」

剣の心得があるからか、教えたことをすぐに学んでくれる。

うん、楽しい

「師匠！本気の抜刀術見せてはくれませぬか!!」

つと言い出した白哉坊ちゃん。

「ええ、」

「お願いします!!師匠!!」

「わかった。やります」

師匠だもんね!!

新しい藁包を、

一瞬

で斬る。

ただ鞘に刀が収まった音だけが響く。

「えっ……?」

つと首を傾げる白哉坊ちゃんに

後ろで黙って見てた夜一さんが

「ふはは!白哉坊でも見えんかったか!」

つと笑い声を上げ近寄ってくる

「えっ、斬れてるのですか!?!えっ、」

つと俺と藁包を交互に見ている

夜一さんが藁包をつんつんつとつとつと、

ドサツと音を立て、切れた3つの残骸が地面に落ちた

「斬れないように錯覚させるほどの太刀筋——見事です師匠!!」

かっこいいよねこれ、俺この声を聞きたくて極めてたのかもしれない。

ロマンです

「維助楽しそうじゃったの、お主のそんな活き活きとした顔カラクリを弄り回してる時

以外に初めて見たぞ」

夕方になり、帰ってる途中で夜一さんがそう言っただけで愉快そうに笑う。

「最初はめんどくさい話持ってきたと思っただけ、楽しいもんだね。あんなに素直に聞いてくれるとは思わなかったよ。」

「僕にもああ素直だといいいんじやが」

「ふは、だって夜一さん定期的に白哉坊ちゃんに意地悪してるんだもん」

休憩中刀を木刀に交換したり、素振りしてる白哉坊ちゃんの回りぐるぐるしてみたり。

「構ってちゃんな夜一さん可愛いな、白哉坊ちゃんも多分なんだかんだ夜一さんの事好きなんだと思うよ」

「って言ったら突然足を止めた夜一さん

「?どうしたんだ」

「か、かわっ…かわい…」

「と顔を赤くした夜一さん。どうしたんだ…」

「な、何でもないぞ! そうだ、なんでもない!!」

「と詰め寄られる。」

「お、おう、なんだ。うん…情緒不安定なんだな」

「ずんずんと俺を抜かして歩き出したと思ったら。」

「の、のう、少し腹が空かぬか?」

「腹? まあ、もうすぐ夕餉だけど」

「す、少しあそこによつて行かぬか?」 っと指さした場所は甘味処。

「確かに、身体動かしたからか小腹すいたし。いいぞ、寄つていいこうか」

と、言うのと本当か!! よし行くぞ維助!! っとルンルンでステップ踏みそうな足取りで甘味に向けて歩き出す。

「そんなに甘い物食べたかったのか…」

「うむ…白玉ぜんざいもよいが、この団子も…」

「っと品書きを凝視する夜一さん」

「なんだ、いつもなら好きな物片っ端から食べるじゃんか。」

「い、いや少しその減量中でな!!」

「へえ…減量中。」

「夜一さんがダイエット…?」

「夜一さんが食べ物を我慢するだなんて」

「なにか病気なら四番隊が喜助を頼るといいぞ? 大丈夫か?」

「失礼じやな維助!! 儂が病なんぞに負けるわけなからう!」

「じやーなんだよ、減量中じやないんだろ? 朝バクバク食つてたし」

「うっ…実は…巷ちまたでは少食でちびちびと食べるおなごが殿方にモテる! というのを聞いてな…」

つとモジモジし出す。

モテたいのか夜一さん。

意外な一面にクスツと笑うと顔を赤くした

「なんじや! 悪かったか!」

「いやいや、夜一さんがそんな理由で食べないのかと笑っちゃただけだよ。いいんじゃない。夜一さんは夜一さんらしく食べれば。」

「そ、そうかお主がそこまで言うなら…」

つと店員を呼ぶ

「この杏仁2つと草団子、みたらし、白玉ぜんざい2つに。あ、やはりみたらしは3本にしてくれ! それからこの限定とやらも! 2つじや!」

つと頼み出す。

運ばれてきた大量の甘味をバクバクと美味しそうに口に頬張る夜一さん。見てるだけでお腹いっぱいだ。

すると手を止めてこちらを見て首を傾げた夜一さん

「なんじゃ、食べるのか？」

「いや、見てるだけでお腹いっぱいというか。それに美味しそうに食べてる夜一さん見てるの好きだからさ。やっぱり我慢しないで好きな物を好きなだけ食べてるのが夜一さんらしくていいよ」

「そ、そうかの？」

うんうんつと頷くとそうか…！つと笑う

「はい、これもあげるよ羊羹だけど」

切り分けた羊羹を竹楊枝で刺してそれを差し出すと

「じ、じゃが…」

と言って何か戸惑ってる様子

「なんだよ？嫌いだっけ羊羹。」

「い、いや…その…ええい！」と言ってパクつと食べる

「美味しい？」

「なかなか美味いぞ、」

と言って頬に手を添えて咀嚼する夜一さん。

「じゃ、俺も」

うん。たしかに美味しいなここ。正解だったまた来ようかな

って思ってるよ。固まってる夜一さん

「かん…かんせつ…き…」

つとなんか壊れたラジオのようだ。

「はー、美味かった美味かった」

つと、お腹をさする夜一さん

「たしかに美味しかったなここ。喜助にも教えてやるか。」

「そ、そのまた一緒に行かぬか？」

「?うん、もちろん」

何を当たり前のことをと思つて首を傾げるが。

グツと拳を握つた夜一さん、なんか嬉しそうだからまあいいか

闇商人みたいな事してたら、にわかでも知ってた人が来た話。

隠密機動は

情報伝達や諜報・暗殺など、いわゆる「裏の仕事」を担当する部隊。

脱走者や裏切り者、罪を犯した死神の調査及び拘束等々。

また、特殊な虚や流魂街に出現した虚の特徴や、

戦闘に参加している隊士の情報をまとめ情報伝達を行うなどの仕事もある

それぞれ五部隊に別れていてそれぞれの部隊長は席官が務めている。

俺ら三人は、裏切り者、罪を犯した死神の監視・捕縛・始末を行う第三分隊に所属した。

あつという間に夜一さんは古株の班員よりも功績を上げもう十四席に上がった。

俺と喜助はそれぞれ十八と十九の席をいただいた。

上がったといっても、実力だけではなく、上の席間が戦死しすぎて繰り上げされているってのもあるかもね。

戦死するのも無理は無い。

相当危険な仕事だ、相手は死神だったり。

なんなら虚より厄介かもしれない。

昨日話してた隊士や、隣で飯食ってた隊士が次の日死んでるなんてもう日常茶飯事。

俺はそんな憂鬱な日々を晴らすために機械制作に精を出しつつ、数々の作品、中には危ないものまで作り：

6畳という狭さの部屋はあつという間に埋もれてしまった。

そして給金も尽きてしまう

そこで俺の頭にはひとつの名案が浮び上がる。

売ればいいのでは…??

やってきたのは流魂街 西地区の65区画の 八代^{ヤシ}ロ

元々闇市場で盗品や女、臓器や武器や呪物が流通している場所で。

適当な空き家で商売を始めた。

初めは10日間水が湧き続けるアイテムを売りつけた。

仕組みは蒸気をや空気中の水分を集める特殊な石を加工して作った簡単なもの。

なんと1万環^{かん}で売れた、大体1万円ぐらい。

それから定期的に現れる俺に流魂街の住人はこぞって買いに来る。

八代の駄菓子屋さんって名前がついた。俺がそう名乗っただけだけど。

もちろんやってる事はちよつと危ないし俺の出世にも関わってきては困るので、服も変えて身分も隠し髪色も変えている。簡易的なウィッグだけどね。

念の為に霊圧遮断のマントも身につけてる。

勝手に喜助の部屋から持ってきたものだけ。

そしてそのうちお金によって依頼も受ける事にした。

直すものや作って欲しいものを要望と金額に沿って話し合う。

もちろん客は選んでる。

水が湧く壺は人気で、水を売り買いしてる流魂街にとつては転売目的としても人気が出るのは頷ける。だから俺は10日間とか期間を決めて効果が無くなるようにしてる。無限にしたら俺が損じゃん。搾り取るだけ搾り取るぜ。

あとは、軽い怪我をさせてやりたい藁人形。

相手の嘘を1度だけ見抜ける石や、

虚から身を守るアイテムなんかもある

そんな闇商人みたいなことをしてたある日

流魂街で霊圧を感じることはないので驚いた。

ほんの少し強い霊圧を感じた。

「あア、ここですよね。八代の駄菓子屋」

そうニツコリと笑って、俺が見つけたボロい蔵を開けた男。
編笠を被っているので口元しか見えないが。

その声はどこかで

「今日は依頼したいものが」

つと、目の前の座布団に座る。

流魂街の住人とは思えない姿勢、仕草。

そして手は武士の手で刀を握っている事がわかる手だった。

そこで、ほんの少し見える髪と声でピンツときた

さすがに俺知ってるぞ？ BLEACHにわかかな俺でさえも。

この人

藍染惣右介じゃない？

取引した話

藍染惣右介じゃないか？って思ったあたりからどんどん口調やら何やらでアニメと似通ったものを感じ、確信に近いものになっていく。

「なにか？」

つと、俺を見る藍染惣右介。

「いいえ。ようこそ駄菓子屋さんへ今日は何を求めます？水が湧く壺？呪いたい人が？虚から守るものを？それとも直したいものが？何でも承りますよ」

ヘラリと、商人ぽいいつも客に向かって言ってるセリフを吐く

闇商人なんて、あのアニメの喜助みたいだなんてやってて思った。

印刷機やた特殊な3dプリンターみたいなものもあるので大量生産は余裕だ。

なんでもドンとこい！

「ここは金によつては要望の物を作ってくれると聞いたんですけど……」

つと、猫かぶりしてる時の藍染惣右介だ、懐かしいなこの時アニメで見たんだよなあ

5

って思ってるが、商売中だと、頭から懐かしい記憶を飛ばして咳払いする

「はい、お客さんのご要望に沿ったものを」何でも「ね。」

「何でも…ね。今まで頼まれて作ったものを聞いても？」

「ええ、とある女性は絶対に汚れない上等な着物を。とある男性は絶対に棘が丸まらない自分だけが持ち上げられる金棒を、”血判契約”で作らせていた頂いてます」

「けっばんけいやく血判契約とは？」

つと、先を話そうとした俺を遮る。

よし、食いついた！

「契約ですよ、血判契約は別料金っすけど。特別な契約で

「お互いの正体、及び取引内容を”絶対”口外しない」という契約です。」

「その口ぶりだと口約束じゃないんだね」

「そう！試してみます？」

つと特別性の紙を取り出すとコクリと頷く。

俺は紙の上の空欄を指さす

「ここに、契約内容を記載します。」

そして、この下にそれぞれの血判を押す。

それで契約が完了。

内容は血判を押しした人にしか見えなくなります。

その瞬間、

1. 契約に関する事を他人に伝える事が出来なくなる。
 2. 取引した相手の正体を伝える事が出来なくなる
 3. たとえ穴を突いたとして他人の耳に目にその情報が入った瞬間、記憶が消える。
- 悪いことする人バレたくない人なんかはみんなこれを使いますよん」
つと指を立てて説明した

「それはまたすごい技術だね。」

なんで俺がこれを作ったって、俺の自分自身の身を守る為と、

かっこいいから!!!いやあく契約とかやってみたかったんだよね。

「試しにやってみましょうか。例えば俺がジャンケンで貴方に負けた。と、その事象を

空欄に書き」

おれは、針で指に穴を開け、血判を押す。

ちなみに内容はなんでもいい。

その紙を藍染に差し出すと、俺が手渡した新しい針で同じく血判を押した。

「これで契約完了。さあさつき取引した内容を口に出してみてくださいいな」

「…!!!」

口がパクパクとして声は出ていない彼から驚いた様子が伺える。

「ね？声が出ないでしょ？似たようなことを言ってもそれが声に出ないんすよ、書こうとしても、脳がそれを許さず書けないし、暗号もむりなんすよ！」

いやあ、我ながら自分の技術が怖い！」

つと、血判契約のセールストークを終わらせると。

「これで安心して取引が出来そうだ。では」

つとニヤリと口角を上げた彼

「毎度あり」

しばらくして帰っていった藍染惣右介。

彼が頼んだのは霊圧を極限まで制御するメガネを希望した。

破格の高額な値段で取引してくれたのでいい客だ。

また次取りに来るだろう。

血判した紙を仕舞う

別にメガネぐらいなら別に構わないと思って取引に承諾した。

なんか、弱そうに見せてたみたいなお話聞いたことあったようなないような気がするし。

もしかしたら俺の技術を盗もうとしてるのかもしれないけど。

俺の技術を舐めてもらっては困る。

真似できるようなものを作ったら商売にならない、

例えメガネを調べようとしてもそれはただの伊達メガネにしか見えないだろう。本人がかけてようやく本領発揮する。

俺の霊力があつて初めて造れて初めて構造がわかる優れものだ。

調べようとしても円周率の最後をみつけるようにほぼ無理に近い。

でも俺の知識途中で終わってるし飛んでるから、

藍染惣右介が倒されたのかとか全然分からないんだよなあ…。

俺が知ってるのはなんか女の子の胸に龍の手を突っ込んでるシーンぐらいで、俺が天に立つて言つて天に旅立った？ 藍染の姿だ。

何年前だよ、俺小学生ぐらいじゃね…その時。

今世で時が経つて益々薄れてるつて言うのに。

まあいいか。つと次の客を迎える

「さすがだね。」

そう言つて俺を褒める藍染惣右介。

手にはご希望のメガネと藍染用の血判契約書。

早速翌日同じ時間に来店してきたのだ。

「君の名前を聞いても？」

つと言われるが

「それは内緒つてもんすよ。こんな商売してるんでね。」

「……まあいいさ、それもお互いのためだろう。契約書があつたとしても警戒して損は無

いからね。」

受け取つたメガネを懐にしまって踵を返した。

はずだが。こちらを見てにこりと笑つた

「また機会があつたら頼むよ

浦原維助」

ヒューっと、彼がいなくなった後ポロポロの蔵に風が吹き抜ける音が聞こえ
おれは座卓机にガンツと頭をうちつける

なんでバレた！

いつからだよ…まあ血判契約で絶対に口外できないし、バラされないしもし伝えられ
たとしても記憶から消えるから絶対安心なだけどさあ…

はあ…

「兄サン？ボクの外套かってに持ってきましたよね？」

ニツツツコリつと笑って仁王立ちする喜助が

一変ジツ——つと薄く目を開いて俺を睨みつける

あ、怒ってる。

「てへ、あいたたた！鼻！鼻！鼻ちぎれるって！鼻！」

ぐいぐいと鼻を引っ張られる俺

「前も勝手に机持ってたたり座布団持ってたたりと！！兄サン、ボクのもの勝手に持ち出すのやめてとあれほど……！」

「ごめん！ごめんって〜！！許して〜」

「じゃあ新しい薬の被検体で許してあげますよん」

つとパツと俺の鼻を離した

「はあ、やだよ！また痺れたり、この前なんて失神したじゃん俺！三途の川見るって！」

「死神が何言ってるんすか……大丈夫ツス！安全な薬なんで！！多分」

「喜助の多分はダメなんだって！あ、おいこらどっから出した注射器!!!」

おれはしばらく逃げ回る羽目になった。

改めた婚約の話

闇商売つてのはリスクを伴うけどお金がウハウハになった。

血判契約書を生成するための印刷機も進化出来るし。

それからくつとバージョンアップさせたい物や

組み込みたいもので頬は緩みまくってた

「なんだか兄サンいつもよりご機嫌ツスね？」

つと飯を食いながら横の俺を見る喜助。

「聞きたい？聞きたい？そう聞きたい？」

「いやいいっす」「そう？やっぱり聞きたいかあ」「はあ」

はあ…なんてため息吐いてる喜助

しばらく買った物やバージョンアップした機械とかの説明をべらべらと話してる。

上の空で返事してるけど聞いているよな!?!な!?

飯食い終わって席官とはいえ下っ端は下っ端なので、当番の俺らは皿洗いをする。

すると思いい出したかのように口を開いた喜助

「そういえば知ってます？最近流魂街の住人に特殊な道具やら機械やらを販売してる闇

商人がいるみたいツスよ」

「へー」

「なんでも、性能が良くいまの尸魂界の技術じゃ作れないようなものなんかも…水が湧いたり綺麗に濾過したりする壺や特殊な織り方をした着物とか。手彫りでは作れない様な細かい装飾がされた石なんかも

すごいツスね流石兄サン」

「だろー？ やっぱり兄ちゃん凄いだ………ろ」

って言って喜助を見るとやっぱりか、みたいな顔をしてた

「い、いつから!？」

「噂を聞いた時からそうじゃないかな…って思ったんす。」

どうやら喜助はカマかけて確信したらしい。上機嫌な俺は凄いと云われて素直に返事してしまつたのを悔やむ。

「だってこの前部屋に機織り機はたおりきあるの見たんすもん。特殊な霊子加工してあって不思議に思ってたんすよね。それに非番の日に限って兄サンどこか行っているみたいですし。外套勝手に持つてく理由もそれで辻褃合いますし?」

「あは…は」

なんて目を逸らしながら皿を拭いてると

グイツと耳を引つ張られる

「アイタタタ！ごめんごめんって！」

「いいツスカ？流魂街の住人なら足は付きにくいし調査の対象外でしょうけど、死神に売つてその道具が問題になったら調査が入る羽目になるんスからね!!」

絶ッ対死神には売らないでくださいよ？いいツスね？

売るなら瀨靈廷内で真つ当な道具にしてくださいよ？」

つとすごい剣幕で言う喜助。

「はい」としかいえなかったが。

藍染惣右介にはもう売つたんだよなあ…

なんて言つた日には鬼の形相になるのが目に見えてる。

まあ藍染なら今のところメガネぐらいでハマしないだろうし大丈夫だろう。制御装置は真つ当…だしね？多分バレても大丈夫だと思いたい

メカの説明やら道具の作り方やオタクっぽい話になって俺のメカ自慢が始まろうとしたところで

「維助、こんなところにおったか」

　　つと洗い場の入口から声が聞こえた

「あれ？夜一さん？どうかした？」

　　任務帰りの夜一さんがいて、3日は帰れないとは聞いてたのに随分早いなって思つてると察したのか

「早めに対象のしつぽが掴めてな、早くに終わったんじゃ」

　　つと説明してくれた

「それより、父上が呼んでおる」

　　やつてきたのは隊首室。

　　夜一さんの父親夕寝隊長と、何故か俺の父上まで…

「浦原維助、参りました」

「よいよい、楽にせい、今回は隊とはあまり関係の無い話だ」

　　つと言つた夕寝隊長がそう言うので頭をあげる

「お前らも死神になつた事で少しハッキリさせたくてなあ。ごめんな維助、夜一様まで呼んじやつて」

「それは構いませぬが、一体儂と維助まで呼んで何用じゃ？」

つと夜一さんも用は聞かされてはいないらしい。

「お前らの婚約の話しだ」

そういつた父上。そういえばそんな話あつたな。

夜一さんと出会いのきっかけにもなつた話。

すつつかり忘れていた。

「もう結婚してもいい時期だが、どうするんだ？お互いはそのつもりは無いようだけでも維助も夜一様も」

すると夜一さんが一歩前にでて口を開く

「元々維助との約束で保留……という形になっておる」

「ほう、保留とな？その理由は？」

つと顎に手を当てた夕寝隊長

「儂が当主になるからじゃ！当主になるから結婚し他所の家に嫁ぐなどは儂はせん！」
つと言ひ張る

「維助くんもそれには同意を？」

「はい。同意しております」

つとおれは頷く

「そうかそうか、小生しょうせいらで2人を見ててそうではないかと思つていたんだ。夜一は意思が強いからなあ。」

「そういう事は早く言いなさい維助」

つと父上に少し怒られてしまった。

「夜一がもし小生の後釜に入り当主となるとなるならば。」

長男で浦原家の当主となる維助君は婿入りは出来ぬなあ…。

まあ小生の娘の話は置いといて、維助君。縁談の話が来ている」

「はあ……縁談」

見合いの話か。つてかそれを用意してるつてことは2人とも大体婚約の話しとか俺らの保留してたこと何となく確信してたんじゃない。

「縁談っ!?!」

つと夜一さんがびっくりして声を上げていて

「そりやそうだろう夜一、維助君は浦原家の長男で次期当主。お嫁さんを迎えないといけないんだから。維助君はとつても人気であつちやこつちから縁談の話が来ているというしね」

「つてことだから維助。見合いを近々行うので、ある程度相手方の顔を覚えておきなさい」

そう言つて父上から見合い写真やらプロフィール詳細やらの書類を大量に渡される
「ええ？これ全部？」

「文句言わない」

「はあーい」

その場で解散し夜一さんと部屋に帰ろうと廊下を歩くと、何故かぼーつとしてる夜一さん

「けっ……こん、維助が……？じゃが……」

つとブツブツ言っている

ぼーつとしてるまま夜一さんとは部屋離れてるので曲がり角で、

「じゃ俺こつちなので〜」

つて言うがぼーつとしたまま歩いて行つてしまった。

おれは部屋に帰りパラパラと書類に目を通す

上級や下級貴族

「はええ、可愛い」

可愛い子や美人さんおっぱいでかい人まで

「鼻の下、伸びまくリッスよ」

「あれ喜助でしたん」

「いや帰ってきた気配したんで」っと俺の部屋にズカズカ入って勝手に座布団敷いてお茶を汲み始める

「やっぱり縁談の話だったんスね〜」

「なんだ喜助気づいてたの」

俺の持つてる見合い写真を見てやっぱりと言う喜助。

「そりや、保留にしているの御二方にはもうバレてるみたいでしたし、

兄サンそんなんでも見た目はいいんで。

昔から夜一サンと婚約してるって言っても見合い話が入ってきてたんスよ」

「へえー。つてそんなんでもつてなんだよ。見た目」は「！つて」は「！つて

失礼だな喜助。見た目もの間違いだろ。

にしても色んなところから来てんな。四楓院関係ない貴族からも来てるし。でもこ

れは四楓院関係あるな。

ん？

フオン シャオリン
蜂 梢綾？」

つと首を傾げる俺に書類を覗く喜助

「名前消されてますね、碎蜂。ああ、四楓院家に奉公してる蜂家ツスね。最近入団した子の恐らく末っ子ツスね」

確かにその名前は二本線が入っていて碎蜂と記載されていた。

「へえ、よく知ってんな喜助」

「兄サンが貴族に興味無すぎなんス。名前覚えないじゃないツスカ……ボクがどれだ
けフォローしてるか……」

まあそりやそうだな。

ん……碎蜂？

なんか、聞いたことあるなやつぱ。

二激必殺なんちゃらーみたいな攻撃アニメで見たような……

その子と髪型は合わないけど……記憶の中のその人と顔似てる……？

原作の子だなこりや。

「気になるんスか？」

「えー、まあ可愛い子だよな」

「はあ、相変わらずツスね。まあこの書類の娘さんたちと片っ端から見合いする羽目にな
ると思うんで頑張ってください」

「喜助は？喜助も見合いしたら」

「こういう時次男でよかったって心底思うツス。結婚しなくても別にとやかく言われな

「いんすもん」

「つと、まあ喜助なら面倒くさがるだろうな結婚とか。
俺も正直めんどくさい。」

お見合いとベタな交換条件の話

お見合いが早速始まった。

なんでせっかくの非番を……つとぶつくさ言うが仕方ない。
父上にニツコリ顔で言われたら行くしかない。

「えつと……維助様の事が……」

ある日は可愛い小動物みたいな子

「維助様はどんな趣味を……？」

ある日はプライド高そうなThee令嬢

「維助様！私とー！」

おっぱいでかい子

数々の貴族令嬢達の見合い。

下級貴族なんかは玉の輿になるから必死だ。

昔ならうへへしてただろうけど大人になって

死神、しかも貴族の結婚は結構めんどくさいと分かる。

俺は身軽がいいし、子供が……子孫が欲しいとは思ってない。

可愛いし美人に迫られるのは嬉しいけど。結婚となれば話は別である。

「へ、へえ、カラクリ……あはは」

カラクリ弄り回す変人。なんて噂がそのうち流れるかもしれない……

そしてまた今日も見合い。

「碎蜂、で、でふ」

座つての開口一言目がそれだった。

「ぶふっ」

俺が吹き出してしまつて、令嬢さんは恥ずかしさからか顔を赤くしてしまつた。

あとはおふたりで……というテンプレ通りに、碎蜂と2人きりになる。

ちなみに名前を覚えないと父上に殺されるので本気で令嬢の名前は覚えた。

「あ、あの!!!大変恐縮なのですが。私は蜂家の末っ子で……蜂家のただ1人の女ですが。

四楓院家に生涯を捧げる為に生まれ四楓院家の為に死ぬ。私は軍団長閣下に……」

つと自分で話して少し混乱しているようだが大体伝わった。

「つまり結婚するつもりは無いと」

「ひゃ、ひゃい!たとえ貴方様の浦原家に嫁ぐことになり一族から抜けたとしても……」

私は軍団長閣下に全てを捧げるために生きてきたので。今更結婚などと……」

下級貴族で上級貴族に入るのは相当な玉の輿でしかも死神ともなれば将来は安泰。なのに夕寝様に命を捧げると。自分の安泰よりも四楓院家に命を捧げる

「君……強い子だね、それなら俺と取引しない？」

「へ？取引……？」

「そう、碎蜂ちゃんも、俺も結婚する気は無い」

「貴方も……？」

「うん、俺は身軽でいたいし子供が欲しいとも思つてない。

自由でいたいから。君も色々見合い話を断られると困る立場でしょう？

まあベタな話だけど、表向き……つて事にしよ

夜一さんともそうだったしね。

で、俺らのどちらかが第五分隊までの部隊長になればその見合い話も正式に断れる。まあつまりは、出世するまで表向きは婚約者……つて事にしよ」

「……分かりました」

「契約成立。よろしく」

俺と碎蜂は握手した。

これで暫く結婚話も落ち着くだろう

中世ヨーロッパの恋愛漫画のベタな展開！

ロマンです。

「はあ……なんでボクまで」

「うるさいぞ喜助!!し、静かにするんじや」

見合い会場の少し離れたところから霊圧遮断外套を来て気配を消す

喜助と夜一。

何故こうなったかは数日前に遡る――

「ど、どうじや喜助!!やま、病かもしれぬ」

「はあ……ですからそれは病じやないんですって」

ここは喜助の部屋。維助が見合い話で出かけてる時に。夜一が訪ねてきていた。

「じ、じゃが心臓が！維助といるとキュッって！キュッって!!痛くて……そ、その。一緒にいたいという思いが強くなるんじや!!」

お、おかしくは無いか!？」

「(夜一サンは自分自身で気づいてると思つてたんすけど。今まで無自覚だったんすか……) それは恋ツス」

「恋!?!わ、濃が!?!」

「そうツス。夜一サンは維助兄サンの事が好きなんですよ」

「す、すき……維助……の事が……!」

ボボボ! つと顔を真っ赤にする夜一

「はあ……」

ようやく気づいたのかとため息を吐く

「喜助! こうはしてられぬ!! 見合い会場に行くぞー!!」

「は、ええ? なんでツスカ? そんなわざわざ」

「だつて気になるであらう!?! 維助が結婚なんぞ……」

「まあ……(兄サンは結婚する気なさそうなんすけど……面白から黙つてましようかね)」

そして外套を着るまでの用意周到さで見合い会場に乗り込んでいた。

遠くからだか、机を挟んで女性と向き合つてる維助の姿が見える。

「き、今日も見合いは断るのだろうな！」

「さあ……それはどうっすかね。好みの女性がいたら――」

「ぬおおお！辞めるんじや喜助！心臓が痛いぞ！」

ギョツと外套を握りしめる夜一。

しばらく見ていると2人が庭に出た

「あれ、珍しいッスね。兄サンが午後になつてもまだ会場に残つて……しかも、園庭を散歩してますよ」

「だ、誰じゃ！相手は!!」

「（あれは……蜂家の……）さあ、そこまでは兄サンの好みの女性ですかねえ」

「ぐぬぬぬ……ここからじゃよく見えぬ……!」

すると、ピタリと足を止めた維助

「なにしてんの夜一さん。喜助」

「ありや、バレちゃいました？」

どれだけ喜助というと思ってるんだ喜助の消しても消しきれない僅かな気配を感じ

れる。

そしてよくよく探ると夜一さんもいた。

2人はバレたからだろうか茂みから出てきた。

霊圧遮断マントまで来てやがる。

碎蜂は夜一さんを見た瞬間に膝を着く

「ん？お主蜂家の……なるほど、よいよい、楽にせい」

つと夜一さんが言うのとハッ！つと言つて立ち上がる

「んで？なんで見に来たんだよ、喜助興味ないっていつてたじゃん」

「いやあ、そうだったんすけど夜一サンが……痛いっ！」

うわ、喜助の顔面に夜一さんの裏拳が入った。痛いぞあれ。

「な、なんでもないぞ!!また維助が女子おなごに粗相をしないか見に来てただじやん！」

「夜一さん俺の事なんだと思ってるんです？」

さすがに家が絡む見合いに変なことしませんよ

俺が父上に殺されるんで。

碎蜂、こつちの鼻抑えてうずくまってるのは浦原喜助。俺の弟だ、

夜一さんは説明要らないな。俺の正式な婚約者で。夜一さんが当主になったら解消

されることになってる」

「は、はい！」

「維介兄サン、それを話すのは……」

つと懸念する喜助に、まあ待てと遮る

「実は――」

俺らは結婚する気は無いが、見合い話は面倒なので表向き――という話をした。

「なるほど、それなら納得ツス。」

「そ、そ、そうじゃったか!!うむ！維助に結婚は無理であろうな!!!」

「なんでそんな失礼な事を大声で言うんだ夜一さん。」

さっきの暗い表情から一変活き活きとした顔で仁王立ちした夜一さん。

本当に俺が女の子に変なこととしてないか気にしてたんだろうか。

ただ、お互い興味無い見合い話で、

表向きの話だったのに……胸なんかは好みじゃない子だったはずなのに――

「喜助、どうしよう碎蜂可愛いかも」

「……は？」

碎蜂の話

表向きには仲睦^{なかむつ}まじい関係に見せないといけないので、任務帰りにデートに誘ったりしている

「はう……お、美味しい……!!」

初めて食べたというたい焼き。

頬を押えてその美味さに感動しているようだ。

身長がとて小さい碎蜂。

まだ顔も幼さが残っていて暗殺の一族とは思えないほど表情豊かだ。

うん……可愛い……な

なんてこのデートで何度思っただろう。

妹ができたみたいで心がほっこりする。

「維助様！次つ次はあれを買いに行きましょー！」

つと子供のようににはしゃぐ彼女。

今までは胸性性！のピンクで埋め尽くされた関係しか持ったことなかったからか、表

向きとはいえこんな普通に楽しめるデザートは初めてかもしれない。

「碎蜂は可愛いなあ、もつと食べ？ほらこれとか」

つと片手で頭を撫でて新しく買った団子を差し出すと

ムスツと頬をふくらませた彼女は

「お戯れはご無用に維助様!!で、でも貰っておきます」

と言つて団子を頬張った。

可愛い……。

「へえ？魚の方が好きなんだ」

「はい！大好物です！」

しばらく団子屋で話しているとお互いの話になった。

「じゃあ今度美味しい海鮮丼食える場所連れてつてやるよ、びつくりするぐらい美味しいんだ」

「本当ですか！楽しみです」

つと長い髪を揺らして笑う。

「えつと……その維助様の好きな食べ物はなんですか？」

「俺？うーん。強いて言うなら……辛いものかな。あー甘いものも好きだし……。あ、

唐揚げが好きだ！」

「ふふ、色んなものがお好きなんですね」

って手で口を隠して笑う碎蜂

あの記憶の碎蜂と比べたら本当に表情豊かだな。

そしてデートも終え碎蜂の部屋に送り届ける

「あ、あの……今日はとても充実した時間を過ごせました……。」

「そりゃよかった。また出かけよう」

って碎蜂の頭を撫でると顔が赤く染る。

そして

「はい!!」

つとニパツとでも効果音がつきそうな笑顔……

眩しい……

部屋に戻ろうとすると喜助の部屋が開た

喜助が障子から顔を出していた

「どうでした？逢い引きは」

「いやあ、碎蜂……可愛いよ」

「へえ………はい??」

へえつと流そうとした喜助が、固まった

「碎蜂サン兄サンのタイプでしたっけ……—」

「いやまあ違うんだけど、本当に可愛いんだよ。なんか心が浄化されるといっつか……癒されるというか……」

つと、あの幼い笑顔を見て笑う俺を見て

頭を抱えてしまった喜助。 んでや

「好きなんスか?」

「え? うん、好きだよ可愛いし。」

「夜一サンは?」

「え? うんそりやもちろん好きだけど?」

「あつなるほど」 つと言つて納得した喜助。

何に納得してんだよ

「そうツスよね、維助兄サンはそういう人でした」

あはーつと首に手を当てて笑う喜助の耳を引つ張る

「よくわかんないけどデイスられたのはわかった」

「あいたたた！痛い！痛いっす！耳飾り！耳飾りで耳たぶちぎれちゃうっす！！」
って涙目の喜助を離す。

「あ、明日非番じゃん？俺ちよつと出かけてくるからお願ひ！外套貸して」

「ええ、またっすか……？つてかあんまりひよひよい外でてるって怪しまれますよ？」

「俺がそんなヘマするかも。大丈夫大丈夫。明日ちよつと約束あつて絶対行かないと行けなくてさ。」

「はあ……仕方ないっすね」

部屋に戻つた喜助が直ぐに戻つてきて片手には霊圧遮断マント

「ありがとう助かる」

「んじゃ、また薬の被検体としてお願いしますねん」つとニッコリ

俺喜助のせいでなんか薬効きにくくなつた気がするんだけど。

明日は……あの藍染に呼び出されてるので絶対行かないと……。

にしても、バカ広い瀨霊廷で出会つて。

すれ違いざまに紙を懐に入れられるなんて思わなかつたな。

多分俺が来ると確信してわざとすれ違つたんだと思うんだけど。

藍染と闘うことになった話

非番の日。

八代の駄菓子屋を定期的に開いてる場所に来た。

すると待ってた藍染はいつもより浅い笠を被っていて顔が丸見えだった。

「やはり、僕を見ても驚かない。僕の正体に気づいていたんだね？それも最初から」

つとニツコリ

「あー……まあ」

つと歯切れの悪い返事をする俺に。

商売道具をそんなに簡単に説明はしないか。と言った

なんか俺の機械で正体暴いたみたいになってるけど。

違うんだよなあ……

まあわざわざ説明してやるぎりもない

「んで、何？また特注品？それなら昨日紙で「違うよ」

途中で否定される

いやマジで何用だ？俺機械作る以外に何も出来ないし。

もしかして消しに来た……？

っと少し警戒を見せた俺を見て察したのか両手をあげる藍染

「消しに来たんじゃない。君は……浦原維助に聞きたいことと少し頼みがあつてね」

「……聞きたいこと？」

「君はどうして出世をおくらせているんだい？」

「……」

んでその話が出るんだと俺は頭を搔く

続けて話す藍染

「君は院では引退した死神も現役の死神をも舌を巻く尸魂界一の剣術使いと聞いたよ。
なんでも

京楽隊長の斬魄刀を斬り落としたとか」

んでそんな話が回ってるんだ。京楽隊長自分で話したな……??

話すか普通。自分が院生に負けたなんて。

いや……違うかも。この人ならどこからかで情報を得てもおかしくない。

というか見てた可能性すら出てきそう。

「始解も、卍解も使わない……。何か理由でも？」

うん、卍解の話知ってるなら、見てたなこの人。
もしかして元々唾つけてて……

商売始めた俺に初めまして風を装って接触してきたのか……？

「はあ……最初から見えて他所から聞いた風に言うのやめてもらっても？
始解も卍解も使わない方が強いから使わない。

出世おくらせてるのは下か中間で適当にやってるのが楽だから」
それっぽい理由を付け足しては見るも

「嘘はもういいさ。その無理やりに押えてる霊圧も、
始解も卍解も全て知っている。

使わない方が強いだなんてそんなわけないだろう？」

もしかして……

藍染はストーカーだった……？

いやガチめに怖いんだけど鳥肌立ったんだけど？

なんで卍解の能力分かるの？ハツたり？

違うよね？なに？怖い怖い怖い怖い！！

もう隠せそうにもないので。

「出世を遅らせてる理由だっけ？それはある人を隊長にしたいから。

それに適当にやってるのが楽なのは本当。」

「四楓院夜一四楓院家の令嬢、二番隊隊長の四楓院夕寝の實の娘で君とは同期で許嫁の関係だったね」

はあーそこまで調べたの？もしかして俺が漫画読んでないから知らないだけで、藍染は相当なストーカー気質の変態だった……？

なんだっけ……鏡花水月だっけ？めっさかつこいい名前のやつ。

あれ見なきゃいいことは覚えてるけど、見たことないし近くの人間に成り代わってたみたいのは無いはず……多分。

まじでがっちり読んどけばよかった……パラ読みだからあんまし覚えてないしアニメなんて流し見だよ……。

黙ってる俺に、無言は肯定と見なすよと言われた。

「まあ、その通りだけど。別にあんたみたいに何か悪いこと考えてるとかじゃないから」
なんてつい、口を滑らせてしまった。

けど、驚いた様子は見えない。それも予想のうちなのだろうか

「んで、聞きたいことは答えた。次お願いって何？」

「僕と戦って欲しい」

「……………あゝ」

俺は簡易的な空間凍結の機械を4カ所に設置する。

流石に流魂街の住人がいるので78区画ぐらゐまで離して

誰も近くに居ない場所まで来た。

「ほう、空間凍結」

「そ、戦ったら被害出るし、もし霊圧が漏れ出てもしたら瀟霊廷側にバレるかもだし、痕跡を消せるけど念には念を……ね。

外からは誰も入って来れないよ」

4カ所に設置すれば空間凍結の結界が作動し、

霊圧が漏れてほかの魂魄に影響を及ぼす事も邪魔が入ることもないし、

特性なので霊圧の痕跡も残すこともない。

俺はマントを脱いで木に引っ掛けると藍染も笠を取った

「戦う？何バカを」

「馬鹿じゃないさ……君の剣術の腕を見込んでの話だ」

つと言われて、この装置を設置する羽目になった。

「ルールを決めよう、斬術……始解をしての戦いはなし。

白打はあり。鬼道どうせ俺使えねえからなんでもいいよ。」

つと斬魄刀を抜いていつでもどうぞというアピールをする

「そうか、斬魄刀の能力ではなくただの力での戦いを……

舐められているのかな」

「舐めてはないよ。その方が相手の実力も分かるつてもんさ」

「いいだろう」

藍染も刀を抜いた。

合図は分からない、ほぼ同時とも言つていい程に俺ら2人は地面から足を離していった。

藍染が上段から振り落とす刀を下から弾き腹に向かって蹴りを飛ばすが身体を後ろに曲げて避けられる。

反射いいなこいつ。

何度か刀を合わすうちに様子見から本気になっていくのがわかる。

「抜刀術は見せてはくれないのかな」

「鞘に収める隙を与えないくせに？」

鬼道も惜しみなく使ってくる。

雷吼炮、鎖条鎖縛、

「縛道の六十二 ひやつぼらんかん 百歩欄刊」

光の捕縛する光の棒が無数に飛んでくるが……

「ほう……全て斬るとは。避けると思ったが」

避けることを見越してなにかする予定だったらしい。甘いな

喜助にどれだけ鬼道ぶち込まれたと思ってるんだ。

「そら!!連続技の出しすぎで隙ができてるぞー!」

黄火閃を飛ばしてきた瞬間避けその光に紛れて

俺は藍染の後ろから刀を振るう

「わざと隙を作ったのさ」

「知ってるよ、よく喜助も使う」

「!!」

藍染が避けた先には俺。

喜助がよくわざと隙をみせ俺を誘導する技。

回し蹴りをする、咄嗟に防ぐが勢いに負け藍染が吹き飛ぶ

「ほう、力も相当なものだ」

「ありややりすぎちゃった？」

「いいや、そんなことは無いさ」

土煙の中ふらりと立ち上がった藍染は口元の血を拭う。

そのうち鏢迫り合いになる。

なにか藍染の表情は少しずつ変化し、

焦るのも無い、恐怖でもない

なぜか—— 楽しそうに笑っている。

俺もきつと同じ表情をしているかもしれない。

手を抜いているとはいえここまで俺と刀を交わせる人はどれだけいたのだろうか。

俺の行動を知り尽くし錯誤を繰り返す喜助以来ではないか。

だが、勝負は直ぐに終わった

一瞬、一瞬の隙で居合の型に入り——

パキツ—— つと音を立てて

藍染の刀が折れ刀身が地面に刺さる

俺は藍染の首筋に刀を添えた

「参った」

その言葉で斬魄刀を鞘に収める

「まさか僕が負けるなんて……ね」

彼はまだ笑ったままだ

折れた刀身を拾って物珍しそうに見ている

「まだまだ余力もあるとみた。これが敗北……か」

彼はそのまま笠を被り踵を返した、

本当に戦いに来ただけなのか。

「さてよ、藍染」

振り向いた藍染に近寄り、肩に手を置く

「よし、飯くいにいこう」

「……は？」

「へえ、藍染五番隊七席なんだ」

「ああ、そうだよ」

最初はなんで君と……？と言われたけど、負けたんだから文句ないだろうって言ったなら

渋々着いてきた。

「ここは個室の居酒屋。」

浦原家とか貴族がよく使うお高い居酒屋だ。

酒を飲んで刺身を食ってる俺に対してそんな箸が進んでないような藍染。

「俺は九〇この前上がった。お前こそすぐ上がれるだろ？なんで上がらないんだよ」

「僕も早々に上がると面倒なんでね……ある人に目をつけられているし」

へえーつと言つてサーモンを食べる。あ、美味しいわこれ

「聞かないのかい？僕が何をしようとしているのか、目的を」

「興味無いね、俺に関係しないなら。俺らに迷惑かけないなら好きにすればいいさ。話

したいなら話してもいいけど」

「ふ、君の剣の腕も技術者としての腕も買っている、迷惑はかけないようにするとする

さ」

「どうだか」

そういうえば藍染の目的ってなんだったかな。

多分全く記憶にないということはその時の漫画読んでないんだろかな俺。

「まあ、金と血判契約さえ貰えればある程度作ってやるよ」

「ああ、それはもちろんこれからも頼むつもりさ」

「にしても、ある人って誰？お前みたいな猫かぶりを見抜けるってすごい人なんだな」
答えないと思っていたが、すんなりと答えてくれた

「平子真子知らないかい？今は五番隊副隊長をしている男だ。」

「へーしらなーい」

聞いたこと……あるようなないような……見ればわかるかも。

「君は人にあまり関心がないんだね。それなのに何故僕を食事に誘ったのかな。大切な話がある訳でもないだろうに」

「え？そりや戦って動いたら腹すくじやん。1人より2人、人と飯食った方が美味しいだろ。それに人に対して無関心なわけじゃないさ」

「そんな感情によって味が変わると思ってるのかい？君程の人が本当に」

「いやいや、気持ちの問題って大事よ、絶望に打ちひしがれながら食べる飯って絶対味感じないじゃん」

「はあ……」つとよく分からないという返事。

「あんたは俺を信用してないかもだけど、仲間になるわけじゃないから裏切るとかそういうんはなしだ。」

つまりは俺と友人関係になろう」

するところめかみを抑える藍染

「君はよく突拍子もないとか、よく分からないとか予想できないだとか言われたことはあるかい？」

「んーあるね、喜助によく、ほらよく言うだろ馬鹿と天才は紙一重だつて」

「君は今馬鹿だけどね」

「おいこらそんなストレートに言うことあるかよ」

俺はビールを一気飲みしてジョッキをゴンツと机に置いた

「あ>NNンなに楽しい戦いは久しぶりだつんだ！これからもたまに剣を合わせよう。お前も楽しそうだし、飯も美味くなるしいだろう？」

「まあ……戦いであんなに楽しかったのは初めてかもしれない。それは肯定しよう。食事に関してはよく分からないな」

「なんだよ、お前寂しいやつだなあ……大丈夫！これからも飯誘つてやるからー！」

「はあ……」

そう肩を叩く俺に対してため息をはいた

新たな友人を手に入れた

弟子の成長と友人と平子副隊長の話

「維助師匠！お久しゅうございますー！」

俺が朽木家に来た瞬間瞬歩で目の前に現れた白哉坊ちゃん。

いや早くなつたなあ……夜一さんが闘争心を燃やしたせいだろうけど。

キラキラした目を向ける白哉坊ちゃん。

腕の筋肉も着いて少し大きくなった気もする

「久しぶり白哉坊ちゃん」

俺が忙しいせいで全然指導できなかつたけど

白哉坊ちゃんは白哉坊ちゃんですら頑張っているようだ。

早速抜刀術を見せてもらおうと。

一瞬にして巻藁が半分に切れた。

ど素人からしたら太刀筋は見えないだろう。成長したなあ

「どうですか師匠!!師匠みたいに鞘に収めるのはまだ出来ないんですけど……いつか

……いつか師匠のようになるのが私めの夢!

そしてあの化け猫に。あつ！といわせるのだ……!!」

つと拳をギリギリにぎりしめる。

夜一さん一体白哉坊ちゃんに何したんだ……。

そういえば、る……る……なんだっけ。

主人公に死神の力与えたやつ。

その人の兄だったよね確か白哉坊ちゃん。

それで確か主人公と戦った気がするけど……

まあ俺の抜刀術ぐらいで原作変わんないよな！多分大丈夫！

白哉坊ちゃんの成長を見れたところで帰宅しようと思霊廷内を歩くと。

昨日見た顔が――

大きく手を振って声を張り上げる

「あつつつれえ〜！おおい惣右介〜」

一瞬顔を顰められたけど、直ぐにニツコリと猫かぶり表情になった。

「やあ、維助君。仕事はどうしたんだい」

「そんなの終わらせてきたんに決まってるじゃん〜」

任務終えればあとは自由だし。呑み行こ呑み奢るからさあ〜」

つと肩を組む

「昨日呑んだじゃないか」

「お前呑んでないじゃん。いこーぜー暇だろ」

「いや……今は……」「おーい、何しとん惣右介」平子副隊長

つと、関西弁が聞こえると。

副官章を腕に着けたポニテ金髪ロングが。

「ん？誰や、惣右介の知り合いか？」

「いや彼は……」「惣右介の友達の維助でーす！」

つと惣右介の声を遮ると小さくため息が聞こえた。

「ほん、惣右介友達居たんやな……。」

「失礼ですね平子副隊長、僕にも友達ぐらいいますよ」

もう開き直ったらしい、

思つてはなさそうだけど、友達と言つてくれたくわーい

「ん？自分、浦原維助ゆつて言うた？二番隊か？」

どうやら俺のことを知っているらしい

「そうだよ……いや、そうです二番隊第九席でーす」

「あんたがああの剣術の……」

上から下までじろりと定めるように見てくる

「なんやホワホワしててそうは見えへんけどなあ」

「人のこと言えないですよ平子副隊長」

「んや、呑み行こ聞こえたけど約束しとったん？」

「いや、たまたま惣右介見つけたんで誘ったんですよ」

すると何か考えたような表情をする平子副隊長さん

「ほーん……なら惣右介今日はもう上がってええで、俺の買い物付き添いやし。いつてき」

「いやでも……」

「おーやつさしい副隊長さんくじや行こうぜ惣右介く」

ってかこの人か、惣右介の猫かぶり見抜いたの。

「どういうつもりだい？呑みにいこうだなんて」

つと眉を顰める惣右介

「いや、意味も何もそのままの意味だけだ」

「何か用はないと？」

惣右介は熱爛あつかん俺はビールを呑んで向かい合っておつまみをつまむ。

「友達なんだから出かけたたり遊ぶぐらい普通だろ？」

「……本当に君の考えていることはよく分からないな」

「褒め言葉として受け取っとくよ。それにしてもあの人が昨日言ってた人か……なんか派手な髪色の人だね」

「それを君が言うんだね……？」

俺そんなに明るいパツキンじゃないもん。

あんなロングの髪は漫画見たことないなあ。多分。

「あ、そういえばそのメガネ調子どう？メンテナンスは無料だからいつでもどぞ」
「昨日君の蹴りを食らってもヒビひとつ、歪みすらなかったよ」

つと眼鏡の縁をなぞる惣右介

いやあ、さすが俺

「だろ？そんな壊れるような物作んないって、それ惣右介がかけないと霊圧制御しないから。もし落としたとしても霊圧制御装置だと分からないと思うよ。」

「へえ、それは気が利くね」

思ってもなさそうに棒読みで刺身をつまむ惣右介

にしても箸の使い方綺麗だな

「だろ？俺は気が利く良い男だから！」

「気が利くなら僕にダル絡みしないで欲しいんだけど」

　　っと少しジト目

「え〜いいじゃん」

　　そこで少し知ってる霊圧を感じてお互い口を噤む

　　惣右介と目が合うと、小さくコクンと頷いた。

「いやあ、維助君はやっぱり凄いなあ。僕も抜刀術見習いたいよ」

「ええ？やだなあ、惣右介も凄いじゃん〜そういえば五番隊給料どう？高い？」

「いやあ、あんまり話せないよそれは、はは」

　　っとたわいも無い会話。

　　猫かぶりモード惣右介とそれに合わせる俺。

　　感じた霊圧はさつき出会った――

「よー惣右介、維助、こんな所で呑んどったんやな」

　　っと平子副隊長さんの声。

　　気配を消して俺らの会話を聞いてたらしいけど

　　俺らはそれに気づかないほど雑魚くない

「平子副隊長もどーです？呑みません？」

つと言うとガンツ！つと惣右介に脛スネを蹴られた

「いつ……」

お前……！つと言う目で見るとスツと視線を外された。

おいこら！こつち見ろ！

おーい!!視線逸らすな！惣右介！

戦闘中じゃないから霊圧硬度あげてないせいでまともに食らった。

脛はダメだつて……!!

「ん？どしたん？」

つと、涙目になつてる俺に首を傾げる平子副隊長さん

「いやあ、舌噛んじやつて、」

「あーそりや痛いやつやな、」

「まあ、とりあえず座つてくださいよ、俺平子副隊長とも仲良くなりたくて」

つと言うと遠慮なくと惣右介の隣に座った。

「おねえちゃんゝ俺もビール！キンキンのな」

つと頼む。

しばらくたわいもない話をする

そのうち酒が入つてお互いにテンションが上がつて

趣味なんかの話をし始めた

「へえ、なんでも直せるん」

「なんでも直せますよ」

「現世の物も直せるんか？」

つと趣味関連でカラクリの修理の話になった。

「現世の？ まあ見ないとわかんないんすけど、直せなかったことないんで」

「へえ！ なら今度もつてくわ」

「平子副隊長。流石に他の隊の者にそれは……」

「いーんよ惣右介、俺も現世のカラクリ気になるし。」

「ほうら惣右介！ お前堅いねん！」

つとバシバシつと惣右介の背中を叩く平子副隊長さん

「はあ……維助君。もし副隊長が何かしでかしたら呼んでくれて構わないから」

「んやねん！ 俺が何かすると思つとんのか！」

こうしてみると仲良い上司と部下に見えるけど、

たまに見える平子副隊長の警戒の色。

なにか心を許してそうで許してない関係にも見える。

俺が惣右介から聞いてたから益々そう見えるのかもしれないけど。

そして数日後の任務帰りに隊舎に帰ると、門の前に金髪が

「あれ、平子副隊長さん？」

「おー、維助、この前ゆーとつたやつ持ってきたで」

「あー二番隊はちよつと今重要な任務あつて入れたら殺されるんで、ここで直しちやいますね」

つと懐から道具を取り出すと

「あんたいつも持ち歩いとんの……？」

つと有り得ないという顔。

「いやあ、いつなんどき必要になるかわかんないスからねえ」

「ほーん本当にカラクリ好きなんやな」

なんて、信じてなかったのだろうか。

平子副隊長さんに渡された風呂敷の中を見ると、高価なオルゴール

相当古い型で、まあ江戸の世にはもうオルゴールは日本に渡つてたし持つててもおかしくないけど。相当高かったんじゃないだろうか。

副隊長つて結構お金もらえるんだなあ〜つと、

その場で胡座かいて分解する

相当大切に使われてるのか、錆は無く。

綺麗に拭かれた跡もある

しやがんで俺の手元を覗く平子副隊長

「なんか途中で音が止まるねん。」

つと、

「なるほど」

音の発生源を見るとすぐに原因がわかった。

歯車の噛み合いがズレて、回らないようになっていただけだった。

細い工具でその噛み合いを直すと

すぐに

「おお!!音が出よった!!もう直ったん!?すごいなあ!」

つと嬉しそうに音が鳴り始めたオルゴールを俺から受け取る。

「喜んでもらえてよかった良かった。」

「見直したわく、いい趣味もつとんな!また壊れたら頼むわ!」

見直されるほど下に見られてたのか俺……?つと思っただけと言わなかった、きつと深い意味は無いだろう。

すると、周りをキョロキョロと見渡した後

俺に向き直りスツ—— つと目を細めた平子副隊長

雰囲気ガラリと変わる

「なあ、惣右介とはいっつから友達なん？」

「数日前ですね、俺が飯に誘って」

「いきなり飯に誘ったんかいな、あんたのコミュ力どうなつとん」

つと俺が嘘ついてないことがわかったのか、眉を顰める

「悪い事はいわん。けんど惣右介にはきーつけ、あんま心開くなや、

あんたは二番隊、裏の情報やら大切な情報を持つとる。

惣右介から維助に絡んだのかと思つたけんど、違かつたんやな」

「惣右介が俺から情報を引き出すために友達になつたど？」

「……いや、変なこと言うたわ、忘れてくれや。

あんた良い奴そうやし、俺見る目はあるんや。

——ただ、あんまベラベラ情報話さんようにな」

「そんな事したら俺が夕寝隊長にぶち殺されますよ。

弟にでも任務内容一緒にならない限り仕事の話しないんで。大丈夫です」

「へえ！維助、弟おるんや！今度紹介してや」

つと、そのまま帰って行つた。

まああの人はあの人で多分いい人なんだろうな。

わざわざ俺に忠告するあたりとか――

つと見えなくなっても平子副隊長が歩いていった方を見ていると

門から喜助の声が聞こえた。

「兄サン……母上が」

「？」

門を開けた喜助は俯いていて。

「母上になんかあったのか？」

つと寄るとすこし涙目になっていた。

微シリアス注 母上と隊長の話

死神が遺影に向かって悲しむだなんて変な話だ
とは思う――

死神は死という概念に近すぎて
死というものを軽く考えている節がある

とはいえ――悲しいには違いない。

「母上……」

ギュツと袴を握りしめる喜助。

目の前には母の遺影

気配を感じ振り向くと襖から顔を出す夜一さんと目が会い

喜助の頭を撫でると外に出た。

「維助は大丈夫なのか」

「それは夜一さんの方でしように」

母上だけじゃない

死んだのは

夜一さんの父親。

四楓院夕寝隊長も亡くなった

そして俺の父上も右腕を切断し

その他の重症の怪我で意識不明と重体だ。

四楓院家の集まっていた3人は

使用人に紛れた刺客に毒を盛られ耐性のない母は死に

耐性があれど万全の状態じゃなくなった夕寝隊長もやられた。

という事が現場検証と遺体から発見された毒物によってわかった。

「夕四郎君は大丈夫でしたか」

「ああ、ちょうど稽古に出ていてな。不在だったようじゃ」

弟君は大丈夫だったらしい。

それにしても

「万全の状態でないにしろ父上に怪我をさせ隊長を殺すとは、相当の手練」

相手が何者かも分からない霊圧の残滓ざんしは綺麗に消され

目撃者も全員殺されている。

唯一の生き残りの父上も意識不明、起きるかも分からない状態。

「則祐殿は四番隊、それに護衛もつけておる」

「ありがとうございます。ですが、恐らく狙われたのは浦原家ではなく」

「ああ……儂の家じゃろうな。復讐か、天賜兵装番を探しに来たか……」

「夜一さんも気をつけてください、あなたも狙われているかもしれない。」

しばらくは一人行動せず必ず護衛をつけること、食事も毒味役をつけてください」

「じゃが儂は……」

「いいですか、負け無いとか、死なないとかそういう事を言ってるんじゃないんだ。いつ何があるか分からない。貴方が死んだら貴族のバランスも隊もどうなるかは分かるでしょう?」

「碎蜂」

「直属の部下になつた碎蜂を呼ぶと」

「ハッ!」

「つと膝を着いた碎蜂が現れた」

「お前を夜一さんの護衛役に任命する。同性なのもあり、より傍で護れるだろう。何かあつたら戦闘ではなく夜一さんを連れて逃げる事。」

「情報を取りに行こうだなんて思うな、命最優先。」

「はっ! 拝命しました」

「はあ……仕方ないのう、頼んだぞ碎蜂」つと夜一さんが言ううと

「はいー」つとお傍で護れることに喜んでいるのだろうか、

緊張と喜びが伝わってきた。

かと言え、他の仕事もある中で人数を裂き続けるのは痛手だ。

いつ来るか分からない刺し客に怯え続けるのも。夕四郎君の所にも、

宝具の所にも精鋭の護衛が着いている。

早々に何者かをつきとめないと行けない。

それに喜助も精神状態が悪く

夜一さんも強がつてはいるが……。

「さて、どうしたものか」

四楓院家で調査に来たものやはり微量の霊子も残されていない。

残っているのは血痕と、零したであろう料理のシミが畳や壁に跳ねているぐらいか。

一応毒は検出され、喜助が解毒薬を作っているが

同じ毒を使うとは限らない。

そしてすぐに四楓院夕寝さんの隊長らによる弔いと
貴族との弔いが行われた。

何百年も二番隊と四楓院家を支えた夕寝さん。

沢山の人に見送られていった

「夜一さん」

「……」

葬式が終わってもまだ残る炎の煙を見上げてる夜一さん

実の父親が死んだ事。

そして彼を越すと努力してた彼女は

越す前に死んでしまったという事にやるせない気持ちでいっぱいであろう。

彼女の頭を撫でると、バツと振り向いた夜一さんは

俺の裾を掴んで肩に頭をうずめた

背中に手を回しポンポンと優しく叩くと、俺の装束が濡れていくのを感じる。

「うっ……ぐう……っ……」

悔しいのだろう悲しいのだろう、奥歯を噛み締める音が聞こえる。

いつも男勝りで無鉄砲で自由人の彼女も、

こうして見れば父を思い涙を流す一人の女の子。

「よしよし」つと撫でると、

子供扱いするでない……つとか細い声が聞こえた。

目元の赤い喜助と目が合い、ちよいちよいと手で招く。

「ほら、お前も泣けるうちに泣いておけ」

もう片方の腕で喜助を寄せると俺の背中に手を回しでううつと鳴き始めた。

大好きな母上と懐いて尊敬してた幼き頃からの

夕寝隊長の2人をいつべんに亡くした喜助も悲しいだろう。

両腕でそれぞれの背中をしばらく撫でつづけた。

あれから1週間、父上は命を取りとめたが起きる様子はなく。

また進展もないままだ。

過去の経歴や逃した脱走者を洗い出してみても、

これといった物は見当たらない。

碎蜂から聞いた話でも怪しいヤツも見えないという。

ため息を吐きながら1人で居酒屋の個室で頭の中で情報を整理していると

「浦原様。浦原様のお知り合いという方が御来店なされています」

という女将の声が。

「知り合い……? いいぞ入れて」

しばらくすると、個室の扉が開く

「惣右介……?」

やってきたのは惣右介で俺の前の席に座った

「難航しているようだね」

「まあね。つてか俺が調査してるって知ってるんだ」

「……僕だとは思わなかったのかい？」

「……………」

いきなり突拍子もなくそういう惣右介に俺は首を傾げる

「僕が君の母親と、四楓院夕寝を殺したとは思わなかったのかい」

「いや、思わなかったけど？」

そう即答した瞬間に惣右介は目を見開く

「なぜ？」

「なぜ……つて、理由がない。宝具盗むのにわざわざ夕寝隊長を殺しに行く理由も無いし、毒なんて使わなくても何とかなるだろお前なら。」

四楓院に復讐する理由も多分無いと思うし、あつたとして動くならもつと慎重にする

と思う。」

「……君は僕を信用しているのかい」

「そうだね。惣右介が軽率な行動をしない人物だと思ってるよ。」

するとため息を吐いた惣右介。

「相変わらず君はよく分らないね。」

……僕は四楓院家を襲った軍勢を知っている」

「本当か！」

大きくなった声を咄嗟に口を押えて、こらえ、

もう一度聞き直すと、コクンッと頷いた

「なんで知ってるかは聞かないでおくよ。軍勢って？」

惣右介が話した内容は。

四楓院家に奉公していた一族が悪事を働き追放され。

その一族が軍勢となつて勢力を上げ四楓院家に

「復讐した……つてわけか。七々ななおうぎ扇家ね。聞いたことないわ……調べてみるか」

「まあ君の場合聞いても興味なくて覚えてないんだらうけど」

「よく知ってんじゃない惣右介。それで、なんで俺に教えてくれたの？」

「……………恩を売っても損は無いからね」

つと猫かぶりの笑顔で笑う。

「そつかそつかあ！友達を助けたかったのか！ありがとうな惣右介！」

「聞いていたかい??」

「ありがとう！この恩は絶対返すよ！」

俺は名前を忘れないうちに二番隊に帰還した。

「喜助！手伝え！図書館いくぞ！」

「ええ、ちよ！待っててください!!」

エプロン姿で薬品いじってる喜助を担いで、瞬歩で図書館に向かった

「七々扇……うーんボクも聞いたことないっスね」

連れてきたのはいいものの怒られたので

草履と紅姫ちゃんを持ってってあげた。

喜助と手分けして図書館の除隊追放履歴やら歴史やらを漁る

4時間ほどたっただろうか、

本に埋もれた喜助があっ!!と声を上げた

「ありましたよんく兄サン」

「おっ、どれどれ」

そこには四楓院家の家系図と分家、

奉公している家の詳細が書かれていた……

「つておいこら、これ機密重要書齋じゃねーか、お前地下入ったろ」

「そりゃ、そつちの方が手早いじゃないっスか」

「おまえ……バレたら除隊じゃすまねーぞ……」

尸魂界中の全ての歴史や事象が記録された地下の書齋所。

入れる人は片手で数えられる程度。

それでも安易に入ることの出来ない場所なはずなのに。

「お前まさかだと思っけど俺の結界の機械使って入っただろ」

「……」

フィツと視線を逸らす喜助の顎を掴む

「あいたた!顎!顎潰れる!!グエ」

俺の結界機器とは色々あるのだが、空間凍結もそのひとつで、

きつと喜助が使ったのは、俺が隠密で使ってる使用者の事象を消すという装置。

まあ難しい話を全て飛ばして簡単に説明すると。

装置を起動して侵入して部屋に入ってAさんを殺したとして。

装置を切断すると、その殺した事象も侵入した事象も無くなり

何もしてないという事と記憶だけが残る優れもの。

つまり喜助が起動して侵入して本を持ち出して。

機械を切れれば、侵入した事象も本を持ち出した事象も無くなるという訳だ。

膨大な霊圧が必要になるし、時間制限もある。

多分普通の死神が使ったら1分で霊力空になると思う。

それに理に干渉するものなのでバレたらやばいと思う。

とりあえず喜助の霊圧が空っぽになる前に全て書き写して

機械を止めるとポンツと本が手元から消える。

本が元に戻ったのだ。

「我ながら俺すげー」

「そこは尊敬してるっス」

「そこはってなんだよ殴るぞ」

「イタイっ!!殴ってから言わないでくださいよ」

頭を小突くと大袈裟に痛がる喜助。

これだけふざけられるなら精神状態も、もう大丈夫だろう。

「はあ……なるほど流魂街の80区画に追放されたのか。そこでまだ生き延びてるって相当だよな……」

流魂街は東西南北更に1〜80区画に別れていて、数字が大きくなるほど治安が悪い。

79・80なんて死体ゴロゴロ、流血沙汰が絶えなく死神も安易に近寄らない。

そこに移住して生き延びてるってことはまあ、察し

相当強い毒プラス戦闘力で

夕寝隊長がやられたのも頷けるかもしれない。

「よし、夜一さんに報告しに行くか」

「七々扇家……か」

夜一さんも知らないらしく頭を捻らせていた。

「それにしてもその一族が犯人だとどうしてわかったんじゃ？」

「そりや聞き込みですよ聞き込み、最近入った四楓院家の使用人を屋敷におらず生き延びていた使用人や夕四郎君に聞いて、

死体になつていなくて生存者の中にもいなく行方不明になつた人から

……洗い出した！つて訳です」

「お主途中説明めんどくさくなつたじやろ、変わらぬの……」

まあよい、それがわかつたのなら部隊編成をし向かわせよう」

惣右介から聞いたことは言わなかつた。

言つてもお互いいことないし。

それっぽい事言つといたわ

二番隊隊長ではなく隠密機動総司令官として夜一さんは部隊編成を行い。

七々扇家が居るとされる場所にまずは確認のために

5人の編成部隊が送られて行つた

けれど――

「帰つてこないね」

「……………これはやられたツスね多分」

3日経っても帰ってこず、また連絡も来ていない。

1人も生き延びずに殺れたのなら。

まあ七々扇家で間違いないのかもしれない。

「夜一さん俺に行かせてください。さっさと終わらせてきます」

「……そうじゃの。相当の手練油断はするでないぞ。喜助、お主も行け」

「はい。夜一サン」

「じゃ、碎蜂。留守は頼んだ」

「ハッ！必ずや御守りいたします」

碎蜂の頭を撫でると少し顔を赤くする。

「なんじゃ、儂は撫でてくれぬのか？」

「つとちよいちよいとその裾を引つ張ってくる夜一さん。

「なんだよ、撫でて欲しかったのか？」

「つて言ってる間に俺の左腕を自分の頭の上に乗せてスリスリする。

猫みたいだ。

「わ、私めも、もつと撫でてください！」

「つと負けずに俺の手にすり寄り寄る碎蜂。

「2人とも可愛いなあー」

「喜助も撫でてやろうか」

「嫌っス」

冷たい

まずい状況の話

80区画なんて

澁霊廷自体端から端まで歩いたら10日ぐらいかかるつーのに、80区画は瞬歩でも相当時間かかる。

喜助と俺、部下を3人ほど連れて向かってるからかささらに遅い。

そしてようやく追放されたときされる場所まで来た。

「確かに強い霊圧をかんじるな」

50メートルほど離れた高台から5つの連なったオンボロの家を望遠鏡で覗き喜助に望遠鏡を渡す。

けれどこれぐらいの霊圧なら三席ぐらいだよなあ。

「こちらの事はもうバレてるようッスね。この霊圧も威嚇でしょう」

「さて…」

俺らはまだしも部下達は不意打ち暗殺はお手の物でも、

正面からの戦闘はまだ不慣れだろう。

俺一人行くにしても何人いるかも分からないし。

奥の手やら何やら残ってるかも：

それに部隊の生き残りがいるかもしれない。

うーん：

よし！難しい作戦とかは俺には無理だ！（諦め）

「とりあえず俺が連中を外におびき出す。

部下の指揮権は喜助に譲渡するから、

タイミングを見て前来たであろう部隊の搜索を優先に。

それが終わったらとりあえず援護してくれ。あとは喜助の判断に任せる」

「分かりました。お気をつけて」

俺は瞬歩でオンボロの前に立つ。

「また来やがったのか。」

ドスンドスンっと、オンボロが崩れるのではと言うほどの足音を鳴らして出てきた、

大男。

こいつボスじゃないな。身体付きだけいいタイプの雑魚。

テンプレか??

とりあえず

「俺の可愛い部下の場所は？」

「あ……？」

一瞬のことで見えなかったのだろう。

自分の右腕をみた大男は、顔を真っ青にすると、悲鳴をあげた

斬られた事にも気づかない早業。

右腕がゴロンつと地面に転がり、男も痛みで右腕を押えながら地面に這い蹲る。

雑魚の下っ端って言ったところか。

それから悲鳴に呼びおせられてか、10人ほどの男や女が出てくる。

どれもこれもボロボロだが、霊圧も戦闘慣れもしているように感じる。

まあ80区画だからかもしれないけど

「へへ、男にしちや可愛い顔してんじやねーか」

「やだあーかっこいい。」

なんて、余裕そうな声。

俺は刀を構えた。

「なんだ、どいつもこいつも、雑魚、チンピラ。

強いと思われるやつもそうでも無いし。

本当にこいつらにやられたんか隊長……」

そんなわけないよな。

つと、気絶した七々扇家の奴らを蹴る

文字通り瞬殺で終わったわけだが。

「大変ツス!!兄サン……」

「?」

慌てたような喜助が駆け寄ってきた。

話を聞いた瞬間。俺は瀨靈廷に向かう

「……嘘だろ。間に合うか……?」

“ 「生き残った隊士が見つかったんすけど……

頭領とその他の幹部が瀨靈廷に向かった……と!!」

と、喜助から伝えられた。

入れ違いになるとは思わなかった。

おかしいとは思ったが……

間に合うか？ いや、間に合わせる。

—— 休み無しでようやくたどり着く。

あちこちで霊圧の衝突を感じられる。

全く、どうやって瀧霊廷に侵入したんやら。

とりあえずは夜一さんの安全の確保。

すぐに二番隊隊舎にむかった

碎蜂 side

維助様が向かってしばらくして

「侵入者！ 緊急招集！ —— ！」

つと侵入者を知らせる鐘が鳴り響く

「夜一様！ 屋敷の奥へ —— ！」

と、護衛のひとりが襖を閉めようとすると

「そうはさせねえよ」

と、聞いた事のない男の声が響く。

目の前で襖の前に立っていた護衛が血飛沫を散らし地面に倒れる。いつから……？いつから居た？

こんな……重くのしかかるような霊圧をしていたのに。

声でするまで気配を、霊圧を感じられなかった……

まさか一瞬で入ってきたとでも言うのだろうか。

大太刀を背負った長身の男はニヤリと笑った

「褐色肌が四楓院夜一？あつてるよね。」

「夜一様お下がりください」

維助様から命じられたのは戦闘ではなく逃走。

私の命を掛けて夜一様をここから逃がさなくては。

だが出口も塞がれ、行き止まりに逃げ失せるのは危険である。

「夜一様、隙を見て外へお逃げ下さい！」

「じゃが碎蜂！お主らを置いては……！」

「我らの命は夜一様と天秤にかけるものでは無いのです！夜一様!!」

だが、夜一様は逃げようとはせず。足を下げて戦闘の構えをとる

「夜一様!!」

「碎蜂。儂はお主らを見捨てて逃げるほど落ちぶれてはおらぬ。

自分の身ぐらい自分で守るわ!」

その背中が大きく、立派で、一寸の迷いも恐怖も感じなかった。

ああ、私はこの人のようにになれるのだろうか。

男も隙を見せない。

あつという間に部屋には私と夜一様だけが残つてしまう。

「似てるね、あの褐色の男も同じように右腕を切り落とした男を守っていた」

つと、男が口にした。

褐色の男——?もしかして:つと前軍団長閣下を殺したのは。

維助様の母君らを襲つたのは——。

その瞬間。隣から物凄い殺気を感じた

「お主が:お主がやったのか?」

「え?あの男?父親でしょー、殺したよ、馬鹿だよねえ」

「夜一様。冷静になつてくださいませ夜一様!」

そう隣の夜一様に声をかけるも

彼女は冷静さを失いかけて、握りしめた手から血が滴り落ちる。

それをわかつているのか、男も夜一様を煽る

次の瞬間、クナイが男から飛んでくるが、それを弾こうとするも

「ぐっ…!!」

頬にクナイが掠る

「碎蜂!!」

「そらー！がら空きだぜー！」

気を取られた夜一様も腕にクナイを食らう

「こんなものでーなっ…」

ガクツと足から力が抜け膝を着く

何故？足が痺れるように…！感覚が抜け、唇も痺れて行く

「毒か…っ！」

と、夜一様が腕を抑える。

「せいかーい！隠密機動つてめんどくさいよね。毒にならされてるの？」

普通少し掠っただけで泡吹いて倒れるのに。

じゃ、このまま時間かけると面倒な奴ら来るだろうし…終わらせるね」

クナイを構えた男が夜一様にむけて大きく腕を振り上げる

「維助…様…」

ごめんなさい。夜一様を守れず。

逆に守られ…私は…。私は…

拜命された任務もこなすことが出来ないのか…

あんなに、よろしく頼むと、維助様に言われたのに…!

「夜一様ああ!!!」

「遅くなっちゃった」

静かに「だが確かに耳に届く低い声。

——ああ、この背中は。

この心強い声を私はきつと一生忘れないだろう

「維助…様」

男が夜一さんに向けてクナイを振り上げていた。

その手を切り落とそうとするが。

咄嗟に手首を返しクナイで刀を受け止められた。

クソ、狭い部屋のせいで勢いが出なかった。

「あんた強いでしょう？分かるよ。でも残念もう毒が回ってそのうち死ぬよそいつら」
「…」

ちらりと後ろをみると腕を押えた夜一さんと、意識が残ってるものの、床に倒れてる
碎蜂。

「夜一さん動けるか。」

「…っ…なんとかの」

俺は男のクナイを弾き腹に蹴りを食らわして距離を取らせる

「これを、ちょうど二本ある。解毒剤だ、喜助の話なら多分効く！碎蜂を連れて危なくな
い場所に下がってくれ。」

下がりすぎはダメだまだ仲間がいると思うから」

俺は注射器を二本夜一さんに投げる。

「…っ、わかつた維助、気をつけるんじやぞ」

「誰にいつてんのさ。大丈夫」

「あいたた、そんな細身なのにどっからそんな力出てるの」

受身を取ったらしい。そうダメージはあまり入っていないようだ。

男は背中の大太刀を取り出した。

「こんな狭い中で大太刀を振るうって？」

「関係ないね、全部切っちゃえばいい」

その瞬間に横に大きく刀を振るう男。

ガガガガ！つと音を立て柱も屋根も崩れてしまう。

咄嗟に夜一さんと碎蜂を横に担ぎ外に出る。

なんつー無茶苦茶な…!!

それに…

「誰が直すと思つてんだ!!俺だぞ俺!!」

夜一さんと碎蜂を壁に寄りかからせる。

解毒剤はきいているようで、顔色は良くなっている。

「そおら!!」

大きく開けた場所に来たからか、容赦なく大太刀を振るってくる。

抜刀をしようとするが、俺の間合い寸前のところで刀が離れた

「なんか嫌な予感。」と、男が呟くように言った

こいつ、勘がいいのか?第六感つてやつなのだろうか。

刀を引つ込めて次はクナイを投げてくる。

全て弾いて寄るも距離を取られてしまう。

あまり離れると夜一さん達を守れない。

一定距離から攻撃してくるのがウザりたい…!!!

少しだけ離れてしまった瞬間に。

「せきえん!
石燕」

つと男が名前らしきものを呼んだ

——瞬間。どこからともなく。

大量の矢が空から降ってきた

「嘘だろ？」

すぐに瞬歩で夜一さんと碎蜂の前で矢を全て弾こうとするも、
なにせん量が多い。

1本も逃さず弾く。

けれど

「そら!!!矢に気を取られすぎだ!!!」

急接近してきた男の大太刀が俺を捉え

本来なら俺の胴体は真つ二つになっているはずだった。

「俺の…大太刀を片腕で…!!」男の驚いた声が聞こえる

俺は左手で大太刀の刃を受け止めた。

だが、少し手先が斬れてしまった

—— つと言つても紙で切つた程度の浅さ。

喜助でも傷をつけられなかった俺の霊圧硬度を突き抜けてくるということはそのなりに強い。隊長格はあるだろうな。

と、安心していた所だが。

「なつ……」

少し掠つただけなはずなのに、

まるで蕁麻疹じんましんのように、ブツブツとした物が腕に出来て熱を帯びて行く。

「はは、俺の刀の毒は超強力！」

普通はそれだけでも死ぬんだけど

……なんで立つてられるの？ おかしいなあ……」

すぐに足を振り上げ踵を落とすもヒョイツと避けられてしまう。

毒を抜こうと、自分の刀で腕を切りつけ血を流し毒を外に排出しようとするが、蕁麻疹は止まらなく顔にまで蕁麻疹が走ってるのがわかる。

「はは……もうすぐ死ぬよ。残念残念……楽しかったのになあ。」

もう毒で動けないでしょ？」

つと一歩一歩寄つてくる男

「維助……逃げろ！ 逃げろんじゃ……！」

そんな声が後ろから聞こえてくる。

「逃げる…？俺が…？はっ馬鹿いつちやいけない

俺が逃げるのはめんどくさい講義だけだ!!ばーか!!」

抜刀術――

「なん…で？」と、掠れた声が聞こえる。

第六感だなんて、そんな嫌な予感を感じさせ無いほど早く――

間合いに入った瞬間に予備動作すら見せないほどに早く刀を抜いた。

俺の刀は確実に男に一太刀を浴びせ

次に足を切り落とす。

次の瞬間には血飛沫が宙に舞って男は地面に倒れた。

何が起きたか分からないというような顔で男は俺を見上げる

「なんでだよ…！俺の毒は…！特殊性なんだ…！」

クナイに着いた毒は薄めたやつで：俺の刃の毒は原液…!!
本来なら！本来なら！死ぬんだぞ!!」

俺は男の前でしやがむ

きつとクナイに薄めたやつを仕込んだのは、クナイが傷むからだろうな。

「知ってるか？俺の弟天才で毒の解毒薬作るぐらいすげーんだわ。

でも解毒薬完成できたかどうかでどうやってどうやって分かると思う？

——それは実験に成功してから。

もう原液は喜助が検出された成分から分析し作り上げて。

その毒を俺で試し解毒剤の実験をしたんだわ。

わかんない？つまり俺にはその耐性ができてるわけ。

実の兄を実験台にするって、イカれてるだろ？

お前は、母を夕寝隊長を部下を殺し父上を傷つけた。

そして大切な人達も

毒よりも死ぬよりも辛い思いをこれから味わうんだ。

今のうちに空を拝んどくんだな」

抜刀術名前つけようかな

「兄サン無事っスか」

あの後すぐに喜助が部下を引連れて戻ってきた

「すぐに四番隊を、夜一さんと碎蜂。そしてやられた部下を運んでやれ」
手を上げるとすぐに部下が皆を連れて四番隊に向かったのが見える。

流石優秀だな。

「矢を放ったのはそいつか」

喜助が倒れた男の隣に弓を背負って気絶してる男を放り投げた。

雑だなおい。

「他の連中も、他の隊の人達に倒されてるのを確認したっス。」

「そうか、ならよかった」

よかった、それは良かったけれども

「気が晴れないものだな。」

母を殺した、父を傷つけた。優しくしてくれた夕寝隊長を殺した。

そんなやつを倒したのに。

気は晴れない

「帰ってなんか。来ないのにな」

「兄サン」

「喜助がやりたかったか？この男」

つというも、静かに首を左右に振って続けた。

「兄サンならこういうでしょう？気は晴れないって」

「そうだな…気は晴れないよ」

復讐というより仇討ちは終えた。

母上、夕寝隊長。どうか安らかに――。

まさか紙で切った程度で毒が回るなんて。

これが他の人だと思つとゾツとする。

ちなみに俺の毒はトイレ行ったら流れてった。

夜一さんも碎蜂も家系上毒にはならされて免疫があつたから身体が持った、毒抜きも終えて後遺症も残らなかつた。安心安心

そして七々扇家は捕まり追放も危険ということで地下深い牢に入れられる事に。

解決した——のだが

「申し訳ごさいません。維助様……夜一様をお守りするという役を承つていたのに……」

碎蜂はあれからずつと俺と夜一さんに謝り続けている。

土下座して、グツと握りしめた手は爪がくい込み血が滲んでいる。

「大丈夫だつて、碎蜂。お前は俺が来るまでちゃんと夜一さん優先で頑張つてくれただろ？夜一さんだけだつたら無謀にあの男に突撃してたかもしれない。」

「うっ、流石に一人では突つ込まないぞ維助！じゃがまあ碎蜂。お主はよくやつてくれたとは思うぞ」

なんて、ツンデレか夜一さん。

「ほら、そんな握りしめたら痛いだろ。」

土下座してる碎蜂を起き上がらせて手を開かせる

あーあー、手に爪の跡がくつきり

袴に付けてるポシエットから包帯を取りだしてその手に巻く

「こ、このぐらい自分でできます！」

「いーからいーから、よくやったよ碎蜂。ありがとうな」

「はいっ…」

そつと頭を撫でると顔を赤くした碎蜂がニヘラつと笑った。

可愛いなあ

「むっ…」

つと維助と碎蜂を見て口を尖らせる夜一に

横に控えていた喜助が維助の方を指さす

「夜一サン混ざってきたらどうツスか、そんなブスくれてないで」

「ブスくれてなどおらん！別に心臓が痛くなったりなどせぬ…！」

あー…！ダメじゃダメじゃ！維助!!儂も撫でるんじや！」

「えっ、ちよその勢いできたらグエツ」

耐えきれなくなつた夜一が維助に飛びついて

維助がひっくり返る光景をみて喜助は、はあつとため息を吐いた。

「まあ、いつも通りで何より……って感じツスね」

隊長になった夜一さんの話

あれから夜一さんは、白哉坊ちゃんの祖父にあたる朽木銀嶺隊長くちぎぎんれいの推薦により無事隊首試験をクリアし2番隊隊長に任命された。

そうして、夜一さんは不本意というか不服そうだったが正式に四楓院家の当主となった。

俺も俺で昇進し。

第一分隊・刑軍予備指揮官

まあ業務内容ぶっ飛ばして肩書だけ説明すると

隠密機動の夜一さんの総司令官の次に偉い副司令官と

二番隊第四席で第四部隊・特攻隊の部隊長も兼任している。

本当は三席、三部隊長をやるはずだったが、監理隊はつまらなそうだからと、喜助に譲った。

そして碎蜂は俺が第一部隊の刑軍に任命しておいた。

数々の死者や負傷者で穴だらけの隊だし色々ごたごたと忙しいが、あと少しすれば落

ち着いてくるだろう。

「え？ウジ虫の家の強化？」

喜助が俺の部屋に訪ねてきて、門の強化を頼んできた

喜助が担当してる監理隊。

ちかとかくべつかんりとう
地下特別監理棟、通称蛆虫の巣、俺はウジ虫の家って呼んでる。

何か巣とか禍々しいというかキモそうだから……家にしたら気持ち悪さなくなるかなって。

まあ名称はどうでもいいとして、喜助は喜助で問題解決に向けて頑張っているようだ、

仕様書や、問題点を事細かに書かれた書類に目を通す。

「なるほど……岩を掘って脱走とか。よくやるなあ」

脱獄の映画かな……？と思えるぐらいに

関節を外して窓代わりの柵をすり抜けたとか、スプーン……匙で岩を掘って穴開けたとか。

「度々起こってたんすけど、ボクには権限がなかったもんで」

「なるほどね、正式に部隊長になったからどうにかしたい……と」

まず問題のの一つ、門。

入り口であるが、度々門番が襲われてしまうといった問題や、力の強いものならこじ開けられてしまう。

など、色々問題がある。

そして仕様書を見ると・・・

「マジ??」

喜助の仕様書は、まあ原理とかを端折って簡単に説明すると。

目の角膜と霊圧の検出による門の開閉。

登録者以外が認知なく通ろうとすれば結界が展開され。はじかれて出入ができなくなる。

セキュリティの問題と、脱走の問題、門番の仕事量削減が見込められる仕様。

「まあ兄サンならできませすよね」

と笑う喜助・・・

ふう

「いいじゃん、やってやるよ」

サイバー感あっていいな、ロマンです。

あれから一週間で完成させた。

喜助にも手伝わせ、工事用のロボも全投入！

異例の速さで大工事を終わらせた、もちろん手抜きはしてない！

洞窟の安全と、空気の確保。

火災時のシステムなんかも全て見直し改善した。

そして喜助の想定するありとあらゆる対応装置も作り。

そして肝心の門だが喜助が手を添えて靈力を注ぐと開き。

隠しカメラにより本人確認。

もし靈力、靈子の構造に合わない何かがあれば角膜での再認証が行われる

なりすまし防止システム！うーん!! かつこいい!!!

「天晴^{アップル}！さすがっス兄サン」

問題解決に喜助は喜んでるようだ。

俺は技術的な面と少し案だしたぐらい。

喜助は原理と仕様を考えたから実質喜助の作ったものでもある。

喜助も喜助ですごいと思うわ。

「うわ、化粧お化け」

「失礼なやつだね。その胡散臭い顔、浦原喜助の血縁に見えるが」

地下にも機械を付けようと思つたら白い妖怪……いや涅マユリという人物が牢にいた。

うーん見たことあるから多分原作の人かな……？

「浦原維助、ボクの兄にあたるっス」

「ホウ、兄……気の抜けるような間抜け顔がそつくりだヨ」

と、ため息を吐かれた

「兄サンは尸魂界一の技術者でして、外に出る機会があればきつと驚きますよ？」

何て喜助が言つた瞬間に興味を示したらしい。

「嘘……とは思えないが、君がそこまで評価するのなら本当なのだろうネ

私より優れているのか……それを試せないのが残念だヨ」

何かに火をつけた気がするけど……まあいいか

つと、仕事も楽しく、順調に進んでいた。
そして場所は変わり四番隊。

「父上」

「…維助。迷惑をかけたな」

やつれた顔の父上。

右腕の負傷に、親友であると思われる夕寝隊長。母上の死。

それを伝えられた時の父上は絶望で心が壊れかけていただろう。

本来は父上はとつくに起きていたんだが。

俺らが父上の精神状態が落ち着くまでと、面会はしなかったのだ。

父上もそれがわかったからか、謝ってくる

「父上だけでも無事でよかった。」

「ああ…だがもう当主として威厳もなければ力も不足してる。

だから・・・」

するとさつききのゲツソリ顔はどこへやら、喜助とそっくりな笑顔を向ける

「維助——お前が当主となれ」

「……はい??」

——
つてことで浦原維助。自称尸魂界一の技術者で

上級貴族の浦原家の長男にして

隠密機動副司令官兼、二番隊第四席、四部隊特攻隊隊長。

そして、浦原家の当主という肩書きが追加された——。

「喜助！頼む変わってくれ!!」

「嫌つす♪」なんて、にっこりと楽しそうに笑う喜助。

「薄情者おおおー!!あんなに色々作ってやったろ!？」

「それとこれは話別ツス。嫌っスもん当主なんて〜」

つと煎餅をバリムシヤア。

「俺だつてやだよ！俺過労死するけど!?ねえ！ちよつと!」

フィツと目を逸らして鼻歌を歌い出す喜助。殴つてやろうかテメエ

そして、部隊長には世話役がついていたりいなかったり、喜助はいないみたいだけど、俺は、補佐的な人も欲しくて世話役を希望したら。

大前田副隊長さんが、なぜか碎蜂を俺の世話役にした。

「碎蜂、刑軍に俺の世話役だなんて大変だろ?断つてもよかつたんだぞ?」

と、せっせと俺の部屋を片す碎蜂に問うと

「いいえ!私が副隊長殿にお頼み申したのです!」

夜一様が維助様はからくりをいじり始めるとお食事もとらずに部屋も散らかすと聞きました!!私がお役に立ちたいのです!掃除洗濯、何でもお任せください!!」

と声を上げながら詰め寄るものだから断れなかった。

いいタイミングでお茶やをくれたり、時間を教えてくれたり、邪魔もしないのでまあ助かっている。

俺の部屋の隅で控えてる碎蜂をちよいちよいと招いてちやぶ台で休憩をする

「碎蜂は働きの者だな」

「そ、そんな滅相もございません・・・維助様のお役に立てるなら・・・」

と顔を赤くして俯く。

かわいいなあ

碎蜂の頭を撫でていると、スパァン!!!と開いた襖

こんな乱雑に俺の襖開ける人は一人しかない。

「夜一さん、襖壊れるんですけど?」

「維助!!鍛錬に行くぞ!暇でかなわぬ!」

「話聞け!!あんた大前田副隊長から逃げて来たろ!暇なわけあるか!!そもそもおれだつて・・・グエツ!!」

遠慮なく部屋に入ってきたかと思うと、俺の首根っこをつかんだ夜一さんは俺を引きずるようにして歩きだす

「締まる!締まつてる首!!おいゴラァ喜助!てめえも道連れだ!!」

引きずられている途中で喜助とすれ違ったので喜助の足をつかむと勢いよく顔面からすつころんだ喜助。

「ガフツ何するんスカ兄さん！ちよ、足離してください!!」

と鼻を抑えながら引きずられる喜助。

「ははは！お主ら重いのお！よいよいいい運動じゃ」

「お、お待ちください夜一様！維助様！」

夜一さんに首根っこ掴まれて引きずられる俺

そんな俺に足首掴まれて引きずられる喜助に

それを追いかける碎蜂という構図である。

「そうそう、碎蜂は物覚えいいなあ」

碎蜂が剣術を学びたいというので、基本的な物だけ

俺の型は自己流すぎるし体を痛めるのでマネはするなど言ってるけど、

バリバリ真似してくる、こりや喜助に教わらせた方がいいかな……

「維助！農と組み手するぞ！準備せい！」

まあそんな喜助は夜一さんにのされて地面に転がってるんだけど、

「はいはい、今行きますよお姫様」

恋愛話と技名の話

「俺の昇進と、惣右介の昇進に!!かんばあああい!!!」

つと、騒がしい居酒屋でさらに騒がしい俺の声が響く。

「はあ」

ため息を吐きながらも他の人の目があるからか一応乾杯してくれる惣右介
半猫被りモードである。

今日は騒ぎたいからお高い系じゃない居酒屋です

「にしても副隊長か、一気に昇進したな」

五番隊長はなんか、この前の七々扇家の事件で亡くなったらしい。

全然知らなかったわ…

それで、京楽隊長が平子副隊長さんを推薦し、夜一さんと同じタイミングで五番隊長
長に昇進。

そして平子副隊長…じゃなかった平子隊長の命により惣右介は副隊長に任命された
という。

猫かぶりを見抜いた平子隊長さん、警戒してて俺にまで忠告するのになんで惣右介を副隊長に任命したんだろうか。

警戒してるからこそ傍におきたい的な…？

でも惣右介を見た感じ、嫌だとか困るとかいう感じはしないけど…。

想定内というか計画通りなんだろうな。

「部隊長になると給料上がるんだろ？いいなあ、でかい部屋貰えるらしいし12畳だっけ？俺も俺で広くなったけど全然足りん…！」

「そんな12畳全部使わないよ。本を少し置くぐらいかな」

「へえ、勿体ない…欲しい家具があったら言えよ！」

お友達割引で安く便利な家具作ってやるよ！

音の立たないスムーズに開けるストレス0引き出しとか。

斬魄刀も喜ぶ！快適な刀掛け！とか」

重要な書類にいかが!?本人の霊力でしか開けられない引き出し!とか」

「段々と興味引きそうな商品紹介をするようになったね。瀨霊廷で真つ当な方の商売でもしたらどうだい」

「いや…」

席も離れてるし周りの客は酔ってるけど一応声を小さくする。

「隊長でもない限りあんまり変なの作って広まるとさ。四十六室が俺を危険分子とみなす可能性あるんだよね。修理屋とか家具屋とかそういうのは出来るかもだけど何があるかわかんないからさ……知り合いにだけこっそり商売してるわけ。」

「へえ、君にも苦勞する事なんてあるんだね。それにそういうのを気にするとは思わなかった」

つとサラツと毒吐く惣右介

「失礼だなあ、俺だって苦勞ぐらいするさ、給料上がったけど仕事増えたし。それに俺から機械類をいじり回すの取り上げたらきつと俺は生きていけないから」

給料は9席の時の倍は貰えるし、隠密で使える機械・道具類なんかは経費で落とせるようになった、けど九席の倍仕事増えた。

「二番隊、第四部隊の特攻隊だったかな」

「へえ、機密じゃないにしろよく知ってたね普通他の隊の構成とか知らないだろ」

「それは君が他の隊にあまり興味無いだけじゃないかい？君と一緒にしないで欲しいな。特攻隊とは主に何をやるんだい？」

「まあ、バリバリの戦闘部隊さ、戦闘して情報を集めて5部隊に引渡し。」

虚から犯罪者、脱走者から何まで全て戦闘で解決させる部隊って感じ。色々端折はしよったけど……まあそんな感じ

特に二番隊の席間の中で殉職率の高い部隊に俺は志願したんだ、監理隊はつまらなそうだし。」

「まあ君にはピッタリの業務かもしれないな」

ほかの部隊も戦ったりするけど、あまりに凶暴すぎるとか危険すぎとか言つた虚や犯罪者に対して先行し前線で戦うのが目的だ。

他の部隊と合同になることが多いかな？

1番殉職率の高い部隊だが、俺の部下は俺自ら鍛えた精鋭達で構成してるから殉職率は下がるだろうよ。

「あれえ〜こんな所で呑んでたのかい。」

しばらく他愛もない話……と言つても俺がベラベラ話してただけだったが。

そんな時、気が緩くなるような声が聞こえそちらに目を向けると

そこには片手を上げた京楽隊長がヘラツと笑つて立っていた。

「おー！京楽隊長じゃないスか〜お久しぶり」

「京楽隊長。こんばんは」

姿勢を正してペコツとお辞儀をする惣右介。

こうしてみるとまじで真面目な優等生つて感じに見える

何かすげーわ、うん……

「いいのいいの惣右介君。今は業務中じゃないしき気を楽にしてよ僕も一緒していいかな？席空いてなくてさー」

「いいですよー！ぜんぜん構いません」

惣右介の隣に座って日本酒を頼む京楽隊長。

「2人とも昇進おめでとう。いやあ早いもんだね」

「まあ、もう何年も経つてますしねえ」

本当に時が経つのは早いものだなんて爺臭いことを考える。

もう人間で言えばもう寿命の1.5倍は生きてるから爺である事には間違いないんだらうけど。

しばらく呑んでたら突然

「そういえば維助君はどっちと結婚するんだい？」

と酒で酔って顔を少し赤くした京楽隊長が言い出す。

「ブツ！ゴホツゴホツ」

吹き出しそうになってこらえたせいで酒が変なところに入って嘔せる俺

「な、なんですか、いきなり」

「いやあねえ？僕も一応貴族だからそういう話は入ってくるのよ、何でも下級貴族令嬢とあの四楓院夜一の2人と婚約してるって」

ほんと、どこからその噂流出したんだ…

「どちらも実質解消したみたいなもんすよ、幼い頃親が決めたのが夜一さんで、夜一さんが当主になると決めたから。」

長男で次期当主だった俺は…まあまた見合い話が来て…みたいな」

「でも正式に解消した訳じゃないんだろう？もしかしたらあちらさんは結婚を申し込まれるの待ってるのかもよ？」

俺は少し考える。

「うーん…それは無いんじゃないスか？」

「おや、それはどうして？」

と、お猪口ちよこを傾ける

「夜一さんは嫁入りする気ないから婚約保留してた訳ですし、俺も俺で当主になったから嫁入りもしないし。」

碎蜂とはまあここだけの話ですけど。

表向きで婚約者を演じるって同意の元って話し合ってたの事ですし」

「ふうーん、でもぶつちやけるとどつちが好きなの？演じてたとしても保留にしてたにしても、そういう気ぐらい出てくるんじゃない？」

「好き…うーん…。二人とも可愛いとは思いますが。好き…好きねえ。」

友人的に部下的には大好きですよ二人とも。でもそういう好きかと言われたら……ちよつとわかんないかなあ……」

「僕から見ると、まるでその気持ちに気づかないようにしている……ようにみえるんだよね、どうも」

つと、まるで確信してるかのような口調

「さあ……それはどうですかね。もう二人とも長年一緒にいるわけなんでドキドキとかキョんキョんとかもないですよ。」

可愛いなあとは思いますが、でもそれは他の女の子にも思うことですし。それに俺少々トラウマがあつてそういうの無意識に避けてるのかも。

なんか女の子から告白されたりすると嬉しい半面怖くなっちゃうし」

他の隊の女の子に告白されたけど院生時代の事があつて、丁寧にきちんと断つたなあ。

トラウマなかつたら、今でも女の子と遊んでただろう。

「へえ……まあ楽しみにしてるよ。よっ！モテモテ優男」

と、笑う京楽隊長。

何を楽しみにしてるんだ？

質問攻めをのらりくらりと適当に流して

それから惣右介も巻き込んでタイプの子の話をしたりして皆酔っ払って帰った。まあ惣右介は酔ったフリだろうけど。

「もう！維助様！こんな夜遅くに……ってお酒臭い」

つと鼻を摘む碎蜂に出迎えられた

「あれー碎蜂。こんな遅くまでどうしたのさ」

「維助様がおかえりにならないから待っていたのです！夜一様より重要書類をお預かりしていて。期限は明後日でいいそうです」

碎蜂が差し出した紙を受け取る

「わざわざ待ってたのか、悪かった」

頭をポンポンと撫でると顔を赤くする。可愛いなあ

好き……好きねえ……

確かに碎蜂は好きだし可愛いけど、そういう好きかと言われたら、マジでわかんない。どう違うんだろうか……

それに俺は身軽がいいし子供も欲しいと思つてない。

それに機械弄る暇を他に当てるのも少し迷つてしまう俺だし、

それはそれで女の子に失礼だしいい気分では無いと思う。

だから院生の時代適当に遊んで適当に関係が切れてみたいなのにハマったんだろうな…。

恋愛つてのは難しいもんだな

「んで、なんでそれをボクに話すんすか？」

つと眠そうな喜助。

碎蜂を帰させたあと俺は喜助の部屋に行つて喜助を叩き起して話し始めたのだ。

「つてか酒臭い。兄サン酔つてますね？」

なんだかんだ話を聞いてくれる喜助は優しい！

やっぱこういうのは俺を知り尽くした喜助に相談するのがいいよな

「ボクも身軽なのは賛成ツス。そういう責任とか負いたくないスもん」

「だよなあ…。つてかそもそも1人の女の子にしか目を向けないとか俺無理かも…最低だけど、爆乳見たらそつち見ちやうもん絶対。」

あと、世に聞く嫉妬束縛とか俺無理だわ…

機械と私どつちが好き!? つて聞かれたら機械つて答えて殺されそうな未来見えるし」

「それは…まあ、正直すぎますけど、それをわかつて人に身を寄せないのは兄サンの良心の部分つスよね」

「なんだよ、良心全然無いみたいない方しやがって」

「ボクと似たようなもんじゃないスカ。良心はあるけども機械のためなら手段も選ばない技術者」

「お前が俺に似たんだよ。お前も研究心を満たすためなら手段選ばねえだろ特に実の兄を実験台にするぐらいには」

「あは？ 褒められちゃいました？」

「褒めてねえよどこが褒めてんだ」

「どこをどうしたら褒めてるように聞こえたのか。」

「ことわり理に干渉して、危険であるとわかっているのに危ない装置を作ったりするぐらいには俺も喜助もそういうのは欠けてるんだらうな。」

「さすがは兄弟と言ったところか。」

「それはそうと」

「あのトラウマさえなければなあ」

「トラウマはまあ…洗脳されかけ事件の話である」

「いやでも、あの事件のおかげで兄サンは相手女性の気持ちを考えるようになってそういうのを避けたり、遊んでも付き合うとかいう行為には至らなくなった訳ですし。」

「まあ、それもそうだよなあ…感謝してるにはしてるよ、もう名前も忘れたあの子。」

「相変わらずツスね普通名前わすれませんよ」

「俺だつて最近はある努力してるよ。成長したもんだよ俺。人の名前覚えれるようになったんだから」

「そこ威張れるとこじゃないツス」

喜助 side

いびきをかきながらボクの部屋で爆睡する兄。

顔を赤くして酒のアルコール臭を漂わせて入って来たかと思えば

悩みや考えをベラベラ話す、酔った時の癖は変わらぬまま。

「まあ、明日には話したこと忘れてるんでしようけど」

悩みやら考えを話して満足しても明日には忘れてるので意味無いようなものだが、まあ気持ち的な問題なのかもしれない。

兄は千寿サンの件から女性に対して億劫になってそういう話をされると避ける節がある。そういうのを本気で話始めるのは酔った時ぐらいなものだ。

弟であるボクの目から見ても無意識というか本能的に夜一サンの好意や碎蜂サンの好意を避けているような気もする。

恐らく本当に気づいていないんだろう。

夜一サンらが好意を伝えた時、兄はどんな反応をするだろうかと考える、人の気持ちつてのは研究しても正解も規則性もないから面白い反面。めんどくさい。けれど

第三者から見ているのは面白い。

頭痛と共に起き上がる。頭いてえ：

呑んで帰ってからの記憶が無い。

んでおれきすけの部屋にいんだよ。

座布団を枕にしてたからか首痛いし

フラフラと喜助を起こさないように部屋に戻り、

自分の部屋に取り付けた洗面所で顔を洗う。

そして無造作に置かれた橋姫に謝りながら刀掛けに起き直す。

そういうえば抜刀術の名前付けないとなあ：

かつこいい技名がいいな：

始解した時の能力じゃないので言霊関係ないから別に技名叫ばなくてもいいわけだ

けど…

いや。でも技名声に出すのってかっこいいじゃん!? 前世だと厨二とか思われるけどこつちの世界からしたら普通みたいな感じだし??

抜刀術…うーん。

俺ネーミングセンスないんだよなあ…

昔飼ってたペットもわんちゃんとか猫ちゃんとか。トカゲちゃんとか

金魚なんて魚ぎよちゃんって名前付けてたし…

機械も1号機2号機だしなあ…

夜一さんは瞬神ってついてたよな。2つ名だけど

早業——瞬…瞬抜刀?

しゅんとう瞬刀…うん! 瞬刀にしよう!!

わかりやすいしなにより俺が忘れない!!

しゅんとうばつとうじゆつ瞬刀抜刀術——三連撃——!! うん、我ながら厨二感あっていいな。

技名叫ぶのはロマンです。

橋姫がダツツサって言ったけど気にしない

猿柿ひよ里と戦った話

フラフラと澁霊廷内を練り歩く俺。

俺の手には新しい工具。と部品とガラクタ。

力で色々ねじ曲げられても。小さなネジとかは流石に工具使わないと無理だし、分解にも必要だ。

ガラクタはいつも粗大ゴミが廃棄されている所から漁ってきた。

たまに掘り出し物あるんだよね：

風呂敷に包んでルンルン気分の俺は、なんとベタな事に――

曲がり角で女の子とぶつかってしまった。

それも小さな――

「つつ――!!なんやねんボケ！」

「あ、すまん」

ドスツとぶつかった女の子は勢いよく尻餅を着いてしまつて。

起き上がらせようと手を差し伸べるも

バシツ!! つと払われ、

立ち上がった女の子はぶつけたであろう鼻を赤くして俺を睨みつけていた。

「きいつけや!! このハゲ!!」

つとブチ切れ? ている。

「ほんとごめん。大丈夫、お嬢ちゃん」

「おじよ…?!? オマエ失礼なやつぢやな!! お嬢ちゃんやないわ!!」

よくよく見ると、怒って顔歪んでるけど…

可愛いな。うん。

「俺は浦原維助。お嬢ちゃんは?」

「だーっ!! お嬢ちゃんぢやう言うてんねん!! ウチは猿柿ひよ里。」

オマエ、ウチの事知らなくて新人やろ! この副官章が見えへんのか、ハゲ!

つと腕をグイツと捻らせ見せつける副官章

まあ新人じゃないけども。

「へえ…副隊長なんだくよろしく」

「ダアアア!! なんでそんなヘラヘラしとんねん!! そこはもう、スママセンでしたっ! つ

て頭下げるところやろ!!」

つとアッ アッ ア!! つと言いながら頭を掻きむしる

うん。この子面白いな!!!

「えーと、ひよ…ひよこちゃん？何が落ちてるけど、君のじゃない？」

「ひ!!よ!!り!!ひよ里言ゆうとるやろ！あんた耳ないんか!!!」

そばで落ちてる何かを拾い上げる

「からくり人形か」

ボロボロのからくり人形で、ゼンマイを巻くと鼓を叩く人形だった。

「!!!触んなや！ハゲ！」　　つと言つて俺の手から奪い返す。

「それ、壊れてるよな」

「…せや。ウチが壊したちやうねんど。急に動かなくなつたんや」

「へえ。何でそれを外に持つてきたんだ？」

「修理や修理！修理に出してんねんけど…無理つて言われたんや！

ボケ！普通わかるやろ！」

いや分からんつて…

「壊れてんのか。俺直そうか？」

「ハア!?!アンタが直せるわけないやろ！寝言は寝ていい！」

「まあまあ、俺これでもメカ…カラクリには詳しい質なんだ。ほら貸して」

そう言つて手を差し出すと、疑い半分つと言つた感じだが渡してくれた。

俺は地面に胡座をかいて、懐から工具を取りだして分解する

「おい！バラバラになったやんけ！」

「中を見ないとわかんないだろ？あー…大丈夫、これなら治るよ。」

複雑な歯車だからか、修理屋は直せなかったんだらうな。

それともそもそも分解できる技術持っていないとか有り得るかも。

これ現世の人形だなあ多分。

歯車のかみ合わせを直して。他の緩んだ所や曲がったところを治して

ゼンマイを巻くと

ポンッ！

っと人形が鼓を叩いた

「つ〜!!!!うせやろ!!全然動かんかったのに、数秒かそこらで直ったんか!」

っと人形を上に掲げてキラキラした目を向ける

「良かった良かった。それ結構な高級品だよね。」

「せや…ウチの隊長に貰ってん。」

ぎゅっと人形を抱きしめる。

相当大切にしてたんだな。

「俺は自称機械技師だから…あーカラクリ技師？壊れたものとかカラクリ以外に簪でも

櫛でも何でも直すし作れるから困ったことあれば二番隊に来なよ」

「二番隊イ!? あんな裏でコソコソしてる奴がカラクリ作れんのか! 二番隊なにしよう!」

「いや、カラクリは二番隊関係ないってどうか…俺の趣味だから。」

「ほん! なんでも直せるんやな!」

「全く同じには復元できないものや、物によつては日を取るけど、一通りなんでも」
「ゆうたな! 今度もつてつてやるわ!」

ふんっ! と言つて帰つていったひよ里ちゃん。今までにない面白い子だ

「あー大量だね」

「どや、これでも治せるんか!」

後日、風呂敷に包まれた大量の荷物を持つてきたひよ里ちゃん

「へえ、火縄銃か古いな…」

それと、歪んだ煙管…うん全部治せるよ、大体…^{一時間}半刻ぐらい待つてて。」

風呂敷を持つて俺は、隊舎に戻る。

まずは分解、どこが壊れてるのか、不調なのか……うん錆びてるな。

でも部品の破損はなし、錆のせいだろうな。

火縄銃の紐を新しくして錆も落とす。

接着剤で櫛は直し、欠けて復元できないものは、似た物資やパーツできれいに継ぎ合わせ、やすりと塗装、

ついでに磨いて、ちょうど1時間。

6個ぐらいの破損したり故障したり、割れてたものをきれいに直した。

うん、楽勝楽勝

門を開いて出ると、仁王立ちしてるひよ里ちゃんと、金髪のサラサラヘアを下ろした平子隊長がいた

「なんや、まさか直す言うー^ゆといてやっぱり直せませンデシターなんて言うんやないやろな！」

「まあ見てみて」

俺は風呂敷を差し出すと、バツと開いた。

「うせやろ……？」

「おー！俺の飾りの銃綺麗になつとるやんけ」

そう言つて銃を手取る平子隊長

ぐぬぬぬつとなぜか怒っているひよ里ちゃん

「ほら、ひよ里。礼がさきやろ、曳舟隊長さんからもろた人形直してもらたんやろ」

「つつー!!!わあとるわ!!ぼけ!・・・おーきに」

そう言つてそっぽ向いたひよ里ちゃん。うんかわいいなあ

「俺の銃も直してくれてあんがとさん、ひよ里がきゅーに壊れたものあらへんかつて騒ぐもんでな」

「いいえ、いいんすよ。」

「んや禿げしんじ、こんな胡散臭いやつと知り合いなんか!」

胡散臭いって…

「んや、名前知つとるやろ?浦原維助。アレや、剣の天才」

「はあ!!剣の天才だあ!!こんのひよろ長の胡散臭いハゲが剣の天才やと!!ホラ吹いてんちやうぞー!」

ビシッ!つと俺に向かって指さす

「いやいや、ホラちやうで。アレや院生の時に中級大虚を一人で倒したつー化けもんやで」

バケモンって…。

「アジューカス…を…?認めへん!こんなヒョロ長がそんな認めへんぞウチは!!なん

なら今から戦えや！ホラ吹いてるって認めるまでボコしたる!!」

「そらええなあ！俺のこの訓練所つかい」

「ええ…？」

俺を置いて勝手にどんどんと話広がってるんだが…？

「どっからでもかかってきー!!」

結局ほぼ無理やりに五番隊に連れてかれて

ひよ里ちゃんと向き合う。

致し方なく斬魄刀を抜くと、合図もなしに突っ込んできた

上にとんで振り下ろすようにした刀を下から受け止め

キーンツと耳をつんざくような金属音が響く

「へえ、やるやんけ」

意外そうな顔をした後、ニヤリと笑って俺から距離を取るひよ里ちゃん

あんな小さい体でも結構力もあるし

今弾いただけで結構距離をとるほどには俺の実力がそこら辺の雑魚と違うと見抜いた。

さすがは副隊長と言ったところか。

「ほら、ボコすんでしょ、来なよ」

つと指をクイツと曲げて煽る。

「つ……ナメてんちやうぞ!このハゲ!」

今までの言動通り、彼女は熱くなりやすいというか煽られやすい性格のようで、無鉄砲に正面から突っ込んできた。

俺は間合いに入った瞬間彼女の攻撃を避けて足を払い転ばせると首筋に斬魄刀を滑らせた。もちろん峰で

「なっ……」

つと、首筋の斬魄刀に冷や汗をかくひよ里ちゃん

「何が起きたかわかんなかった?もういいッスか」

つと、手を離すと、ペタンつと座り込んだひよ里ちゃん

「つ……!!!!認めへん!今のはまぐれや!!まぐれ!!」

もう一度や!!つと立ち上がってまた突っ込んでくる。

これ終わるのか?

かと言つて戦闘不能になるまで女の子をボコボコにする訳にも行かないので、なるべく傷つけないようにして参りましたと言わせようとするも認めてくれない。

「はい、また死んだ」

切っ先を心臓部分に当てて。何度目かの詰み。

「っー！まだや!!」

そして何度目かの再戦

そしていつの間にか始解までしてきてるし。

だが、それを止めたのは――

「ようやく止めるの…??」

遅くない??平子隊長。

ガシツとひよ里ちゃんの首根っこ掴んでとめた平子隊長

「んやねんシンジ！まだ終わってへんぞ!!」

「終わっとるやろ、ひよ里実戦なら何回死んどるんや」

「それは…っ油断や！油断!!」

「油断してないんは自分がよーわかっとるやろ。維助は汗ひとつ傷一つおうてへんぞ。

負けを認めるのも大人になる一歩やで」

「んや……」

何かを言おうとしてるひよ里ちゃんに俺と平子隊長は首をかじける

「ウチがガキみたいに言うなや!! ！禿げシンジ！」

「ゴフツ!!」

「下からのものすごい勢いのアッパーが平子隊長の顎に直撃して吹っ飛ぶ平子隊長
うわ、痛そ

「認めへんからな!!ボケ!!首洗って待つとけや!!」

なに、俺殺される…??

そのまま地団駄をふんだひよ里ちゃんは訓練所を出ていった。

「あのアホ…！舌噛んだやんけ…!!」

いなくなつたひよ里ちゃんの方向をギリツと睨む平子隊長。

「大丈夫ツスカ?」

「いつもの事や、いつもの、すまんなあ…ひよ里ああ言い出したら聞かへんくて。俺もあなたの剣術見たくて止めんかったのも悪いんやけどな」

やっぱり故意的に止めなかつたのかと、小さくため息を吐く

「んで、始解せんかつたん?ひよ里が始解した時点で始解すれば良かったやんけ。出来へんわけちゃうやろ?」

「まあ、剣術での戦いで俺が始解したら能力が強いから!つて言われて長引かれても困るので」

「あんたええ性格しとんな…だから最後まで始解せんかったんやな。劍術でつて言われたから劍術でノシたんか…」

事実半分、始解はしなくても勝てるという余裕半分。

認めてもらいたかった訳では無いけど。俺も俺で熱くなって意地になってたのもあるのだろう。

それからというもの

「ハゲ維助!!今日もやるぞ!」

「ええ、俺暇じゃ「あん?」はいはい…」

二番隊に押しかけて俺を呼び出したかと思うと

毎日のように命狙いに来てる並の戦いを挑んでくるようになって

毎日のように碎蜂が呼んでくれた平子隊長の制止が入り毎回ボコボコにされてる平子隊長。

そしてひよ里ちゃんの

「このハゲ!」

つていう捨て台詞から

「殺したるからな!!」

に変わってマジで殺意マシマシ。

俺特に何もしてないんだけどなあ…

まあストリートな正直な性格は嫌いじゃない。

猿柿ひよ里との出会い

惣右介に相談されたのと増えた弟子の話

惣右介とは知り合って約十年も経った。

あの闇商売してた頃が懐かしい。

定期的に流魂街の誰にもみられない場所十俺の機械フル活用で俺と惣右介は剣を交わしていた。

惣右介はここ数年遠慮なしに全力で鬼道ぶっぱなしてくるし、急所をガチで狙いに來ていて少しヒヤツとする時もある。

俺で黒棺を試そうとするのはやめて欲しい、今のところ失敗で終わってるけど。

俺はまだ剣と白打だけで霊圧すら解放していかないけど。それでも、この状態で渡り合える人がいてくれて楽しい日々を過ごしていた。

今日もお互いポロポロで、俺は大の字になって地面に転がる。

惣右介は膝を立てて木に寄りかかるようにして座っていた。

すると突然

「——はははっ……」

つと聞いた事のないような笑い声。

楽しそうな笑い声が聞こえてそちらに目を向けると。

惣右介が天を仰ぎながら笑みを浮かべていた。

「んだよ。いきなり笑って怖」

つて言うのと、俺の声には返答せずまるで独り言のように呟いた。

「君ともう少し早く……出会っていれば変わっていたかもしれないな」

つと、なんの事か分からない。俺は首を傾げる

「だが……もう遅い。私は……アレを殺さなくては」

アレとはなんだろうか……聞いても多分こたえてくれないだろう。

するとスタツと立ち上がった惣右介が、俺の傍によった

俺も身体を起こして立ち上がる

「……世界を作りかえる気はないかい？」

「——はい?!?」

そうすごい間抜けな声が出た。

「……いや、なんでもないさ。君はきつとこんな話をして断るだろう。この言葉はその時まで取っておくよ」

本当に何を言ってるんだ…？（大混乱）

「私は君を信用していないが実力と技術力は信用している」

「知ってるよ、何度も聞いた」

何度も何年も聞いた言葉。

「……………なぜ君は他人を信用出来る？下級の者ですら、自分と肩を並べられない者ですら…なぜ他人に背中を預けれる」

「ほんつつつとうに今日どうしたんだよ。

でもまあ

完全に心の奥まで信用できるだなんて、無理かもしれない。

でも俺は裏切られてもどうにかできる力を持つてるから。

自分を信用できるのは自分だけだろ？俺は自分の力を信用してる。

どうにかできる力があるなら他人を信じて損は無いと思うんだよ。

だから俺は他人に背中を任せ、任務も任せれる。

あ、ああ俺説明とかそういうの苦手だよ。

例え一人でもどうにかできる力を持つてたとしても、1人って寂しいんだよ。

ご飯も楽しいも、他人と共有する方がいいだろ？

前々から言ってるじゃん一人で飯食うより二人で食った方が、皆で食った方が美味

「いつて。」

「君はいつもそれを言うね」

「1人で剣を振り回すより2人で振り回した方がいいだろ？つて言った方が良かったか？

一人で素振りして楽しかったか？俺と剣を交えてお前楽しいつて言ったよな。

俺はそれをご飯で例えたんだよ」

「…そうか」

説明下手くそだから抽象的になった部分あるけど。惣右介には何となく伝わったらしい。

本当に今日はどうしたんだか。

惣右介はここ数年で一人称をたまに変える時がある。

きつとそれが彼の素なのだろう

あのラスボスかは分からないけど。BLEACHの敵キャラであつた彼は警戒心が高く何も信用しないという印象を受けていたが。

素を出しているという事は、少しは信用して貰えているという事なのでは…？

つと思つたけど口には出さなかつた。

「——そうだ。新たに作って欲しい道具があつてね」

「おー、どんな仕様？」

惣右介から頼まれたのは魂魄を削り取ることが出来る道具。

身体は傷つけず、また自覚もないように削り取れるようにして欲しいというなんとも無茶苦茶なものだったが。

おれは七々扇家の囚人で実験して成功させ。

1週間で作り上げた。

「ほう……これが」

見た目は銀で出来た匙のように見えるけど。

魂魄を削り取れる代物

「いやあ、小型化と軽量化が大変だったわ」

使い方を説明していつも通り大金を貰って。

惣右介はなにか企んでいるようにニヤリと笑ってそのまま去っていった。

もちろん血判契約はしてる。

にしても……魂魄を削り取るなんて何をするんやら。

まあ魂魄とか鬼道とかそういう系は喜助専門だし、俺が聞いてもよくわかんないだろ

うけどね。

惣右介が敵なるとわかってても手伝う理由。

俺と喜助はその研究が、その技術が理しどわりに干渉してても非人道的であつたとしても。

作つてみたいという強い欲求がある。

——分かつているのにやめられない。

俺が引き金でもしかしたら原作が

世界が本当に滅んでしまふとしても……

まあ、俺はほぼ原作覚えてないから惣右介がどうやって倒されたのかも知らないしその流れも断片的だし……。

原作が変わつてしまった！つて考えるほど知識ないのが悔やまれる。

いや……別に原作沿いにこだわる必要ないか……？

俺がもうイレギュラーなわけだし……そうだよ、もし俺の機械のせいで世界滅びそうになつたら俺が何とかすればいいよな……？？

そうだ、自分で責任取ればよし。

うん！後のことは後で考えよ

そう決心して俺は帰路につく

「おや?」

二番隊隊舎に向かうと何やら騒がしい。

人集りが出来ていて、俺らの隊士と違う隊士で何やら口論…?

よくわかんないけどどとりあえず。

「碎蜂」

そう呼ぶとスタッと瞬歩で膝をついた碎蜂が現れる。

「これ、どういう状況?なんか騒がしいけどよ」

「それが…十番隊の隊士が維助様をだせと…」

「十番隊の隊士…?!」

十番隊に誰か知り合いいたっけか…。

それとも俺なんかしたか…?

すると――

「浦原維助を出してくれ!!」

「ですから!浦原四席はご不在で――!」

つと離れたところまで聞こえる。

「声でつつつか」

よく見ると人混みの中心に羽交はがい締めいじめされた少し若い青年がいるのが見えた。そいつは見たことないしあれが十番隊の隊士か…本当に記憶にないな。

俺が近寄ろうとすると碎蜂に止められた。

「おやめ下さい維助様!!あのような者…もし維助様に何かあれば…」

「いやいや大丈夫だって、ここで大騒ぎする方があれだろ?話ぐらい聞かなきゃ

はーい、解散解散」

俺が割り込むようにして散らすと、2番隊の隊士はすぐに離れていく。

「あんた…!!」

つと、羽交い締めにされてた青年が落ち着きを取り戻す。

「俺が浦原維助、あんまり騒ぐなよ話ぐらい聞いてやるさ」

とりあえず人数を散らして。静かな店で話を聞くことに

なんか怪我人も居るつばいから碎蜂に任せた。

「んで、俺に用だっけ」

若い新人ホヤホヤって感じの青年。

まあ死神は成長速度まちまちだから一概に若いとは言えないかもだけど。

「俺は二番隊四席浦原維助。はい、俺は紹介したぜ。そっちは？」

「……俺は志波一心十番隊所属でまだ席は貰ってない」

「志波……ああ、あんた空鶴ちゃんこの？」

五大貴族が1つ志波家。

だが流魂街に拠点を構えるなど貴族からしてみれば自由奔放で、

没落しつつあり貴族の間ではもう既に四大貴族なんて呼び方されてる。

俺もそう覚えてたんだよな。死神になって初めて五大だったっての知ったな……まあ俺の場合興味なかったからなんだろうけど。

夜一さんがよく喜助と志波家に遊びに行ってるらしく話は聞いてたので名前を聞いてピンと来た。写真も見してもらってたけど……

こんな青年いたかな――

「俺は分家で知らねえのも無理ねえよ。俺は貴族関係できたんじゃない……です」

「ふーん。そうかさりや悪かった。それで何用？」

すると、バツ!!と机に両手をついて頭を下げた

「俺を弟子にしてください!!」

「ええ……」

また弟子の志願か……つとため息出そうになるのをこらえる。

「ミシンくんだっけ……いや俺弟子はもう取らないって決めてて……」

とりあえず頭を上げてもらうが。

「一心です。お願いします!!俺を強くしてくれ!

……じゃなくてください!!」

「いや……うーん」

俺が四席に上がってから中級を倒した剣の達人だとか何とか出処は京楽隊長以外にも色々広まって、こうやってたまに弟子入りとか鍛えてくれて希望してくる人が多く訪れるようになっていた。

「お願いします!!」

「いや俺一人もう既に弟子いるけどそつちにもあまり構ってあげれないぐらい忙しいし……増えるとなるとちよつと……」

浦原家の当主としての引き継ぎやら何やらもまだ残ってるし。

機械いじり回す時間も減ってたりするし……

四席部隊長の仕事も……

白哉坊ちゃんの指導も定期的にしてるし。

弟子が増えるとなるとまた別で時間を作らないといけないからめんどくさくて。

「お願いします!!そこをなんとか!!」

「何とかって言われても……剣の心得無いわけじゃないんだろ？」

何を学びたいんだよ。俺の型は自己流で決して褒められた構え方してないから身体痛めるし癖がつくと良くないんだよ。

それにギリも無い。十番隊だろ？なんで俺が十番隊のほぼ無関係の隊士に教えないといけない」

「……確かにそうかもしれないねえ……。けど……俺はあんたの戦う姿に惚れたんだ!!」

「惚れ……っ?!いや俺そういう趣味は……」

「ちげえよ!!んな事言っつてねえ」

つと全力否定。少し冗談言っただけなのに

「覚えてないかもしれないけど……俺あんたに助けられたんだ。

俺は斬魄刀の能力が強いからって過信して虚討伐に志願したのに

……その虚に手も足も出なかった……!

——悔しかったっ……」

ぎゅつと机の上に乗せられた手を握りしめる一心君

確かに覚えてないな……

「そしてもうダメかと思つた時あんたが簡単に

数十人の隊士の命を奪い傷一つ付けられなかつた虚を一刀両断したんだ……！」

——かつこよかつた、刀の能力なんて関係ない剣術。

始解がいくら強くてもそれを扱える剣術が！力が！

足りないって思い知らされて……。」

その目は真つ直ぐで俺を貫く

「——確かにあんたにはギリもねえかももしれない。

だがあんたにしか頼めないんだ!!

お願いします!!俺を強くしてくれ……ください!!」

机にゴツツ!!つと頭がぶつかる音がするけど。

そんな事お構い無しにまた頭を下げた一心

「さつきも言つた通り」

弟子志願を辞めさせるために言つた訳じやなくて

俺のやり方は癖がありすぎて俺はもう慣れてるけど

身体の負担が凄くて痛めるし、型は教えることはできない。

俺との鍛錬って言つても白打と死なないためを目的とした戦闘慣れする模擬戦をし

こたま続けるぐらいで……。

俺が得意とする抜刀も合う合わないあるし」

まあ実際模擬戦をし続けて

喜助も受け身とか避けるのとかバチくそ成長したわけだし。

白哉坊ちゃんの指導も抜刀術のやり方と実践に備えた模擬戦だし……。

「ならその模擬戦！俺とやってください！」

直接指導してくれなくてもいい！

俺が勝手にあんたと戦って経験値を得る！」

「うーん……」

模擬戦だけならまあ2番隊の指導に混ぜればいいけど……。

「いや、俺やつぱり時間ないし……模擬戦ぐらいなら他の連中でも」

「お願いします！そこをなんとか!!」

食い気味に遮られてしまう。

とりあえずまだ仕事残ってるからと

無理やり惣右介と会うためにほった仕事を片すために解散したはいいものの。

「おはようございませす！浦原さん!!」

「今日はどこ行かれるのですか！」

「浦原さん！お願いします！ご指導を……！」

つと俺が外出る度に待ち伏せている。

「おい、十番隊の仕事どうしたよ」

「そりやもう終わらせてきました!!仕事が残ってたら浦原さんに頼めないじゃないですか!!」

もう1週間。こんな感じだ、諦める気はなくずつとついてくるし

頭を下げつづけるから周りの目も痛くなってきた。

それをわかってやってるのかもしれないけど

ここまで折れなかったのは初めてだな。

俺はガシガシと頭をかいて一息ついて一心と向き合う

「分かった。お前が満足するまで付き合っつてやるけど、俺は言った通りあんまり時間がない半分は弟が相手すると思うけどそれでいいな?幼い頃から俺と戦ってる弟だから弱くはないよ」

「本当ですか!!ありがとうございますしはん師範!!」

「ただ自分も教えてくれ!つて他の人が来るとめんどい。今回は特別だから他の人を誘ったりとかはするなよ」

「もちろんです師範!!ありがとうございます!!」

つと勢いよく頭を下げた。一心
——不本意だけどもまた弟子が増えた。

潜在能力の鬼の話

あれから隙間時間に稽古をすることになった。

確かに始解は強いかもしれないけど、扱い方がなっていないのが俺からしてもわかる。

型や癖は喜助に直してもらった。

ちなみに勝手に一心をちよつと任せるとなったって話を喜助にしたら

「何勝手に決めてるんスか???'」

って静かに怒られた。

しばらく実験台になるから許せって言ったら

——まあ……それなら

という事で渋々承諾してくれたので結果オーライ

一心は物覚えは良いらしく、喜助が直したらそのままの形を意識している。

さて、癖もなおったところで……

「一心、俺は鬼道は教えられない。鬼道系は喜助に任せとけ」

すると喜助から何を勝手に……つという目を向けられる

「俺が教えるのは『受け身』『避け方』『攻撃』『反撃』

全て模擬戦で叩き込む。後は適当に必殺技作ろう」

「お願いします……!!」

少し緊張しているようでこちらに斬魄刀を向ける。

俺は完全手加減で木刀を使わせてもらってる。

「ほらほら、もう何度死んでるんだ？遅い遅い！」

「ガッ！」

俺が下から顎を蹴りあげると勢いで仰け反るが

ひっくり返らずに寸前で耐えた一心。うんうん体幹はいいな。

「はあああー!!!」

勢いよく上段から切りつけてくるがそれを霊圧を収束させ硬度を上げた木刀で受け止める。

「はい、いちいち驚かないー！隙あり！」

驚いて動揺してる一心の刀を弾き軽く腹を蹴りを飛ばすと

ようやく吹き飛んで行った

靈圧はデカいし力はあるし物覚えもいいけど、正直すぎる単純な剣。
短期決戦がいい所か……。

「はい、死んだー」

起き上がろうとした一心の首元に木刀を添えると

ふうー……つと一息ついた一心。

「強すぎです……。」

「疲れた？」

「いや、まだ行けます」

つと起き上がる。受け身をちゃんと取ったらしい傷はあるけど身体は痛めてないよ
うだ。この分だと受け身は完全に身に付くな。

あれから時間の許す限り打ち合ったり殴りあったりして、

一心は驚く程に成長した。うん才能の塊だな……。

あれから何か必殺技を作れって言った。

始解以外にも特化したものを――。

瞬歩、鬼道、白打、剣術なんでもいい。

俺は馬鹿力と抜刀術。

喜助は靈力操作に長けた鬼道。

夜一さんは瞬歩。

一心は白打と剣術を選んだが、とりあえず白打を教えることにした。教えるって言うっても単純な殴り合い。

避け方反射を鍛え、どこをどう拳を振るえば有効打になるのか。実際に経験そしやくを咀嚼そしやくしてもらおう。

しばらく殴りあつてコツを掴んだらしい一心が拳を振るい俺は手で受け止めるが。
バジツ!!

「およっ?」

俺の手が勢いよく弾き返された。

その隙に俺の腹に右ストレートがはいるが……

「つ~~~~!!」

一心が右手を押えて声にならない悲鳴を上げて涙目になっていた。

ふははは!俺の筋肉の硬さ+霊圧硬度爆上げた腹筋はどうだ!

「大人げないツス……」

つと喜助から聞こえたけど知らん知らん!

「鉄かよ……っ!!」

どうやらさっきのパンチは拳に霊圧を収束させたものを貯めて殴ると同時に解放

したらしい。

そして一心の必殺技が決まった……

バチンツ!!!と音を立ててへし折れる木。

一心がデコピンで木をへし折った。

ただの物理攻撃ではなく、霊圧を収束してデコピンと一緒に放つ

霊圧の収束と解放が上手い一心だからなせる技。

手に収束させるのは簡単だが、指先となると難しくなる。

勢いが出なかつたり、解放タイミングをミスって爆発したり指が吹き飛んだりと

色々リスクを負うのでわざわざやろうとは思わないが。

一心の操作能力があるから才能があるから出来る。

敵もまさかデコピンがこの威力になるなんて! ってなる不意打ち技。

ちなみに俺も食らってみたけどちよつと痛かった。

鍛え上げれば凄いものになりそうだな。

「兄サン」

「なんだよ」

壊した訓練場を修理してる俺に話しかける喜助。

ちなみに一心はボロボロのまま帰って行った。

「あの必殺ひっさつ 鬼痛おにいたデコピンデコピンってネーミングセンスどーにかなんないんすか……」

必殺 鬼痛デコピンとはあの一心が使ったデコピンの名前である。

「ええ？ 分かりやすくはない？ ガチで痛いデコピンだよ。わかりやすいだろ？」

「……いや分かりやすいッスけど、その……ダサイ」

「ダサイ?!?!」

「志波サンと盛り上がってたんで言えなかったんスけど、2人して名前付けるセンス

0ッス。ダサイ、恥ずかしい」

つとピシヤリと言い放つ喜助

「そ、そこまで言うか!?! だって俺名前付けてもつけた名前忘れるし……」

犬をわんちゃん、猫を猫ちゃんってわかりやすいだろ……?」

「それから、その維助兄サンの抜刀術名。それもダサイッス」

「うっ……確かに橋姫にも言われてたけど」

橋姫を使つて瞬刀しゅんとう抜刀術はつとうじゆつって言うのと、

『やめて！ 恥ずかしいわ……!!』って顔を抑えて顔を真っ赤にして否定される。

そんなにダサいか…？

必殺ひっさつ

鬼痛おにいたデコピン

ガツシヤアアアン！つと音を立てて大穴が空く訓練場

「あーあー、また直さなきや」

つと、俺は大穴を見てため息を吐く。

俺二人分ぐらいのデカ穴は

一心のデコピンによって作られた。

「うん、やばいな」

たった1ヶ月でこの威力までに成長した一心。

最初は指を痛めてしまったりしたが今は霊圧収束解放に慣れたのか完璧なものだっ

た。

「よっし」

穴を見てガッツポーズする一心。

俺は防いでダメージ0だとしても、吹き飛びはするかもしれないな……

本来は他の隊の隊士を勝手に虚退治に連れて行つてはダメなのだが。

虚任務に連れて行ってみた。

一瞬で虚に急接近してデコピンを虚の仮面に向かってデコピンをぶっぱなし。顔面から上半身まで吹き飛んだ虚をみて少し引く。顔面

我が弟子ながらちよつと引くよ……。

「こりゃ大物になるかもしれないッスねえ〜」

つと一緒に見に来た喜助が苦笑いする。

あんなにくそざこで癖つきまくりの一心がこんない能力持つてるなんてなあ……。

まあデコピンはそう何度も効く技じゃないので、他にもいろいろ教えなければ。

そして一心は完全物理型の脳筋に成長した

そしてもう1人の弟子。第一の弟子である朽木白哉坊ちゃん。

「ハアツ!!」

彼は俺よりも遅いけど、隊長、副隊長格でもなければ目に負えない程の速さで、まきわら巻藁を一刀両断。

まだ連撃は出来ないけど、白哉坊ちゃん俺の抜刀の速さを劣化ながら受け継いでくれた。

力はないけど速さで何とかできるだろう。

こつちもこつちで化け物に成長するかもなあ……。

そしていきなりだが隊首室に呼ばれた俺。

「はっ、浦原維助参りました」

「よいよい、維助農らの仲じやろ」

「やってみたかったただだよ」

って俺は下げてた頭をあげる

豪華な座椅子に座った夜一さんと横には大前田副隊長さんが控えていた。

「んで、何用で? またなんかありました?」

また4部隊を出陣させる程の何かあったのかと思つたが……

口を開いたのは大前田副隊長さんだった

「いやあ……俺引退しようと思つてて」

「……はあ……はっ!? 副隊長さん引退!」

つい聞き返してしまった。

「そう、俺の息子がさあ――」

ちやらんぽらんでこのままじゃ院も卒業できないかもしれん。

俺がほっぽつてたのが悪いんだがな?

次男も産まれたし、教育に専念しようと思つてな。

そこで隊長に相談したら――

――俺の代わりにの穴埋めは維助がいいんじゃないかって」

「……………はあ……………えっ?」

おれが代わりに……………?」

「いや待つつつて! 夜一さんの脱走サボり癖! あんたにししか止めれないだろ! 俺鬼道使えねえし」

「大丈夫だ! お前なら何とかなる」

つと俺の肩にポンつと手をのせる

どっからその自信でてるんだ……??

「俺ですら働き者じゃないのに……なんならサボってバツクれないぐらいなのに……!!

二番隊は終わりだっ……!」

俺は頭を抱えてしやがみこむ

「そこまで言うか?ぶつちやけすぎだろ」

「ははは!相変わらずじゃの維助!大丈夫じゃお主ならなんとかなる」

だからその自信はどこから……?」

「じゃ、手配はしておく、大前田希ノ進!今まで大儀であった」

そして俺は 隠密機動副司令官兼、二番隊副隊長になった。

二部隊の 警邏隊兼、部隊補佐として一部隊から五部隊までの補佐もする事になって

更に当主の土地の管理に、弟子2人の鍛錬。

定期的な喜助の所の機械のメンテナンス。

俺……過労死しないかな……?」

最後の最後まで行かないで!!って大前田さんに言っただけど、

「がんばれよ」って手を振られるだけでダメだった……

夜一さんを拘束するために極めてた大前田さんの縛道……!!
あれがなきや絶つっつたい逃げる!!無理!
俺このままやつて行けるのかな……

副隊長時代

副隊長になつたのと最新機器の話

副隊長の就任は一応拒否権がある。

だから俺も拒否しようとした……

したんだが

「なんじゃ……濃の補佐はいやか……？」

つと夜一さんにシユンつとした顔で言われるもんだから……

「あああ……はあ……分かつた分かつたけど、約束してください」

つて俺が即折れた

「ん？なんじゃ約束とは」

つと首を傾げる夜一さんにむけて俺は指を2本立てる

「1つ、1日最低一刻半さんじかんは必ず事務仕事すること。

2つ、隊士から重要書類は必ず受け取りその場で終わらす。また確認書類は確認する

こと。」

「一刻半も……か!？」

3時間って少ないからな!？」

「あんたがずつと同じ場所にじつとしてられないのは分かってます……分かってますけど!! 大前田さんがいなくなつた今……!」

夜一さんが好き勝手にサボり始めると二番隊は崩壊するんだ!!」

多分恐らくこのままでは夜一さんはサボるだろう。

だが、しなければ罰を与える系で言う事聞かせるのは逆効果

罰を与える系は1回の約束程度なら効果的だろうが

持続的な約束事の話だとあまりよくない。

しないと罰が待ってる……!という緊張感と仕事への嫌悪が募ってしまう可能性もある。

夜一さんには緊張感と苦痛はあまり与えたくない。

仕事をなるべく楽しいもの……つと感じさせたい。

「もし・約束を守ってくれたのなら。1日ひとつ、俺に出来ることなら何でもしますよ。鍛錬、お出かけ、なんでも」

「な、なんでも……」

キラキラとした目になる夜一さん。

「どうしますか? やつてくれますか?」

「もちろんじゃ!一刻半ぐらいドーンツと……!」

つて事でやる気になってくれたらしい。

良かった良かった。

「そういえばなんで俺なんです? 繰り上げなら三席の喜助が適任でしょうに。」

「それは喜助が拒否したからじゃ」

つと、言い放ちお茶を飲む夜一さん

「俺は?!?!俺の拒否権は?!?!」

「まあそう怒るな維助! もう決まったものじゃしな」

つと笑う

はあ……。心の底からのため息が出た

また仕事が増えて四席が空くけど、四席の部隊はとても危険だ。

まだ育成も終わっていないから後任を任せられるのも居ないので俺がしばらく兼任することになりそうだ……。

「ならば私が！」

つと部屋掃除をしてた碎蜂に愚痴を零すとそう力強く言った。

「いやいや。刑軍と俺の世話係と四部隊長はキツいよ、さすがにお前の身体が心配だから却下」

「そ、そんな……」

つと明らかに落ち込んでる碎蜂。

「俺の世話係無くしたとしても、四部隊は相当危険で相当な重任務。他の隊で倒せなかった虚の討伐だったり相手は死神だったり。」

わかるだろ？お前の実力を下に見てる訳じゃないがお前はまだ経験が足りない。わかってくれるな？」

「はい……お任せしてくれるようになるまでこの碎蜂頑張ります!!」

つと意気込む。うんうん、前向きだ

場所は変わりその夜とある居酒屋

「維助の〜昇進にかんぱあーい！」

カララツツと4つのグラスがぶつかり合う

声を上げたのは平子隊長。

俺の昇進を聞きつけた平子隊長が暇な人を引つ張って居酒屋に来たのだ。

もう呑み仲間になりつつある――

京楽隊長に、平子隊長、そして惣右介は俺が無理やり連れてきた。

「いやあ、早いものだね……数十年が一瞬に感じるよ」

「んやねん、ジジくさいで京楽さん。」

「いやあ、僕は維助君が院生の頃から見てきたからねえ……」

つと、しみじみし始める京楽隊長

「まあ、副隊長にはなりたくなかったんですけど」

「ありや、そりやまたどうして？」

つと首を傾げる京楽隊長

「いやだつて、サボり魔が隊長で副隊長もサボり魔ですよ？二番隊崩壊しますつて」

「ははは！僕も人の事言えないけれど……まあ君はやる時はやるから心配ないんじゃないかな。色々仕事任されてるみたいだけど何だかんだやり遂げているんだらう？」

つと、笑う。

「まあ……そりや、サボりたいけどせつかく任せてくれた仕事は最後まで終わらせたいから。責任と信用つてそう言うもんでしょう？」

「んや、真面目なやつぢやなー維助」

「ともう酔ってるのかバシバシ俺の背中を叩く平子隊長。
いたい

「平子隊長も見習ってください」

「つとお茶を啜る惣右介……」

「飲めないアピールなのかお前！全然酔わないの知ってるからな！

「つて俺の目線に気づいたのか、つま先を机の下で踏んできた。

「クソてめえ！」

「さすがは隊長、副隊長。色々不安がつてる俺にアドバイスをくれたりなんかした。

「へえ、流れで書類を……なるほど！」

「惣右介も惣右介で猫被りモードだけど、ちゃんとしたアドバイスをくれた。

「メモつとこ。」

「惣右介はそういうところ上手いんよなあ……気分いい時に書類渡されると、ついついやってまうわ」

「書類やることは普通なんですよ隊長。」

「うちのリサちゃんも何だかんだ仕事してくれるしねえ、真面目だよ彼女。しかも早いし効率的」

「へえ、八番隊の副隊長さんか」

見た事ないけどまあそのうち副隊長なら顔を合わせることになるだろうな。

平子隊長と京楽隊長が酔ってべろんべろんになつて帰つて行つたあと。

残つた惣右介から「はい」つと渡された a4 用紙ぐらいの紙。

「君との剣を交わす時間が減つたらかなわないから」

そう言うだけ言う俺に紙を押し付けて帰つていった惣右介。

「おお」

そこにはびつしりと、副隊長の仕事や、あらゆる問題とその対処法、集まり時の待機場所、等々など事細かに書いてあつた。

字めつちや綺麗だなおい。

それは新しいものではなく紙の端が傷んでたりしたので、惣右介が副隊長になつた時に書いたものなんだろう。

ありがたく貰つておこう

俺はそれを懐にしまった。

ただ、副隊長は悪いことめんどくさい事だけじゃなかった――

「部屋が広いっ!!!」

十二畳、中庭直通縁側付きの副隊長専用部屋!!!

しかも夜一さんからの許可を得て改造も可に!!

「まずは防音でしょ、防壁もやって……それから配線も……へへ。改造しがいあるわ!」
新しい部屋つてドキドキするよねえ……!

喜助を引つ張つてきて手伝わせた。

「ボクも暇じゃないんすけど……」

「お前が俺に副隊長押し付けたんだから。手伝うぐらいいいだろ?」

「はあ……あれ?これなんすか見ない機械ツスけど」

箱に入れた機械を指さす喜助。

箱の中には

「ああ、偵察用無人機ていさつようドロローンか。いや見回りとかあるだろ?前々から機械使つて監視すれば見回り人数も減らせるし、偵察にももつてこいだから潜入にも使えそうだなーつて。院生の時代から考えてたのをようやく手をつけたんだよ」

「へえ……」

物珍しそうに俺の試作品ドローンを見る喜助。

「なるほど、靈力とこの操^リモ^コン^ンで無人機と繋いで遠くに行っても操作できるようになってるんスね。それで問題は遅延と音――」

「お前も機械詳しくなつたよな……」

見ただけで問題を見抜ける喜助も喜助だわ

「長年見てるんスから知識ぐらいつきますって。それに改良の痕もみれば……ねえ？
まあ兄サンみたいに作れる技術はないんスけど」

つと箱を指定の位置に移動する喜助。

「まあ、音は何とか出来そうなんだけどなあ……それでも無音とはいかなくて。あと少し改良したら何とかなりそうなんだが次は重量と耐久性に問題が出るから、新しい素材とか探して色々試そうかと」

「楽しそうツスね兄サン。最近忙しくて機械弄ってるの全然見てなかったんで心配だったんスけど。良かったツス」

つて、なんか嬉しそうな声色

「なに、ご飯抜いた時みたいなこと言つて……。機械弄つてなくても仕事中はちゃんと設計図とか改善点とか頭の中で書き起こしたりしてるし」

「ちゃんとしてなんスか……」

つと呆れた様子で振り向く

「お前だつてボーツとしてゐる時の半分は研究の事だろ？」

「まあそりやそうなんすけど」

「新しい環境つてのは不安で大変そうだと思ふけど……その反面楽しそうだと思ふよ。新しい事つてのは俺らにとつたら花の蜜のように魅力的に見える。」

「そうツスねえ……」

あつ！つと思ひ出した事があり声を上げて喜助に振り向くと、

俺の声に驚いたのか少し肩をビクつかせる喜助。

「副隊長就任でしばらくバタバタするし、時間も取れるわかんないんだけど。

ずっと考えてた新しい機械作ろうと思つてて。喜助の知恵も借りたい」

「へえ……そりや面白そうツスね。その機械はどんなのツスか？」

そう、俺がずっと考えてて。原作にもあつた機械

ずっと名前思ひ出せなかつたけどようやく思ひ出して、

この今の時代に無いことも確認した……

もう作るしかないよね。

最初は俺の時代にあつたものと同じものは作れないと思ふけど

「遠くの間所でも連絡を取り合えて……情報戦が有利になる。虚も緊急事態も通知が来る。」

名を「」

スマートフォン
伝令神機

スマホの話

俺の前世が現代に生きる学生だったからか
初めから物足りなく感じていた。

ああ、待ち合わせに時間がかかる……

ああ……こういう時に連携取れば……

こういう時スマホがあればな……つと何度考えたか。

連携報告、状況が遅延ほぼ0で伝えれる便利な機械。

スマホがほしい……!!

それか小型の通信インカム。

それがあれば2番隊の隠密も有利になるし、状況把握もしやすい。

ドローンを作るにあたって、電波の代わりになる霊子構成は開発済み。

ただ、電波塔となる施設・設備が必要になる。

またどこまで小型化出来るか、どこまで通じるのかという問題、現世にも通じるよう
にもしないといけない。

それで、施設だが浦原家が所有しているバカでかい土地があるそこに施設を作ればいいのでは……？つと考えている。

そして小型化、現世は隠密で試験的な運用をすれば、そのうち事業として……つと先のことまで考えてみる。

尸魂界は現世の道具や知識、化学や道具を尸魂界で使えるように改造したものが多く、1から作ることがほぼないからか科学者はいても、俺みたいな機械系の技術者がいない。

恐らく原作の伝令神機も現世の携帯をパクって作られたものだろう

それで携帯……つまりは黒電話や小型機器のガラケーみたいなのが出るのは今から150〜200年後。

そんなに待てるか？いや！待てない！！

俺は作るぞ……！！！！

尸魂界でスマホを！！！！

つと言っても仕事は次から次へと舞い込む。

大前田さんの引き継ぎからまだ荷物の移動も終わってないし。

最初いきなりスマホを作り上げるのは無理だからまずは通信機器であるインカム系を作ろうかな……。

とりあえず目標はできた……！

新しい事は本当にワクワクする。

きつと俺の顔はだらしなくしまらない変な顔をしてるのだろう。

「なんじゃ、維助ご機嫌じゃの」

夜一さんの食事を毒味してる俺の顔を見て首を傾げる。

毒味は七々扇家の問題があつてから護衛がやつてた毒味を副隊長になって俺が引き受けた。

「あ、やつぱ分かつちやう？ いやあ、毎日同じ日々を過ごすのもいいけど、新しい事があると新鮮でいいなつて感じて」

「ほう……まあ数十年も同じ日々を過ごすと飽きるもんじゃしの。

維助が楽しそうだなによりじや」

「まあ、それもあるけど夜一さんが隊長、俺が四席になつてから暇が少なくなつて一緒にいる時間も減つてただろ？」

「こういうゆっくり朝話すのなんて久しぶりだなーつて感じてさ。」

「そ、それもそうじゃの……」

つと顔を赤くする夜一さん。

毒味を終えたお膳を渡す。

「約束しただろ？業務をきちんと終えたらなんでもひとつ叶えるって。

夜一さんはいきなり隊長になって色々不安で大変だったと思う。

隊士のゴタゴタもあつたし、それでもめげずに真つ直ぐ頑張る夜一さんに少しでも褒美あげたいし……

つてのは半分、もう半分は夜一さんと少しでも一緒に居たかつたからなんだ。」

「つつ……」

つと、さらに林檎のように赤くなる顔。

まあ夜一さんは面と向かつて言われる事少ないだろうから照れるのもわかるけど、そこまで顔を赤くされるとこつちまで移りそうだ――。

それから夜一さんはビックリするぐらいに真剣に執務室で書類を書きあげる

やっぱモチベーションって大事なんだな……。

「よし!!今日の仕事は終わったぞ維助!!甘いものを食べに行こう」

「えっ、ちよ俺まだ仕事終わってな――」

言い終わるか否や俺の襟首えりくびを引つ張り瞬歩で走り出す夜一さん

「ギャア!!首!首!首!!」

咄嗟に気道を確保する。

死ぬ死ぬ!っと思つているとあつという間についた甘味処。

瞬歩更に早くなつたなあ夜一さん。

早速大量の団子を頼む夜一さんを見て懐かしい気持ちになつた。

前にもこんな事あつたな……。

口にみたらしをつけて幸せそうに食べる夜一さんを見ながら頬杖をつく。

少し小さな幸せでも、行動を制限された当主であり隊長の夜一さんにとってはその小さな幸せはとても大切に貴重なものだ。

彼女の幸せが続くといいな。

なんて業務後に鍛錬や甘味処に行く日々を過ごしつつ、例の伝令神機の件を進めてい
る。

まずはインカムを作ろうとしたがお金がない……!

夜一さんに二番隊のためになるし尸魂界が変わるかもしれないことをプレゼンした
ら

なんと——!!予算を使つていいことに!

「理屈はよう分からぬが、維助と喜助がそこまでやる気になつておるなら許可するぞ」
つと快く承諾してくれた。

早速喜助は機械と機械を繋げる電波霊子の安定とその隠蔽。

霊子で居場所を辿られてしまう等の問題を解決するための隠蔽だ。

俺はその繋げるための装置を作る。

まあ難しい話は置いといて簡単に説明すると——

声を霊子に変換。電波霊子でそれをもうひとつの機械に送り込み変換したものを元
に戻す。

つまりまた声に変換させることで聞こえるようになるというもの。

それを発信受け取りと両方の機械つけて混線も防ぐ、それにより同時に話せるし同時
に聞きとる事も。

また音質もいいし声のみを霊子に変換するので雑音などの音は変換されないのう

るさい場所でも使える……! !

雑音を拾わないインカムの完成だ。まあ形はワイヤレスイヤホン。

落ちないように固定もできるようになってる。

また、付けてる隊士が殺されたり奪われたりしてインカムが敵の手に渡ってもそいつは使えない。

何故なら事前に使用者の霊力を記録しておいてその記録した霊力を持つものしか使えないようになってるからだ。

現代でこんなことすると馬鹿でかい装置になりそうだが、霊力や霊子という色んな性質を持つものがあるからなせる技だ。

そして試験運用として、実際に夜一さんと俺と維助で使うことに。

元々目をつけていた謀反のアジトを見つけたからそこで使おうということになったのだ。

”『あーあー。聞こえます?』”

つと耳元のインカムから喜助の声が聞こえる。

「よし、聞こえる」

俺はついガッツポーズしてしまう。

100メール離れてても聞こえる。これは成功だな……霊子の残滓ざんしも残ってない。さすがは喜助！

『『本当に耳元から声が……すこしむず痒いな』』

つと夜一さんの声も聞こえる

「まずは遅延確認だ。はいっ！と合図したら同時に聞こえたって言ってくれ

——はいっ！」

『『聞こえたぞ！』』 『『聞こえたっス』』

ほぼ同時に話した瞬間に聞こえたと応答がある。

うん、遅延も無さそうだ。

完璧……ッ!!

それでインカムとか想像しにくい名前は良くないとのことだ。
伝声神機でんせいしんきという名にした。

単純わかりやすい！俺が覚えやすい……！

伝令神機と似てる名前だけでもまあ、いいだろう！統一感あるし。

「さあ、早速だけど、任務の確認だ、

謀反衆は一番隊の機密文書を盗んだ疑いがかかっている——っていかほぼ確定。文書の在処を吐かせるために捕縛するのが目的。

誰が情報を持つてるかも分からないから一人も逃さず1人も殺さずに捕縛する。

喜助の待機位置には大量の捕縛装置がある。

敵は全て15人。

夜一さんが喜助の待機所まで敵を追い詰め、夜一さんの合図とともに喜助が装置を起動。

喜助は人数確認！逃れた奴がいたなら夜一さんと俺がそいつを捕縛するから報告忘れずに。」

追い込んで合図とともに捕縛装置起動させましょうね！の簡単な任務。

大声で合図する必要も無いので悟られる確率も下がるだろう。

早速夜一さんが戦闘を開始し謀反衆を外に出す事に成功との報告を受ける。

直ぐに俺も取り逃しが出ないように動くが、そんな心配はなかったようだ、喜助の縛

り紅姫で取り逃しは防がれていた。

そして、インカムを渡した部下に報告して引き取ってもらう。

よし……とりあえず運用試験は合格。

完璧——！！

つてことで伝声神機イシカムは二番隊で大活躍。
本格的に導入の流れになった。

そしてその装置を伝令神機となる箱に取り付け、また虚が空間を裂いて出てくるのを感知する装置も作りそこから近くにある伝令神機に自動で通達を送るとい装置を作った。

ちなみに現世で実験済み

「はあ…伝令神機で報告とかできればいいんだけど…」

報告はできるがそれを取仕切る受け取り側が居ない、情報をまとめる機関とか作りた
いけど…

「そうツスねえ…そういう機関いつか作りたいうツスね」

まあしばらくは扱える奴いないから無理だろうなあ。

—————
そしてついに—————

液晶も完成させた。この時代にこの世界ではまだ作られていない、ガチスマホ液晶！
まあ霊子で構成されてるしちよつと俺のいた世界とは構造異なるけど…

もう何年かかった？文では簡単だけどガチで色々大変だった。

現世尸魂界関わらず通信ができて。

電話もメールもできる

写真も撮れるし

虚襲来も緊急速報も通知が来る

——スマートフォン伝令神機——

が完成した——。

ちなみに見た目はバチバチ iPhone 12 である。

液晶の半分ガラケーのキーボードが付いている バージョンver も作った

——
そして今日——

「よっし——!!!」

俺は四十六室の為の居住区域である
せいじょうとうきょりん
 清浄塔居林から出てガッツポーズをする

正式に四十六室の元へ行ってプレゼンテーションし

伝令神機を尸魂界で使用する許可を得た。

隠密機動が元は四十六室直属の組織だったこともあるだろうけど…

それに四楓院家と浦原家の名も決断の一つになったと思う。

四十六室が伝令神機は危険ではなくこれから尸魂界で有効的に活用できる物だと理解し気に入ってくれたのだ。

そして俺の許可無しに勝手な製造改造も禁じてもらったので——つまりは著作権もゲット。

——そして浦原神機うらはらしんきという携帯の会社を立ち上げた。

会社経営系は俺は全くダメだったのでそこは喜助に丸投げしておいた。

夜一さんがなんと！スポンサーになってくれることになり。

つまりは、五大貴族のうちの一つ四楓院家の後ろ盾と広告塔となり信用ができる会社になった。

早速、喜助と俺の合同で技術を集結させて、通信をより安定させるための電波塔とそ

これらの通信をまとめる地下施設を作った。

場所は浦原家が所有している土地。

喜助の作った結界と俺がウジ虫の家で作ったあのサイバー感溢れるセキュリティで情報を盗むとか壊すとか遮断すると言ったものも出来なくした完璧なエリア。

—この開発から許可を得て会社を作るまでの間約5年
ありえないほど爆速である。

しかも機械技術者俺1人。と科学者喜助1人の計2人。
いやあー短いようで長い濃い期間だった——

ちなみに浦原神機うらはらしんきって会社の命名俺な！

歴史は——と新たな技術者の話

ちなみに尸魂界で死神に伝令を行う地獄蝶。

最重要な機密情報などは伝令神機ではなく蝶で行われてる。

俺がそうするように指示した、もし万が一伝令神機が使えなくなった時に蝶はちゃんと稼働させておいたほうがいいし。

それに蝶は案内役だったり蝶は蝶の良い所があるしね。

——それに通達、呼び出し系はスマホでも重要な報告はこういう機関を使わない方が絶対いいと思ってる。作ってなんだけどね。

まあ虚襲来通知が主な使い方だから伝令神機は伝令神機のいい所があるって事で

直ぐに尸魂界内でスマホ型伝令神機は公式に使用されることになった。

虚が空を割いて現世に現れる瞬間を記録し発信。

完全に出現する前に自動的に近くの死神に報告される事で現世の魂魄の被害がだい

ぶ減った。

そして伝令神機は特に若い女性陣には大人気で見た目が可愛いらしい。

見た目が可愛い…??

可愛いというのは初めて聞いたけどまあ、人気になるなら良かった。

浦原神機うらはらしんきから護廷十三隊に所属しているもの全てに伝令神機が配布されて靈力記録をして他人に使えないようにもしてある。

後色とかカスタムは別料金だよみたいな感じで予算とは別で金稼ぎしてる。

そして浦原神機で現世の死神助けますよ系の道具で

靈力ある人間に万が一見られた場合による記憶置換装置も作っておいた。

これ原作で聞いたことあるんだよなあって思いながら作ってたわ。

まあ稼げるからいいんだけど。

そして隠密機動に2番隊に会社——当然喜助と俺じゃ手が回らないわけで…。

二部隊の警邏隊けいらたいの信用できる部下数人に置換装置の販売などは任せておいた。

そのうち自販機とか作ろうかな…自動販売所みたいな。

「いやあ、維助大功績やなあー！」

つと笑ってグラスを掲げる平子隊長。

副隊長を祝ってくれたあの4人でまた呑みに来ていた。

「いやあ、弟の手伝いあつてこそですよ、弟がいなかったら完成しなかったかもしれないし何十年とかかつてたかも…」

「んでも5年は早すぎやろ…。まあ飲みの誘いにいちいち出向かなくていいのは楽でええな」

「いきなり鬼電かけます？普通」

そう、平子隊長から鬼電が来ててマジでびっくりした。

何事かと思つてでたら

”『お、よーやつと出た、維助く呑みにいこやー！俺今現世から帰るねん。帰ったら呑もな』”

だけ言つて切られたのだ、有効活用しすぎでしょ平子隊長。

「それじゃあこのまま君が色々なものを開発すれば。あつちに呼ばれてもおかしくないかもねえ」

つと、独り言のように呟いた京楽隊長。

「あつちっ？」

俺は首を傾げる。

「尸魂界100万年の歴史が詰まった…尸魂界歴史そのものと言ってもいい。王属特務零番隊さ」

君は尸魂界に大きな影響を与える歴史そのものとなってもおかしくないからね」

その言葉に少し惣右介が反応した。

そういえばこの前惣右介が零番隊がどうかかって独り言、言ってたな…

「王属特務…?」

だが惣右介は知らないフリをするようだ。

「へえ…呼ばれたらどうなるんですか」

「さあ…歴史の一つとなった方々は王を守り歴史を守り続ける…なんて昔は教えられたもんだけど今は教えてないみたいだね。」

僕もあの人たちに会ったのは1度だけだからねえ…」

すごく簡単にだが話を聞いた。

「歴史を守る…ねえ」

守り続けるってのに少し違和感…まあ俺は興味無いけど。

「もし俺が新たな開発を続けて歴史を作り、その何とか特務に呼ばれたとしても俺は行かない」

「えっ、行かないのかい？昇進だよ？」

つと首を傾げる京楽隊長

「1つ2つ歴史を作っただけで俺が満足するわけじゃないじゃないですか。

俺は俺が満足するまで開発を続ける。

俺が作る歴史はそんな一つや二つで終わらせない…。

何でまだまだ進む事ができるのに守りに徹しないとイケないんです？」

つと、ビールを流し込む

俺は伝令神機だけで終わらない、まだまだ作り足りないんだ。

京楽side

飲み会が早めに終わって帰路につく、あんなに高かった太陽ももう落ちて代わりに月が輝いている。

「ああ、懐かしい気持ちになったねえどうも」

笠を上げて月を見上げる

始解をしない戦い方をする維助君に彼を思い出す。

そして理由は違えど王属特務の勧誘も断ろうとする所も――

維助君はきつと現役だった頃の彼よりも確実に強い。

2人と戦ったことのある僕だから分かる…。

想像する力、作り出す力、前に進む力に行動力と度胸もある。

懐に入った支給された伝令神機を取り出す。

院生で剣が強いと言われた彼がこんな能力があるとは…。

「どうも若いってのは怖いね」そうは思わないかい」

「くるやしき
剝屋敷」

七代目剣八であった院生からの同期を思い出す。

「まあ……維助君が懸石介くんあの子に呑まれないといいけど」

嫌な予感がして飲み会から早めに帰ってきたら。

パキツと音を立てて俺の腕に着いていた枷かせが地面に落ちる

「また、ダメか」

全ての死神についている霊力の排出口である手首につけていた霊圧制御装置——死神になってから時が経つ事に謎が増えて溢れていく霊圧。

死神になって勉強部屋で喜助と鍛錬してる時にはもうつけてたが、その機械も早めの寿命を迎えひび割れて落ちてしまった。

新しく作ったものを装着するが今度はいつまでもつか分からない。

喜助が定期的に俺の検査してるが未だに原因不明。

俺の魂魄が丈夫すぎるのか、霊圧が溢れ出るぐらいで特に支障はないけど…他人に迷惑がかかるのは何とかしないと…。

ジャラツとまるで囚人のようについた鎖を見てため息を吐く。

「ただいま帰りました」

そう若い男の子の声が聞こえて俺は振り向く

「おかえり阿近^{あこん}」

ひよりちゃんよりも幼く小さい阿近。

つい3年前ぐらいに流魂街で虚に襲われてるところを助けて拾った子供。

霊力があり死神になる才能もあるしと院に通わせてる。

走拳^{そうけんざんき}斬鬼の才能は一般的だけどね。

そして阿近は死神の才能ともうひとつ技術者の才能があった。

これはいい拾い物をした：つと思つたね。

早速俺の技術力を仕込むと喜助並のスピードで機械を理解してつた。

1から作ることにはまだ出来てないが、今や俺の作った機械のメンテナンスと修理ができるぐらいにはなっている。

会社を作る際も色々手伝ってくれて助かったな

俺の後任として任せれるぐらいには育てたいものだ――。

「ありや、阿近サンまた身長伸びました？」

つとニコニコした顔の喜助が廊下から顔を出す。

「伸びてません。つうーかあんたさつき碎蜂さんが書類どうこうって言って探してたぞ」

「そーなんスよねえ〜だから逃げてきたんス」

「ここに逃げてくるなよ」

つとジト目の阿近を撫でる喜助。

2人は仲良くなつて、喜助が薬品系の知識を阿近に教えこんでるらしい。

仲良いようで何より。

「兄サン、また霊圧漏れてたっすけど」

「ああ、さつき壊れて変えたところだよ、迷惑かけた」

手首についた真新しい制御装置を見せる。

「小型化が好きな兄サンにしたら珍しいッスねえ」

まあそこそこでかいからな…分厚い鉄をつけてるようなものだし。

「あんまり薄いと壊れるんだよ…他も考えないとな…」

霊圧を押しこめるじゃなくて吸収でもいいけど耐えられるかどうか…うーん。

つと頭をひねらせていると

「あの…もし俺が…。」

そう少し緊張した様子で阿近が口を開いた

「もし俺が、貴方と浦原喜助の技術を吸収して…まあ、アンタらみたいには行かないとは思うけど…。」

でもいつか、俺が貴方に完璧な制御装置を作る…から…そしたらつけてくれます…か？」

つと声があつたかきながら、ハッキリと言ってくれた阿近の頭を撫でる

喜助がフルネームで呼ばれているのは笑っちゃうけど。

「当たり前だろう技術者の弟子が俺のために作ってくれたものをつけないわけないだろ」

「つー！」

嬉しそうに笑う阿近。

待つてゝるぞ阿近。

身体壊した話

伝令神機が浸透して1年弱

休まない開発、会社経営、機械のメンテナンス、隠密副司令官の仕事に、二番隊副隊長の仕事、2、4の部隊長に1〜5部隊の補佐、弟子の指導に惣右介との剣を交わし、定期的に来るひよ里ちゃんの相手もして……

最初は眠れなくなつて、疲れが取れなくなつた、目を閉じると目の中で眼球はグルグルと回る感覚に陥り目が回つて、さらに耳鳴りまで

———そう

過労で体を壊しました……

「阿近ごめん……」

「いいから、休んでください」

布団で横になつて俺の頭に濡れタオルを乗せる阿近。

ぶっ倒れた俺に気づいたのは同室に住まわせてる阿近で、阿近がいなかったらやばかったかもしれない。

卯ノ花隊長がわざわざ診に来てくれて、副隊長になってから5、6年休まなかった疲労が蓄積されついに身体の方が耐えられなくて悲鳴を上げたからつまりは休んどけとの診断を受けた。

しばらくのお暇をいただけることになり、こうして阿近に看病されている。

ついでに喜助も――

その喜助は俺が倒れたと聞くなり、部屋に来て「無理しすぎッス」って言ったかと思うと

俺が効率化のために作った機械……元の時代というパソコンをカタカタし始めて恐らく自分の書類をやり始めやがった。

眩暈する――確かに少し働きすぎたかもしれない……

ここ最近では書類の効率化とタスク管理をわかりやすくするためにPC作ったりしてますます休む暇もなかったし……

「なんか一瞬で体回復してすべての疲労吹き飛ばす薬とかねえの……」

っていつたら呆れたように振り向いた喜助

「それただの怪しい薬じゃないツスか。そんなのあつても所詮元気になったと脳を騙しただけで、身体は壊れたまま。そもそもそんな倒れるぐらいまで行くと薬を頼つても身体の機能なんてそんなすぐに回復しないツス。」

と言われた・・・まあそりやそうだよなあ

「そもそも、本質はめんどくさがりでサボリ症のくせして、死神になつてから、仕事は必ずこなさなきゃいけないみたいな責任感を無駄に負いすぎたせいツス。」

「だってそれが責任と信用で・・・」

「はいはい、それはも何度も聞いたツスよ」

つとあしらわれる。

「あれ、俺が兄だよな・・・??」

「それに、4部隊なら碎蜂サンに任せてはどうなんスか? 5, 6年前は経験不足つて言つて断つてましたけど、彼女もう十分実力上げましたよ??」

「あー・・・すつかり忘れてた、4部隊は俺がやらなきゃみたいな感覚抜け切れてなくつて」

「頼ることを忘れていた・・・と、馬鹿ツスね」

「バカはねえだろバカは・・・」

「維助さん。これお粥もらってきました」

　　つといつの間にかどこかに行行ってたらしい阿近がお膳を持って入ってくる

「卵粥です。曳舟隊長が、『ひよりちゃんがお世話になっているから。』——と」

「ああ…あのおっぱい美人の隊長か…」

「そんな口聞けるまで回復したならよかったです。」

「いつもこんなんだろ」

「いえ、最近の維助さんは返答が日本語じゃなかったり、いきなり笑いだしたり、花瓶をみて『美人さんだー』とか言い出したり…」

「何それ怖い」

「こっちのセリフですけど」

まじ??そんなことしてたの…　　こわい記憶ない

起こしてもらって、匙で粥を口に運ぶ

あーおいし…おい…し

「くない…あれ？」

おっぱい隊長の料理は何回か食べたことあるけど、味がなかったなんてのは一度も…

「そりやそうでしょう、この1年ぐらいごはん食べる時間も惜しいとか言って携帯食ばっか口にくわえて作業してましたし、身体弱って味感じないんですよ」

と、いわれる、阿近なんかその冷静な感じ昔の喜助っぽいな…。

ドロドロの味のしない米を食べてる感じがすごい…うん、身体ここまで弱ってたのか「物理攻撃は大丈夫だったんだけど、中身がだめになつてたか…：疲労が物理的に攻撃してくれば耐えたのに…内側となると…」

「浦原さんあれは…？」

「あのたまにアホな事言うのは兄サンの通常運転ツス」

「おいこら、そこ聞こえてるぞ！でもこれでも書類は減ったんだよ、そのパソコン作つたおかげで…それに休ませてもらうって言つても期限近い物とかあるし…ちよつとやんなきゃ」

「大丈夫ツスよく代わりにやってるんで」

つとニツコリな喜助、どうやら俺のパソコンでやってたのは喜助の書類ではなく俺がやるはずだった書類やらをこなしてくれてたらしい。

ガガガつと、印刷される紙を見て流石喜助…つと感謝しながら粥を食べ終えて俺は横になつた。

「休息って大切なんだなって……」

「はあ……？」 つと俺のセリフに首を傾げる阿近。

俺はなんと1週間ほどで復帰出来た。

卯ノ花隊長からも無理せぬ程度に……と、実質復帰許可も貰えた。

あれから溜まりに溜まった書類を、休息前だったらふらついたり目眩したりとかで時間がかつてた書類もあつという間にぱつと片付けることが出来た。

正常なからだって……いいな……！うん！

それから、わざわざ刑軍の仕事を停止させてまで2部隊と4部隊の代理部隊長を1週間務めてくれた碎蜂にお礼しに行った

「元氣になられて何よりです！倒れたと聞いてどれだけ心配したことか……」

つとすこし泣かれてしまった。

「ご、ごめんな？これからは適度に休憩するから……な？それに2部隊と4部隊ありがとつと頭を撫でる

「あの……この碎蜂に是非4部隊をお任せしては貰えませんが……私はある頃の維助様に守られるだけの女ではございません！ここ5年ほど任務失敗率も0ですし……その……」

つと言つて俯く。

「たしかに、碎蜂の働きはとてもいい。ただ刑軍である1部隊に務めるのはお前の夢みたいなものだろう？それなのに4部隊を兼任するとなると刑軍の活動も疎かになってしまおうし」

「いいえ！それは大丈夫です！仕事にも慣れましたし夜一様にも許可を得ております！！」

なるほど、そう来たか…先に夜一さんに許可を得てくるとは…

「はあ…よし、分かった。無理そうだったら何時でも言ってくれて構わないからな？今度引き継ぎの書類を渡す。今日より4部隊の部隊長を碎蜂に任命する」

「つー…ありがとうございますー！」

つと花のような笑顔になった碎蜂。

そういうことで俺の仕事も少し減った。

「よ、夜一さん?？」

執務室ですつとしょんぼりしている夜一さん

「お主を無理させてしまった…本当にすまぬ…」

「なんで夜一さんがあやまるのさ？夜一さんは夜一さんの仕事をちゃんとやってたから

俺が困ることもなかったよ？俺が体壊したのは自分の限界を知らないで不摂生な生活してたせいだから。」

まさかここまで夜一さんが落ち込むとは…悪いことしたなあ

「で、でも夜一さんのお出かけで結構体が休まってたよ？気分転換にもなったし、夜一さんが仕事ちゃんと終わらせて、ちゃんと俺との約束をずっと守っていてくれたから…な？」

上手いこと言えない自分を恨む…けれど

「ま、まあ儂もお主がいないと仕事がまともにできないからの…その…元気になってよかったぞ維助」

とようやく笑顔を見せてくれた

「今日も早く仕事終わったら甘味処いこうか」

「うむ！今日は三色団子の気分じゃ！さあ早く終わらせるぞ維助!!」

日付が変わるか変わらないかぐらいの夜遅く

「わり、惣右介身体壊しちゃってさー」

「ああ、何となく分かってたよ」

「ここ数ヶ月全然剣を交わしてなかった惣右介と久しぶりに流魂街のいつもの場所に来ていた。」

「わかってたんだ」

「ああ、だから誘わなかった」

「へえ？身体壊してる時に挑んだら勝てたんじゃない？」

「……それは本当の勝利では無いからね。それで勝っても嬉しくないさ」

つと、惣右介は惣右介なりに心配してくれた……のかな。本音かどうかは知らないし俺の勝手な解釈

「でもまあ、もう完全復活、倦怠感もないし睡眠もちゃんと取った。さあ1週間休んだりハビリに手伝ってくれよ？」

「いいだろう」

つとお互いに剣を構える。

いつも通りお互いボロボロになるまで戦うのかと思ったら、一戦してスつと刀を鞘に納めた惣右介

「??もう終わりなのか？用事？」

「いいや、また身体を壊したら意味ないだろう？リハビリならこのぐらいで十分さ」

と、まだやってたいけど、まあそれもどうかと俺も鞘に納めた

ちなみに惣右介の鏡花水月斬魄刀だけど、始解を見たものの五感を支配する完全催眠。

俺はあんまうろ覚えで正確じゃないかなって思ってたけど、あつてた

あつてたっていうのは惣右介自身から斬魄刀の能力を開示してきたのだ。

他の人には言うなって言われた。

俺に催眠かけてくるかと思っただけど、そんなことはなく、始解は一度も見た事が無い。

本気で最近惣右介の考えていることがわからないときがある……

多分試されているのだろうって感じはする。

まあ俺はガチ友人と思ってるから、せつかく秘密教えてくれたのに、それをバラすよ

うな真似しないけどな。

なんて考えていると口角を上げた惣右介

「そういえば君に会わせたい子がいてね」

「へえ惣右介が？珍しい」

「君にはどう見えるか見てほしいんだ」

「え、師匠てきな？俺無理だから、また体壊すよ?」

つと言おうと首を横に振る

よかつたこれ以上弟子増えるのは勘弁だったし。

「面白い子だね。面白い君と顔合わせさせてみようかと」

「へえ……」

面白い君って何だよ……

「でも惣右介がそこまで言うのは珍しいし、顔合わせぐらいなら——」

「一応忘れたらごめんだけどその子の名前は？」

「彼の名は——」

——市丸ギン——

市丸ギンと隊長推拳の話

初めは不思議な見えない壁にぶつかつたのが始まりだった。

「…なんやろ…これ」

触れても優しく弾き返される。

音も——風も——何も感じない

何も感じないのの中で男2人が刀を交えているのが見える。

草むらの中でその不定期に行われてる光景を見るのが楽しみになっていた。

見えない刀捌きに憧れまで抱いていた。

「かつこええなあ」

服は違うけど、身なりは綺麗だ、きつと死神なのだろうなんて想像がついた。

毎回毎回、あのくすんだ金髪の男が勝っていて。

「なんで負けたんに笑つとるのやろ」

負けてるのに口元は歪んでいる黒髪の男。

刀を交わしている時も2人してずっと笑ってる狂気と思えるほどに——

またある日、今日もいたらええなと思ひまた向かうと。

「なんやろ…匙さじか…？」

銀色の匙のようなものを金髪の男が黒髪の男に手渡していた。

ニヤリと笑つて去つていつた男。

遠くからよく見えなかつたけど、なんで匙なんか…？

いつも通り帰ると

乱菊が倒れていた。頬には殴られたような跡

「へへ…これで金貰えるんだろ？無駄に暴れるから時間かかったな」

「なんだろうなこれ」

「知らねえよ、変に詮索すると消されるかもだぞ？」

その男らの手に持つてるものを見て目を見開いた。

何故、あの日金髪の男が渡した匙を持つている？

なにかキラキラしたものが匙から溢れていて。

乱菊から何かを取つた

？

ボクは男達を追いかける。

すると、その場で膝を着いた男が匙を

あの金髪と戦っていた黒髪の男に渡した。

サラサラと砂のようなものが匙から零れていくのが見える。

ああ……こいつや……こいつが親玉や

黒髪金髪もアイツも乱菊を泣かせた――。

――こいつらはボクが――

直ぐに乱菊に触れた2人は殺せた。

1人は見つからなかった――。

あの男達に勝てるか……？ いや今のボクには無理や

刀を目で負えなかった、あんな戦い今のボクには――

「ギン！どこいったのよもう！……って……血？それにそれ死神の――」

「乱菊、ボク死神になる」

「は……何言って……」

「死神になつて——乱菊を泣かせない世界を作つたる」

恨み憎しみ——今すぐにでも殺しに行きたい。

けどダメやそれじゃあ、今のボクには無理やいつか……いつか殺して取り返したる——。

別れて6年以上たった、乱菊に触れたもう一人の男を探し続けている。

そうしてようやく見つけた、フラフラと酒を持った男が千鳥足で歩いている。

躊躇いなんてなかった、躊躇ったらこつちが死ぬ。

盗んだ刀で心臓を一突き。

「がっ……」つと手を伸ばしてくる男

「まだ生きとんの……？今楽にしたるよ」

伸ばしてきた手に刀を突き刺して縫い付け、短刀で首を切り裂いた

瞬間——

パチパチパチつと手を叩く音が聞こえた。

「!!」

あの男や、黒髪の——！

初めて目が合うその男に恐怖した。

こわい、こいつは無理や勝てない奴やつと本能が叫ぶ――

――だけど平常心を保って顔には出さなかった。

「僕が始末しようとしてたんだけどね。君――名前は？」

「――市丸ギン、市丸ギンや」

「そうか」

それがこの男とあの男への復讐の始まりだった――。

死神になるための学校に通わせてもろて、3ヶ月

乱菊は元気しとるのやろか。

そんなことを考えてるとあの男に呼ばれた。

「ギン、君に会わせたい人がいてね」

「へえ、どないな奴なんですの？」

「この伝令神機を作り上げる天才、剣術の達人で停滞を嫌い――常に進化を求める男さ」

その笑みは、あの戦いの時に浮かべていた笑みと一緒に――

ああ、あの男金髪かと、察しがついた

「君がくえつとー…何とかギン？」

藍染副隊長と違ってこっちの男はぼやぼやして毒気が抜けそうになる。

一言で言えば優男。

ヘラヘラしててずっと笑ってる。

——けど、隙は無い。

「市丸ギン、市丸ギンや、覚えておいてください。よろしゅう浦原維助サン」

市丸ギン…市丸ギン…聞いたことあるんだよなあ…つて事は原作かあ…

こんな小さな子…うーん…うーん…

あ、あれか！なんか刀伸びるやつ！！

ああ！DSのゲームで使った覚えあるわ…！！

懐かしいく小学生のころかなあ…

なんて懐かしさにひたつてると

「ギン、君の目には浦原維助はどう見える？」

「……アホ……？」

「殺すぞ」

つと反射的に返してしまった。

あれ？俺ら初対面だよな？

初対面のやつになんでアホなんて言われなきや行けないんだ??

「いやだなあ冗談やないですか、ほんま見たまんま面白い兄さんやなあ」と

「それ結局褒めてないよな…?」

それからしばらく話したら、少しだけ警戒気味だったけど慣れてくれたらしい。

「へえ…今院生なんだ、一回生？」

「そうなんですわ、でも来年にはもう卒業です」

「へえ、1年で卒業かー優秀だな！

じゃあもうすぐ死神かあ〜うんうん、優秀な人が来て嬉しいよ。」

「君も1年で卒業するはずだったのにあの四楓院と浦原喜助に合わせて2年で卒業した

じゃないか」

つと惣右介が言った…つてあれ？

「えっ、ちよつとなんでそれを知ってるの…???」

あれ、それ先生しか知らないはずだよな…??

「知る方法などいくらでもあるさ」

久しぶりに恐怖を感じた…。

しばらく日を置いて夜一さんに呼び出された俺と喜助。

「……え？もう一度言つてください」

「じゃから、維助か喜助。お主らのどちらかを隊長に推挙すいきよしようと思つてな」

「へえ…あれ、空きがありましたっけ？」

隊長全部埋まつてた気がする…？

「兄サンが身体壊した時に10番隊の隊長サンが殉職したんす」

「へえー」

「それから内密じゃが、12番隊の隊長もこの度昇進することになつてな、2枠空きがあるが2人は推挙できん。2番隊の穴も大きくなるしの」

「隊長になるのつて試験あるよね？夜一さんのその言い方だと、絶対受かるみたいな言い方じゃない？」

「ん？お主らが落ちるわけなからう」

マジでどつから来るんだその自信。信用とも言つていいか…？

「まあ俺はパス！引き継ぎ多すぎるし。隊長だるいから」

「最後のが本音ツスよね…？でもまあいいツスよボクがやります」

つと承諾した喜助にびつくりする

「えっ、意外！めんどくさいとか言いそうなのに」

「いや、めんどくさいんすけど…隊長になると色々自由が効くって聞いたんで…この際に新たな機関を作ろうかと」

「へえ…！」

何となく喜助と話した内容を思い出す。

伝令神機で死神からの報告をまとめる機関や、新しい実験や研究ができる場所と人数揃えれたらいいなみたいな事を話してたなあ。

喜助は喜助なりに考えてたのか。

「ま、喜助なら大丈夫だな。卍解も会社経営しながらさつきと習得してたし」

喜助が忙しすぎて卍解習得出来ないって言うから俺の技術と喜助の技術を合わせて、まあ…卍解を簡単に習得できる人形を作ったのだ！

説明めんどくさくなんかないよ？

まあ半分以上喜助の研究だし俺は外側作ったぐらいだしな。

「ふむ、じゃあ推挙しておこう、数ヶ月以内に隊首試験があるはずじゃ」

「頑張れ喜助！」

「はいっす」

その夜に喜助が俺の部屋に来た。

阿近が茶を出す

「ありがとツス阿近サン。それで兄サン、隊首試験までに片しておきたい案件が。」

「また脱走者？」

つて言うとかクンと頷いた。

喜助から貰った書類をパラ読みする。

「そうだな…喜助が居なくなる前には終わらせないといけない案件だな…。居場所もわかってないのか…」

「そうなんスよ。複数の脱走者と固まってなにか企んでいるらしくて…」

「あの…」

つとお膳を持った阿近が口を開いた。

「ん？どうした？」

「お仕事の話中すみません…その脱走者ってなんですか？囚人…？」

「ああ、色々意味はあるけど今回俺らが話してるのは瀨霊廷からの脱走者。つまり隊から逃げた人達だ、

死神は脱退というものはなく、何かしらの正式な理由での引退。まあ基本貴族である事。それか命に関わる損傷、病を患ってるぐらいしか認められてないけど…そういう引退でしか抜けることが出来ないんだ。」

「そう…なんですか」

「例外もあるけど」まあそれは置いて、抜けようとする色々情報も持つてるし、危険分子になるかもしれないから表向きは除隊とし、そいつらを隔離しておくんだよ。それが嫌な人達や気づいた人達が瀦霊廷から逃げ出してしまう…それが脱走者」

「情報を持つてるし、危険分子になるかもしれないから…捕まえる…と?」

阿近は説明が軽くても伝わるから助かる。

「そうだな、今回はもう何かしら企んでる連中がつるんでるらしいんで早々に捕まえな
いといけない。」

今回のやつらは霊圧も高く席官だし、隠れるのが上手い。

それにめんどくさい能力をもってる――。

地道に聞き込みするしかないかあ…」

書類に記されたそれぞれの斬魄刀の能力をみてため息を吐く。

「ええ、部下にもあたらせてはいるんすけど…」

「夜一さんはなんて?」

「夜一サンも早々に片付けないと面倒になると。隊首試験は遅らせられませんか、そういう能力なんで…まあボクが抜ける前には終わらせないと」

「…わかった、2部隊も動かして情報を集める。」

「ありがとうございます兄サン。」

さて、喜助が気持ちよく隊首試験受けれるように俺も一肌脱ぎますかね。

調査と脱走者の話

「こんな顔のやつ、いませんでした？」

「いやあ？知らないねえ」

俺はいま流魂街にいる。

脱走者の調査だ、刑事のような感じで入隊時に撮った脱走者の写真を持って目撃者を探している。

霊圧の高いやつってのはそれを隠すのが上手い。

そいつらの霊圧を知ってたら話は別かもしれないが、俺は知らん。

伝令神機の霊力は記録してあるけどそつからは追えない。

まあ指紋認証から人探しするようなものもあって考えてくれればいい、まあ第三者に使われないようにするための機能だしな霊力記録は。

というわけで喜助の部下と俺の部下総動員であっちこっち探しているとそこでブーブーっと懐の伝令神機が揺れた。

浦原喜助と表示されていて電話に出る。

「あ、もしもーし、喜助？どうそつちは」

『西にはいないようツスねえく兄サンは？』

それと同時に俺の前に現れた部下の顔を見ると、部下は首を横に振った。

「うん、北もダメだ。」

流魂街はバカ広い。ドローンも部下もフル活用で搜索してるけど――

そこで、ピピピッと音が鳴った。

「あ、阿近から電話だ。喜助一緒に繋げるけどいい？」

『大丈夫ツスよ』

ちなみに阿近は俺の部屋でドローンのモニター監視と1部を操作してもらってる。

ボタンを押して阿近の電話に出ると自動的にグループ通話に切り替わる。

『あ、維助さん。見つかりましたよ』

「あーやつばだめか…ん？見つかった!？」

『うるさつ』、つと阿近がそこでビデオ通話に切替える

『近寄るとバレるので今上空から拡大してます。』

外力メで映し出されたモニターには確かに脱走者の1人がフラフラと流魂街を歩

る姿が映し出されていた。

「よくやった阿近!!そのまま追跡してほしい、拠点を見つけない」

『でも、ここから先は森なので、見失うかも…』

「行けるところまででいい、任せたぞ」

『はい』

そこで阿近の通話が切れる。

「喜助、一旦戻ろう、ちよつとドローン改造するから手を貸してくれ」

『分かりました、部下も引き上げさせますね』

まさかこんなに早く見つけられるとは…。

部屋に戻ると阿近がちゃんと録画していてくれて、森に入ってから見失うまでの動画が撮られていた。

「恐らく森のどこかに拠点があるのかと…森の周りを無人機に監視させてたんですけど出てくる様子はありませんでした。」

「さすが阿近ー!よくやった」

わしやわしやと撫でると、髪ボサボサになる!つと手を押しのけられた。

全く可愛いなー!

「前々からの問題点。遅延はどうかになったんでしたっけ?」

つと、戻させたドローンの一つを喜助が分解する。

おいこら勝手に分解すんな

「ああ、もう遅延は大丈夫だけど、やつは音がなあ…ほんの少し聞こえるんだよなあ…」
「…維助さん。小型化つてできるんですよね？」

「ん？ああ、小型化は俺の専売特許！耐久性とかちよつとの性能不足を全然気にしないならマイクロまで行ける…はず。やったことないけど」

マイクロ…？つと首を傾げる阿近。後で教えるよ

「小さくできて、音が出るなら…もう堂々と音出しちやつていいんじゃないですか」

「…?!?!」

「なるほど」

喜助は理解したらしい。ちよつとまって俺が理解できない…

「音を隠さず出すんすよ。」

音を隠さない…かくさな…い

「…あつ」

そこで俺らの思考はようやく一致した

モニターに映るの例の脱走者。

同じ場所を通って毎日水を汲みに行ってるらしい。

堂々とその背中にひつつく無人機。

「ん？なんだよ。ブンブンうるせえなあ、そろそろ湯浴みしないとやべえか……？」
つと、性質の悪いマイクから拾った声がモニターから響く。

「大成功ツスねえー！無人機をハエに改造！」

「いやあく小型化最高！」

「……このネジ……なるほどこうやって出来てるのか」

阿近が超倍率虫眼鏡でハエ型ドロンの予備を観察している。

そう、音を消せないなら音が出るハエにしちやえば？つてことで戻ってきたドロンを早速ハエ型に改造したのだ。

ハエの目はカメラで倍率は20倍まで、マイクもついてるけど音質が悪い。まあこれは仕方ない。

耐久性は全然なくガチのハエを退治する並に脆いけど、これはもう便利すぎて——なんで今まで音を消すことしか考えなかったのだろうと、自分の頭の硬さに泣きそうになるわ。

「ここっすね」

ようやくついたのは木々に隠されるようにして建っているボロ屋

「維助さん、霊力充電もう切れそうです。」

「わかった、じゃあ位置を記録して戻そう」

ドローンを動かすにあたって—— まあいわゆる充電が切れてしまうので戻すことに

もうちよつと見たかったけど、いたしかた致し方ない

そこで喜助と作戦会議

「脱走者全員の確認と、行動パターンを確認して逃さずにとらえましょう。」

「そうだな」

ハエ型のバッテリーを性能アップしながら話を聞く

「あの… 斬魄刀の能力がどうかかって… そんなにやばい能力なんですか？」

「うーん… まあ厄介だよな」

本当は見せちゃダメなんだけど、阿近に斬魄刀の能力が記された書類を渡す

「ことだま言霊?！」

「そう、鬼道でも使われる言霊… 言葉に宿った霊力が力をなす。」

こいつの斬魄刀はいわゆる使用者の言霊の強制発動、斬魄刀に言霊を乗せて放つって

言ったらわかりやすいかな：制限はあるみたいだけど、厄介。止まらなくて言ったら動けなくなるみたい、直接相手を傷つける言霊は使えないみたいだけど、鬼道の威力増幅なんかはできるみたい。」

「…どうしてこんな強い人が隊から脱走するんでしょう」

つと、しばらく書類を見ていた阿近が疑問の声を上げる。

俺はその頭を優しく撫でた

「集団行動が苦手とか、隊に合わないものを感じた…とか想像と違ったなんてよくある事さ。集団行動系は6回生で学ぶから大丈夫なはずなんだけど、まあそれは本人にしかわからないものがあるんだろうよ…」

相談所とか作ればいいかと思ったけど——人員裂く暇ないか…

まあ阿近、もし死神になって困ったことがあれば俺に何でも相談しな、権力と職権乱用してやるよ」

「…それ最後の方言わなかったらかつこよかったです」

どれだけでできた人間…じゃないや、できた死神でも恨みや憎しみ嫌がらせなんかよくある事だ、

それが嫌になって逃げた奴らをこの数十年でどれだけ捕まえたことか、できてできなくても、憧れが荷になってつぶされたり、恨まれ憎まれたり、難儀な

ものだ。

「え？喜助が？」

しばらくしたある日俺と喜助と夜一さんが隊首室で雑談していると碎蜂が分厚い文書を俺に手渡す。

同じものを夜一さんに渡したようだった。

目を通すと事細かに喜助の行動の悪いところが書き綴つてあり――

「このようなものに隊長など無理です！維助様と違い任務をサボリ、維助様を困らせる！経費乱用から――」

と、説明し始める、それを本人の前でやるのすごいな。

「おお、細かいツスね」

「お前他人事かよ、お前の事だぞお前の」

他人事のように書類を覗く喜助に思わずつつこむ

「いやあ全部本当のことなんで」

「相変わらずじゃの」

なんて呆れた様子の子の夜一さん

「維助様はお身体を壊すほどに働きの者にどうして弟君はこうなんですか!!二番隊の顔にまでじゃなく維助様の顔にまで泥を……!」

「まあ言い変えれば体の自己管理できないって事だけど、つてか昔は俺の方がサボり魔だったんだぜ?」

というと有り得ない!という顔をする碎蜂

「あり得ません!そんな弟君を守るために……」

「いやいやほんとほんと」

「そうツスよー兄サンは興味ある事をやってるだけツス、あとは任された仕事を責任もってやり遂げる。」

「喜助が俺に似てきちゃったんだよ……ごめんな碎蜂こんなへなちよこ弟だけどやる時はやるから……多分」

つと喜助の頭をガシガシなでる

「最後に下げるのなんなんスか?」

うざそうに俺の腕を抑える喜助。いやあ昔が懐かしいよ

——なんて思い出に浸ってたら

「失礼します。」

つと俺の部下が報告に来てくれた。

「お、もう固めたか？」

「はい」

部下に指示しておいた、例の脱走者を捕まえる手配が整ったらしい。

「さて、行きますか」

「明日は隊首試験じゃ、それまでに戻るんじやぞ」

「ええ、もちろん、ギリギリの時間まで長引いたら最悪喜助を戻させますよ、行くぞ喜助」

「はいっす」

「どう?」

「目標も気づいて警戒してきてます」

「まあ逃げれないから潜伏するしかないよねえ…」

部下の報告を聞く。

半径50メートルには捕縛用の機械を部下に設置させ、また部下も周りを囲っている。

どうあがいても逃げれないだろう

「じゃあ作戦通りに俺と喜助が… って」

知った霊圧を感じて振り向く

「碎蜂…着いてきたのか」

「よ、夜一様が気になるなら行けば良いと…」

まったく、夜一さんは何を考へてるんだか…まあ喜助の活躍を見させて喜助は意外と出来るやつだぜみたいな事を見させたいのかもしいれないけど…

いや夜一さんはそんな深く考へてないな、多分面白がつるだけだあの人。

「まあいいや、碎蜂見学ならここから動くなよ?」

「はい、承知しました。浦原3席、維助様の足を引つ張らないよう。」

「はは、わかってますって〜」

なんで喜助そんなに碎蜂に邪険にされてるんだ??

何したんだ喜助——。

「さ、行きますかね、喜助の2番隊最後の仕事のお手伝い」

俺らはボロ屋の前に立つ。

「さあ出て来い!もう逃げられないことはわかつてるだろ!神妙に縄につけ!さすれば怪我はさせないぞ」

なんて言ってみたものの——ガンツ!!と扉が開いたかと思うと。

「破道の七十三 双連蒼火墜!」

威力増大の詠唱破棄した——いや、これは事前に詠唱したな?

俺はそれを斬り軌道を変えた。

交渉決裂——か

全部で5人、全て脱走者で元席官の奴がゾロゾロと出てきた。

——
叫^{さけ}べ——言^{こと}之^の祢

静止せよ

「うっ……」

これが言霊か、ビックリするぐらい指一本動けなくなる……が！

「なっ、一瞬で！」

1秒ぐらいかかるけど一瞬の霊圧解放で跳ね返せるな……！

喜助も少し時間かかったけど跳ね返せたらしい……けどその1秒がちよつと厄介だな

……

そう、厄介。

斬魄刀で抜刀しようとした瞬間また——

——静止せよ！

つと頭に直接響くような感覚に襲われ、脳の信号に反して身体が停止する。

その瞬間に別のやつが俺に斬り掛かる――が

「なっ……」

驚いた様子の脱走者の声――。

「驚いた？ そんなやわな剣じゃ――俺の霊圧硬度は抜けない」

首に刀が触れているが俺は薄皮ひとつ斬れてない。

動揺は隙！ 刀を掴んで引つ張り、膝で顎を蹴りあげ、その頭をつかみ

「ガッ！」

霊圧で硬化させたカチカチの頭突きを食らわせると白目を向いた

うわ、自分でやつときながら痛そう。

俺が二人倒したところで喜助の方を向くと喜助の周りにも2人が地面に倒れていた。

残ったのは言霊の斬魄刀を持った男。

「さ、もうお仲間は見えない。どうする？」

「つ……！ なんてだよ！ 見逃してくれよ!! 俺はただ……自由に……っ」

つと柄をギチギチと硬く握りしめる音が響く。

「ならなんで死神になったんだよ。自由が少し制限されるのは仕方ないだろ？ 仕事なん

だし、みんな自由奔放にやってたら崩壊する」

「こんな地獄だなんて！ 思ってもみなかつたんだ!! 新人が席官になれば先輩から恨まれ

指さされ笑われる。上からは期待の目……!! 分からない訳ないだろう？ あんたらも席官ならわかるはずだ!!」

「まあ……そりゃ俺にだってあるさ、イケメンだし昇進早かったし？」

元々上司だったやつの上に立つと気まずいよなあ、でもそんな関係ない。なんで俺が人の目を気にしてウジウジしないといけねえんだって感じ」

そこで、はつとしてこつちを見る男

「俺は全て実力で振じ伏せてきた、下がどうこう言ってるのは所詮戯言、妬みだよ、俺はこう言うね、悔しいなら抜かしてみろよって。」

お前は人の目を気にしすぎた、優秀だが心が弱かった。

—— 後退じゃなく前進を選ぶべきだった。」

「そう強く生きられたら……! 俺には無理なんだよ!!」

錯乱した男が喜助の方に目を向けて喜助の方に斬り掛かる

喜助なら倒せると思ったのだろうか。

—— おれは鞘に刀を収めた。

—— 静ませよ!

喜助の首筋に刀が——だが喜助がそれを紅姫で防いだ

「なっ、まだ数秒も経ってないのに……!」

「相殺させてもらいましたア。何度も食らうてればその靈子構成も攻撃も読めるつてもん。食らう前に逆の靈圧をぶつけて相殺したんス」

「っ……!!」

絶句する男

「期待される重み——わかるツスよ。」

兄サンは天才的な技術者で劍の天才で強くて、それと同じぐらいにボクにも期待の目が向けられる。

弟なんだから——なんて何度言われたことか、一度は嫌になって兄とは違う鬼道衆の道にも行こうとした。

けれど、そんな重みに耐えながらも兄サンの隣に立てるようになってボクはボク自身に誇らしい。期待されるって、想われてる証拠なんス、ボクは『どうせお前には無理だよな』なんて期待されなくなる方が怖いツスね

期待されるために頑張るって案外悪いことじゃないって最近思えるようになったん

ス」
ガクツと男が膝をついた。

言葉で言えば簡単に聞こえるかもしれないが、実際に俺らが体験し実際に思ってる事だ。それがこの男には響いたのだろう。

喜助の2番隊の最後任務が終わったのだ――。

ずるい俺の話

隊首試験当日、夜一さんと喜助が出てもう数時間。

おれは執務室で部屋でウロウロしてしまふ。

落ち着かない…喜助なら大丈夫だと分かつてるけど…。

すると襖が開いて夜一さんが顔を出した

夜一さんは俺と目が合うとグツと親指を立てた

「よ、良かったアア…」

俺は畳に寝そべるほどに安堵した。

それを見下ろしてため息を吐く夜一さん

「弟バカは相変わらさずじゃの維助。喜助が落ちるわけなかるうに」

「それでも心配だったんです。でもよかった」

「のう、維助」

畳にねそべる俺のそばで座った夜一さんが、ちよいつと袖を引っ張った

「ん?」

「維助…は本当は隊長になりたかつたんじゃないのか? 上に上にと…上を目指しておつただろう? もし儂が足枷になつてゐるのなら…」

そこで夜一さんの言葉が止まる。

おれが夜一さん手を握つてその言葉を制止させたからだ

「夜一さん、俺は院生の時からあんたの下につくつて決めてたんだよ。夜一さんを一人にさせたら誰も止めれる奴いないだろ? 当主になるのを見守るつて決めて、夜一さんがつくる二番隊と隠密を見守るつてのももう決めてたこと、それとも俺はもう用無し?」

つて意地悪すると、ブンブンと横に首を振る

「正直…儂の元から離れていくのはみんな…悲しいし寂しい。あんなに幼き頃から一緒にいた維助と喜助が…いつの間にか儂を超える程の力を持ち、どんどん前に進む…儂は置いてかれそうで…」

「大丈夫、夜一さんの傍から離れたつて夜一さんを大切に思う気持ちは俺も喜助も一緒に、俺だつて喜助が離れてくと思うと寂しい、そりや喜助が生まれたときからずっと一緒に居たしな。でも、大丈夫。俺はそばに居るよ」

「約束じゃぞ、維助。ずっと、ずっと一緒に居るよ」

「ああ…ずっとずっと一緒に居るよ」

院生の頃、京楽隊長に8番隊に誘われて、即答した答え。

俺は夜一さんを支えて生きていく。

彼女は1人にしたらダメだから、彼女は貴族の中でも上位5本指で数えられる知らない人はいない貴族当主で、本来なら俺もここでこうべを垂れなきや行けない身だ。

でも夜一さんはそんな一線を嫌う、貴族だからと姫だからともてはやされているのが気に入らないんだ。

強がりな彼女を時が許す限り支えようと誓う

「おめでとう喜助。」

「なんか、違和感ありますねえ」

隊長羽織りに腕を通して照れる喜助。

正式に隊長になる式典の日を迎えたのだ

「はい、これ俺からの昇進祝い」

少し古びた箱に入った扇子と綺麗な箱に入った下駄を手渡す

「この家紋」

喜助が扇子を取り出して彫つてある家紋を見て目を見開く

「そう、母上の形見で俺が継いだやつだ。喜助は俺らから離れてくからなせめて母上に

見守つてもらおうかと、大切にしろよ。

それは母上からの昇進祝いで、この下駄は俺から、隠密だから苦手な草履無理やり履いてただろ？もう昇進したからいいかなと」

「大切に…大切にします」

ギユツと大切そうに握つて笑う喜助。うん、本当にあつという間に成長して…

「兄ちゃん嬉しい…っ!!」

喜助に思いつきり飛びかかるように泣きながら抱きつくくと全力で押し返される。

「なんで泣くんスか!?!ちよ、羽織り汚れる!あああー!」

つと叫び声と夜一さんの愉快そうな笑い声が響いた――。

「つたく、夜一さんが取りに行った方が早いだろうに、面倒くさがつたなあの人」

一番隊隊舎についたら夜一さんがいきなり喜助の昇進についての大切な書類を忘れたというもんだから取りに戻つたのだ。

まったく…

「すみませーん、二番隊副隊長、浦原維助です〜開けて欲しいんスけど〜」

つと、でつつかい門の前で叫ぶ。

ギギギギつと音を立て開いたかと思うと――

「うるさいわボケ！」

「ガブツ」

小さな足の裏が俺の顔面にめり込んだ

「顔が痛いっ!!なにすんだひよりちゃん!!このイケメンフェイス凹へんだらどーすんだ
!」

「あん!うつさいわボケ!グエツ」

「うつさいのはお前やひより!」

ぷらーんつとひよ里ちゃんが持ち上がったかと思うとひよ里ちゃんの首根っこを掴んで持ち上げた平子隊長とその横に控えた惣右介

「おーす、惣右介おはよ」

「おはよう」

「おいこら、維助!助けてやった俺に挨拶は!?」

「おはよーございます平子隊長!相変わらず派手な髪で」

「アンタに言われたかないわ」

お前瞳までギラギラやんけつて言われたけど知らぬ。

「維助君、君のところの隊長は?一緒じゃないのかい?」

つと首を傾げる惣右介

「さあ、先に行つたと思うけど……俺はパシられただけだし」

来たかどうか確認する札が表になつてゐるから来てはいるんだろうな、まったくフラフラしやがって……。

「相変わらず十一番隊は自由やな」

つと裏返しになつた札をみてため息を吐く平子隊長。

「十一番隊つてだれだっけ」

「豚や豚、なんであないなやつ隊長になつたんやろな」

つと俺の疑問に答える、いや答えてないな、結局誰だよ

「おやあく人の悪口は感心しないよ、平子君」

「おー京楽さん、おはようさん、珍しく早いやん」

つと後ろから京楽隊長と浮竹隊長が来た、あの人体調すこぶる悪いって言つてたけど今日は顔色いいみたいだ、良かった良かった

「あたしがケツひつぱりたいで起こしたんや……つてなんやねん」

京楽隊長の影に隠れて見えなかつたが、姿が見えた瞬間、すこぶる美人のおっぱい美人の手を握つてひつまやく跪く、俺

「貴方がリサちゃん!? 可愛いなあ! どう今度俺とデートゴブア! なにすんだよひよ里ちゃん!」

「うっさいわ！アンタウチには何も言わへんよなあ！胸か！胸なんか!!」

いきなり後頭部に蹴りが飛んできて前のめりになるがリサちゃんがヒョイツと避けたせいで俺の顔面は地面にたたきつけられた。

「んやねん、この助平は」

つと俺を指さすリサちゃん。

「ほら、この前十番隊さんとこのお見送り弔式で休んでた、剣の天才浦原維助君だよ。二番隊副隊長さ」

「浦原……ああ、伝令神機作った頭イカれとるやつか」

「リサちゃんいいすぎ」

つと京楽隊長のツツコミがはいる。

身体壊したのとか色々あつて結局今回が初めてのご対面だ。

いやあー美人！

「ははは、維助君はいつも楽しそうだなあ、伝令神機のおかげで部下が色々な場所の写真撮つて見せてくれるんだよ、君には感謝してる」

つと浮竹隊長が優しく笑う。

「お役に立ててるなら良かったです」

部屋までの長い廊下でゆっくりと歩く俺ら

「今日隊長になるん十二番隊やつけ？」

「ふん、うちは認めへんぞ」 ってブスくれるひよりちゃん

「つてか維助やないんやな？ なんか浦原がどうのこうのつて聞いたからてつきり維助か
と思つたわ」

つと平子隊長が振り向いた。

「あれ？ 会つたこと無かつたでしたっけ？ ほら初めてお会いした時ぐらいに言つたじゃないですか弟がいるつて」

「つてことは…弟が隊長かいな！」

「弟くんには何度か会つてるけど、彼も凄いいよ、面白くなりそうだねえどうも」

つと笑う京楽隊長。

「あんたら兄弟どうなつとん…」

「なんでそこで呆れるんだ…?？」

もう部屋にいた夜一さんが俺を見るなり開口一番。

「遅いぞ維助！」

「おいこら、夜一さんが取ってこいって言ったんじゃん」

はい、つと渡すと書類を受け取る夜一さん。

「維助はー！どっかの八番隊のリサに鼻の下伸ばしてたら遅くなっただんやでー！」

つと反対側の平子隊長から野次が飛んでくる

「ばっ！ばっかお前！」

つてかももう名前言つてんじやん！

それにそんなこと言つたら…

「ほう…？他のおなごに鼻の下を…」

「アイタタタ！耳！耳引きちぎれる！」

引つ張られた耳をようやく離されると

平子隊長が面白そうにゲラゲラ笑っていた。

——後で覚えとけよ。

「んで喜助は？まだ来てないんですか？」

「ん？儂は朝から見とらんが」

「俺も見えてないですよ朝から…」

どっかでのんびりしてんのかあいつ…一緒に連れてくれば良かったかな。

「ありや、遅れちゃいました〜」

噂をすればなんとやら、呑気な声が聞こえた。

「遅いわ喜助！どこで道草くつてたんだよ」

喜助があはは、と言いながら頬をかいていた

「いやあくちよつとのんびりしちゃって」

「やっぱりな」

「んや、ヘラヘラした笑い方維助ににとんなあ…ほんまに兄弟だったんか」

なんて平子隊長の眩きが聞こえる、疑ってたの…??

「これより、新任の儀を執り行う。」

元の隊長が異動したことや、推薦により浦原喜助が隊長になったことが説明された
「…よつて、ここに元二番隊第三席浦原喜助を十二番隊新隊長と任ずるものとする」

解散になってバラバラと隊長副隊長が帰っていく。

暗い顔をしているひよ里ちゃんに近寄る。

「俺の弟をよろしくね」

「…認めへん」

そうブスツと口を尖らせているひよ里ちゃん

「うーん…頼りないところあるかもだけど大丈夫、そのうち打ち解けるよ」
「そんなん決めるのはウチや」

そう言つてスタスタと帰つて行つた。

さて、俺は残りの喜助の荷物を整理するかね…。

「そうそう、その配線はこの防水の袋被せて縛つてほしい。」
「はい。」

隊舎に戻り院が休みの阿近にも手伝わせて喜助の部屋を整理する。

ある程度持つてつたとはいえ、でかい器具は持つていけないので、そのうち運ぶための準備を2人でしてる。

「喜助も…独り立ちかあ…」

「なんですか、急に」

つとジト目で俺の顔を見る阿近。

「いや、喜助が産まれた時から見ててずっと一緒だったからさ、あつという間に成人して…院も卒業して、色々あつたなあ…ずっと二番隊で一緒に成長して…寂しくなるなあ」

「死ぬわけじゃないんだから会いに行けばいいでしょうに」

「そうだなあ…阿近も…あ、そうだ、」

阿近に聞きたいことがあつたんだつた。

「なあ阿近」

「なんですか？」

荷物を置いた阿近が俺と向き合う。

「喜助から聞いたんだけど、喜助は技術開発局っていう新しい機関を作るんだ、漚靈廷のために新たなものを生み出す機関さ。」

曳舟隊長から義魂ぎこんの概念っていう論文を貰つてさ、それから色々研究して仮の肉体に魂を宿す道具を作るって喜助が息巻いてて。

まあそれはいいとして、俺の作った伝令神機の緊急報告の受け取り側になる情報機関プラス他にもいろいろな研究とかする機関を作るんだよ。」

「…それで俺がそこに？」

「話が早くて助かる。そう、お前はまだ死神じゃないけど、俺と喜助の権力で死神見習いとして雇えるようになった、特別だけどな？お前は俺の技術と喜助の技術どっちも近くで見てきて受け継いでる。喜助も技術者が一人でもいれば頼りになるだろうよ、どう？」

「………行きます」

「分かった、お前は俺の子供みたいなものだ、もし何か困った事があつたらなんでも言つてくれ。お前の力になる」

寢床は俺の場所だが、通いとして喜助の隊に見習いとして働く事になった阿近。

断界の研究とか虚の研究とかしたいって言つてたし、俺はそう言うのは向いてないから、阿近にとって技術開発局つてのはいいい経験になる事だろう。

「見ず知らずの俺を助けて拾つてくれて育ててくれて…死神にしたら少しの時間かもしれないけど…俺は感謝してる。絶対に維助さんの霊圧上昇の原因を突き止めて…絶対に最高の霊圧制御装置をつくる。」

つと意気込む阿近。やる気があつて実によろしい！

その日の夜、何故か喜助が部屋に来た

「おいこら、もうお前は12番隊だろ？そう他の隊にひよいひよい入っちゃダメだろ…」そんな呆れた俺の声を無視して歩き出した喜助。着いてこいと言ふことだろう。

阿近は寝てるけど一応聞かれたら困る話なのかと、おれは無言で歩き出す喜助について行く。

やつてきたのは勉強部屋。

光を放つ特殊な生物が天井にいるので外とは違い明るい

「兄サン。維助兄サンはこの先どうするんですか」

「この先つて？そりや喜助の局を手伝うよ、浦原神機の社長としてな、仕様書を貰つて作るエンジニアみたいな……」

「分かつてるでしょ？そういう話じゃない事を、兄サンは院生の頃から夜一サンを抜かさないうように卍解を隠し実力も抑えて、定期的にやらかして問題児のフリして……。そして彼女の気持ちにも気づかないフリをしてる。」

「……」

振り向いた喜助は真剣な目をしていた。

「人の色恋にどうこう口出すのは不躰ですけど、兄サン。碎蜂サンと夜一サン。そろそろ真剣に向き合う時じゃないんすか？」

「俺は結婚する気はない、それは直接本人らにも言ったこともある。甘味処行つた時とかにな。碎蜂とはそもそも席官になるまでの見合い話の延長線だし、その時に結婚はしないとも言つた。夜一さんと俺は当主同士だから、籍を入れるのにも色々問題あつて難しいものだし。」

「いいんすか。」

「ああ、俺は人を幸せにするのに向いていないから、夜一さんの部下で碎蜂の上司。」

もう悪い事にも足を踏み入れた。

惣右介がなにか未来でしかすって知ってたのに手を貸した。

——けれど彼女らは巻き込みたくない。

わがままで機械ばっかで友人も愛しい人も選べない俺には幸せにするとかそういう人は向いてない。

「そうツスカ、兄サンがそこまで言うなら。卍解はいつまで隠し続けるんすか？夜一さんを抜かさないとって言ってましたけどもう彼女は当主だ」

「なんだよ今日は質問攻めだな？」

「京楽隊長や平子隊長は気づいてますよきつと夜一サンもね」

「ああ、知ってて何も言わないでくれる夜一さんには感謝してるよ」

隊長になるために必要なうちの1つの条件それは

卍解ができる事

夜一さんは俺か喜助を推挙しようとした。

俺は夜一さんに卍解ができる事を話してない。

なのに俺を推挙しようとして候補に入れていた。

知ってたんだなあ…いつからだろうか、流石に能力までは知らないだろうが、

「でも俺はこれからも多分命の危険がない限り始解もしないし卍解もしないと思う…多

分な？ 剣術と白打を極めし死神——かつこいいだろ？」
「ふっ…兄サンらしいツスね」

俺は好きな事をしてロマンで生きる。

いいところ取りのずるい俺

魂魄に何かを埋め込まれた話

いきなり呼ばれたと思ったたら隊首室の大改造するから手伝えとの事で喜助に朝から呼ばれて配線や喜助の荷物を運び込んだ。

「いやあ、助かりましたあ〜」

つと嬉しそうに笑う喜助。

余程正式に研究ができることが嬉しいんだろうな…

俺は浦原神機として技術開発局の依頼を受けて機械を作る役を担になううことになった。

それはいいんだけど――

「ええ？ウジ虫の家いえ維助のウジ虫の巢の呼び方の連中を隊士として受け入れる…?？」

「ええ、前々からもつたいたいなあ〜って思ってたんす」

喜助が抜けた今、俺が3部隊長代理となっているので喜助が担当者である俺に頼み込んできたのだ。

「何考えてるんだか…思想行動が危険視された連中だぞ？」

「大丈夫ツス、ボクが全て責任を取ります」

「……わかった、除隊から復帰の手続きはしておく」

死神として復帰した中には――

「化粧お化けも？」

「相変わらず失礼な奴だヨ、浦原維助」

その中には化粧お化けこと涅マユリもいて――

配布された伝令神機を見て製作者を聞くなり顔に青筋を立て

「こんなもの使わないヨ」

って壁にぶん投げたはいいものの跳ね返って鼻血を出していた。

なるほど……伝令神機を武器として使う手も――。

ちなみに伝令神機は擦り傷は出来たものの割れてもないし壊れてもない。

そうして形になって行った技術開発局。

前々から欲しかった問合せ所なんかも作ってくれて、現世の死神が困ったら伝令神機

に問い合わせを送ることで技術開発局に連絡が行くようになった。

特殊な虚の研究、曳舟元隊長からの論文を元にした義魂丸の開発、新たな物質の発見

など様々な研究をしている。

毎日帰ってくる阿近が楽しそうに研究の話をしてくれた。

阿近ももうすぐ卒業、卒業したら入隊は12番隊になるだろう、そうしたら俺の部屋

ともおさらば……ああ、弟離れと子離れ……また寂しくなるなあ……

そしてもう一つ変わった事が

「おめでとうー！一心!! 大出世じゃねーか!」

「いやあはは、師範のおかげですよ」

あの二番弟子の一心が10番隊副隊長に昇進した、まだ隊長ではないけど代理として10番隊を仕切ることになった一心。

始解の能力でゴリ推してた頃とは違いちゃんと筋肉も着いて喜助から学んだ鬼道や俺から学んだデコピンと剣術で——実力で副隊長にまで這い上がった。良くぞここまで…!!

そんな感動してる中女の子の声が聞こえた。

「ちよつと志波副隊長! こんな所にいた!」

「おお、乱菊」

トタトタと走ってきた子供…? いや死覇装来てるから死神だな

子供なのに胸がデカイな! 将来が楽しみだ…なんて変なこと考えてると俺と目が合う

「この人は…? あつ、副官章! す、すみません」

つと俺の腕の副官章をみて頭を下げる

「この人は俺の師範で浦原維助。伝令神機を作った人だ」

「えっ、これをですか？」　　つと懐から取り出す伝令神機。

「浦原維助、二番隊副隊長だ。もし伝令神機で改善して欲しい点とかあったら検討するから教えてくれな。」

「いやいや、すごく便利ですよこれ！写真撮れるし…隊に設置された印刷機…？つての
で写真を印刷して書類に貼れて…！全然満足してます!!」

　　つとキラキラした目で見つめる

「乱菊は今年に入った新人なんですよ、たまにサボるけどやる時はやるやつです」

「ちよつと副隊長！副隊長のほうがサボってるでしょう？」

「ええ、俺はちゃんとやってるだろ?」

　　仲良い事で何より何より。

同じくギンも5番隊の席官として入隊したらしいし、色々変わり時って感じだなあ…

　　そういうえば——　　喜助と夜一さんはどうして原作で現世にいたんだろうか——。

現世配属…？いや…ないな、なんでだ…？

　　そういえばなんか碎蜂と夜一さんが戦ってたような…

　　ああ…もつと漫画ちゃんと読んで読んどけばなあ…。

　　そもそもゲームでは確か…涅が羽織を着てたような…。

　　いや、気のせい…？エプロンと見間違えた？

うーん……こんななるならちゃんともメモでも取っておくんだつたな。

そんな喜助が隊長になって早2年。

早いものだ、阿近も飛び級して死神になり正式に12番隊隊士になり

ひよ里ちゃんもなんだかんだ12番隊として喜助の元で働いていて――。

ある日また喜助が相談に来た。

「は？魂魄に異物質を埋め込む実験？その被検体になれって？」

「はいっす、やっぱ実験しないと」

「おい、だからって俺を被検体にしていいと思ってるのか。なにを埋め込むんだよ？」

「……それは内緒ッス！大丈夫ッスよ！多分死なないんで」

「多分!?死ぬ可能性あるって事かよ……!虚で試せよ」

「いやあ、もう試したんすけど、死神にも試してみようかと」

「自分でやれよ自分で」

「嫌ッス！怖いじゃないッスかく死んだらどーすんすか」

無理無理つと扇子を扇ぐ喜助

「てめえ、俺はいいってことか!?埋め込むものを言わねえとヤダね」

「……あらゆる想定の前にある未来に使う道具ッス！」

「…はあ？」

喜助が良くわかんないことを言うのはいつもの事だけど、今日は更によくわからない。

「つまり、ちよつとやばいものを作っちゃいまして、そのヤバい物のあらゆる想定をした中で必要になる道具を埋め込ませて頂きたいなーって」

「……………はあ、いつもやばいもの作ってる喜助が、自分からやばいものって言うなんて…相当だな。まあ分かった、いいぞ」

って言った瞬間に心臓に痛みが走った。

——俺の身体の中には穴が空いていて、喜助が手を突っ込んでいた。

「成功ツスねー」なんて、言って手を抜く喜助

「いきなりやるか?!?!普通!!」

「いやあ、だつて心の準備してもやること一緒なんスから早い方がいいかなーって」

「野郎…っ」

マジで喜助…兄ちゃんの扱い酷すぎないか…?

「ちよつとまで、これ取れるのか？」

「え？取れないっスよ？」

「はあ!!」

取れないって…何か変なのが俺の中に残ったまま!?

「いやあ!言つたじゃないツスカ!埋め込む実験だつて!埋め込んで摘出する実験だなんて言つてないじゃないですか」

「てめえ…!最初からそのつもりだったな!?!」

痛みはもう何も無いし、何も感じない…本当に埋め込まれたのかつて感じただけ…。

「そう、あらゆる想定の先に使う事になる…そうならないといいんすけどねえ」
何を埋め込んだかは喜助のみぞ知る

子供は可愛い話と俺の変化の話

俺の手首には複数のプレスレットや紐、縄みたいだったたり手錠のようなものだったり
が取り付けられていた。

「これもダメか……」

ため息を吐きながら肩を落とす阿近。

阿近は見習い時代からずっと俺の霊圧上昇の解明と並行して霊圧制御装置も作って
くれている。

もう試作品は何個目かも分からない。

俺の霊圧に耐えれずびび割れていく霊圧制御装置、見た目に凝り始めたな……？なんか
オシャレになってるし

パソコンに研究結果を記載する阿近は何度かのため息を吐いた

「霊力を吸収する石を使ったのに……吸収するキャパがオーバーして限界を迎えた……うー
ん。」

俺は元の霊圧制御装置を付け直す。

この2年の間にも霊圧は上昇し続けている。

そろそろ俺の魂魄に影響が出てきてもおかしくないほどに――。

まあまだ元気なんですけどね、ただ制御出来ないとなると他の奴には迷惑かかる。

「昔からそうなんですか？ 霊圧の上昇」

つとカタカタとキーボードの音が響く。

「うーん。昔からだよ」

正確には卍解を習得してからだけ。

始解は確かに俺の霊力を使うけど…始解や卍解で霊圧が上昇し続けてしまうなんてあるのだろうか。

卍解は溜め込むみたいな能力じゃないし…なんだろうなあ

「また違う物質試してみます。ありがとうございました」

「阿近は阿近で研究したいことあるんじゃないのか？ ほら、断界とか研究してみたいとか言ってたじゃん」

「たしかに色々研究したい事はありますが、死神には途方もない長い時間があります。

それに…恩返ししたい」

「別にそんな重く考えなくてもいいのに」

つというと首を横に振る阿近

「維助さんにとつては当たり前のことだったかもしれないし、たまたまだったかもしれない。けれど、俺はあそこで死を覚悟した。生きるのを諦めてしまった…維助さんは見ず知らずの俺を助けて拾って色々教えてくれて、近くで歴史が作られる瞬間も見た。俺はそんなすごい人に拾われた事に感謝してるし、一生かけても返せないほど恩を貰った…」

パソコンをシャットダウンした阿近と目が合う

「少しでも、少しでもあんたの役に立ちたい。少しでも、少しでも…俺に出来ることで恩を返していきたい」

「…そっかあ」

そこまで強い意思があるならこれ以上謙遜するのは阿近の覚悟に失礼だな。

阿近の頭をそつと撫でる、阿近も少し大きくなつたなあ

「息抜きも大切だぞ阿近。」

あつという間に夜遅くなつてのんびりと二番隊まで歩く。

瞬歩ならすぐだろうけど、こうやってのんびり歩くつてのもいいもんだ、月も綺麗だし久しぶりに酒持つてきて一人で酒盛りでもしようかな…

ふと、視線を感じて振り向く

木の影、塀、屋根、地面、空

何もいない。

気のせいかな……？

突き抜けるような視線を一瞬感じた気がするけど、まあ澁霊廷で俺は有名人だし見られてもおかしくないか……。

「あれ？惣右介？」

「……」正面から来てた惣右介。違うことを考えたせいかな惣右介がいることに気づかなかった。

惣右介は黙って俺を見る……というより俺の後ろを見ている。

振り向いて確かめるが何もいない

「どうしたんだよ惣右介」

「……………いやなんでもないさ。それよりこんな遅くに何をしてたんだい？」

「いや、こつちのセリフな？俺は12番隊に行つてたの」

「夜はあまり出歩かぬよう指令がでてたはずだけど？」

「……………えっそうなの？」

なにそれ初耳なんだけど

「はあ……………」

つとこめかみを押えた惣右介

「2番隊の隊長はろくに指令を伝えられないんだね」

　　っと呆れてる様子。

「まあ、夜一さんの事だから忘れてたんだろうな。教えてくれてありがとうな。つてかそれなら惣右介もじゃない？」

「僕は少し用があつてね」

「へえ」

　　自分が何してたかは言わないのね、まあ深堀はしないけども。

「つてかなんでそんな指令が出てるんだ？」

「知らないのかい……？ここ最近隊士が不審な死を遂げてるからだよ」

「不審死……？」

「不審な事件と言つてもいい。最初は1年前、夜道を歩いていた隊士が何者かに殺害されたのが始まり」

　　2件目3件目はそれぞれの隊舎、しかも自室で。4件目は現世滞在中の死神が——現在25件目。

　　死因や場所、階級、院生時代のも遡つても全てに当てはまる有力なものは無かつた——ただし。被害者の首元には必ずバツ印が刃物のようなもので刻まれているようだ。

　　ここ1年でこれだけの事件が起きている瀨霊廷は本格的に調査に乗り出したよ。本

「当に知らなかったのかい？」

「あー……………なんかチラツと碎蜂から聞いたような……………」

「君警邏隊の部隊長だろう……………?？」

「いま警邏隊は部下に任せてるもん」

あははーつと頭をかくと調子が狂うと言つて眼鏡を上げた惣右介。

「夜道には気をつけるんだね」

「ああ、そうだな」

鎧を付けた数人の男が蠟燭ろうそくに火を灯す

蠟燭の光が揺らめく部屋で一枚の紙が燃えていく

その紙には箇条書きのように文字の羅列が並んでいた

【調査記録・指令書】

浦原維助

上級貴族の浦原家の長男で現当主

始解・解号・能力、共に不明。

一回生の現世の魂葬実技により中級大虚アジュールカスと対峙し重症を負いながらも討伐に成功した。

剣術の天才とうたわれるようになる、抜刀術を得意としている
その後真央霊術院を2年で卒業

二番隊副隊長に就任後浦原神機うらはらしんきを設立、伝令神機を開発し多大なる功績を上げる。

他にも——××××××××

《中略》 ××××××××

×——等の開発に成功。

戦闘時は膨大な霊圧を圧縮して全身を硬化させており、70番代の鬼道を素手で防ぐのを確認。正面戦闘の勝率は100%。毒物にも耐性があると見られる。

——以上のことから

計・画・に・お・い・て・非・常・に・邪・魔・な・存・在・と・判・断・す・る

【指令】

—— 浦原維助の

抹殺を命じる

事件の話

惣右介が言っていた25件の謎の事件。

遺体の首に刃物でつけたようなバツ印が刻まれているのが特徴。

そしてついに――

「……夜一さん」

「僕の責任じゃ」

頭を片手で抱え込む夜一さん。

26件目。ついに二番隊の隊士が犠牲になった。

夜一さんの一部隊刑軍の1人

刑軍は夜一さんの護衛兼虚や危険な任務などが多いため弱い奴は配属させていない。
俺が選**び**俺が実力を認めた隠密達**が**ほとんどだ。

「……」

刑軍の奴がやられるって相当強いのでは……？そもそも1人か？複数の可能性もある。

でも、1人も目撃者がいないというのも……

とりあえず喜助の所の12番隊が事件の証拠や犯人の調査をしていると言うので向かうことに。

「碎蜂、夜一さんを任せた」

「はっ」

一度に2人以上死んでいない、目撃者もいないということは、1人になった時に襲われたのだろう、2人以上傍にいれば多分大丈夫。

瀧霊廷内は見回りや監視が強化されている、夜も朝も、その中で誰にもみられず……？

「たのもうー!!」

「ゴルア!扉壊れるやろ!普通に開けられんのかボケ!」

12番隊の研究所の扉を開くと第一声にひよ里ちゃんの怒号。

「喜助エ!!ボンクラ兄貴来たど!ゴルア!」つと、仮眠室♡と書かれた扉に向かって叫ぶつとしばらくして扉が開いた

「クマやば!」

ボサボサの髪に髭が伸びた喜助。

何より目の下のクマがやばい真っ黒なだけけど？

「そんな叫ばないでくださいよ。…頭に響く……いらつしやいませ兄サン」

欠伸をひとつ漏らした喜助がキャスター付きの椅子に座った

「阿近さーん、二番隊の調査結果の資料持ってきてください〜」

つと、奥に叫ぶと阿近がトタトタと資料を抱えて来た。

俺はそれを受け取る

事件の詳細、死亡推定、また死因や戦闘痕の調査や毛髪など事細かに調べてあるらしい。

「昨日の夜、死因は失血死。背中からの一太刀から胸を一突き……ね、慣れてんな。」

まるで隠密のやり方だ。

「25件目は戦闘痕があつたんすけど、今回は完全に背後を取られての暗殺。隠密がそうそう背後を取られることはない……というのに、相手は少なくとも副隊長以上の実力でしようね」

「……死神だと思おうか？」

「そうツスねえ……院は出てるでしようね。鬼道を使用した痕跡がありましたし。斬魄刀の使用形跡もある」

鬼道は知識と技術がいる、死神でもない、鬼道衆や隠密でもないやつが使える技じゃ

ない。そりやそうか

「……………」

結局犯人と直接繋がる情報は……なし

「ありがとう。」

書類を阿近に返し俺は踵を返す。

喜助はずっと調べてまとめてたらしい、椅子の上で寝こけてた。

「さて、帰るか……」

夜一さんが傷心中だし、何か買ってすぐ帰るか……

甘味処は事件があったからか客は居なくてガラガラだった

三色団子とみたらし団子を包んでもらって帰ろうと歩く。

一日が早く感じるなあ……もう夕方か俺も、もうジジイの気分だよ

人間で言うとなんか人生3回ぐらいは生きてるしな。

いつも賑わっているのに事件があるからか静かだ——

早く事件解決するといいいけど。

なんて思っているとガツン——と、重い鉄が擦れるような音が聞こえて振り向く。

その瞬間——

振り向いた瞬間に見慣れた銀色の切っ先が——
「あつ……ぶな」

音を斬り裂くように目の前に振り下ろされ咄嗟に身を後ろに引いて間一髪避ける
俺がこんな近くまで来て気づかなかつた……？殺気すらも？

そこには死覇装のうえに甲冑かっちゅうを着た恐らく男が。
兜かぶとをかぶり鬼面をつけている

「いきなり斬りかかってくるなんて、マナーがなってないなあ。俺は二番隊副隊長浦原
維助、そっちは？」

つとというと、刀を構え直す兜男

「お前を殺しに来た」

そう面のせいか籠った声が聞こえた。名乗らないかそりや
なんて思つてると——また目の前に切先が。

「つは……！」

顔に触れるか触れないかの瞬間に草履の裏でそれを止め、弾き飛ばし距離をとる。

早い——？いや、俺が目^めに追えないわけない。

刀の振りは見えてた……いつ俺の目の前に来た……？

地面から足が離れる瞬間見えたか？

——いや、気づいたら目の前にいた

「そうか……そうか、事件の犯人はお前か、そしてその斬魄刀の能力厄介だな」

——時を止める能力——

生物に触れる瞬間に無効になるんだろう。

それか時を止めると攻撃できないから解除したか——。

どちらにしろ移動は時間を止めているらしく見えない。

「クソ厄介だなそりゃー！」

0. 1秒にも満たない時間で刀を捌くか避けなさいといけない。

霊圧硬化してるとはいえ、隊長格の実力だった場合霊圧制御してる今は突き抜けて来る可能性がある。また七々扇家みたいな毒だったら死なないにしろ動きが鈍くなる。

だから避けるか捌くかしないといけないんだけど——！

「きつつついな」

バク転して距離を取るが俺が刀を抜く前にまた詰め寄られてしまう。

抜刀の構えすらさせてくれないらしい。

ただ、ここは瀟霊廷、時間をかければ音と霊圧の衝突に反応したやつが来るだろう。

ここは時間を稼いで——っと思ってるど気づく。

俺の買った団子の包が宙に浮いていた。

「教えてやろう、ここは時間の止まった空間。止まった空間の中に何が起きようと周り
は気づかない。生物の時間は止めれないが俺の卍解の力だ」

ボロボロになった草履を脱いで裸足になる

「卍解ねえ……。めんどくさい事で、でもその感じだと長く持たないんだろう？ そんな
強い卍解靈力が持つはずない。それに色々制限があるんだろ？」

「ふっ、その通り……！」

また消えた——っと思つたが目の前に出現しない……

「後ろか！」

「遅い!!」

左後方から斬りかかってくる——右なら刀で防げるから、こいつ対死神戦にでも慣れ
てるな？

咄嗟に腕で受け止めるがそいつが狙つたのは腕ではなく……

「ぐっ……」

俺付けてた制御装置が半分は斬られ地面に落ちる

まずい、いきなり制御装置を取られると——

「最初っから狙ってやがったな……っ！」

片手とはいえ溢れ出る霊圧。お風呂のお湯は溢れないように制御できるが、海は？津波は？制御できるものではない——

荒れ狂う海を抑えてた防波堤制御装置がぶち壊されたんだ、抑えようとしても溢れ出てくるっ

……！

「その硬い霊圧硬化も霊圧を制御できてたから成せた技だ！これなら……っ」

「ガッ……ッ……」

咄嗟に身体を捻らせ急所から外すが刀が脇腹を貫通した——

「はっ！やっぱりな」

つと笑い声が聞こえる

「はは……お前焦りすぎだ、そんなに時間ないか……う？ふっ……よく言うだろ？」

「なっ……うごかない」

俺はそいつの刀を握りしめ動かせないようにする

「肉を切らせて骨を断つ——つてな。わざと斬らせたのさ、ばーか！さあその面見せろや」

思いっきり身体を反って勢いをつけ、そして——

——溢れ出た霊圧の全てを収束させ頭突きをくらわせた

「ガッ！」

バキツつと音がして鬼の面にヒビが入りポロツと地面に落ちる

目を見開いた男と目が合う、だが男が短刀を懐から取りだし俺の目を狙う

——「破道の八十八 飛竜撃賊震天雷炮」
ひりゅうげきぞくしんてんらいほう

背後から聞こえたその声に咄嗟に刀を離し飛び退く

「ばっ！ばっ！ばっかお前!!俺まで巻き添えになる所だったろ！」

惣右介!!!」

「チツ……」

舌打ちした男は刀振る——次の瞬間にはその場から消えていた

ドシヤツつと浮いていた団子が地面に落ち、能力が消えたことを証明する。

ため息を吐いて惣右介の方を振り向く

「助かったよ惣右介。ってか、惣右介入れたのか?」

「変な空間の事ならついさつき入れるようになったよ」

「なるほど」

ついさつき……俺があいつの刀に触れた時かな……?」

「あー久しぶりに痛かった」

脇腹をすりすりと撫でる。

「その霊圧早く収めない」と――」

人が来るよ……惣右介が言った瞬間には

「兄サン！兄サン！霊圧！霊圧を抑えて！ボクの所の隊士倒れてるんで！」っと、声を上げながら喜助が走ってきた。起きたのか……

「いや、これでも壊された時よりは抑えてるんだけど……」

「ってなんで制御装置が壊れて……それにその傷！」っと俺の足元に伝う血を見て慌てる喜助

「大丈夫、傷はなんか治った。浅かったし」

「ええ……っ？あ、本当にふさがってる……一体何が……？」

だからって傷口触るか普通。

すぐに阿近が持ってきた制御装置を付ける。

少しひび割れるが壊れはしなかった。まあ長くは持たないだろうな。

霊圧が溢れ出たせいでもう片方の無事だった方もひび割れてるし……

事件現場を調査する12番隊を横目に簡単に説明する。

恐らく事件の犯人と接触したこと等。

「はあ……とりあえず俺重症って言つて……」

「ダメだよ、総隊長がお呼びだ」

「はあ……」

俺と惣右介は隊首会に呼ばれてしまった。

でもあの男——どこかで見たな、原作じゃない……

だれだ……？いつ見た——？

男の娘と霊圧制御の話

隊首会に呼ばれた俺と惣右介

主に俺が当初の状況を説明する。

「浦原維助、貴様を狙ったということか？」

つとある程度状況説明をした後に聞き返された。

「はい、お前を殺しに来た」と、理由は分かりません。たまたま一人でいたからって可能性もありますので」

「それで、その男の顔を見たのだな」

「ええ……焦げた茶色の髪に黒い瞳」あー、左頬と左目付近に火傷のような痕が」

「ほんまか……？」

つと声を出したのは平子隊長だった。

並んでた平子隊長はそのままつかつかと歩くと俺の胸ぐらをつかみあげる

「平子隊長！」

猫かぶりモードの惣右介が平子隊長を止めようとするがそれを振り払う

「ほんまに言うてんねんか？斬魄刀の能力は？」

「……恐らく……時を止める能力」

「っ……」

平子隊長は顔を歪めるとパツと、胸ぐらを掴んでた手を離す

俺は卍解の能力で時の止まった空間内で戦闘にあつた事を話し、生物には無効と己が話していたとか分かつていること全てを話した。

「一定時間を止める空間……なるほど、それは目撃者が居ないはずだ、25件目は戦闘痕もあつたのに誰も来ないなんておかしいなあーって思つたんすよ」

つと納得した様子の喜助

「……帯志土さん……生きてたんやな」

つと言つて、俯く平子隊長

帯志土おしどつて誰だ……？つと首を傾げると惣右介が耳打ちしてきた

「平子隊長が副隊長時代、君と僕が出会つた頃の隊長さんさ、帯志土隊長。ある日突然断界内で姿を消したんだ、拘突くうとつに飲み込まれたつて言われてる」

拘突に飲み込まれた……つまりそれは死を意味している。

今は十二番隊が誰がどこを通つたかいつ通つたかの通過記録を取っているが当時は無い。予測でしかないが死んでいたはずの元隊長が……なるほど、だから見た事あつた

のか。

「でもなんでや帯志土おしどさん……生きとつたんならなんで会いに来てくれへんかったん……」

「浦原維助、藍染惣右介、ご苦労じゃった下がってよい」

つと総隊長が杖を鳴らす。

俺らは頭を下げ隊首室を後にした。

「顔を見た時からもしかして——とは思ってたんだけどね、霊圧が変わっているのが不可解だけ」

「霊圧が変わってた……？へえ……そんな事あるんだ」

「能力でもない限り普通はないだろうね」

平子隊長のあの感じだと相当親したしい間柄にみえる。

……目的はなんだろうか、1人でいるのを狙ってたと思っただけと思えば俺の霊圧制御装置を狙ってたようにも見える。わざと腕を切り落とさず腕輪を切り落とした。

制御装置だと見抜いたって可能性もあるけど——。

霊圧硬化も知ってたし、俺の戦い方なんかも知ってるように思えた。

辻斬りみたいに適当な相手ではなく俺を標的としていた……？

俺は見たことあるけど帯志土って人と話したこともないだろうし、俺のことは知らな

いはずだ、当時九席の雑魚だったし隊長格がいちいち席官全て覚えてるとは思えない。「あーわかんねえ、なんかややこしいなあ……まあ確かにあの強さと能力で隊長格なのは領けるけど……」

けれど霊圧硬化は抜け出てなかったなあ……霊圧は俺の方が圧倒的に上ってことだ。けれど能力は相当厄介。時を停めている間に動くんだ、目で追うとかそういうのが通じるものではない。

「時間系のメカ作りたいたいけど、バレたらウジ虫行きだしなあ……」

それに制御装置がひび割れてる今……戦闘になつたら確実に壊れる。

阿近の実験でも外す時は大量の霊力を吸い取る石で囲って行つてたし。

少しずつ制御できる霊圧は増えたはずなんだけどそれでも抑えきれなかった……。

本格的に制御装置作らないとダメだな、次狙われたら大変な事になる。

惣右介と別れた俺は自室に籠る。

作っては見たけどやっぱりごついし見た目以上に重い。小さくはなってるけどこれで15キロ以上ある、両腕だから倍か。

殴る時は強いんだけどな、ただデカすぎてたまに戦闘に支障をきたすし普通に邪魔。

「帯志土……か」

俺は0・1秒にも満たない時間で刀を捌いてたが……速さになれてない普通の隊士なら無理だろうな、隊長格なものも領ける

霊力消費的に短期決戦がいい所だけど、それで済むぐらいには強い。

普通は、「気づいたら斬られて死んでました」みたいな感じだろうな……でも不可解なのが25件目で戦闘があつた事。

それほど25件目の被害者が強いのかと思つたらそうでも無い。

度々戦闘になつてるぽいし……。

俺は死覇装のまま疲れて布団の上に寝る、しばらく眠気が襲つて来たが俺は何か嫌な予感がして目覚める

目を開けた瞬間——目の前の刀が振り下ろされた

反射的に頭をずらすと耳を掠り枕に穴が空く

「また会つたな鬼面野郎」

身体を弾くように起き上がらせ橋姫を探すがない。

男の手元には俺の橋姫が……くっそ、取られた！

おそらく時間を止めて入ってきたのだろう。益々厄介な能力だ

音を切り裂くように刀を振るう、おいおい俺の部屋が……

物を壊されちゃたまらないので俺は足裏に霊圧を収束させ勢いで男に蹴りを食らわ

せ外に吹き飛ばす。

それと一緒に外に出るが男の姿は見えない。

「もうその手は食らったわ!」

また背後に出現し刀を振るうがその刀を霊圧硬化した手で掴む

「あんだ帯志土おしとつてやつだろう?元五番隊の」

「……帯志土……帯志土……」

男が呟くように繰り返す名前。

なんだ違うのか……?っと思つてると

「俺は……おれは……誰だ?」

「は?」

俺は誰だつて……それはまるで記憶が――。

そう考えてると空からブンブンと円を書きながら飛んで来る刀が見えた。

咄嗟にそれが紅姫だと理解すると男の刀を押しつけそれを掴む。

「ありがとうな喜助!」

男の卍解の空間はやっぱり刀に触れていると入れるようになるらしい。喜助が駆けつけて状況を理解すると俺に己の刀を渡してきたのだ

「援護はします」

つと鬼道の構えをとる喜助。

男は先程の動揺はなかったかのようにまた消え目の前に現れる

「その0.1秒も慣れたもんさ」

生物にも無効なら触れてしまえば恐らく時間を停めれない。

俺は斬りかかって来たそういつの腕を掴み相手の勢いと力を利用して合気道のように捻りあげ、腕から斬魄刀が落ちる。

地に伏せた帯志土の上に乗っかり紅姫を首筋に当てる

「……殺せよ」

「それは出来ない、お前には色々聞きたいことがあるからな」

橋姫を奪え返すが、男は何も言わない。

「……………」

「帯志土さん!!」

つと平子隊長の声が聞こえた、髪は乱れていて息も上がっていた。俺が刀に触れた時に空間から漏れ出た霊圧に気づいて来たんだろう喜助みたいに。

俺は男の面を弾いて飛ばすと、平子隊長が目を見開いた

「やつぱ帯志土さんやな……………なんで……………なんでや。なんでこないなこと……………それに霊圧も……………」

「帯志土……おれは——帯志土……？」

「は……帯志土さん……まさか……そんな冗談つまらへんで……？」

つと乾いた笑いをこぼす。

「何失敗してんの」

つと、ハスキーボイスが聞こえ視線を向けると、月を背景に塀の上に座ってる若い女……いや男？中性的な顔立ちだ。

「……使えない」

一瞬——声が聞こえた瞬間に移動するのが見えたが、避けるよりも先に俺の頬に拳がめり込んだ

「ぐっ……！」

咄嗟に避けるが頬がピツと切れて血が流れ落ちる

こいつ俺の霊圧硬化を抜けた……！

「はっ、可愛い顔して強いんだな」

「硬いなあ……もう」つと手を痛いと言いながら降る

「あんた名前は？誰だよ」

「僕はうーん、ミト！ミトでいいよ！納豆が好物だからね。ミトにしよう」

バリバリ偽名かよ。

「まあ、ボクはこのボンクラを回収しに来ただけ」

つと小さい身体でデカイ帯志土を持ち上げる

「逃がす思つとんのか」

「なに、関係ないでしょこれは僕が拾って僕が改造したの、僕の玩具をどこに持っていこうと僕の勝手でしょ」

「改造……？」

「そ！僕は死体を改造できるの！凄いや？すごいでしょ？」

つとまるで子供が親に褒めてもらうかのように意気揚々と自慢する。

死体を改造——やっぱり、拘突で吞まれてつて話は本当かもしれないな。本来は死んでるはずのやつつてことが？

死体を改造……その言葉を聞いて目を見開く平子隊長が見えた

「んや……それ気色悪いで」

「肉を人形のように動かすだけなんだけどね？本来は……でも突然変異か知らないけど

意思があるんだよね!!へへ、可愛がってるの。良いでしょ?

他にも突然変異個体はいるんだよ!

でも脳内の記憶が戻ろうとすると大変なんだよねー

あと100年は整備に時間費やさなきゃ……じゃあね!

100年後——生きてたら会おう」

そう言って逃げようとするミト

「逃がすと思ってるのか!」

俺はすぐに橋姫を抜刀しようと構えようと手を添えるがその前に鰐を足で抑えられ抜けなくなる。

夜一さん並に早い……!」

「ダメだよ、君は厄介。計画の邪魔になるし殺して僕の人形にしようとしたけど、無理みたいだ。今日はこれで勘弁」

また帯志土を抱えた逆の腕で拳を振り上げるのが見え避けるが

パキツつとヒビが広がる制御装置。

拳は触れてない……風圧で制御装置が限界に達した——?

ヒビは徐々に広がり音を立てて崩れる

「あは、やっぱりすごい霊圧……じゃボクはこれで」

「まてや!!帯志土さんを返し!!」っと平子隊長の怒号が響くも

その場からミトと帯志土は忽然と姿を消した。

「兄サン!!抑えて!抑えてください……!平子隊長、すみませんあとは任せました!」

そう言うのと喜助が俺を抱えて瞬歩で遠く離れた場所に運んだ。

確かにここなら霊圧の影響を受けるやつが居ない……。

喜助は恐らく俺の部屋に制御装置の予備を取りに行つた

「がっ……ぐ……」

抑えろ、抑えろ、抑えろ……

出てくるな……言うことを聞け……

自身の霊圧だと言うのに抑えきれずに溢れ出る。

バケツ身体から溢れないように調節制御していたのに水霊圧はMAXで噴射されバケツから水が

溢れ出る……

急激に霊圧が溢れ出ると苦しくなる。

なんとか抑えて、抑えて、極限まで押えた時

「なんでできた……阿近!」

阿近が大量の汗をながし身体は震え意識を飛ばしそうになりながら、1歩1歩足を進

め近寄ってくる

このままじゃ阿近が霊圧に押しつぶされてしまう。

俺は離れようとするが、動いたら制御がぶれる……

「俺は……あなたに救われた命……この命をあなたのために使うって決めたんだ。俺はあなたの力になるなら何でもする、なんだって……!」

阿近はそのうち倒れ、だが地面に這いながらも俺の傍に来た。

「やめろ阿近! はなれろ……潰されるぞ!」

阿近は震える手で懐から何かを取りだし俺の腕にまきつけた

「ぐっ……」

シューウウつと音を立て身体の内側の霊力が飲み込まれて行くのを感じ、暴走した霊圧が収まる

「っ……はぁ……はぁ……なにをした?」

制御装置をつけた時のように収まった霊圧。

「っ……はぁ……霊力を吸収する石は溜め込むから限界がある、けれど俺が作って完成させたこの生物は無限に霊力を食べ続ける」

「へえ……そりゃ便……利、生物?!」

生物って言ったか!?

つと聞き返すとコクンつと頷くと予備らしき同じものを取り出した。

「これは霊力を食べ続ける生物で、原理的には亜空間に霊子として分解して流し込んでるんです。こいつの口で分解し、それを飲み込み亜空間に繋げる……って聞いてます？」

「いや……気持ち悪いんだけどそれ!!」

「1つ目の怪物がギザギザの歯をカチカチと鳴らしているのが布一面に――。それが俺の腕に……?」

「――取っていい……?」

「俺を殺す気ですか」

魂魄消失事件

魂魄消失事件の始まりの話

腕の布の位置を調節することによって霊圧の制御が細かくできるようになった。幸い、変な生物の歯音はしない……してたら外してたかも。

細かくできるようになったおかげで制御ギリギリを保ち身体が慣れての繰り返しして少しずつ制御できる霊圧が増えて行った。

霊圧硬化も更に硬くなり惣右介に全力で斬ってもらったんだが薄皮が少し斬れる程度にまで硬くなる事が出来るようになった。

「腕を落としたつもりだったけど」って言われたのは少し怖かったな。

ガチの目だったぞあいつ。

そしてバカ重い両腕30キロ以上にまで増えた制御装置の重さは数gにまで軽くなったおかげで、抜刀の速さも戻ったし動きも軽くなった……

うん、阿近すごいな!!

惣右介に聞いたところ平子隊長はあれからずっと落ち込んでるらしい。相当仲良

かったんだな……

実はどこかで生きていたなんて希望を持たされて、死体を操ってましたーなんてカミングアウトされたらそりゃ落ち込むよね。

「——惣右介、何用？」

「……あの時の、恩、返してもらおう」

ある日惣右介に呼び出されたと思つたらそう言われた。
恩を返せ……？ そうだそういえば。

『それで、なんで俺に教えてくれたの？』

『………恩を売つても損は無いからね』

『そっかそっかあ！ 友達を助けたかったのか！ ありがとうな惣右介』

『聞いていたかい??』

『ありがとう！ この恩は絶対返すよ！』

七々扇家の時に恩を返すつて言ったな……そういえば

「なに？ 俺に何をして欲しいんだ」

「これから先起きるであろう1つの事件、君は手出しをしなくて欲しい、全く動かないと

いうのは無理だろうから、率先して解決しようとしなければいい」
「なにか起こすつて?」

「……」

ニツコリと笑う惣右介。

「前も言ったけど俺はお前が何しようとしてるのかは無理に聞かない。けれど、夜一さんと喜助に何かしてみろ、お前とは絶交。つまり敵になるからな」

「それは約束するよ、あの二人には何もしないさ、他の二番隊にも手をださない」

「………わかった、首は突っ込まない、これでチャラだからな」

「ああ、助かるよ」

俺はチラッと茂みに視線を移し、踵を返した

「ええんですの藍染副隊長、あの人邪魔してきそうやけど」

「……大丈夫さこつちがあの人二人に手を出さなければ邪魔はしてこない。」

「言い切るんです? 随分信用しとるんですね」

茂みに隠れてたギンが藍染に話しかける。

おそらく維助は気づいて居ただろうが

「罪をでつち上げて牢に入れといた方が安全なんぢやいます?」

「そうだね、浦原維助の動きを止める事など造作もない。けれどそれじゃ僕が後々困るんだ、彼は今回の実験に首を突っ込まないでいてくれればそれでいい。それに僕は彼がこの先どのような歴史を作るのか楽しみでね。敵に回したくはない」
「……………」

ギンは不思議でたまらない、確かに伝令神機や記憶置換装置、虚の予測出現警報等、多大なる功績を上げる伝説になるであろう死神。

剣術においても負けたという話は聞いたこともない。

最初は仲間なのかと思つたらそうでも無い、実験内容も知らないようだし、何を待っているのか何を期待してるのか、ギンにはそれが分からなかった。

「魂魄……………？なんだつて？」

「魂魄消失じゃ、服のみを残して行方不明になる隊士が増えてるとな」

つと夜一さんが現世から取り寄せたアイステイーをグルグルと回す。

「服のみ……………」

本来死んで消えたのなら服ごと霊子となるのが普通。

服だけを残してどこかに消えた……………？

「それで二番隊の俺の2部隊が警戒にあたれと、分かりました。各地配置につかせてお

きます」

各地配置につかせて書類をまとめると。

スマホが揺れて通知が来た事を知らせる。

《よろしくね》

つと猫かぶりモードの惣右介の笑顔が脳内に浮かぶ。

ああ、この消失事件……惣右介の仕業か。

これにあまり首を突っ込むなっことね……。はいはい

全く本当に何をしようとしてるんだか……

その時俺は軽く考えてた、惣右介が変なこと企んでるのはいつもの事で結界の機械を

貸せだの、死神の記憶を一定時間消して欲しいだの。

またそんな感じで何かやろうとしてるのか……って。

ただ、これが俺の人生、俺らの人生を変えるものとなるとは……

この時はまだ思っていなかった

夜一さんのヤキモチと心の内の話

あれから魂魄が消失するという話は瀧霊廷中に広まり噂となった。

原因は不明。俺も惣右介が絡んでることは分かるが何をしようとしてるのか何をやってるのかは知らん。

ただ、本当に二番隊には何もする気はないらしく被害は二番隊に全くない。

「二番隊第二部隊、警邏隊。瀧霊廷内の警邏が仕事……。何も情報は無いのかい？」

その日、情報が欲しいと京楽隊長が直々に二番隊に来た。

専用の応接室に案内して資料を机に広げる

「今のところは何も、朝夜交代できちんと見回っていますよ。これが巡回ルートです。1週間に一回変えてます。こっちが無人機のルートです。」

主に流魂街の決まったルート1時間をグルグル回ってます。定期的に充電が必要なんで戻ってきますけど1時間も空けません」

「うーん……」

首を傾げる京楽隊長。

京楽隊長が来たのは8番隊の席官が行方不明になったらしく、調査に赴いたおもむと言うわけだ。

服が置かれていたという場所を渡したピンで刺す。

「巡回ルートもつと変えた方がいいかもね。ちょうど穴をつかれている。」

澁霊廷はバカ広い。本当に、歩いて端から端まで10日かかるぐらいには

「流石に全ての死角を埋めるといふのは……。隊員も人数が限られてますし、十二番隊に監視カメラもあるのでそちらを見てもらった方が何か情報を得られるかも知れませぬよ」

「うーん、そっか、わかった喜助君の所で聞いてくるよ」

そう言って立ち上がった京楽隊長が部屋から出ていく時

「あ、そうだ」つといて振り返った

「はい、なんですか?」

「最近惣右介君とは呑みに行っていないんだね? いつも何かと絡んできるところを見てるけど、(ト)最近みないなと」

「はは、平子隊長がああの状態ですから惣右介が五番隊を支えなきゃいけないと思うんで、遠慮してるんですよ。俺も事件のせいで少し忙しくなっちゃいましたし。」

「……そつかあ、また僕とも呑もうね」

「そう片手降って踵を返した。」

多分俺の予想だけど京楽隊長がわざわざうちに来たのは俺の様子とか見に来たんじやないかな、妙に鋭いしあの人。

で、惣右介と呑まないって……

—— いや誘えるわけじゃないじゃん!!

だって……!惣右介がハゲ坊主と入れ替わってんだもん!

誰あれ!白目むいてて怖いし……。

平然と5番隊の副官章つけて歩いてるから何!?!って思ったけど。

鏡花水月で周りはアレが惣右介に見えているという事に気づいた。

いや、あの白目ハゲと呑み交わさせて?なんの拷問だよ。

ってことで最近はや可愛い女の子と飲んでる遊樂って店。現世で言うキャバクラ!!

相手はプロだし、そう言う愉快的気分になるだけで夜の関係とかは無いし安心だ。

でも……

「維助……!」 つと頬を膨らませた夜一さん

「あーあははは」

香水の匂いを付けて帰ってきた俺に拗ねたらしい。

「儂と出かける時は……髪なんぞ適当に結っておるくせに……。」

つと、俺が出かける時に髪を整えるのにもモヤツとしているようだ

「あーごめんね？ いやあ……ついついここ最近忙しかったから……息抜きに……ね？ ゴブア！ い、いたい」

鳩尾に右ストレートがめり込んだ。腕を怪我させないように硬化全くしてなかったせいで、内臓に響く痛み。

蹲ってる俺に

「維助なんぞもうしらん！」 つと腕を組んでそっぽ向かれてしまう

「機嫌直してよ、夜一さんね？ ね？ ほら、あーえつと……そう！ 今度一緒にキャバクラ行
kゴフツ！」

今度は脳天にかかと落としが入って俺は畳にめり込んだ……

「今のは擁護できません、維助様。」 つと呆れた碎蜂の声。

夜一さんはどつか行つちやつたらしい。もう部屋にはいなかった。

「あーいててて」

あれから夜一さんは表情豊かにドストレートにヤキモチを焼くようになった

あれからというの……まあ霊圧暴走時にまで遡るけど。

「維助！維助無事か？」

つと阿近に制御装置をつけられた俺が帰宅すると夜一さんが駆け寄ってきた。

あちこちぺたぺたと触り怪我を確認してくる

「だ、大丈夫だって、頬が少し切れた程度だし。ほらこれ阿近が作ってくれたんだぜ？凄
いよな。これで俺のあのバカ重い制御装置ともおさらばだし……つてなんで泣いてる
!？」

制御装置を見せて笑うとポロポロと金色の瞳から大粒の涙が溢れていく。

「え、ちよ俺より夜一さんの方が怪我してない!?ちよ、あの、泣かないで」

指で涙を拭うもどんどんと出てきて止められない。

何も言わないで泣いているので俺は慌ててどうしようかと周りを見渡すも誰もいなくなってる、おいましてさつき喜助も着いてきてたよな？あいつ帰りやがった!

「ずつと……」

つとしゃっくりを上げながら言葉を繋ぐ夜一さん。

「ずつと、一緒におるって……言ったのに……!約束したじゃろ、勝手にいなくなるでな
い……」

俺に抱きついてすりすり頭を胸板に擦り付ける。

「心配かけてごめん夜一さん。勝手に居なくなんないよ、大丈夫俺は夜一さんを守って支え続けるって言っただろ？」

優しく撫でるとまた「うう……」って言って服が濡れていくのがわかる。

「よしよし」

しばらくすると夜一さんが突然俺の背中に回って飛び乗ってきた

「うわ、何?」

「おんぶじゃー! さあ維助おぶれ!」

気分屋で唐突になにかするのはいつもの事だけど今!?

って思いながら橋姫を壁に立てかけ、夜一さんの足に腕を回す。

「高いの〜」っと俺の肩から顔をのぞかせる夜一さん。

俺はのんびりと二番隊隊舎にある林を歩く

「だいたい六十二寸一八七センチぐらいあるからね〜」

「昔は農より少し高いぐらいじゃったのに」

「それいつの話? だいぶ昔じゃん、それこそ出会った時ぐらい」

「そうじゃの……あの時は胡散臭くて態度の悪い貴族の男って感じじゃったの」

「ふは、たしかにあの時の俺だいぶ態度悪かったなあ〜」

京楽隊長にタメ口聞いたり（今もたまにやってる）今となったらヒエヒエってなるよ

うな事をしてた。

「儂が当主になるのを応援してくれた」

「うん、そうだね」

「儂を怪我させまいと白打の講義で手を抜いとった」

「はは、懐かしい」

「女子おなごに洗脳されかけとった」

「うっ…俺の黒歴史…!」

つと言うと、ははは! つと楽しそうに笑う夜一さん

プラプラと足を揺らして鼻歌を歌い出す。

すると、段々と静かになっていく

「夜一さん?」

俺は立ち止まって名を呼ぶと、肩の布をギユツと握られる

「儂のことは大切か?」

「え? そりやもちろん大切だよ」

「1番か…?」

「喜助と夜一さんどっちも1番だよ」

つと言うとふつと零すように笑う

「儂も維助が1番大切で、大切で…大好きじゃ」

足を風がなぞる。

夜一さんは俺の肩に顔を埋めていて、俺が口を開こうとすると遮られた。

「お主が結婚を望んでいないのは知っておる、昔から言っておつたしの。身軽おなこでその日限りの女子と遊んでいたのも知っておる」

バレてたか、と苦笑いをうかべる

「儂はきつと…昔からお主のことが好きじゃった。気づいたのはずっとあとじゃが…。儂とお主は正式に結婚ができぬ。だから婚約は破談になる…。でも嫌なんじゃ…儂はお主を離しとうない。」

「…俺はきつと人を幸せにはできない。自分勝手に最低な事をしてきた自覚はあるし、これからもすると思う。機械ばっかだし好きな事を好きなだけして生きていきたいし…だから身軽が良かった。夜一さんはこれからも大切な人なのは変わらないよ。」

「…そ…うか。」

俺の肩が湿って行って、泣いていることが分かる。

ごめん、夜一さん。

——しばらく落ち着いた夜一さんは俺の背中から降りると

伸びた髪に俺の卒業祝いにあげた簪を揺らして笑った。

「じゃが、儂の気持ちはかわらん！儂はお主を好いておる。」

そして現在に至ると言うわけだ。

正直可愛かった——というのは俺の中に秘めておく。

本当にごめんな、夜一さん

魂魄消失事件の話

しばらくしたある日。

夜中――

” 『ビービービービー』 ”

「うるつつつさー！」

机の上に置いた伝令神機がいきなり大きな音を出した

” 『緊急招集！緊急招集！』 ”

俺はすぐに支度を整え夜一さんの部屋に向かう

， 『各隊長は一番隊に集合願います』 ，

” 『九番隊に異常事態！』 ”

走りながらも伝令神機は鳴り続ける。異常事態？一体何が…

「夜一さんー！」

「維助、支度…はできとるな、行くぞ^ゆ」

夜一さんの羽織を渡し、一番隊隊舎へ到着し俺は門の外で待機する。続々と隊長らが隊首室へ入っていく、急ぎだから副隊長も来ている隊と来ていない隊が多い。

「つて、リサちゃん？」

「しー、静かにしいやバレるやろ」

リサちゃんがコソコソと隊舎の中に入ろうとする

「おいおい。怒られるぞ？」

「うっさいわ、バレるゆーとるやろ、黙ってついてきて」

何故か口を塞がれ俺は無理やり連れていかれる、なんで俺まで…

隊首室の外の庭で耳を澄ます

「前線の九番隊の待機陣営からの報告によれば、野営中六車拳西、久南白兩名の霊圧が消失！原因は不明」

つと、総隊長殿の声がきこえる。

「九番隊の待機陣営…？」

「またあの魂魄消失が起きたんや、やから九番隊が偵察に行つてん」

俺の疑問にリサちゃんがそう答える。

「へえ〜」

じゃあ魂魄消失事件、あれか…霊圧が消失したってのは…惣右介が「ボクに行かせてください！ボクの副官が現地向かってるんす！」

つと喜助の声。

こんなに慌てる喜助は久しぶりだな。

それにひよ里ちゃんが…？

「…」

「んや、暗い顔して、辛気臭いで」

「いや…」

なにか、すごい嫌な予感がする…惣右介。 一体

「おおくいりサちゃん」

つと京楽隊長の声。

「なんや！」

ガシツと格子を掴んだりサちゃんやんが隊首室に顔を出す

「隊首会のぞきみしちやダメって言ったでしょ」

「しようがないやろ、隠されると見たくなるもんや」

「いつもやってんのか…」

「話は？」

「きいとつた」

「頼める？」

「当たり前」

スタツと、地面に降りたりサちゃん。

「リサちゃん。」

「んや」

「お気をつけて」

「はっ、さっさと片してきたるわ」

猛スピードで塀を乗り越上げて見えなくなったりサちゃん。

今日は…嫌な月だ。

○西方せいほう郭ぶかく外がい区く第六区

隊長格副隊長格が血濡れで倒れる。

半分の仮面を纏った平子が藍染を睨みつける

——終わりにしましょう

平子隊長

「貴方達は…いい実験材料だった…」

月に反射した斬魄刀が振り下ろされる

「くっ…クツソオオオオ!!」

——だが

キーンと火花を散らしその刀を弾く——

「…ほう、これは面白いお客様だ。浦原喜助」

黒い外套を纏った浦原喜助と、鬼道衆の握菱 鉄裁。

「ぎ、喜助…なんで来たんや…」

「なんスか?その気色悪い仮面は」

つとおどけて言った喜助に

「言うやんけ…」つと、笑みを浮かべた平子。

喜助は藍染に向き直る

「藍染副隊長…一体何を?」

「ご覧の通り、偶然にも戦闘で負傷した、魂魄消失事件の始末特務部隊の方々を発見し、救助を試みていただけのこと」

「嘘っスね、負傷した?ちがう、これは虚化だ」

「なるほど…やっぱり君は思った通りの男だ。」

つと、ニヤリとわらった藍染

鳥肌が立つような靈圧が地を這い喜助の背筋に走る

「君の兄には大変お世話になったよ」

そう言つた藍染に目を見開く

「…兄サンに、維助兄サンに何をしたんスカ」

酷く低い声が喜助から放たれる

「何をしたか…ね、心外だな…僕が少し頼んで…何がとは言えないが手伝つてもらつたのさ、彼のおかげで僕は――」

藍染の目の前で火花が散る

東仙が斬りかかった喜助の刀を止めたのだ。

「兄サンに漬け込んだんスね…貴方のことを本気で…本気で友人だと…」

「君は実の弟なのに知らないのかい？彼の心の内にある野心すらも？彼は僕が何かをやると分かつていて協力してくれたのさ」

「…そんな、そんなはずは」

「本当に？」

そう動揺した喜助に聞き返す。

「本当に彼は良心のみで機械を作っていたと思つているのかい？本当に？」

たしかに、思い返せば兄は自分の欲のままに理を歪める機械を作つたり、それこそバ

レたら極刑になるほどの機械も作っていた。

自分の欲に忠実で作りたいものは作る、戸惑いもない。

—— 例えそれで誰かが死のうとも。

「心当たりがあるようだね。」

東仙が喜助の刀を弾いて距離を取らせる

「ここまで来てくれて良かった、退くよ」

「まっ……！」

「お避け下され！浦原殿！」

鉄斎が鬼道の構えをする

—— 破道の八十八飛竜撃震天雷炮 ——

—— 破道の八十一 断空 ——

鬼道の衝突により土煙が舞う

「なっ……詠唱破棄した断空で……」

忽然と姿を消した3人、兄よりも、藍染よりも、今は—— みんなを

「京楽隊長……？」

何故か俺のところ来た京楽隊長。

「…………いや、思い込みがすぎたかなと」

そう言つて笠を下げる

なんだ???

「リサちゃん大丈夫でしょうか」

「大丈夫…彼女は強いからね。明け方には戻ってくるさ」

明け方…ね。

明け方近く、京楽隊長と長話をしてた俺は隊舎に戻る

「浦原副隊長」

「どうした」

慌てた様子の部下が膝をついて現れた。

「ご報告します！十二番隊隊長浦原喜助と、大鬼道長握菱鉄斎が、虚化禁忌事象研究の容疑で現在四十六室に――」

「…………夜一さんは？」

「それが、隊長のお姿はどこにも…」

惣右介…っ…お前――。

約束の穴をついたな、手を出さないって約束。

自分自ら手は出さない。ただ容疑がかかっちゃいました：僕は関係ないってシラを切るに決まってる。ちゃんとやっておけばよかった：

首を突っ込むな：ね、そっちが約束の穴をつくならおれもつくさ。

「俺は夜一さんを探してくる。隊舎は頼んだ」

「はっ！」

俺は――。

「賊だ！逃げたぞ！探せ!!」

四十六室に向かったが、やっぱり夜一さんが喜助らを逃がしたらしい。

大騒ぎになってる。

ふう…：さて、隠れる場所と言えば――。

「やっばいこいだよな」

「…兄サン」

——俺らが死神になって、作った勉強部屋

何故か警戒している様子の喜助。

…惣右介まさか変なこと言ったのか？

脇には八人が虚のようになりかけていた。これが部下の言つてた虚化…ね。

「…喜助。夜一さんは？」

「…ボクは止めたんすけど、兄サンを呼びに」

「…入れ違いか」

入れ違いになったらしい。夜一さんの姿は見えなかつたがちようどいい。

「お前らは現世に行くんだろう、ほれ」

ひよいつと懐から出したものを投げると受け取った喜助。

「これ…」

「俺専用の伝令神機。分かるだろ？12番隊に情報が流れない試作品。電波霊子も俺にしか分からない。もってけ」

「…ありがとうございます。兄サン。兄サンはどっち側ツスカ？」

「…俺はお前ら側だよ、ただ…ただ友人の頼みは断れなくてね。何の頼みだったかは言えないが」

俺は苦笑いをうかべる。

「…そうっすか」

やっぱり惣右介と接触したらしい。警戒してた理由はやっぱりそれか。

「喜助」

俺は喜助に近寄って

「イツタ!!なんスか!?!」

ザクつと喜助の指を軽く斬って紙に押し付ける。

「鉄齋さんも捕まったって聞いたけどそういえば」

「上で境界貼ってもらってます」

「…そうか、俺は違う入口から来たから会わなかったのか、益々都合がいい」

「それ、血判契約お互いの正体、及び取引内容を“絶対”口外しない契約ツスよね…一体

何を？」

「契約内容を話さない契約書。取引も話せない、取引した相手の正体、つまり誰と契約したか話さなくさせる契約…それを使った理由。お前に大切な頼みがある。」

「…その言い方だと、現世には行かないんスか？夜一さんも現世に行くんスよ？彼女は四十六室に侵入した、いずれバレる。」

「…俺は何もしてないからな、行く理由がない」

「まだそんなこと言ってるんスか！兄サン！貴方がここに残ったら…きつと藍染副隊長

に……」

「いや、多分大丈夫さ。俺はまだ使い道があるから今回捨てられなかった……って感じかね。まあ俺は現世よりこっちで色々やりたいからさ。だから……夜一さんを頼むよ。俺からのお願いだ、夜一さんには俺と連絡取れることは言わないで欲しい。俺は影から応援しとく」

「……兄サン。」

眉を下げる喜助。

「……頼むよ」

「……分かりました」

——俺は喜助を優しく抱きしめる。

「大きくなつたな、喜助。」

「っ……」

ギリツと奥歯を噛み締める音が聞こえる

「大丈夫、喜助ならやれる。責任重大だけど……やれるさ、大丈夫。お兄ちゃんが保証するから……色々現世で不安もあるだろう。俺が助けてやる、しばらく……きつと会えないだろうけど。」

「兄サン……兄サン……本当に……本当に行かないんすか……」

「ふは、俺がどっか行ったら惣右介を止めるヤツどこにいるよ、それに…夕寝さんと夜一さんが守り継いできた隊を、そこら辺のやつにやれるかよ」

俺は優しく喜助の背中を撫でる。

猫背でなで肩で、いつか俺の身長を抜かすって言って抜かせなかった喜助。

——ああ、本当に大きくなったな——喜助

俺はそつと離すと、喜助はゴシツと裾で顔を拭った

「維助！ここにいったか！維助！！」

タイミングのいい事に夜一さんが駆けつけた

「夜一さん」

「維助、話は聞いておるか？今から…維助？」

俺は夜一さんに近寄る

「俺は実は惣右介に頼まれてたんだ」

「お主…藍染と組んでおったのか？まさかそんなはず」

「そんなはずあるさ、俺はずつとずつと昔からあいつの友人で仲間さ」

「っ——！」

絶望したように顔が青ざめていく。

「ずっと夜一さんを騙してたのさ、悪いね」

「維助……嘘じゃろ？」

「…本当だよ」

「なら……なんで……そんな顔をしておる。」

ああ、俺は今どんな顔をしてるのだろうか。

夜一さんが俺の裾を掴む。まるで行くなどでも言うように

「儂は……信じておる。お主の事じゃ……儂に嫌われようとしておるんじやろ……」

「……」

「お主の嘘ぐらい。わかるわ、マヌケめ……どのぐらい一緒におると思っている。なあ……」

維助。ここに残るんじやろ」

「夜一さんにはかなわないな……うん、ここに残るよ」

喜助の血判契約、無駄になるかな……？いや、連絡取れることは内緒にしておいて欲し

いし、まあいいか。

「……夜一さん。」

「なんじや維助。」

「俺の事は忘れて幸せになつて欲しい」
「……」

途端にポロポロと目から涙を流す夜一さん

「……いやじゃ……お主も。お主も一緒に」

「分かつてるだろ？俺は行けない。俺が撒いてしまったかもしれない種だ、自分の後始末ぐらいしなきや」

「……いやじゃ、いやじゃ……」

いやいやと、子供ののように俺に縋り付く。

「な、いい子だから。夜一さん。」

「うっ……うっ……」

「さよなら……夜一さん」

「っっ……!!」

嫌だと顔を上げた夜一さんの唇に口付けをする。

口を離すと顔を赤くする

俺は夜一さんを優しく抱きしめた。

ああ、優しい匂いだ――

猫のように自由気ままで気分屋で――団子屋で笑う夜一さんを思い出す。

猫型になって俺の書類に墨を飛ばして俺に怒られてしょんぼりしてたっけ。

碎蜂と張り合って楽しそうにしてたな、白哉坊ちやんに絡んで追いかけて回されて。

ああ…楽しかったな、幸せだった…立派になった弟と可愛い婚約者に囲まれて――

――俺は幸せだったよ。

――さようなら

俺の大切な…愛しい人

「い…すけ…」

ふらりと倒れる夜一を抱き上げる。

「喜助、夜一さんを頼む。夜一さん専用の睡眠薬だ。3日は起きない」

「…兄サン。」

何か言いたげな喜助に笑いかけ口を開く

——
愛してるよ

俺らの大切な人達

100年間のお話編

隊長になった俺の話

「夜……様。」

浦原喜助らが現世に逃亡した事が公になった。

すぐさま碎蜂は隊首室に走り襖を開き

ガラツとした部屋を見てペタンつと膝を着いた。

「いす……維助様は……？ 維助様も……？」

ポロツと……目から涙がこぼれ落ちる。

「碎蜂」

聞きなれた低く心地よい声に振り向く

そこには眉を下げた維助が立っていた

「つ……！ 維助様!! 夜一様が……」

「大丈夫、大丈夫だから」

優しく碎蜂を抱きしめあやすように頭を撫でる

「維助様、維助様……」

「俺は大丈夫、何処にも行かない。」

俺が尸魂界に残った理由の一つ、碎蜂が壊れると思ったから。

碎蜂は夕寝さんが亡くなった時も酷く傷心していたし、また召使えてる夜一さんが居なくなつて、俺まで居なくなつたら——と考えたからだ。

夕寝さんや夜一さんが守つて歴史を作つてきた隊。

まだ夜一さんの弟の夕四郎君は幼く隠密機動は任せることが出来ない。

俺が全て責任をもつて継ぐ——。

ちなみに弟だから副隊長だからという理由で疑われたりはしなかった、そこは京楽隊長が俺のアリバイを証明してくれたから。

「え、俺が……」

「そう、隊長に。どうかな？ 実力も十分だし、穴が大きくてね。総隊長も二つ返事だったよ」

そう俺に話したのは京楽隊長、なんでも

2番隊、3番隊、5番隊、7番隊、9番隊、10番隊、12番隊つと隊長が居ない。たしかに穴が大きすぎる。10番隊は殉職してから隊長いないしな…

「それで早急に隊長を補充しないといけなくてね。まずは君を——と」

「……俺卍解は——」

「何言ってるのく使えるでしょ?」

そう笠の下から見る顔は見透かしてるように笑っていて。

まあそうか…

「わかりました…うけます」

——浦原維助

—— 隠密機動総司令官

兼

護廷十三隊

二番隊隊長

隊首試験では本来数人の隊長格が同席するのだが総隊長しかいなかった。

致し方なく卍解を披露し、俺の元々の功績もありすぐに隊長になることに。

やはりガタガタになった護廷十三隊は大変だな。

「ねえ、これ着ないとだめ…?」

「ダメです！仕来りしきたりなので」

「ええ……」

無事に二番隊隊長として就任したのはいいが、袖のない死覇装。

刑軍装束だ、夕寝さんと夜一さんと一緒にノースリーブで流石に背中が開けるなど言つて閉じたものにしてもらった。

袴きょうはんは脚絆きゃはんで止めている。

これ夜一さんとか夕寝さんが使つてた……瞬何とかつて技のための服じゃないの……俺使えないけど？

「あの……本当に着ないとだめ？」

「お似合いです維助様！」

キヤツキヤと俺の姿を見て喜ぶ碎蜂。

ちなみに隊長羽織は袖なしにした。裏面がオレンジだ、なんか夜一さんを思い出すな。

ちなみに刑軍軍団長の抜刀は処刑演武しよけいえんぶを表し……まあ標的を一網打尽にする命令的な？になるから、斬魄刀とは別に脇差を背中の腰の辺りにさしておいた。まあ抜くことはないだろうけど多分。

俺にはまだ仕事がある。引き継ぎはまあ副隊長をやったからだいたい大丈夫だとして、

他は十二番隊の事だ、喜助の後釜は多分涅になるけど、まだ実力は無い。

それに四十六室により虚化の禁忌研究を行ったことにより技術開発局が潰されかけていた。

早速俺は四十六室に掛け合い長い口論の末、プレゼン能力と俺の功績によつて技術開発局は続行する事になった。

良かった良かった。

早速阿近らに知らせると

「本当ですか……よかったです……」

つとホツと胸を撫で下ろしていた。

「ふん、仕方ないネ……」って何が仕方ないのかわかんないが涅も喜んでいる。

技術開発局、局長は涅が引き継ぎ、12番隊長・副隊長はまだ居ないが総隊長に掛け合い、涅マユリを副隊長に、特殊な隊なので勝手がわかる涅マユリをいずれは隊長に……つと進言しておいた。

これで12番隊は大丈夫。

あとは10番隊は元々一心が隊長代わりを務めているし卍解を習得したら俺が推薦

しておこうかな。

ガラガラの中新任の義が終わった。

喜助の式典を見守ってた俺が、される側になるとは……わからないものだな。

そして――。

「てめえは殴ると決めてたぞ惣右介」

「おや、これはこれは浦原隊長お元氣そうですね」

つとニツコリと笑う惣右介。

「維助でいいわ！アホ！ったく……。まあいいや、殴るのは今後に取りしておく」

「なんや荒れてますなあ」

つと笑うギン

「何が荒れてるだ、荒れないわけないだろ」

「アイタタ！なにするん」

グリグリとこめかみを拳で捻ると涙目になったギン。

どうしようも無い怒りだ。

「手は出てないだろう？約束通り。どういう訳か疑いがかかってしまったようだけど――」

「……………言うと思った。いいよ、怪我させなかったのなら。許してやる。」

するとパチクリと驚いたように瞬きする惣右介。

「なんだよ、そんな驚いた顔して」

「いや、斬られるかと思ってね」

「俺をなんだと思ってるの？」

ムカついたからって斬らないわ。

つてか…喜助と夜一さんが現世に行った理由これだったのか…：

結局止めたら止めたで、主人公が困ることになるんだろう。多分？

惣右介は計算高い、俺が惣右介の悪巧みを暴こうとしても喜助みたいに冤罪をかける

ように準備してたかもな…。

それに俺は友達を売れなかった。

30年後

30年で変わったことを簡単に言うと

弟子1号白哉坊ちゃんが護廷十三隊に入隊、2年で卒業してきやがった

弟子2号一心。俺が推薦して10番隊隊長に

それと同じくして涅も12番隊隊長に。

そして惣右介、誰の推薦かは知らないけど5番隊長になった。

護廷十三隊はフレンドリーな隊長格がほとんど居なくなつたせいで隊同士の関わりは薄れてしまった。

関わりまくつてるのは俺ぐらいか…？

惣右介の所に遊びに行つてるし、白哉坊ちゃんのものにも一心の所にも行つてる、京楽隊長とも浮竹隊長ともたまに呑むし。

段々と形になってきた護廷十三隊——時代の移り変わりつて感じがするな。

俺は功績を挙げ続け、伝令神機、誰でも簡単簡易結界装置、また鬼道が苦手な方へ、鬼道補助装置。まあ簡単に説明すると補助輪みたいなので自転車走れるように練習する装置的な…？等々を作り上げ、コピー機も実用化し、PCも各隊に備え付けた。

それで

「なんで俺が真央霊術院の講師に？」

「いやあ、君が1番適任だと僕が推薦しておいたんだよ」

「はあ…京楽隊長、俺の隊長推薦と言いなにか俺を過大評価してません？」

「いいやあ？ 正当な評価だと思うけどね」

京楽隊長が総隊長に実力不足の死神が多い問題を解決するために俺を講師にと、勝手に勝手に!! 推薦したので。それを総隊長が承諾、俺に知らされた時にはもう確定して

た。

「はあ…そういうの本人に聞いてからでしょ」

「いやあくだつて断るじゃない」

「断るわ！俺が先生とか無理だろ」

「いやいや、伝令神機やその他すごいもの作つといて教える頭がないなんて言わせないよ？大丈夫大丈夫、座学の一部と剣術と斬術の講義だけさ。それに特別講義だから毎日じゃなくていい」

「そりゃ毎日だつたら隊長としての仕事回んなくなるし、そうじゃないと困る」
「つてことはやつてくれるんだ？」

つと笑う京楽隊長。

俺は心の底から出るような深いため息をはいた

「わかった、わかりましたくやればいいんでしょやれば？」

両手を上げて降参ポーズをとると

ふふつと笑う京楽隊長。

「ふふ、ありがとう、維助君。」

つてことで俺が院の特別講師になった。

白哉坊ちやんと緋真ちやんの話

あれから更に数年経った。

「おーす、白哉坊ちやん元気？」

「お師匠…坊ちやん呼びはあれほど……」

「いや、ごめんごめん。」

素振りしてた白哉坊ちやんが俺に気づいてムツとした表情をする、坊ちやん呼びはお気に召さないらしい。

白哉坊ちやんの父親が殉職し、彼が現当主となり副隊長になった。

あんなに小さかった白哉坊ちやんも今ではこんな青年に。

熱くなりやすい性格は変わらないが、彼の父親が死んでからあまり表情を表に出さなくなつたような気もする。

「お師匠。少し相談が……」

「……………」

相談とは珍しい…俺は坊ちやんの後をついていき。着たのは朽木家。

「こちら、私の婚約者の……」

つと女の子の肩に手を乗せる坊ちゃん。

「ひ、緋真ひさなです！あつ……えつと……その、婚約者です……？」

つと顔を赤くする緋真ちゃん

「こ………婚約者アア!?!」

つい大きな声を出してしまい咄嗟に自分の口を塞ぐ

い、いつの間に婚約者なんて……!?!

2人寄り添ってそりやお似合いだけでも……!

「そ、それで相談って……？」

つと切り出すと、眉を下げた緋真ちゃんがおおずおおずと言った感じで。

「じ、実は私は……流魂街出身で……その……お師匠様はどう思われますか……？」

つと不安そうな顔。

白哉坊ちゃんが俺に耳打ちしてきた

「実は、お師匠様が特別講師として忙しくしていらしたので中々お話できなく……」

つまり、まとめると俺が講師して忙しくしてる間に白哉坊ちゃんは流魂街で緋真ちゃんと出会い一目惚れ、是非妻へ！つと求婚し婚約して……。

だがお遊びではなく本気でしかも五大貴族の朽木家の妻となる。

周りの貴族からは「流魂街の住民など…」と険悪な目で見られているという。

それで自信がなくなってしまうた緋真ちゃんを心配した坊ちゃんは上級貴族であつて信用ができる俺に話し意見を聞いてみよう。

「なるほどね、確かに貴族つてそういうのめんどくさいよな。白哉坊ちゃんは当主になつたばかりだし、いきなり流魂街の婚約者連れてきましたーつて言つたら周りも困惑する。」

「そう…ですよね」

つと悲しそうな顔をする緋真ちゃん

「ああ、勘違いしないで？俺は反対側じゃないから。俺は信用と気持ちがあれば結婚出来ると思うよ」

「信用……」

「気持ち」

つと繰り返す緋真ちゃんと坊ちゃん。

「そう、昔から育つてきたとはいえ当主になつたばかりの白哉坊ちゃんはまだ貴族らに信用があまりない、まずは信用を作る。」

そして同じく結婚の意思も伝え続ける。必ず反対派つてのはどこにもいるものなんだ。まずは周りを納得させる、無理に結婚したとして緋真ちゃんへの当たりは変わらな

いと思う、それか益々強くなる。うーん…ちよつと結婚とは違う例え話だけど。」

つとと言うと2人して首を傾げる

「こういうの俺説明苦手だけど…ぼつと出のヒョロ細の死神がいきなり隊長やります！

しかもそいつは呑んでばっかで遊び歩いてます！つて言われていい印象ないだろ？

でも実は実力があつて仕事もちちゃんとやつてから遊んでる。

そういうのつて話だけ聞くと印象悪いけど、きちんと絡んできちんと相手を知つて
さ。

ああ、この人なら仕事なんでも任せれるし遊んでもちちゃんとしてる人だから大丈夫つて周りから信用ができるんだ。

だからそうやって白哉坊ちゃんも緋真ちゃんも認めさせてあげなよ。

流魂街出身が嫌われる理由つて学が無いつて言われてるのと常識がないと思われてるのもあつて良い印象が無いからなんだ」

まあ靈力うんぬんもあるけど…

「だから緋真ちゃんはそこら辺の奴らとは違うつてのを見せつけてあげな、白哉坊ちゃんは当主として周りの外堀を埋めていく。そうして結婚すればいいんじゃないかな。」

つと励まして上げると、パアアアつと顔を明るくした2人

「わ、わかりました…私頑張ります…！」

つと拳を握つて意気込む緋真ちゃん。

「もし朽木家の使用人が嫌がらせしてくるとかそういうのあつたら俺が信用してる家庭教師がいるから、その人から芸や作法を学ぶといいよ。俺が紹介してやる」

「ほ、本当ですか？」

その感じだと嫌がらせされてるのか。

「お師匠、是非お願いいたします」

つと、白哉坊ちゃんと緋真ちゃんが外堀を埋めていくのを見守ることになった。

あれから数ヶ月、緋真ちゃんはあまり体が強い方じゃないけど自分の体に相談しながら作法や貴族の常識を学んだ、挨拶は誰からするとか、箸の使い方とか姿勢とか。

白哉坊ちゃんは白哉坊ちゃんで父親の仕事をきちんと引き継ぎ周りの貴族からは賞賛の聲が上がるぐらいに当主らしくなった。

「白哉様と緋真様がいれば安泰だな…… 蒼純様白哉の父親が亡くなった時はどうなる事かと……」

「そうだよな、わけも分からない女を連れて結婚すると言った時はもう終わりか……と思ったが、緋真様も貴族じゃないのがおかしいくらいに良いお方だ」

という、朽木家に献上している貴族からの声が多くなった。
何より何より。

——そして今日また遊びに来た時に別の相談があると呼ばれたのだ。

「あ、あの浦原様が指揮する隊は流魂街にも行く事があると伺いました」

「うん、そうだな俺の隊は流魂街の虚討伐もやってるし」

「実は……」

緋真ちゃんが話した訳は、数年前に貧しさから赤ん坊であった実の妹を置き去りして
いて、たまに探しに行ってるのだけが見つからないという。

もし見かけたら教えて欲しいという話だった。

「うん、わかった見つけたら報告する。それに探しに行ってるって……流魂街は虚が出
やすい、霊力のあるあんたは格好の餌だろうよ。不安なのはわかるが命を大切に。」っと
軽く注意する。

あまり期待はしないようにと前置きして、教えてくれた場所にドローンを多く導入し
た。

そして

「おめでとう、緋真ちゃん、白哉坊ちゃん」

「ありがとうございます、浦原様……！」

「お師匠のおかげです」

—— 2人はついに結婚した。

周りも厳しい声から祝福する声に変わり、白哉坊ちゃんと緋真ちゃんはちゃんと外堀を埋めることに成功したのだ。

夫婦の誓いを意味する さんごんのぎ 三献の儀が行われてるのを会場から離れた場所で見守る俺。

白哉坊ちゃんも緋真ちゃんも幸せそうだ。

俺はついつい伝令神機を取りだしてある場所に掛けた

プルルル

ピッ

つい、無意識というか、掛けちゃってなんだけどワン切りみたいに切ってしまった

……

その瞬間

プルルル

つと折り返し電話がかかってきて頭を抱えた。

仕方なく出る

ピッ

「あー、もしもし？あー……その間違えたというか」

“ 『んなわけないでしょう、何用ツスか？兄サン』 ”

つと、数十年会っていないが定期的に連絡してる喜助

「いやあ……白哉坊ちゃん今日結婚したんだよ」

“ 『そうなんスか？朽木サンが……いやあ夜一サン驚かれるでしょうね』 ”

「ああ……あんなに小さかったのにな……んで……その」

“ 『……夜一サンは元氣ツスよ』 ”

つと俺の聞きたいことを先に言ってしまった喜助について苦笑いしてしまう。

分かってたのか

「よかった、夜一さんは相変わらず散歩か？」

“ 『ええ、最近は現世の街並みを見るのが好きみたいで1度出かけたら数日は帰って

きませんよ、よっぽど楽しいんでしょうね』 ”

「はは、自由で夜一さんらしいや。喜助も元氣か？無茶してないか？」

“ 『大丈夫ツスよ、あの件もなんとかりましたし、店も構えられて兄サンの仕送り

のおかげで生活も安定してきましたし』 ”

「そりやよかつた、また何か欲しいもんあつたら言えよ。」
そう言つて切る。

元気なら何よりだ。

改造魂魄の話と緋真ちゃんの話

「碎蜂」

必死に刀を振るう彼女に話しかける。

だが、気づかない。

ガツつと音を立てて的が半分に切れる。

「だめだ……これでは……これでは……」

つと一人で呟く

彼女は副隊長に昇進させた。

だがそれから責任感なのか、何かほかにあるのか一人で鍛錬し続け顔はやつれてきている。

「碎蜂」

もう一度声をかけるとようやくこちらを振り向いて慌ただしく姿勢を正す。

「もう夜遅い、明日も早いだろう？」

「そう……ですね。」

つと視線を逸らす彼女。

「……………」

「……………」

しばらく無言の時間が続いたが、碎蜂が口を開いた

「……………維助様は……………どうして夜一様…、いいえ、元軍団長を許せるのですか?」

「許す?」

「維助様を……………地位を捨て逃げた方です」

「いやそれは……………」

違うと言おうとしたが碎蜂が遮った

「違うんです! 維助様が……………幼い頃から維助様が元軍団長の為に当主となるのを応援し続け、夕寝様がお亡くなりになった時も支え……………。なのに、その地位を維助様の弟君のために簡単に捨て去った!! 維助様の気持ちも知らずに……………!!!」

「違う、違うんだよ……………碎蜂。」

違うんだと、全てを話してしまいたかった。

けれどそれは出来ない。

俺は泣き崩れる碎蜂を抱きしめることしか出来なかった――。

「ダメだな……俺」

精神的には強い方だが、たまに寂しく思う

自分で突き放しといて女々しいやつだ……俺は。

碎蜂も碎蜂で可哀想だ、俺がいなかったら彼女は どうして いた だろう か……でも 彼女は 心の 芯は 強い。 きっと 傷は 残れど 立ち 直ると 思う。

俺が しっかり しないと―― 部下が、彼女が 道に 迷って しまう。

「よし、こう いう どんより した 気分 の 時は 機械 いじる に 限る」
伝令 神機 の 新しい 機種 と、新しい 機械 の 制作 に 取り 掛かる。

「……様」

……

「維助様！」

「うわっ！」

大きな 声 が 聞こえて 振り 向くと 碎蜂 が 頬を 膨らませて 仁王 立ち して た。

「なんだよ 碎蜂 か、驚かす なよ……」

「驚かして など おりませぬ！ 何度 お声 掛け しても 反応 が ないので どう なされた のかと

……！」

「なんだ、何か用か？今日は全て仕事終わらせたはずだけど」

「十二番隊阿近殿が維助様をお呼びです」

「ええ？阿近が？伝令神機で呼べばよかったの……に」

つて思つて伝令神機を取り出すとすごい着信の数だった。

時計を見るといじり回してから8時間ぐらい経つてて。痺れを切らしてわざわざ来てくれたのかと申し訳なく思いながら席を立つ。

「行ってくるわ〜遅くなるようだったら先にみんなで食べてて。」

「はい、行つてらっしゃいませ」

すぐに門の前に行くと阿近が立っていた

「ごめん、阿近く機械いじつてたらさ」

「はあ、だろうなとは思つてました」

さすが一緒に住んだことはある。呆れたようにため息をはいた。

阿近も白哉と同じぐらいに成長して青年になった。

うんうん、みんな大きくなつたなあ……

「それで？なんだっけ」

「改造魂魄モッド・ソウルの事で、生成する機械が少し故障してしまったようで、俺が見たんですが俺ではまだどこが壊れているのか分からなくて……」

改造魂魄。曳舟さんの義魂という概念から作られた義魂丸、

それを死者の肉体に強化された改造魂魄を入れて戦力として虚と戦わせる尖兵計画スピアヘッド計画。十二番隊が考え俺に必要な仕様をまとめ俺に依頼してきた機械。その機械が壊れたらしい。

「いや蒸し暑……」

水溶液が入ったカプセルが並ぶ部屋。

ひとつの機械が開かれていて修理しようとした様子が伺える。

「浦原隊長。」

「おー由ゆしま」

俺は挨拶してきた由ゆしまに片手をあげる。

由ゆしまは改造魂魄の開発者で責任者だ。

「壊れた時の状況を教えて貰っても？」

「はい、改造魂魄の霊子をインポートした所急に煙が――」

俺は話を聞きながら機械を点検する

「ああ……やっぱりか、誰かここにぶつかつただろ。パイプが曲がつて根元の線が切れ
てんな……誰か外した後に適当に直しただろ」

つとと言うと見守つてた何人かの隊士がビクツと肩を上げて、それを見た阿近が鬼の形
相で怒鳴つた

「てめえらここに寄りかかつて談笑するなつて何度いえばわかんだ！」

「ひい！すみません」

つと研究員の悲鳴を聞きながら少し笑う。上司らしくなつたな阿近
線を新しく取り替えパイプを治す。

「はい、多分これで大丈夫。」

ポチツと中止されてた機能を開始させると、水溶液がちゃんとカプセル内に流れ、イ
ンポート状況を知らせるバーが動き出した。

「ありがとうございます。浦原隊長」

嬉しそうに笑う由罵。

「改造魂魄……ね」

「気になることでも？」

「……いや、なんでもないけど、バックアップは定期的に取つておけよ」

肩を叩いて帰ろうと出口に向かうと阿近が俺の横に着いた

「改造魂魄、何かありました？」

「……いや、何かあったわけじゃないけど……四十六室のヤツらが嫌いそうな話だなと」

「……………四十六室が？」

「アイツら臆病だからさ」

「そんな事言つて、聞かれたら大変ですよ」

「だーいじょうぶ大丈夫、あいつら俺に頭上げれないから」

「はは、そりや言えてますね。」

四十六室はウジ虫の家維助のウジ虫の巢の呼び方に使われてるセキュリティを彼らの居住区にも設置しろと言つてきて設置してやったのだ。隊長格と承諾したものしか入れないようにして四十六室は安心だ！と大喜び。

ま、媚は売つといて損は無いらしい。別にいいけど

阿近に見送られ二番隊に帰つてきた俺は部屋に戻り続きを作り始める。

白哉坊ちゃんの妻、緋真ちゃんは身体が弱い、咳き込むのも見ていた。

俺が頼んで四番隊にも見ってもらったがだいたい進行した病らしく完全な完治は見込めないそう。

俺も医療に通じてるわけじゃないしなんなら全く知識がない。

治すことは出来なくとも進行を遅らせることは出来る。理に反するが、体内の病の時間を遅らせるというもの。

肺炎だかなんだか知らないが、異物質を検知しその時間を操作する。

消滅はさせれないがきつとこれが完成すれば病を遅らせることができるだろう。

初めは体内の時間を遅らせるものを作ろうとしたが、ほかの細胞にも作用してしまい怪我が治らなかつたりと色々問題が起きたので改善したのだ。

そして数日して完成し緋真ちゃんの腕に埋め込んだ。

咳き込んだりは治らないがこれ以上悪くなる事は無い。

「身体を強くしたりとかは無理なんだ、ごめんな」

「いいえ、ありがとうございます。」

つと嬉しそうに笑う緋真ちゃん。

病弱を完全に治すつてなると、一部サイボーグ化するとかになるけど多分誰にも受け入れられないし、やろうとも思わない。

——そんなことしたら白哉坊ちゃんに命狙われるな——。

講師の仕事の話

俺は座学は苦手なのだが、歴史と虚や隊の話をする特別講師と剣術、斬術を教える講師になった。まあもう10年ぐらい経ったし慣れたもんさ。

今年新たに新入生が来るとの事で毎度の恒例、担任が俺を紹介する

「こちら二番隊隊長にして隠密機動最高司令官。伝令神機を作ったすごいお方だ！三回生になったら伝令神機が配られるから楽しみにしとけよ！」

つと担任が紹介すると。

「隊長？まじ？」

「やっぱ……！霊圧が違うわ……」

つと生徒の声が聞こえる。うん、悪い気はしない。

功績を褒められるのつていいよな！少し恥ずかしいけど。

担任が出ていき俺の講義となった。

「えー、初めまして浦原維助、さっき紹介された通りです。俺の講義では道具の使い方、使う意味、また歴史や虚の話、隠密機動や鬼道衆、死神の隊の話なんかをします、実技

は剣術、斬術の講義な。隊長兼任してるもんでたまにしか来ないけどよろしく。もし質問があつたらその都度手を上げてくれ」

つとと言うと早速一人の女子が手を挙げた。

「はい、そのの子」

つと指さすと「はい!!」つと行って立ち上がる子

「ひ、雛森桃です! えつと……、浦原先生はそんなすごい方でお忙しいのにどうして講師をなさっているのですか?」

緊張した様子だけどハッキリと質問してくれた。

桃ちゃん……? うーん……なんか聞いたことあるような……。

「先生……?」つと言った声で現実にもどる。

「ごめんごめん、頼まれたつてのもあるんだけど……。こういうの新生入生に言う話じゃないけど、今弱すぎるんだ」

「よわ……すぎる? それは靈力が弱い子供が多いということですか? でもそれは」

「そう、靈力うんぬんなら貴族が有利だ、靈力の高いもの同士が結婚して子供を産んだら靈力が強い子供が生まれる。そりゃ靈力強ければ強いよ。でもそういうのだけじゃない、靈力強くても死ぬ時は死ぬ。」

要は経験不足なんだよ、そこから辺の雑魚い虚にやられてるようじゃ隊ではやって行け

ない。俺は現実を教え生き抜く術すべを身につけてもらう……そのために俺は講師を続けるのさ」

すると、息を飲む音がする。

「死なないために死ぬほど努力する。死にたくないなら真面目に講義受けるよ」

つというと、ありがとうございませう。つと頭を下げて座った。

「はい、質問はもうないかな？じゃー始めるぞ、教本を開けくまず護廷十三隊について」

講義が終わり休み時間になる。

「なあ、浦原先生かっこよかったよな。俺憧れなんだよ」

「え、あ、そ、そうだね？」

「俺は阿散井恋次、そっちは？」

「吉良イヅル……阿散井君は浦原先生の事知ってたんだね」

「浦原先生の話？」つと一人の女の子が話に入ってきた。

「あ、さつき質問してた……」

「雛森、雛森桃！浦原先生かっこよかったよね、死なないための術って……ちよつと緊張感あつてドキドキしちゃった」

「来週、浦原先生の剣術の講義だよな、うわあ……本物の剣術……楽しみだなあ」
つとキラキラした目をする2人に吉良は苦笑いをうかべた

数日新入生を見て素直に賞賛する。

突発的な才能があるものつてのは稀にいるもんだ。

雛森桃、彼女の鬼道は喜助と似通ったものを感じる。喜助は院に入る前から家庭教師により鬼道を学んでいたが、雛森桃は流魂街出身。

下の番号の鬼道とはいえきちんと発動できる彼女をみて将来は喜助のようになりそうだと笑みを浮かべた。

それから阿散井恋次、あの特徴的な赤い髪……少し聞いたことがある見たことある気がすると思うつてことは多分原作で出てきてたんだろう。

うーん……確かにいたような……

「先生、」

「うお、なんだ？恋次」

竹刀しなを持った恋次が俺を呼びに来た

「あの……もうみんな準備出来ました」

周りを見渡すと竹刀と面をつけた生徒たち。

「いや、おれの剣術の授業では竹刀は使わねえよ、皆浅打貰つたる用意しな」

「えっ……でも……」 つと雛森が戸惑つた様子を見せる

「竹刀での打ち合いなんて俺じやない講師が教えてるだろ？」

俺が再度来るまでの時間割にも何コマかあつたからやつてるはず。

「俺は死なない為の術。剣を恐れず剣を交わしてもらう、斬るとはどういうものなのか、死とはなんなのか。死なないためにどうするのか。いいから浅打を持ってこい」

つというど慌ただしく浅打を取りに行つた。

しばらくしてみんなして刀を持ってきたのを確認して頷く

「そもそも俺は型が我流だから斬り方を教えるとかは向いてないんだよ。死なないために死ぬほど剣を交わして貰う。2人1組を作れ。阿散井恋次お前は俺とだ」

「えっ……あつ……俺と?！」

いきなり呼ばれた恋次は驚いたように自分を指さした。

おれは頷くと、おずおずと言つた感じで寄つてくる。

「一般の講師からお前は剣術が上手いと聞いた。上のやつと剣を交わせばそれが経験値となる、どうだ? 隊長と経験を積む機会つてのはそうそうないぞ」

俺が京楽隊長と剣を交わした時みたいだな、つと思ひ出す。

「……よ、よろしくお願ひします!!」

「声でか……」

「……」

あの尸魂界一の剣の使い手と言われる浦原維助と向き合っている……

ただ強いだけではなく、尸魂界の連絡手段を変えるほどの功績がある伝説とも言っている人、教本にだって度々名前が出てくる人だ。

正直この人が目の前にいることが未だに信じられない。

それに――

「(す、隙がねえ)」

剣先を下に下げて隙をわざと作ってみても用意に突っ込んでこない。

やはり普通の奴相手とは違う

「うーん……」 つと唸ったと思ったら浦原先生は斬魄刀を鞘に収めた

「え、えっ?」

困惑する俺。

「いや、いいよさあ斬りに来な」

ほらほらつと言いなながら手招きする

今なら隙だらけだ……

「うおおおお……っ!!」

怪我しても文句は言わせねえ！思いつきり上から刀を振り落とうとする……が、

——俺は

一歩も動けなくなった

息もできない、脳と反して身体が動けなくなる……

俺の頭が警告を発してる

——このまま振り下ろせば殺される……

確かな——死の恐怖

霊圧……？ちがう

——動けばお前を殺すという

確かな殺気だ

ガタツと、刀が手から滑り落ち落ち地面に刺さる

柄から手を離した浦原先生。

「っ……はあ……はあ……っ」

地面に手を着いて息を整える、今まで無意識に息を止めてたことに気づく。大きく息を吸って、浦原先生を見上げる

これが――上ってやつか

打ち合ってすらいらない、交わしてもいないのに俺は剣術に負けた……。

――いや恐怖に負けた。

「阿散井くん!？」

桃が恋次に駆け寄り立ち上がらせる。

息を整えた恋次が俺の方を向いて頭を下げた。

阿散井恋次。剣術の講師から潜在能力の高いやつがいると聞いてたから楽しみにしてたけど、やはり凄いな。

普通人に刀を向けると恐怖を感じるものだがそれはなかった。

そして俺の間合いに入る瞬間に殺気を感じ取り立ち止まった。

「うんうん、あっぱれ天晴!期待してるよ阿散井恋次!」

「あ、ありがとうございます」

周りの生徒はわけも分からず首を傾げる

「どうだい、新入生は」

「あやあ、藍染隊長」

「いやだなあ、維助君」

つと優しそうな顔で笑う惣右介。

たまたま会った風を装い院の門の前にいるが待つてたな？

惣右介も座学の講義で月一程度に院に顔を出してららしい。

まあ鏡花水月を見せつけるためだろうな。

隊同士の関わりが薄れた護廷十三隊の隊士に鏡花水月の催眠をかけることは難しくなる。だから隊に入隊する前の新人たちに「これが始解さ」、つとでも言いながら催眠をかける。

「どうだった、特進学級の子達は君の担当だろう？」

「ん？まあさすがは特進学級に選ばれた奴らだなんて感じ、霊力だけじゃなくてちゃんと潜在能力、才能がある」

「そうか……楽しみだ」

ルキアと言う少女

特進学級が中心だったが、ほかの組もたまたま講義することになったというか頼んだ。
鼻^{ひいき}戻する理由は無いらしい。

そこで講義が終わり解散し――。

見知った顔を見つけて足を止める

止まった俺に気づいた少女は振り向いて俺に首を傾げる

「お前……!!名前は何?」

「ひゃーひーえ……っ!?!」

ガバツと、肩を掴んで揺さぶる

「いいから!名前!」

ザワザワと騒がしくなる廊下。

「る、ルキアです……浦原先生」

「やっぱりか……お前これから空いてるか?」

「はい?」

「う、浦原先生!!」

　　と恋次の声が聞こえ、人混みをかき分けて焦ったような恋次が俺の前に来た

「あ、あのルキアが何かしました?すみません、こいつその……常識がなくなってなくて」

「たわけ!それは恋次貴様の方だろう!?!」

　　と痴話喧嘩を始めてしまう。

「ごめんごめん、焦っちゃった……ルキア。お前を探してるやつがいるんだ、会ってやって欲しい」

「私の……知り合い……ですか」

「ルキア……?ルキアなのですね?」

「わたし……と同じ顔……?」

　　ギョツとルキアを抱きしめる緋真ちゃん。

　　すぐに承諾を得た俺はルキアを抱き抱えて落ちる落ちる!と悲鳴をあげられながら朽木家に来たのだ。

　　本当はダメだけどね。

　　再会を果たす——ルキアの方は赤ん坊だったからか覚えてないらしくったけど。

　　白哉坊ちゃんも遅れてやってきた

「私が……私が貴方を捨ててしまったの。私は緋真。貴方の実の姉です」
「私の……姉？捨てた……？」

お互いの話をし合う姉妹、顔が似ているからルキアも信じたようだ。

「姉様ねえさま私は怒ってなどおりませぬ、良い友人にも出会い良い経験もできた、こうしてまた会うことが出来たのです。どうか泣かないで……」

「つ……ありがとう……ルキア……ありがとう」

つと泣き崩れる緋真ちゃん

そこで白哉坊ちゃんが入っていった

「白哉様……ルキア、実はこのお方と私は結婚しているのです。もしあなたが見つかったら……私達はそばにいれなくなる、白哉様と一緒に今度こそ守ると決めたの……どうかお願い。朽木家と養子縁組をしませんか？」

「養子縁組……」

流魂街で散々苦勞をしてきたルキアに、もう苦勞はかけさせまいと白哉坊ちゃんと緋真ちゃんが考えた話。

まあ、色々思うところはあるけど人の家庭の話だから俺は見守る。

決めるのはルキアだしな。

「……分かりました。その話受けます」

「つく！ルキア！嬉しいです……ルキア。」

白哉坊ちゃんも黙ったままだけど、少し嬉しそうだ。

「ひゃああああ！落ちる！落ちる！！」

つとまた叫ぶルキア

寮の前に下ろすと、ゼエゼエつと息を整えていた。

「さあ、荷物用意しな！」

つと尻を叩くとひえ！つと叫ぶ、元気だなあ

「浦原先生！！」

つと涙目で詰め寄ってくる

「ごめんごめん！怖かったよね！漏らしちゃった？ゴフツ！顔が痛いっ……！」

勢いよく顔をぶん殴られその場に踞る

「あつ！いやすみません先生……！」

暗い顔だったが何とか元に戻ったようだ、まあ姉とか養子縁組とか言われたら困惑するよな。

こうしてルキアは朽木ルキアとなった。

「……」

「なんだい、静かだね維助君」

居酒屋のカウンターで飲んでると隣に惣右介が座った。

隊長になってから益々猫かぶりが極められてるようだ

「なんだよー人で騒いでたらおかしい奴だろ」

「えっ……いつも一人で騒いでるじゃないか」

「どつき回すぞ？……いや、ルキアの事を考えててさ」

「……さすがに生徒に手を出すのは」

「お前なあ……」

わざとらしく引くような態度を見せる惣右介をぶん殴りたくなる。

「冗談さ、あれだろう朽木家に養子縁組で朽木家に入ったお嬢さん。」

「……ああ。惣右介って兄弟いたっけ」

「いや、いないけども」

「……もし姉がいたとして、過去に自分を捨てました、でもそれは覚えてない。大きく

なつていきなり実の姉です。って言われたらどう思う？」

「さあ、あれだろう？浦原喜助のことを思い出したんだろう？」

「……よく分かったな？兄弟を捨てる時ってどんな気持ちだったのかなって。きつと長

年すごい罪悪感もあったし生きていくならそれが最善だったのかもしれない。第三者がどうこう言うつもりは無いけど、ルキアはどういう気持ちなのかなって……、先生として支えられるなら支えてあげたい。白哉坊ちゃんも口下手だし上手くやれるかな。」

「……君は変なところがあるよね」

「褒めてる？ 貶してる？」

「……」

2ヶ月ほど経って1回生の特進学級の恋次らが現世で大量の虚に襲われたらしい。

「先生の稽古より怖くありませんでした」 つと桃に言われた時は頭抱えた。

なんでも一人で突っ込んでそれをみた2人が遅れてカバーに入り虚を倒した後、残り
は助けに来たギンと惣右介が片した——って聞いた。

「でも、先生！ 先生はあの中級大虚を倒したんですよね!! 院生の時に倒したって五番隊の藍染隊長が仰っていました！」

そして俺はまた頭を抱える。惣右介ええええ！

「俺、あの時動かなきゃ死ぬと思っただんです。多分浦原先生の講義受けてなかったら戸惑って焦って何も出来なかった。死なない為の講義って……ようやくなんか実感出来

ました」

「僕も……。浦原先生のおかげです」

つと恋次とイツルも……

俺は3人の頭をそれぞれ撫でる

「まあ、無事で何よりだ……。今度は自分の力を過信しないようにする訓練しないとな。」

「ええ、これ以上浦原先生のスパルタ講義うけたら死にますって」

「あ？恋次そんなに受けたいって？いいぞいいぞ」

「ちげえ！話聞けって」

「あはは、阿散井君おかしい」

頭をうりうりつと撫でられて照れてる恋次を笑う桃。

この3人は立派になりそうだな、将来が楽しみだ。

「二番隊って隠密機動……ですよね」

つとイツル。俺はそれに首を横に振る

「二番隊イコール隠密機動ってわけじゃないよ。本来、隠密機動は隠密機動、二番隊は二番隊だったけど、俺が総司令官を兼任してるからその隠密機動の色合いが強いんだ。俺が総司令官を継がなければ二番隊はただの死神の隊だったさ」

つというともんなして首を傾げる

「ま、難しい話はいいよ。」

「その総司令官つて強かつたらなれるんすか!？」つと恋次が詰め寄ってくる

「お？俺を抜かす気か？あはは、隊長は強かつたらなれるかもしれないけど隠密機動はそうはいかない。中央四十六室直属の組織だからな、信用が大事なのさ。信用と強さがあればなれるかもな？」

「信用かあ……」

「それに恋次は隠密とか無理だろ」

「うっ……浦原先生みたいになんでも出来る人になりたいんです。霊圧は勝てるものじゃないけど……」

つと俯く恋次

「俺は霊圧関係ないけどね。」

「え？」

ポカンとした顔が笑える

「俺は剣術の達人。俺が今まで教えた剣術に霊力使ってたか？」

つというと首を横に振る

「だろ？俺の剣術は霊力関係ない。だから俺は霊力が少ししかないやつでも虚は倒せる

と思うんだよ。まあ弊害も多いけど――

貴族の俺が言うのもどうかと思うけど――流魂街のやつでも貴族のやつでも強い方が強い。霊圧じゃない――心と剣の強さ、それがあれば上に立てるんだと俺は思うな。」

そもそも剣術と斬術は別だし…。補助できる機会作れば霊力弱いやつでも雑魚虚倒せるんじゃないか…？

霊力多くても戦闘力なければ弱いやつは弱いし。

「か、かつけえ！浦原先生やつぱかつけーな！なつイツル」

「そうだね……」

「お？だろだろ？かつこいいだろ！」

「先生台無しですつ！」

つと笑う桃。

かつこよさとロマンだよなあ！やつぱり！

霊力が少ししかなくても虚を倒せる機械……面白そうだな

ニヤア

つと鳴き声が聞こえる

「よお、猫ちゃん。今日も来たんだな。」

夜、襖を開けて作業をしているとその隙間から入ってくる黒猫。

珍しい目で俺みたいな淡い青い目をしている。

時々俺のところに来ては擦り寄ってくる

「よしよし、可愛いなあお前は」

ワシワシと撫でてやるとゴロゴロつと喉がなる

ひよいつと抱き上げて寝つ転がると俺の腕から抜けてお腹の上で丸くなる猫ちゃん

「……」

今頃夜一さんは何してるかな。

この猫のように自由気ままに生きてるんだろうな

襖から入る月明かりを見てるとヒョイツと起き上がった猫はスタッと俺の上から降

りた

トテトテと襖に向かって歩き出す猫

——俺は無意識に手を伸ばしていた。

「つ……はあああ……何してんだ俺」

ギユツとその手を握り天井を見上げる

俺の使ってるダンスの上には、3人で撮った写真があつて、まだ幼さが残った喜助と

夜一さんが映っている。

きつと今日、俺らと似た桃達をみて思い出しちゃったんだろうな昔の気持ち、昔の思い出を……。

2人を守らなきやって思ってたその時初めて始解したんだっけか。

あの時は無我夢中だったな……

『あの時動かなきや死ぬと思っただけです』つと言った恋次。

俺もあの時、動かなきや俺が何とかしなきや死ぬ。大切な人達が死ぬって思っただったな……。そっからだ、死なない為に死なせない為に死ぬほど努力するようになったのは。

猫は去っていった

廊下の角で蹲る女

「……………維助様……………」

現世で月を見上げる女

「維助」

想い想われ——届かない

俺だつて息抜きが必要だつて話

朝——ふと目が覚めた。

いつもは碎蜂の声が廊下から聞こえて俺が目覚めるつてのがいつもの朝だつたんだが、碎蜂の声はせずまた時計もいつもの起床時間で、

何かあつたのか？つとさつさと支度をする。

襖を開くとそれと同時にドタドタと走る音が聞こえて

ギギギイ!!つとブレーキ音が聞こえて曲がり角から現れた碎蜂。

「い、維助様!」

「うお、なんだ碎蜂珍しいな?」

「す、すみません。寝坊してしまつて……」

つと膝を着く碎蜂。いいと言っているのに硬いものだ。

「にしても碎蜂が寝坊だなんて珍しいな?つてなんで前髪そんなに目にかけてるんだ?

目悪くなるぞ?」

まるで顔を隠すように髪を下ろしている碎蜂は前髪を目にかけるようにして俯く。

「い、いえ!?なんでも……!そ、それより朝餉あさげのお時間です!ささ、早く行きましょう!」

そして俺の前を歩く碎蜂。

なんか空からげんき元氣というか……。

「碎蜂」

「っ……………」

振り向いた碎蜂が逃げないように後頭部を押え、前髪を書き上げると、クリツとした瞳と目が合う。

目元は赤くなっている

「……………泣いたのか？誰に泣かされた？何をされた？」

「い、いえ！その……………えっと……………」

つと視線を逸らす碎蜂

「か、かふ「花粉症だなんて言わせねえからな？」うっ……………」

手を離すと。グツと拳を握って俯く碎蜂

「私の……………私の問題なのです。もう解決したので大丈夫です、ご心配をお掛けしました
維助様。」

「……………そうか、ごめんな人の問題にズケズケと。もし何かあったら必ず俺に相談してくれ。」

つとつと

「はい！」つと笑う。

いつもの笑顔に戻った碎蜂にほつとする。

人を覚えない名前も覚えない、人のことをどうでもいいと思っていた俺はいつからこう人に情を抱くようになったんやら。

「浮竹隊長は奥さんとか居ないの？」

「ゴホツゴホツ……な、なんだい維助君急に」

お茶を蒸せた浮竹隊長が机を拭く。

書類を届けに行つたらついでにお茶をしていかないかと言われてお茶してるのだ。何故か京楽隊長もいた、サボりに来たな？

「浮竹は女の子に奥手だからいないんだよ、あつちからグイグイくるのにねえ？」

つとお猪口をゆらす、朝から酒かよ

「維助君はどうなの？ 碎蜂ちゃん？ それともあの姫さん？ それともあの遊楽戸魂界ゆらくとのキャバクラの店の名前の女の子？ 維助君のお気に入りの子いたよねえ」

「……、京楽その話は……」

「ああ気にしないで、夜一さんも碎蜂も可愛いよなあ。あのキャバ……遊樂の女の子俺好みでさあ、ボツキユツポンって感じが」

「ああ、わかるよわかる。脚もいいよねえ……あのラインが」

「こらこら、ここでそういう談笑をするんじゃない」

「なんだよ、浮竹隊長く俺とは別のイケメンのくせに。女の子にチャホヤされてるんだから流されてチャホヤされればいいんだよ。勿体ないなあ」

「そうだよ、浮竹。勿体ない勿体ない！」

「はあ……なんで俺に流れが来るんだ」つと頭を抱える浮竹隊長。

「浮竹隊長の好みは？胸？尻？脚？無難に顔？」

「いや……俺は」

「いやいや浮竹はきつとクビレだよクビレ。」

「ああくクビレか！俺も好きだなあ」

「2人とも！勝手に決めるんじゃない……！俺は……」

「俺は？」

「い、言わないからな？ゴホツゴホツ」つと咳をし始める浮竹隊長。

からかいがあるな。

「あ、そうだじゃあ今日遊樂いこうか！」

「おつ、いいねえ京楽隊長！行こう行こう、楽しみだなあ浮竹隊長、おすすめの子紹介してやるよ」

「ええ?!俺もか?!いやおれは「じゃ!また夜に〜」あつちよ維助君!」

「なんで俺まで……」

つと顔を覆う浮竹隊長の両端には露出ろしゅつの高い女の子達

「浮竹隊長さんいけめーん!かっこいい!」

「維助様と違うかんじの優男く浮竹様つてよんでいー?」

つとキャツキャウフフしてる

「ほらほら、浮竹隊長、せっかくなんだから楽しまなきゃ」

つと、両端の女の子に肩を回す俺

「きゃー維助様。今日も相変わらずかっこいい〜」

「あ、ずるーい私も私も」つと寄ってくる女の子達。

うん……ハーレム最高……っ……!!

酔っ払った京楽隊長を浮竹隊長が送っていくことに。俺は隊舎が離れてるから別方

向だ。

うん、いい気分だったな〜って思いながら踵を返すと

「あ、あのー！維助様!!」

つと女の子の声。

「ん?」

トタトタと俺の元に走ってきた女の子は店の子で、なんか忘れ物したかなと懐をまさぐるも、思い当たるものがない。

すると――俺の腕に抱きついて上目遣い

「あの……お店には内緒で。2人で一緒に呑みませんか?」

うーん……これは夜のお誘いか……。

新人だしプロ意識がないのはしかたないけど……

「ごめんね?そういうつもりでキャバ……じゃないや遊楽行ってるわけじゃないんだ、一線はこえないよ」

「い、いいんです!お願いします!私あなたの一番になりたいんです!お願いします。

あなたの一番に……一緒にいたいだけなの」

つと胸を押し付けてくる。

困ったなあ……

っと思つてると

「維助様……?」

「あ、碎蜂。乱菊ちゃんも、どしたの?」

「ど、ど、どうしたの?じやないですよ!浦原隊長、その子は……?」

つと指を指す乱菊。

あ……そういえば抱きつかれてたままだったな。

「なんですかあ維助様。この子供達は」

乱菊からカッチーンっという効果音が聞こえてきそうなほど顔が歪む。

乱菊はまだしも碎蜂は大人だろう……身長でそう言つてるだけかもな。

「はいはい、そこまで。んでなんで2人はここに?」

睨み合つてるのを制して聞く。

「女死神協会の集まりなんです!!!ほら、前に伝令神機に改善点があつたらつて言つてくれつて言つてたので、女の子同士で話したらそういう集まり作つたらどう?みたいな話になつて〜!碎蜂副隊長は浦原隊長の近くに居るから機械くわしいかな〜つて話してたら仲良くなつて!」

つと楽しそうに笑う乱菊ちゃん

「それでいまはその帰りに碎蜂副隊長と買い物に……そしたら……」

「あはは……」

俺と出くわした…つと

「副隊長おお？このちんちくりんがですか？」

つと笑うキャバの子

さすがに失礼だぞ、つと言つたらごめんなさあーいと軽い返事。

勘違いしないで欲しいんだが、遊樂の子はいい子ばかりでこういった女の子は少ない。多分この子がちよつと…

とか俺の方が失礼なことを考えてると

プルプルと震え出した碎蜂

ばっ！つと顔を上げたかと思うと俺に詰め寄り

「わ、私だつて胸あります!!」

「どうした碎蜂!？」

「維助様は胸が好きですけど!!私だつて大きくなりました!!!」つと大声をだす碎蜂。本
当にどうした!？」

「うわあ、浦原隊長胸なんだア…」つとジト目の乱菊ちゃんと

睨み合い始めた2人

それに

「おい、あれ二番隊の…」

「胸？胸とか聞こえなかったか？」

つと通りがかつた死神や住民の声聞きこえてきて。

「いや!!俺はちが、違うぞ?!胸だけじゃない!そう!そうだよ!脚…脚も好きだ!!」
「ええ…」

ちつがあああう!これが言いたかつたわけじゃない!

「と、とにかくこの話は終わり!はい、遊樂の子ははやく店戻る!!オーナーにチクるぞ?はいはい」つと背中を押して帰らせる

10番隊隊舎に乱菊ちゃんを送り、碎蜂と2人になる

「あ、あのー碎蜂さん…?」

ずつとむすつとしてる碎蜂。

「…:胸なのですか?やはり夜一様のような…」つと胸に手を当てる碎蜂

「いや、うーん。いや…あは…は」

どうしよう俺、どうしよう!どう答えても角たつぞ…?

胸にしか興味無い浦原維助隊長なんて噂が立つたらこまるし…!

「お、俺は碎蜂の身体がすきだな」

ん?

ボボツと、顔を赤くする碎蜂をみて冷静になる。

さて、俺すごいセクハラまがいな事言わなかったか？

「わ、私の身体が……」

っと自分を抱きしめるように腕を組む碎蜂。

「い、いやーごめん！ちが、くはないかもしれないけど！違う！誤解というか……！」

「い、いいんですよ維助様……！維助様の本音聞けてよかったです。おやすみなさいませ」

っとルンルンで去っていく碎蜂。

いつの間にか隊舎についてたのか……俺は門のまえで蹲る。

セクハラだと言われなかったのは良かったけど……やべえ……

乱菊ちゃんにもあの遊楽の子にも誤解を解かないといけないし……

ああ……いや誤解ではない……？うん？

酒のせいか頭が痛くなり

——俺は考える事を諦めた。

靈刀の話と流魂街の天才児の話

「白哉坊ちゃんもついに隊長かあ……」

五番隊副隊長市丸ギンと、六番隊副隊長白哉坊ちゃんが隊長に就任した。

ギンは三番隊、坊ちゃんは引退した祖父を継いで六番隊に

「大きくなつたなあ白哉坊ちゃん」

つと袖で目を覆い泣いたふりをする

「はは、相変わらず弟子愛がすごいね維助君。」

つと笑う惣右介。

今は式典帰りなのだ。

「ギンも出世早いよなあもう隊長か、大きくなりやがつて！」

つと脇を肘でつつく

「あいたあ……なにするんですかあ浦原隊長。にしても白哉坊ちゃんって可愛い名前やなあ」

「……師匠」

「ごめんって」

低い声で白哉が威圧してくる。だーあってもう定着しちやっただもん。

「とにかくおめでとう、ギン、白哉坊ちy…白哉」

いやあ…時が経つのが早いもんだ。

あれからまた時がたった。

霊力が全然ないやつでも扱えるようになる斬魄刀もどきを作れるのでは…？つと思つて今試作品を何個か作っている。

「あの…俺も忙しんですけど」

つと頭を掻く阿近

「いーじゃん、いーじゃん休憩だろ？少し手伝えよ」

「休憩の意味…」

つと呟く阿近に刀を渡す

「斬魄刀…じゃないですね。普通の刀…？」

「そう、日本刀すこし改造したやつな。中は機械がはいってる、柄のスイッチ押してみろ」

つとと言うとカチツつと音がして刀に霊子が集まり始める

段々と青白くなっていく刀

「霊力を吸収する鉱石と、精霊邸の建物みたいに霊子を分散させずに維持する力を参考にした機械を合わせて、刀に霊子を集結させ流し纏わせる。これで体内の霊力を使つて戦う死神じゃなくても雑魚虚ぐらいは斬れるようになるはずだ。ちゃんと魂葬できるかも実験済み！斬魄刀は魂魄を循環させる装置みたいな感じじゃん？柄の魂葬印の原理を少しパクつて虚の罪を洗い流して魂葬できるようにしたんだ」

俺の技術様々だなあ！

「…これ、アレに似てませんか？」

「アレって？」

しばらくブウンつと刀を振るっていた阿近が俺の方を向いた

「大気中の霊子を集めて戦う——それはまるで「阿近なにしているんだネ！サボつてないで285番の容器を取つてきたまえ!!」

つと涅の大きな声が研究室内から聞こえてきた。

「はあ、休憩が…じゃ俺はこれで。」

つとフラフラと去っていった阿近。

うーん。ただこれは対死神に対しては魂魄が霊圧に耐えれないとかいう問題とかあるからそういうのは向いてない。

使えても流魂街の住人が自分の身を守る為に……って所かな。まだ改良必要な所もあるし。

「ただ、問題なのが大気中だけじゃなくて建物の霊子も吸い取るから建物が崩れるんだよなあ」

ボロボロになった塀を撫でる。

使いすぎると大気中だけじゃなく壁の霊子まで削り集まり始めるのだ。

なんか成分とかあんのかな……？大気中限定に絞るにはそういうのを調べないといけない。だか成分とかそういうのは俺わかんないし……

「よし、こういう時は喜助だよな」

“ 『兄サン……なんでそんなもん作ったんスか……』 ”

説明を静かに聞いていた喜助がため息を吐く。

「え？なんかおかしい？」

“『いや…おかしくはないんすけど…いや。やっぱりおかしいッス』”

「ええ？　そうかなあ、刀に靈子を集めて流すだろ？　それで密に耐えきれなくなった靈子がギチギチとひしめき合い振動するだろ？　その振動部分に触れるとスパツ！　つと斬れるわけだよ、斬魄刀より耐久度の劣るただの刀でも――」

“『いやそういう原理とかの話じゃなくて…大気中の靈子を集める機械を作ったんすか？』”

「だからそうだって、集めて刀の周りに流してるの。虚もスパーンよスパーン！」

“『……それ滅却師じゃないッスか？』”

「え？　滅却師？　ああ…そういうえば、似てるな――でも違うだろ細かく操れる訳じゃないし、飛ばせる訳じゃないし…あつ飛ばせたらいいなあ…確かに！　うんうん。靈子を斬撃として飛ばせたらカッコいいよな。ありがとう喜助！」

“『いやアドバイスした訳じゃないんすけど？』”

滅却師――　ねえ？

「斬撃として飛ばせるようにしても、魂葬ができるかわかんないんだよなあ…。刀自体に斬魄刀と似たものをつけてるから、それと離れてしまった斬撃は…うーん…均衡が崩れるよなあ…。」

そしたら弓も似た感じか：：やつぱ仕様書きちんと作ってから取り掛かればよかったなあ」

“ 『はあ：：こりやしばらく話聞かないツスね』 ”

つてかこれ色とか変えたらかつこよくない？

眩しいし：：明かりになるなこれ。明かりとしても応用可能。でも触れるだけで怪我する。だめだな、うん。

ただ、この機械をちゃんとしたものにすれば色々と応用できる気がするんだよなあ：：。力ない死神でも使えば簡単に切り刻めるようになるわけだしそういう力を利用して——とか。まあとりあえず仕様書作るか

この霊刀が数十年後活躍するとは——思いもよらなかった。

「へえ、流魂街の天才児？」

「そうなんです!! 私がスカウトしたんですけど、これが生意気で生意気で!」

美味しい茶菓子があると言うのでお邪魔している俺。

そういえば乱菊もあんなに幼かったのに大きくなつたなあ今ではちゃんと女性だ。

「乱菊、お前流魂街にサボリに行つてたのかあ？」

つと呆れた様子の一心。

「サボつてません！ たまたま！ たまたまなんです！！ 全く！ 隊長と一緒にしないでください」

「おいおい、でもそれ聞いたことあるなあ…なんでも初日に決闘を申し込んできた六回生を一瞬で倒したんだらう？」

「ええ？ そりやすこい」

「でも生意気なんです！ 生意気！！ ずーつとしかめつ面だし！」

ここうですよ！ ここう！！ なんて言つて指を目にあててつり目にしてみせる

「そういえば師範、講師の仕事は？」

「おー、ここら辺バタバタしてたからなあ…来週辺りにあるな。」

伝令神機のカレンダーで予定を確認する。ここら辺ちよつと霊刀とか作ろうと試作してたりして忙しいから断つてたんだよなあ

すると両手を合わせて笑つた乱菊

「あつ！ じゃあーその時にその生意気なガキ紹介してあげますよ！！」

「おっ！面白そうだなあ俺も見に行く」

　　と乗り気の一心

「うーん、まあ俺も気になるし……んでお前らその日の仕事は？」

　　つと言うと2人して視線を逸らした

おいこら……

日番谷冬獅郎の話

今日は午前中で終わる日。

稽古でもするかと浅打を背負い立ち上がったところで――

“『ピンポンパンポーン』”

つと、教室に着いている虚の仮面のような置物の口が動き始める。

“『一回生、特進学級、日番谷冬獅郎さん』”

周りの生徒の目が一齐にこちらに向けられる

“『至急、特別訓練場壺にお越しください繰り返します』”

「はあ……」

痛々しい程の視線を避けながら特別訓練所へ向かう。

通常の訓練場とはちがいで、特別な申請書がないと入れない特別訓練場。

壺の扉は開いており、そのまま入る

「失礼しま……」

その瞬間顔を柔らかいものがつつんだ

「隊長く！この子ですよこの子！生意気なガキ！」

「離せ！！てめえが呼んだのか松本！」

「松本副隊長でしょー！この前昇進したって言ったじゃない！」

「ふんっ」

「もう！生意気ー！！」

顔を背けた先には羽織を着た2人の男がいた。

「おつ、その子が乱菊のお気に入りか？ほー」

黒髪の男は俺の事を見ると感心したように頷いた

「師範どう思います？」

師匠と言われた男は俺と目が合うとニコリと笑って近寄ってきた

つと思えば腕を握られ持ち上げられる

「なっ……！」

「暴れようにも動かせない。なんつー力だ――」

「へえ、うんうん。君毎日稽古してるんだ」

「……！」

腕を見ただけで分かるんでも言うのだろうか

男は先程とは違い優しく腕を離す

「自己紹介が先だったな。俺は浦原維助、二番隊隊長でたまに講師として院の先生をしてる。そのうち俺の講義を受けることになると思うけど、よろしくな?こつちが」

つと黒髪の男を指さす

「俺は志波一心。十番隊隊長で乱菊の上司だな」

「……んで隊長ら2人が俺に何の用ですか」

「乱菊ちゃんがすごい生意気で凄い強いやつがいるって言ってたんで気になって呼んだんだ」

「生意気とは言ったけど強いだなんて私は言ってますからね!浦原隊長!!」

「……浦原……浦原?」

浦原維助、流して聞いていたが教本に名前が――。

「浦原隊長は伝令神機と流魂街の偵察無人機を作った人よ?その他にも数え切れないほどすごいもの作ってるんだから!ほら流魂街でふよふよ浮いてる機械見たことない?」

確かに、ばあちゃんがアレは死神様が見守ってくれている証だとか言ってたような。それ作った?

「……………本当に見に来てただけなんですか」

「うん、そうだよそれと勧誘に」

「……勧誘?」

「そう！せっかく優秀な逸材がいるんだから唾付けとかないとって感じで乱菊ちゃんも
気に入ってるし一心も気に入ったようだし、良かったら院卒業したら十番隊に行かない
？」

「…」

志波隊長の方に目を向けるとニコリと笑った。

「…考えます」

「十番隊に入ったら私が上司だからね！冬獅郎！」

「…やめようかな」

「なんですって!?!」

「はは、2人は仲いいなあ。冬獅郎。なぜ院に入ろうと思ったの？」

つと首を傾げる浦原隊長

「…力の扱い方を学ぶため…っす」

「ふーん…そっか…なるほどね、うんうん確かに」

またペタペタと身体中を触り始める、この男読めないというかマイペースというか

そのうち頭を撫でられる

「二番隊でもいいなあ！君なら大歓迎だよ」

「ちよちよ、師範！そりやダメだつて！ただでさえ最近二番隊志望する隊士多いのに！
隠密も隊士ももう要らないでしょう!？」

「ええ!?!部下はいてなんぼだろ」

「…考えます」

「うんうん。もし何か困ったことあれば言えよ。放課後も講義で質問あつたら聞いてるし鍛錬も付き合ってるし」

「鍛錬も…?ですか」

「おう！俺が教えるのは死なないための技術。打ち合つて打ち合つて自分自身を向上してもらおう。受け身、防御術、反撃ももちろんただの攻撃も。俺の鍛錬で使うのは竹刀じゃない本物の刀だ。実戦と似たような感じで鍛錬するからいい経験になるぞ」

「…今からお願いつて出来ますか?」

「なつ、冬獅郎!」

つと言う松本を浦原隊長が腕で制す

「いいぞ、死なない覚悟があるなら」

「…あります」

「よし!」

つとまたポンポンと頭を軽くなでられた

「師範もいやらしい人だ。わざと仕向けたな」

「…全くですね。はああ、心折れないといいけど冬獅郎」

スタスタと訓練場に作られた広場に向かう2人を設置された観戦席に座る

「いや、ああいうタイプは逆に燃えるんじゃないか？」

「私、隊違うし講義も見たことないんです。師範って言ってるぐらいだから志波隊長よりも強いってのは分かるんですけど、実際浦原隊長どうなんです？尸魂界一の剣術使いって本当なんですか？」

「…うーん、師範が四席の時に俺が2番目の弟子になったんだよ。その時から強かったぞ？そもそも尸魂界一の剣術使いって言われるようになったのは師範が護廷十三隊に入隊した時からだしな」

「えっ、そんなに前から？へえ…じゃあ中級大虚を倒したってのも本当なんですか？」

「そう聞いているぞ、それを一回生で倒したって言うんだからそりや称号ぐらいつくわな。実際強いぞ、当時は何十キロっていう重さの制御装置をつけて動きも制限されてたらしいんだがそれでも——刀身は見えなかった」

「へえ…」

「へえつて聞いといて反応薄すぎねえ？」

「だって見ないとわかんないじゃないですか」

「だから見えねえんだつて、ほら始まるぞ」

冬獅郎と維助が向き合い、維助は柄にすら触れていない状態で、冬獅郎が刀を抜いても変わららず棒立ちだった

「はあああー!!っ」

上から容赦なく真つ直ぐに斬り下ろす——が、

それを柄頭つかがしらで受け止めた維助

一瞬驚いたような顔をする冬獅郎が1歩下がりがり斬り込む——が片手で刀を抜いた維助が軽く弾く。

——軽く、そう軽くまるで道の蜘蛛の糸を退かすように軽く。

動きは柔らかくゆっくりに見えるのにそれに反して音は大きく火花が散る。

「がっ…!!」

何度が弾いた時に勢いに負けて冬獅郎が尻餅をつく。

早業でもない、的確に連撃がしづらくなるように弾く技術力。

大きく振っている訳でもないのに片手で握った刀で相手を弾く力。

「私見えますよ」

「ありや冬獅郎の実力を計ってんだ。それに見えないのは師範の抜刀術、抜刀術は見せつけにはなるが鍛錬にはなんねえだろ。師範自身も抜刀術は鍛錬向きじゃねえっていつてたぞ」

すぐに立ち上がった冬獅郎がまた斬り込みに行くがまた飛ばされ尻餅を着く。

それでも諦めずに何度も立ち上がる

何度も

何度も何度も

砂を蹴りあげ維助の目を潰そうとする冬獅郎

だが、目を閉じた維助は冬獅郎の突きを避け懐に入り込むと刀身を首筋に添えた

「…参りました」

つとか細い声を出した冬獅郎

「うんうん、本当に一回生か？こりや一心なみに化けるなあ」

つと笑い声が聞こえる。

「決して…決して雑な攻撃でも弱い攻撃でもないのに。」

「赤子を相手しているようにみえたか？」

つと一心が驚いている乱菊に聞くと小さく頷く

天才と言われるだけはある、頭も使い的確な攻撃、力もあるし技術もある。

6 回生でも、死神でも負けるかもしれない程の実力を持っている冬獅郎だが、維助の前では赤子同然だった。

力も技術力も余裕も全てが上の存在。

見ているだけで、刀を交わしてもいけないのに分かる。

「今ので自分の何が悪かったか分かったか？」

維助の間に頷く冬獅郎

「躊躇ためらいいと、刀の受け流し」

「そうだな、竹刀とは違うだろう？ 躊躇いは初めは仕方ない。人に刀を向けて本気で斬るのなんて躊躇って当然だ。まあたまに躊躇いもなく斬る奴いるけど——まあ慣れだ慣れ、受け流しも一人でできるものじゃないだろ？ こうやって打ち合って学んで。経験値を積みめば強くなる」

「はっ」

「浦原隊長……ちゃんと講師してる」

「お前師範の事なんだと思ってるんだよ……まあ師範は口より身体で教え込むタイプだから

なあ。感覚型？ってやつだな、俺の時もひたすら殴り合い斬り合いだったし。あの人説明自体は下手だぞ」

階段を上がってくる2人。

「始解したら楽しみな。大きくなるぞこりや一心超えるかもな？」

つつ笑う維助がワシワシと冬獅郎を撫でる

「やめてくださいよ縁起でもない、まだまだ現役ですよ俺」

「……うん。なんだろうな、なんか違和感。冷たい霊圧……か。」

握って開いて手を確かめる。

戦ってる途中から冷たい冷気のようなものが空間を包んでいた。

「こりや始解喜助よりも早いかもな」

将来が楽しみだ

劍八という男の話

フラフラと碎蜂を連れて歩いていと
嫌な奴とすれ違う。

視線を逸らしてなるべく目を合わせないようにするが——
ブウンつと風を切り裂く音と共に

俺は碎蜂の首元にある刀を素手で抑える

たたりつと碎蜂が冷や汗を流すのが見えた。

「へっ、俺の刀を素手で抑えるか、そうじゃねえとなあ？」

「…なんのつもりだ更木劍八。俺の部下に手を出すな。その命いらないうて？」

「こうでもしねえとてめえは俺と戦わねえだろ」

「そこまで落ちたか？してもしなくてもお前とは戦わねえ」

更木劍八。俺と会うやいなやいきなり刀を振り回してきたイカれたやつ

会う度に刀を抜いてくるし予定とか全部パーになるから嫌いなんだこいつ。

「いいか？次俺の部下になにかして。お前じゃねえお前の部下を殺してやるから

な

こいつは脳筋に見えてそうでもない、きちんと部下思いだし

こういつた脅しは効く

「チツ」っと大きな舌打ちをした更木は刀を鞘に収めた。

「てめえ尸魂界一の剣術使いなんだろ、戦えよ。減るもんじゃねえしいだろうが」

「てめえと違って忙しいんだよばあーか」

「なつ、隊長に何言つてやがんだ！それとも何か？俺らの隊長に負けるからつて「やめとけ」

ハゲが俺に掴みかかろうとしたとこをハゲの襟首を掴んだ更木

「それ以上行くと斬られるぞ」

俺が刀に手を添えていたことに気づいていたらしい。

「はっ、隊長。そんな噂どうせこいつが作ったホラですよ。霊圧全然感じないし雑魚じゃないっすか。雑魚」

「よくみる、てめえあの腕についてんの見えねえのか」

「……」

ハゲは俺の腕——手首を凝視する。

「あれ隊長の…」

「はっ、俺のやつはこいつの霊圧制御装置を改善して作ったやつなんだよ、そう技術開発局のやつが言ってたの覚えてねえのか」

「…チツ」

「もういいか？俺忙しんだ」

つと踵を返そうとすると俺の前に立ち塞がる。

「そうはいかねえ、今日こそ斬り合ってもらうぜ」

「はあ…」

また話が振り出しに戻る。だから嫌なんだこいつ…

「碎蜂わるい、先に行つて説明してきてくれねえか」

「ですが維助様！このような者共は無視してよろしいかと…！」 つと碎蜂は碎蜂で熱くなっている

「大丈夫大丈夫、いやこいつらどこまでも着いてくるから…たのむわ」

「…」 碎蜂はハゲをギロツつと睨むと瞬歩で先に行つた。

「いいか？前忘れたのか。お前が一方的に暴れて始末書騒ぎになっただろ？てめえ学ばねえのか」

「始末書がなんだってんだ、戦えるなら何枚でも書いてやるよ」

「はあああ……」ここまで話を通じないやつだとは俺は顔を手で覆う。

「俺は正当な許可つてのはそれなりの価値と訳があると思うんだよ」

「はあ？ んだよいきなり」

「つまり、正当に総隊長に隊長同士の決闘許可を得てきたらいいって言うてんだ。許可を得てちゃんとした場所を用意してくるんだつたら斬り合つてやるよ。話はそれからだ」

どうせ無理だろ、なんて思つて俺はそのまま立ち去る——だが

「許可する」

「はっ……？ えつ、総隊長……いまなんと？」

俺は呼ばれて一番隊へそしたら、総隊長がそう俺に言った

「許可すると言つたのじゃ。更木剣八及び浦原維助の隊首決闘を許可する」

「まてまてまて！ 総隊長！ そりゃないって！ 普通断るだろ！ この前の暴れよう覚えて

ねえのか？一番隊ボロツボロになったろ!?俺がどれだけ神経すり減らしてあいつを避けてたと思ってるんだ!？」

「無論。被害を出したら相応の処罰をする」

「んな無茶な!!何を考えているんですか総隊長……!」

「大丈夫じゃ、勝ったからと言って剣八になる訳でもない。負けても地位を剥奪するこども無い」

「そういう問題じゃないって!はあああ……」

つと俺が項垂れてるとポンツと俺の肩に手を置く京楽隊長。

「楽しみにしてるよ。大丈夫大丈夫、院生の時に僕の斬魄刀切り落としたんだから。戦闘不能にすればいいんだよ?維助君なら大丈夫さ、被害を出さずに終わらせてきなさい」

「京楽隊長……あんた楽しんでねえ?」

「いいやあ?」

そう言った京楽隊長だが笑っている。

「はあ……」

「いいか？更木剣八。勝ち負けはしつかり決めよう。ルールを決めるんだ分かったか？」

「てめえ、その話何度目だ」

もう3回ぐらいかな？

俺と更木剣八は瀨霊廷端にあるバカ広い荒野で向かい合っている。

少し離れた崖上には数十人の隊士。何故か隊長も混じってる

惣右介とギンは暇なんか???

そして何故か卯ノ花隊長と京楽隊長、浮竹隊長まで。

「斬り合ってやるからには条件がある。許可は得てきちやったからそれはまあいい。お前は戦いを楽しむだろ？俺はそうでも無い！だから俺にメリットがないわけだ」

「あ？ああ…」

「だから、もし俺が勝ったら1年間の十一番隊の予算の半分を二番隊が貰い受ける」

そう言った瞬間十一番隊のやつらからヤジが飛んでくる。

「ああ、いいぜ、いくらでもくれてやる」

「隊長!!」

つとハゲが叫ぶ

「うるせえぞ、勝てばいいんだろ」

「ふつ、みんな聞いたよな？ 後でやっぱ無理とかはなしだから」

「ああ、二言はねえよ」

「よし、じゃールールだが決着がつかないことが一番問題だ。時間は今日の戌20の刻時まで、決着つかなかったら終わりな。斬魄刀が折れるか瀕死の状態になったら負け。それでどうだ？ ちょうど卯ノ花隊長もいる事だしギリギリまでは大丈夫だろ」

「はっ、いいぜそれとつとと始めようぜ!!」

俺の部下が開始の花火を上げる。

その瞬間——迷いもなく更木が急接近し俺に向かって刀を振り下ろす。

容赦ないなこいつ。瀕死ってわかってんのか。普通のやつなら今ので真つ二つだぞ。

「チツ」

俺が半分刀身を抜いた状態でそれを止めたからか舌打ちをする更木。

「さつさと終わらせねえと明日に響くんぞね！ 仕事が!!」

また斬りかかってくる更木。

だが俺は1歩足を下げ身をかがめ

——音を切り裂き誰も見えない刀身が

確かに更木の腹部を切り裂く……

だが、鮮血が舞うだけで更木は倒れない。

「およ、胴体を切り離れたはずだったけど……一歩後ろに避けたな」

「はっ……やるじゃねえか。何が瀕死だ？」

「その言葉そのまま返すぜ」

「あの子ら決闘って分かってるのかねえ。浮竹」

「はあ、京楽なんで止めなかったんだ。総隊長に話を通したのお前だろうか？」

崖の上で斬り合う彼らを見守る観戦者達

「だあーってずっと見たかったんだもん。更木剣八と浦原維助の決闘を……ねえ？卯ノ花隊長」

「はて、どうして私に振るのでしょうか。私は怪我人が出る事には賛成しておりませんよ」

「まあ四番隊の卯ノ花隊長はそうだよねえ」

含むような言い方に苦笑いをうかべる浮竹。

「にしても、維助君もなんだかんだ楽しんでるね。ほら薄ら笑いうかべてるよ」

「あの子はいつもああじゃないか？それにしても……ここにまで靈圧のぶつかる振動が響いてくるとは……」

剣を交わず度に、音と靈圧同士がぶつかり合うその余波が崖上まで響いていた。

耐えきれずに十一番隊隊士の何人かが泡を吹き倒れてるのが見える。

「にしても、維助君は全然傷が見当たらないな」

「靈圧硬化つてやつかね。靈圧の押し合いもそうだけど、彼は漏れ出る靈圧を自身に纏い鎧のように固めている、不意打ちでもない限りそうそう怪我しないよ。ここ数十年で更に硬度も上がってるらしいしね」

「おいおい、それじゃあ更木劍八は維助君を切れないってことか？」

「そうだね。今の更木劍八には——無理だろうね。どうも、維助君も酷いことをする。十一番隊の予算の半分だなんて、それにほら最初に腹部を切ったの、大量の出血を狙つてのことだろうし」

指を指す京楽、その瞬間ふらりと更木劍八が地面に倒れた。

腹部が開いた状態で動き回っていたのだ、貧血になってもおかしくは無い。なんなら重症である。

それを狙ってやったと京楽は確信していた

「卯ノ花隊長く!!」つと維助が手を振る

「院の時から思っていました、彼は面白い方ですね」

そう言つて駆け寄る卯ノ花隊長をみて京楽は地面に座る

「計算高いというか、なんとというか。彼は昔から怖いねえどうも、そうは思わないかい？
惣右介くん」

じつと決闘を見ていた惣右介に話をふる京楽

「はは、そうですね。十一番隊の牽制にもなり、予算も手に入る。はは彼は怖いより、面白いと僕は思いますけどね。」

ぺこりと頭を下げて踵を返す藍染とギン。

「どうも、これでまた維助君の実力を測れなくなつてしまつたね……
笠を深くかぶり立ち上がる京楽

十一番隊が崖から降りて駆け寄るのを横目にその場を去つた

入隊の話

「うはは、本当に予算が上乘せされてる」

俺は、Excel^{エクセル}もどきで予算の数字を見てテンションが上がっていた。

「維助様！あのような者共無視すれば宜しかったのに……！」

っと、怒ってる碎蜂に振り返る

「無視しても着いてくんだって、あいつがいつの間にか隊長になってた頃から絡まれてただろ？避け続けてるって言っても限度があつた、そろそろ何とかしないと入隊してたんだけども。まさか総隊長が決闘を許可するなんてなあ、俺は金が手に入ってうはうはだし」

「それでも維助様「失礼します!!」何用だ」

隊首室に現れた部下。

「はい、二番隊隊舎の門の前で十一番隊の隊士が暴れていまして……浦原維助をだせ！と……」

「はあ……何用かねえ……更木剣八はまだ卯ノ花隊長のところで療養中&監視で出れないはず……」

だし…俺は用ないんだけど」

「私が行つてきましようか」

「いや、いいよ。俺が行く」

俺は適当に羽織を肩にかけて立ち上がる。

全く、敵討かたきうちちかなにかか？

門の方に行くときゃーギョーと騒ぐ声が聞こえる

「いいからだせ！浦原維助をよオオオ!!」

「なりません。勝手に入らないでください」

つと冷静な俺の部下の声。

この声――

「ああ、やつぱりハゲか。」

「…あゝ？」

ビキツと、血管が切れる音が聞こえそうなほど青筋を立てた顔がこちらに向けられる。

暴れてるのはハゲで、俺の部下に抑えられ、その後ろにはオカツパ黒髪頭が

「君は…」

「僕は綾瀬川弓親は第五席。うちの一角がどうしてもって言うからついてきたのさ」

「ふうーん……とりあえず落ち着きなよ。なに？仇討ち？」

部下が手を離すと、俺の方を真つ直ぐみるハゲ

「ちげえよ、そういうんはうちの隊長が望むことでもねえし。男同士の正当な決闘だ、文句言うつもりもねえ」

へえ、意外だ。よくも隊長を!!みたいな感じで襲ってくると思っただけだ。

すると、バツつと頭を下げたハゲに驚く

「見た目と霊圧で判断して雑魚なんて言つてすんませんした浦原隊長。それを謝りに来たんだ。実際あんたは講師をしてる時から知つてて強い事も分かつてた。分かつてたのにうちの隊長よりは弱い、俺より弱いだなんて勝手に勝手に想像してたんだ。だから、あの決闘を見て実感した、実力も隠してた霊圧も何一つ敵わねえつて。」

顔を上げたハゲ、なんとというか真つ直ぐと言うか……

俺ですら忘れてたのにこいつは気にしてたらしい。

「いーよいーよ、別に。案外真面目だねえ〜君」

しばらく軽く話して帰って行つた2人。

十一番隊は更木がいたから徹底的に避けてたけど、案外ちゃんとしてるんだな。

「卒業おめでどうー！いやあ嬉しいよ」

「ありがとうございます！先生!!」

この度桃達の学年が卒業式を迎えた。

「いやあ…俺入隊試験落ちるかも…」と不安そうにしてた恋次も、2次試験そして最終まで無事に合格してちゃんと卒業できた。

特に特進学級の中でも、特に桃、恋次、イツルは放課後も勉強教えてとか、鍛錬をやる気満々だったたので俺も気にかけていたのだ。

うんうん、おめでどう！

「入隊は3人とも惣右介の所だっけ？」

「はい！私はずつと憧れてて…！浦原先生の所も迷ったんですけど…！」

「いーんだよ気を使うなって」

つて頭を撫でると本当ですよ！つて笑う桃。

「俺は隠密かつけーつて思ってたんすけど。二番隊は倍率高すぎて落ちちゃいました。」
つて頬をかく恋次。

「まあ、教え子だからつて鼻^{ひいき}根には出来ねえからなあ、そういうんは部下に任せてるんだ、悪いな」

「…それに阿散井くんは隠密には向いていないと思う」つと呟くイツルに、なんだと！つとキレる恋次。

「まあまあ、異動もできるからねえ。とりあえず惣右介の所でもまれてきなさいな」

それにしても惣右介が直々に生徒を隊に引き入れるなんて、珍しい事もあるもんだ。ここ数年で初めてじゃないか？

「ルキアは十三番隊の浮竹隊長の所だっけ？」

「はい、浦原先生。」

朽木家の養子となつたルキア。

ここ数年気にかけてはいたけど、クラスの友人関係や周りの視線が少し痛かつたようだ。

まあ俺は貴族生まれ貴族育ちつてのもあるから慣れてるもんだけど、ルキアからしたら周りの目が冷たくなつてることに敏感で対応の差なんかも違和感を感じるだろうな。流魂街出身の自分ならこういう対応をされたらどうか…なんて。

ルキアの頭を撫でると首を傾げる

「まあ、大丈夫さ俺は話したことないけど、十三番隊副隊長はいいやつだつて聞くし」
弟と一心からだけどな。

「浮竹隊長も優しくくていい人だから安心しな」

「はい…」

「どう、白哉坊ちゃんはお前の兄をやれてるか？」

「ええ、このような私を気にかけてくださいます」

「そうか、ならいいんだけど。白哉坊ちゃん口下手な所あるからさあ」

「誰が口下手か、師匠」

つと後ろから声が聞こえた。

「やべ」

そこには白哉坊ちゃんが冷たい目をして立っていた

「あれほど坊ちゃん呼びは」

「わかった！わかったってごめん！」

小言が始まる前に手を合わせて謝ると小さくため息を吐かれた

「そ、そういえば浦原先生。あの十一番隊と決闘をしたと耳にしたのですが、お怪我はなのですか？」

空気を变えようとしたルキアの話題。

「んでそんな情報入ったんだ…、ないよ怪我なんて」

なんで卒業生のルキアにそんな話入ったんだ？まじで疑問なんだが

「それは、兄様が…」

「えっ、お前見に来てなかったの？」

俺はついつい白哉坊ちゃんを見てしまう

「見に行く必要はあるまい。勝敗は既に決まっているようなものだった、師匠が負けるはずなどないのだから」

つとキツパリ言い放つ白哉坊ちゃん。

「はあ、信頼というかプレッシャーというか……まあいいや。怪我もなしで普通に勝てたよ。予算の半分もゲットしたし」

予算……？つと首を傾げたルキア。まあ汚い話だから黙っておこ

その後入隊式も終えて無事に教え子達は護廷十三隊入りを果たした。

「こうして話すのも久しぶりだな惣右介。」

「いつもギンがついてまわっていたからね」

「そういうギンは？」

「あの子はもう隊長だ、僕にいつも付いて回る事など出来はしないさ」
つとお猪口を傾ける惣右介。

久しぶりに俺の鼻^{ひいき}根^ねにしてる個室居酒屋で呑んでいるのだ。

もちろん盗聴防止の機械は取り付け済み。

「なあ惣右介、なんであの3人をお前^{みずか}自ら引き入れたんだ？」

「やっぱりそこに突っかかってくると思ったよ」

「いや、まあ別に反対してる訳でもないけどただただ疑問」

「使えるそう思ったからさ」

「ふうーん」

「おや、怒ると思ったんだが」と、こちらを見る惣右介。

惣右介がなにか企んでるのは知ってるし、それに巻き込まれようとしてる桃達だと、察しはついたけど。

「もうあの子らは卒業して生徒じゃない。もう立派な死神——一人前さ、俺が首を突っ込むことじゃない。自分の身は自分で守らなきゃな」

「へえ、一人前だった浦原喜助と四楓院夜一を気にかけていた君は他の人には冷たいんだね」

「それはそれ、これはこれ。弟と親友を思うのは当然だろう？もちろん桃達の心配を全くしてないわけじゃないさ。惣右介が何をしようとしてるのか知らんけど、桃達はもう俺が気遣う必要は無くなったってだけ。死神になる生徒をいちいち気にかけてたら俺がもたん」

「やはり君は君だったな、心の底では他人なんてどうでもいいだなんて考えているんだろっ？」

「俺をなんだと思ってるんだ…：そんなことねえよ、ちゃんと部下は思ってるし。ただ優先

順位があるだけだ」

俺をそんな冷血なやつだと思わないで欲しいんだが？

「ふっ……まあいいさ、君には頼みたいことがあつてね」

「なに？またモニター作れつて？あれもアノ貴族さんの目を盗んで——」「いやちがうさ、今回は監視用のものじゃない」

スっ——つと惣右介の目が細められた

「大気中の霊子を収束させ——刀に纏う」

「さて……それは……」

嘘だろ？これは阿近と喜助しか——。

「実に面白いものを作る。君の作った霊刀れいとう僕に出来ないか」

「嘘だろ——」

頭を抱えた話

俺は自室に入るなり頭を抱えた

「惣右介ええ…」

あいつ、本当俺の卍解といい霊刀といい…！どっからその情報を手に入れてんだ！
マジでストーカーじゃないかって疑うわ…

少し遡り

「いやいや、霊刀はあれはまだ実験段階で」

「ああ、完成したらでいい。完成までの費用はこちらが持とう。」

「いや、でもあれ相当危険だし」

「危険であると分かっているながら作っておいて、何を今更…？それに今も破壊しよう
とせずに試作品を作り続けているじゃないか」

「はあ…」

凶星をつかれて俺は机に伏せった

「死神にも有効打になるあの刀。欲しい輩が多いだろう？それに作った表向きの理由として流魂街の住民に――「まて！なんでそれを知ってる？」」

そこまで知ってるなんて流石に――　　っと思つたところでハツとして顔を上げる。

もしかして

「お前！大霊書回廊だいいいしよかいろうにはいつたな!？」

「ご名答。尸魂界の全ての事象・情報が強制集積される地下議事堂。君の試作品から完成品までの制作資料全て見させてもらったよ、実に興味深い」

俺は深くため息を吐く。

俺の資料に書いた流魂街の住民の為にって書いた企画資料も読んだわけね。だから理由も、霊刀のことも詳しく知ってた…と。

マジでバレたらやばいのによくやるわ…

「恐ろしい技術だ、本当に――。君の考えた設計図を元に作ってみたんだが失敗ばかりで成功品はひとつも作ることが出来なかった。」

「ふっ、そりゃ絵の書き方の本をみたって芸術家のように描けないのと一緒に設計図があつても技術がない。」

「そうだね、だから僕は君の技術をかつている。君のその創造欲を満たすために僕が手伝ってあげよう。」

——で、何も言えなくなり冒頭に戻る。

いやその通りなんだよなあ…企画書作って見たけど、どう考えても四十六室共が喜ぶようなものじゃないし…。

それはもうとつくの昔から思ってたけど、俺は作ってみたい完成させたいという気持ちでいっぱいだった…それを惣右介に見抜かれたんだ。

作る——か。いやでも流石に危険なものを…直接人に被害をもたらすものを惣右介に渡すのはちよつと——。

今まではスプーンとかメガネとかモニターとかだったからまだ日用品じゃん??（表向きは）

武器はなあア…

とりあえず保留にするとは言ってきたはいいもの…。

よし、作ってから考えよう。…一応こちらで制御できるように設定するか…。

また数年が経った

「入隊おめでとうー!冬獅郎!」

「…ありがとうございます、浦原先…浦原隊長」

つと身長はあまり伸びていない冬獅郎の頭を撫で回す。

ブスツとしながら俺の手を払う冬獅郎。

いやはや、あつという間に卒業してきやがった。

俺の予想通り始解をすぐに習得し、なんと最近は卍解を習得したというのだ。才能だ

なあ…

冬獅郎は俺が講義に来ると違う学年の担当だったとしてもどこからかその話を聞き付けて待ち伏せして毎回のように稽古を頼んできた。

やる気があつて大変よろしい！

そうしてその実力があるから10番隊の席官として入隊する事になった。

「おー！冬獅郎！お前が来てくれて嬉しいぜえ」

つと冬獅郎を高い高いする一心。

もちろん二番隊なら大歓迎とも言ったわけだけど、

「俺は隠密には向いていない」

つと言うことで断られてしまった。残念

桃達も惣右介のところでも実力を上げて席官になっているし。

「ない！ないないない……ない！！！！」

「い、維助様？」

俺は部屋中を漁りまくり部屋はぐちゃぐちゃに。

俺の声を聞いてか碎蜂が駆けつけてきた。

「ここ、ここに置いた刀知らないか？なんか、青い柄の……」

「青い柄……いいえ存じておりません」

つと首を横に振る

たしかに一昨日までこの壁に立てかけてあつて――

隊首室を勝手に入る奴はいないはず。碎蜂も嘘つくようなやつじゃないし……。

しかも霊刀だけ……？

そう……一昨日脱走者の捕縛任務で離れてて。今日戻ってきたら……無くなっていたのだ。

すると碎蜂が口を開いた

「あの……昨夜維助様どうして突然戻ってらしたのですか??」

「えっ?」

その言葉に振り向く。いや昨日は――

「昨日突然帰ってきてすぐに出ていってしまったので、なにか任務でのお忘れ物ならこ

の碎蜂に任せてくだされば宜しかったのに」

昨日戻ってきてなどいない…。まさか…まさか！

「ちよつとごめんな碎蜂！」

俺は誰にも聞こえないであろう場所に向かい電話をかける

ブルルル

ブルルル

“ 『はい、なにかな維助君』 ”

つと優しい声——だが

「てめえ…惣右介俺の霊刀取ったろ」

“ 『さて、分からないな…僕にそんなこと言われても…どこかになくしたんじゃないのかい？』 ”

「てめえしらばつくれるのか？はあ…お前。斬魄刀の能力使って俺に見せ掛けただろ？わざと俺に分かるようなやり方しやがって…」

“ 『ふつ。仕方がないさ、君は僕にくれる気はないのだろう？それは僕が悪用し、その道具が君のものだと分かったら色々困るからだ』 ”

「…だから盗んであげたって？」

“ 『ふふ、そうしてくれば君は動きやすい。盗まれたのだから仕方がない…つてね。』 ”

「…」

“ 『大丈夫さ、少し性能を確認したら返してあげよう』
そう言つて電話が切られた。

はアアア…

志波一心にとつての師範と消えた霊刀の話

俺は志波一心。

十番隊の末席に入隊した。

院の頃から始解が出来たということで人目置かれていて。

「一心はもう席官になれるなあ！それだけ実力あるんだからいけるだろ！」

「はは！なつてやるさ」

貴族の名しか見ない連中と違いちゃんとした同期や友人に恵まれてた――

そう…恵まれてたんだ。

自惚うぬぼれてた、始解も強くて鬼道もある程度できる。霊力にも自信あるし医療の心得もあるし…いつか上に立てる人間に――なんて…

「おい、起きろよ…！」

友人が血濡れて倒れる。雨のせいか血がぬかるんだ地面に広がっていく

周りには先輩や――席官までも…

俺らは虚討伐の班に配属されて、虚を倒す予定だった…予定だったのに。

「なんで…こんな強えんだよ！」

虚はケラケラ笑いながら俺の斬魄刀を避ける。

ようやく隙を狙い腕を切り落とす——はずだった

キーン

甲高い音が響いて俺の刀が弾き返される。

ドシヤツ…つと、ぬかるんだ地面にしりをつく…斬魄刀は飛ばされ後ろの木に刺さった。

ダメだ…だめだ、背中を向けたら死ぬ…

死ぬ…??

こんなに——俺は弱かったのか…手も足も出ずに、自分の力を過信して…。

——ああ、俺死ぬのか

「待たせたね」

ザンツつという斬撃音と共に

——空が晴れた

珍しい髪色の男が俺の方を振り返り

淡い空色の瞳が細められ、男の背後で虚が塵になつて消えていく

かつこいいい…素直にそう思った。

誰も手も足も出ずに傷一つ付けられなかった虚を一刀両断し天をも切り裂いた。

俺に手を差し伸べる男。

俺は咄嗟に聞いてしまった。

「あんたの…名は？」

キョトンつと首を傾げた男はふつと笑つた

「俺は浦原——浦原維助」

「うらはら…いすけ」

幸い死人はおらず、四番隊で治療を受けた俺ら

俺はあれから一週間検査をされて退院できることになった。

「うらはら…いすけ」

忘れぬように口で呟くと。

「あら、浦原維助がどうかしましたか？」

つと優しい声で問われた。この人は確か…四番隊隊長の卯ノ花隊長。

「いえ…、助けられて…」

「あら、そうでしたか…ならば二番隊に行くといいですよ。彼は二番隊第四席ですから」

「二番隊…」

二番隊はたしか隠密機動の隊だった…よな？

「よし！」

「あら、どこに行くのですか？」

「弟子入りしてきます!!」

俺は走って二番隊に向かった

「あらあら…」

つとと言う声は聞こえなかった

二番隊の門…

1歩踏み出した瞬間に首筋に刀が添えられる

「一般隊士が何用ですか」

「門番か…」

そりや情報機密を扱つてる所だ、そりやいるよな

「頼みます、俺は浦原維助に用があつて来た」

「今浦原四席は不在です。お引き取りください」

「お願いします！浦原維助を出してください！」

「ですから浦原四席は不在で…」

「お願いします!!浦原維助をだしてください!!」

暴れる俺を羽交い締めにする、だが俺は諦めない——絶対に弟子入りする!!

つて興奮状態になっていると

「はーい、解散解散」

つと…声がした、あの時の声。間違いない。

隊士をかき分けて来たのはやはりあの男で。

「んで何用だっけ」

つと俺のことは忘れていたようだった。

「弟子にしてください!!」

「ええ」

つと、あからさまに嫌そうな顔で後頭部を搔く

それから断られても1週間待ち伏せして、その度に

「お願いします!弟子にしてください!!」

つと懇願しまくった。

ため息を吐いた浦原維助は

「分かった。お前が満足するまで付き合っただけでやるけど、俺は言った通りあんまり時間がない半分は弟が相手すると思うけどそれでいいな? 幼い頃から俺と戦ってる弟だから弱くはないよ」

つと: : : ようやく承諾してくれたのだ。

嬉しかった: : : 心の底から

「本当ですか!! ありがとうございます!! ぎいます師範!!」

それからは弟という浦原喜助。彼に俺の癖を直してもらった。

刀が振りやすく軽い力で斬れる形に直して貰いその型を崩さぬように素振りをする。

「俺が教えるのは『受け身』『避け方』『攻撃』『反撃』」

全て模擬戦で叩き込む。後は適当に必殺技作ろう」

「は、い、い！」

俺は斬魄刀、対して師範は木刀。

最初は戸惑ったし躊躇した。けれど彼なら大丈夫だろうという何かそういう確信があった。

それからは地獄だった、打ち合って打ち合って打ち合って、

殴られ殴られ、吹き飛ばされて

身体中が痛かった。胃の中がからになるほどに吐くほどに体力は限界を迎えて次の日もまたその繰り返し。

「はい、しんだー」

つと何度目かの宣告。

首筋には木刀が添えられている

「もう一度！」

「そ、う、く、なくちや」

本当にその細身のどこから力が出ているのか不思議なぐらいに強かった、型は確かに自己流だけど、それが更に厄介だった。

読めない太刀筋、たまにフェイントも入れてくるし少しでも思考がそれに引っ張られ

ると腹に蹴りが入る。

だが続けているうちに受け身からの立て直しが早くなるのを感じる。

ああ、こうすれば痛くないしすぐに反撃できる。

思考を逸らすな、真つ直ぐ敵を――。

剣術の他に白打を学んだ、つと言っても殴り合い蹴り合い。

俺は全然当てられなく逆に俺の顔は痣だらけ

「せい!!」

全身全霊を込めた拳もパシツと受け止められたかと思うと、

腕を引つ張られて足を引つかけ腕を捻じ上げられて俺は地面に沈む。

相手の勢いと力を利用して沈める技。俺もできるようになりたいな…

「鬼痛デコピン…!!いいですね師範!かっこよくてわかりやすい!」

「だろだろ?」

必殺技を作れと言われて考えて末に、霊圧を一点に収束させ手放つデコピンの技を作った。

不意打ちとして有効で虚を倒すことも出来た。

鬼道も浦原喜助から学び、俺は確実に強くなった。

だが過信はしない：俺はまだまだ、そう思うよあの天を割くような彼のようになりたいと。

そういう俺も末席から副隊長、隊長に昇進した。師範は隊長になっていた。

「死なない為に死ぬほど努力する。」

「死なない為に死ぬほど準備する」

そう浦原維助と浦原喜助は俺にそう言っていた。

さすがは兄弟だ：って思ったね。

特に維助師範は口癖のように言っていた。

汗ひとつ流さずにまたいつものように俺をのした師範は口を開く

「死なない為に死なないように努力する。俺が大切な人を守れなかつた時、きつと後悔する。あの時俺が——ってな、そんなのは嫌なんだよ」

強く木刀を握りしめる師範。

部下からの信頼は高くおちやらけている時もあるがやる時はやる男。

ああ、かつこいい。

いつも思う、この人の弟子になれて俺は幸せだ。

浦原喜助から聞いた話だと、師範は昔からガラクタ集めるのが好きでそれを合体させて動くカラクリを作ったりしてたそうさ。何でもロボット？って物が部屋の中のゴミを自動で片付けてくれるらしい。

そんな師範が作った伝令神機。副隊長時代に作ったそのカラクリは目を張るものだった。

どうして触れてるだけなのに中の映像が動くのだろうか…。

配られた時は正直扱いに困ったが使い続けられればなるもので今では院でも扱い方を学ぶ講義があるそうさ。

「隊長は浦原維助隊長の事をどう思ってるんですか？」

そう冬獅郎に聞かれた

「そりゃ尊敬するすげえお方だよ。俺は死ぬほど彼に鍛えられて俺は強くなった。これからも強くなれると思う。師範のようになりてえっていつも思ってるよ。ってあれ!!? 俺の饅頭は!?!」

棚にしまっていたはずの饅頭がなく慌てると

「饅頭なんてどうでもいいでしょう?」馳走様でしたよ」

「お前かよ!! やつぱりな!!」

「それより2ヶ月前の鳴木市の担当死神が事故死した件で——先月分の担当死神も死亡
しています」

「……!」

流石に偶然とは考えにくい。なにか起きている…?

縁側から飛び降りると師範が歩いてきた

「師範」

「ん? どうした慌てて…」

「…いいえ、少し出てきます! 明後日ぐらいには戻ってきます—!」

つと冬獅郎と乱菊に仕事を押付け師範と別れて現世に向かった。

「雨の日がやばいのかあ〜」

つと現世の担当死神に呑気に話して安心させる。

雨。

死神自体が標的か、はたまた霊圧に寄せられてるのか

試しにつと、抑えてた霊圧を解放する。

「ぐああああ!!!」

「っー」

くそ……！霊圧のデカさに反応したのか？

悲鳴とともに下では無惨に殺された隊士が。

いつの間にか真つ黒な虚が俺の前にいた。

穴はふさがっているが霊圧は虚で間違いない

ただなんだ……？この妙な感じ……

それに――。

つとなにか引つかかる違和感に眉をひそめていると

青い刀と俺の斬魄刀が甲高い音を響かせる

「……！！！！なんだ……その刀！！」

青い霊子がグルグルと刀を纏っている。

俺の漏れ出る霊圧を吸収している……？

すぐに刀を弾いて距離をとると吸収はされなかった。触れると吸収するのか？

なんだあの刀は……！

「それにその鏢……！！！！」

違和感の正体がわかった。

その鏢の形は――師範の斬魄刀と同じ形をしていた

女の子が俺を助けた。

だが弓のようなものを消した彼女に虚は向かっていく

「ばっ…なにを!!」

まるで誘い込むようにして手を伸ばした彼女に虚は歯を肩に食い込ませ、青い刀を彼女の腕に突き刺した。

その瞬間彼女は

「捕まえた」

そう言つて虚の脳天を貫く…

だが自爆しそうな虚が膨らみ、まずいと思つた俺はそれを防ぐ

俺は地面で血濡れになっていた

「私は…黒崎真咲…滅却師です」

「そうか…滅却師か、はじめてみたなあ」

「ぐっ…」

彼女は刀を腕から抜こうとするが

「ばっ、そんな無茶に抜いたら…!」

つて思つてると刀がまるで今までそこになかったかのように

——消滅した

消滅……？いや……？ちがう吸収された……？

でも彼女から何も感じないし……

俺はそのまま尸魂界に帰還した。

「報告は以上です」

「あいわかった、無断出撃は罪なれど、即断速攻は隊士の犠牲は最小限に収められた、よって、こたびの隊規違反は不問とする」

俺は謎の虚のみの報告をした。

滅却師の事も、師範のにた刀のことも言わなかった。

「……」

滅却師の生き残りがいるって本当だったんだな。

「さて、礼にでも行ってくるかね」

ぽっかり胸に穴が空いて、それはまるで虚のようになった彼女をみた……白髪の男に抱えられて

言い争っている

「やめましよう、ここで争ってる時間は無い」

懐かしい声でした

「あんた……」

だいぶ老けているがああ髪と雰囲気は――。

「話は後ツスよ志波サン」

ぐちゃぐちゃと長つたらしい説明がされた。

虚化とかよくわかんねえ……！

特殊義骸に入れば死神と人間の中間の存在になれ、彼女の相反するものになる

半分以上頭に入らなかったが。

つまりは――

「俺が傍でずつと守ってればいいんだろ？やるよ！やるってんだ！」

「未練は……ないんスね？」

「未練ないわけないだろ！タラタラよ！師範を超える夢だつてあつた、けどそれがなん
だつてんだ。未練に足を引っ張られ恩人を見殺しにした俺を明日の俺は笑うだろうぜ」

「ふへへへ」

なんだかふわふわと笑う彼女。

「おふたりの魂魄の結合に成功しました、もう大丈夫ツス」

つと浦原が言った。

良かった、良かった——。

「あつ、そうだ、あんたの斬魄刀。見せてくれねえか？」

「…なんスか急に」

つと言いつつ始解斬魄刀を渡してもらい受け取る

「うーん」

やっぱり似てるけど、違うな。やっぱり浦原喜助の鏢じやない

「なあ、滅却師って刀を使うのか？」

「なんなんスか？本当に…アタシの知る限り弓しか知らないですなえ」

「そうだよなあ…なんか霊圧を吸い取る…いや霊子を吸い取ったような刀を使つてたんだよ虚が、その性質が滅却師になつてよ」

「虚が…？それどんな刀でした？」

「刀自体は直刃すくはの平巻の打刀で…鏢は——師範のものと似ていた」

「…」

スツツと目を細める浦原に首を傾げる

「そうツスカ、多分見間違いでしよう、兄サンの刀は乱刃模様ですし」

「うーん、そうか、そうだよなあ」

「……その刀はどこに？」

「いや、この子の腕に刺さったと思ったたら消えちまったんだよ。何も残らずに」

「……」

顎に手を当てて考え込む浦原。

「まつ、とりあえず今日はここで休んでください。刀の件はアタシが調べておきます」

「お、おう」

「……」

2人が寝静まったのを確認して僕　ボクは電話をかけた

ワンコールで出た――兄

“ 『なんだよ、喜助からなんて珍しいな？』 ”

「兄サン。あの刀……藍染サンにあげたんスか」

“ 『……』 ”

兄は黙ったままだった

「兄サン。今回一心サンは死神じゃなくなりました。そつちでも恐らく事故という形で処理されることでしょう。」

“ 『それどういう事だ？』 ”

ボクは詳細を話す。

すると兄サンの事情も話してくれた。

「つて…事です。兄サンの霊刀を持っていた…と、それが消えたと言うんス」

“ 『…消える？消えるだつて？そんな機能つけた覚えねえよ？』 ”

「そうなんスか…藍染サンが改造した可能性も…」

“ 『消えるね…うーん…証拠を残さないため…とか…？』 ”

「あるいは…虚の力と結合した——」

ため息が電話越しに聞こえた

“ 『わりい…俺、やべえもん作ったかも。』 ”

「何を今更」

今更だ、ことわり理に干渉するものを作ったりしておいて——。

“ 『喜助。俺最近やべえんだよ』 ”

「はい？」

“ 『作りたくて…作りたくて仕方ねえんだ。理に干渉するものも作れる、魂魄に干渉

できる物も——俺は——』”

「兄サン……いいんす。ボクも似たようなもんすから……」

“『今回、盗まれた霊刀、取り返そうとすれば取り返せた……けれど、俺はそうしなかった……きつと俺は藍染よりも黒い。よっぽどどす黒い……俺の機械で、誰かがどうなるのか見たかったんだ——』”
“そういう気持ちがあつたから取り返さなかつた……俺はきつと心の底では藍染に期待してたんだ。だからあいつを止めれないし……お前らを助けられなかつた。』”

「兄サン。今回一心サンが死神じゃなくなつたのは兄サンのせいではなく虚化のせい。でも……次は——」

“『ああ、次は俺が……誰かを殺すかもしれない。』”

なあ……喜助、俺はもしかしたら敵になるかもしれない

喜助、もしそういうことになれば——』”

「…無理ッスよ…兄さん」

切れた伝令神機を持つ手の力が抜ける

——もしそういうことがあれば

俺を殺せ喜助

浦原維助という男の話

「あれから一〇〇年ぐらい……か？」

夜一さんが居なくなつてからもうそんな経つのか。

夜一さん、尸魂界は変わったよ。

伝令神機械で決済できるようになつたんだぜ？ ついに

たまにちよつと変な機械作つて四十六室に怒られる時もあるけど……

喜助から元気だとは聞いているよ。けど——つて俺が突き放しといて何言つてんだかつて感じだよな。

俺は歴史を作つてるよ、涅にぶつくさ言われてるけど。

あいつらは義骸とか同調剤とかそういう薬系が凄いだよ。俺は無理。機械系は任せてもらつてるけどな。

あ、それで俺が作ったのは

新型伝令神機に虚探知機だろ、記憶置換装置に簡易結界装置、鬼道砲に、つて説明してたら日が暮れるな……

俺はあんたの跡を継いで忙しい中頑張ってるよ。

いつかまたここに来ることがあったら驚くぞお？

なあ夜一さん。あんたは今——何してるんだろ？

名は浦原維助

そこから辺の隊士は

「浦原維助？知らんやつはおらんよ先生の事だろ？」

霊術院特別講師

副官は

「維助様は聡明な方だ、ああ維助様この碎蜂一生ついていきます」

二番隊隊長

隠密機動総司令官

五番隊副隊長は

「先生？先生はとつても凄い人だよ

伝令神機を作ったんだから、他にも」

——機械技師

五番隊長長は

「浦原維助？ああ、僕の大切な友人さ気さくでいい奴だよ」

——交友関係も広い

八番隊長長は

「彼はどうもお酒が強いからねえ、一度倒れるぐらい吞ませてあげたいな。女の趣味もいいよオ」

——巨乳好き

十番隊長長は

「俺はあの人に勝てたことがない。尸魂界一の——」

——剣の達人

「んで、何書いてんだよ恋次」

「うわっ!」

「うわじゃねえよ」

一生懸命伝令神機に打ち込んでいるのを後ろから覗き込むと

そこにはびっしりと俺の事について書かれていた。

「恋次おまえ…」

「いや違うんすよ!!これは…その、実は…頼まれて」

「頼まれたア?誰に」

「その… 檜佐木さんに…」

「はあ…察したわ」

胡散臭い!?あの浦原維助に迫る

「んだよ、このタイトルぶち殺すぞ」

「俺に言われても…」

瀨靈廷通信、檜佐木が編集している通信簿みたいなやつ。

伝令神機
デジタル、アナログで読める

「うれしいっていうか恥ずかしいけど、俺これでも隠密機動なんだぜ?隠密。あんま情

報が乗るのはなあ…」

「何いってんすか…瀨靈廷であんたの名前知らない奴いんですよ」

っと呆れたような目を向けられる。

「あ、そうそう、そういえばおめでとう恋次副隊長！ようやくだなあ」

「あざっす！」

「桃達が先に副隊長になった時焦ってたもんなあ」

「これも先生と隊長のおかげです!!いやあ俺いつか先生みたいになりてえなあ！剣一つで全てをぶった斬る！かああー！男つて感じ！」

「それ拳ひとつじゃねえ…？まあいいやそれより…ルキアが現世任務になったぞ？連絡しなくていいのか、馴染みだろ？」

「ふっ、いいんですよ、帰ってきたら驚かせてやるんで！」

「ふっ、そうじゃなきゃなー！ルキア早く帰ってくるといいな。俺白哉坊ちゃんに頼まれてさ、門まで送ってやったんだけど緋真ちゃんが泣いて泣いて…たった1ヶ月なものな」

「朽木隊長の奥さんでしたよね、はは、相変わらずっすねー」

——現世——

春の気持ちいい風が頬を撫でる

真っ白なシーツ

ひらりと桜の花がシーツの上に舞い落ちた

「おふくろ、今日もいい天気だぜ」

近くのパイプ椅子に座ったオレンジ髪の男

近くの花瓶には新しい花が生けられている

「明日入学式なんだ、俺ももう高校生…早いな…つてなんかおじさんみてえだ。」

ベットの上で眠った女性は固く目を閉ざしているが、ふと笑ったような気もした。

「おーい、一護帰るぞ〜」

つと顔をのぞかせた髭親父

「んだよ親父。もうちよつと話させてくれよ」

「寿司屋予約してんだよ寿司屋!」

「あ? 珍しいな寿司なんて…回転寿司か?」

バックを手にして立ち上がる一護

「んなわけねえだろ! お前の入学祝いにある恩人が無料券をくれたのよ」

「ああ、俺の中学の時もあったな…俺会ったことねえけど」

「遠いところに住んでんだよ、会えないぐらいに、早くしろよ遊子も夏梨も先車乗つてるぞ。」

行ってくるねえ〜!! 真咲いいい〜!!」

「早くしろよ！さっきも2時間ぐらいおふくろと話してたら」

グイグイツと肩を押して扉からどかす一護

「あつ、ちよ押すなつて!!」

パタンツと静かに扉が閉まった

「なるほど…強い魄動はくどうを感じられる」

ふわりと現世に降り立つ死神——名を朽木ルキア

死神代行編
現世編始動

「なんだよ、その…伝令神機つての。携帯に似てるけど…なんだすげえな」

「ふん一護のくせにこれの凄さがわかるのか！これは写真が撮れてなんと壁に映像を映す事もできるのだ!!」

「霊刀…それは貴方の魂と統合した力。少し性能は変わってるようツスけど」

「霊刀…それってなんだよ、斬魄刀とはちげえのかよ」

「のう喜助、維助は…今頃どうしてるんじゃないかな」

「さて…兄サンの事です上手くやってるでしょう」

「はは！御用改である！言ってみたかったんだよなあ！！脱走者共お縄につきやがれ」
「維助様！！流石です！！」

「二番隊はバカの集まりだヨ…」

「こら、紫流^{しりゅう}。白哉様を困らせてはダメよ？」

「もう俺そんな歳じゃねえってもう死神だぜ？」

「いいッスか、黒崎サン。浦原維助、彼には気をつけてください。もし出会うことがあれば逃亡一択。決して戦おうとしないように」

「浦原…それって…！」

「彼は尸魂界一の技術者で剣の達人。

そしてアタシの実の兄ッス」

「さあ答えを聞こう浦原維助」私の友人」

「俺は」

原作開始

紫流という子供の話

——身長152cm

生を受けて約17年。死神ではまだまだ成長途中の子供。

名は

朽木紫流
くちきしりゆう

2年という速さで院を卒業し六番隊に入隊

「なあ、お師匠さん。うちのとーちゃんをアツ!!つと言わせるような物ねえの? ほらへ
じとかびつくり箱とか」

「子供か」

つと突つ込むと違い!つとムキになる紫流

白哉坊ちゃんと緋真ちゃんの実の息子である。

それはそれは大変だった、緋真ちゃんは身体が弱いためもしかしたら——つとやばい

状況にもなったが何とか無事に産まれてくれた紫流。

すすく育ちルキアも甥っ子が出来たと喜んでいた。

そんな紫流は反抗期真っ盛り、白哉坊ちゃんに反抗しまくりで他の隊士にも反抗しまくってる。

「あと、お前の師匠じゃねえのにお師匠さん呼びすんな、浦原隊長だろ？」

「いーんだよお師匠さんはお師匠さんで。昔からそう聞いてたからなんか浦原ってしつくり来ねえんだよ」

「なんだよその理屈…あつほら迎えに来たぞ」

「つたく、紫流てめえ朽木隊長を困らせんな。」

やってきたのは恋次で、俺が内緒でメールを送っておいた。

恋次は紫流の世話係みたいな感じで口下手の坊ちゃんの代わりに心の内を通訳したり、暴れる紫流を止めたりとかまあ…苦労してるみたい。

「うるせえ恋次！いいか！俺は次期隊長だぞ！紫流様と呼べ！」

「誰が呼ぶか。いいか死神になって席官になったらもう貴族とか関係ねえ、上は上なんだよ敬語を使え敬語を!!特に先生になんつー口聞いてんだ!」

ポカッ!つと頭を叩く恋次

「いっつてええええ!何すんだよ!あつおい!離せ!!ばーか!」

「クソガキ!!髪引つ張んなー!」

米担ぎした恋次と暴れる紫流。

「ばいばい」

「世話になりました。先生」

一礼して去っていく恋次。

まあ反抗期過ぎるのは白哉坊ちゃんの口下手が原因なのかも。

白哉坊ちゃんは隊長&当主として忙しくあまり紫流に構ってあげてなかったらしい。

「父ちゃんは、俺が入隊しても早く卒業しても当たり前だって言うように褒めてくねえんだ。『そうか』の一言だけ?俺いつか見返してやる」

つと言っていた紫流。

まあ人の家庭にズカズカと土足で入り込む訳にも行かないから見守るしかないんだけど、白哉坊ちゃんは少し言い方考えればなあ。

プルルルルつと電話が鳴って懐から取り出す。

ピッ

“ 『あつ、兄サンうちよつと仕入れたいものがありました』 ”

「あー、なに?注文入ったの?」

通話先は俺の弟、闇商人みたいな事を始めて弟ながらちよつとよくわかんないけど

兄をこき使うあたりはさすがと言える。

“ 『記換神機と、伝令神機の予備バッテリー。それからソウル*キャンディと——』 ”

「はいはい、分かった。AIロボに送らせるわ。んで伝令神機の予備バッテリーが必要なんだ？ 伝令神機の充電は霊力だから要らねえだろ。」

“ 『いやあちよつと霊力回復中の死神がいますてえ〜』 ”

「あー、なるほどね。分かったすぐに送らせる」

“ 『兄サン1つお願いが』 ”

「なんだよ」

“ 『朽木ルキア。彼女の伝令神機追尾機能を消してくれませんか？』 ”

「……………お前」

“ 『よろしくお願いしますねー』 ”

つと言つて切られる。

霊力の無い死神……………伝令神機追尾機能持っている死神が何処にいるか感知するいわゆるGPS機能を消せだつて？

何を考えてるんだ……………それにルキアが……………？

喜助には何か考えがあるのか。俺に訳を話さないなら止められるかと思ったのか……………。

仕方ない、何か問題起きたら俺が対処するか

「朽木ルキアが行方不明？」

「はっ、四十六室と映像庁綱彌代家を取り仕切る監視機関より。朽木ルキアの消息と連絡が途絶えたとの事で、伝令神機追尾の搜索依頼と隠密機動での搜索を……とのお達しが」

つと部下からの報告を受ける。

……………朽木ルキアが行方不明。

死神が補足できなくなるとは……死んだ訳では無いな死んだら死んだで映像庁が死神ひとりに動くことは無い。

急に補足できなくなったから隠密に依頼した……。

そして喜助も絡んでいる――。

れいあつしやだんがきが
霊圧遮断型義骸……か？

霊子を含まない喜助が作った義骸。それなら補足できない理由も分かる。

喜助も喜助で説明しない時はしないで察してくれスタンスだからめんどい所あるよなあ……。

いざ説明すると長いし。

つまり喜助はルキアに何かしたから、GPSを切ってしばらく匿えるように何とかし

とけつて事なんだろうな。

「軍団長閣下？」

つと部下の声で思考から現実世界に戻される

「ああ、分かった。その件は俺がやる。指示があるまで待機するように」

……喜助。何するか知らんがあまり時間は取れないぞ

現世

アギヤアアアアギヤアアア

「ぬわアアアー!!うるせえー」

叫び声のような悲鳴にバツ!!つと起き上がる一護

スパンっ!!つと襖が開くとルキアが手袋のようなもので一護の魂を抜く

「一護虚だ!行くぞ」

黒崎一護。朽木ルキアにより死神の力を授けられた

死神代行。

夜中の街を死神の姿で走りながら文句を垂れる

「大体!うるせえんだよそれ!んだよその鳴き声!」

「虚感知機能だ!虚が出現する前の魄動を感じ取り事前に知らせてくれる機能だ!この機能のおかげでどれほどの死神と魂魄が助かったと思っておる!」

「ちげーよそういうん言つてんじゃねえ！うるせえつてんだ！音量！音量何とか出来ねえのか！」

虚を倒した後馬鹿でかい刀を背中に背負う一護は一息ついた

「大体、その板どうなつてんだ？」

「ふふん。凄いであろう？ほら」

ドヤツとでも効果音がつきそうな顔をしたルキアは一護にカメラを向けパシャツ

つと写真を撮った

「すげえな、写真撮れんのか板で……つてなんか出てきたぞ？」

ウーンつと音がしたと思えば

画面が浮き上がりそれは紙のような質感になった。

それを慣れたように捲り取り出すルキア

「ほれ、こーうやって印刷ができるのだ！」

つと写真を手渡したルキア。

高画質の写真でまるで空間をそのまま切り取ったかのようで、

暗いはずなのにフラッシュも炊いていないのに明るく仕上がっていた。

「なっ……」

あまりの未来感に驚愕する一護。

一体どうなっているのか……。それに尸魂界つてのはそんなに未来感溢れる世界なのかと少し少年心がドキッと高鳴る。

「そ、尸魂界つてのはすげえんだな……。あれか？空を飛ぶ車があるのか……。？」

「車……。あの走っている鉄の塊か！いや……。ああいう人が乗るようなものはないな。なにかふよふよした箱のようなものが空を飛んでおるぞ、偵察用無人機という名だ！」

「箱が空を……。??？」

？マークが頭に浮かぶ一護。

箱が空を飛ぶとは全然想像がつかない。

——翌朝、ルキアは浦原商店に来ていた

「浦原はおるか」

玄関口を勝手に開けてそう問えば

「はああい、いらつしやい朽木サン」

欠伸をしながら下駄を履く浦原喜助。

「……………」

ジツつと浦原の顔を見つめるルキア

「やはり先生に似ておるな……本当に血縁じゃないのか？」

「そうツスよくよく間違えられるんすよねえ〜！ 苗字も一緒だなんて偶然偶然」

つと言いなながら箱を取り出す

「ふむ……まあ血縁者がおるとは聞いたことが……ないな。まあ私が聞かなかつただけか

もしれぬが、あの方の血縁者がこんな貧相な場所で商売しているはずはないしな」

「はは、貧相つて……その人はどんな方なんです？」

「先生はすごいお方だ、隊士の関わりは無いが面倒を見てもらつておる。」

「へえ、すごい人なんすね」

当然とでも言うようにふふんつと鼻を鳴らす。

「それより、注文してたものはまだか」

「はいはい、ちょうど昨日届きましたよん」

また一方その頃。

「はああああ!!紫流が行方不明!!」

白哉坊ちゃん俺のところに来て伝令神機の追跡機能を使って探して欲しいと依頼が来て。

「うーん、尸魂界内にいるけどなあ……でも……ん？」

モニターに映し出された位置情報は段々こちらに近寄ってきていて

「隊長ー！これ紫流の伝令神機!!」

つと恋次が紫の伝令神機片手に走ってきて俺は頭を抱えた

「あいつ、置いてきやがったな……ちよつと待ってろ」

俺は直ぐに阿近に電話をかける

「『はい、阿近です』」

「隠密機動総司令官権限で、断界通行記録を今すぐ調べろ、名は朽木紫流」

「『分かりました、少々お待ちください。おい！因幡いなば！すぐに――』」

で阿近の指示する声が聞こえる。

「『お電話変わりました、因幡です。えー。朽木紫流の断界通行記録が見つかりまし

た。昨日の正午に通行したという記録が残っています。』」

断界の専門らしい因幡の話を聞く。

やっぱ俺の想像通り断界通つたらしい

「場所は？」

“ 『空座町二丁目の上空です』 ”

「あんのやんちや坊主……!!」

逃亡した紫流の話

また虚を片付けた時嫌な感じがして咄嗟に頭を下げると

真上をブウン!!と風を斬る音を立てて何かが通り過ぎる。

パラパラと自分のオレンジ髪が地面に落ちたのを見て冷や汗が流れる

「何すんだ!!てめえ!」

咄嗟に振り向くと

「ありや?」つと首を傾げた子供

「お前……死覇装!」

意外と身長が低くて驚くが、キョトンとしたその子供の服は確かに死覇装を着ていた

「そーだよ、今更?つてか誰?」

「こつちのセリフだ!!!」

「うるさ」

つとわざとらしく耳を塞ぐのをみてイラツつとする

「なんなんだてめえはいきなり!名も名乗らずに刀振り回しやがつてあぶねえだろ!」

「あん？てめえ俺の事知らねえのか！泣く子も黙る俺は護廷十三隊六番隊、次期隊長！！
朽木紫流だ！！」

「朽木……!?!」

「はん！やつぱり朽木の名を聞いて怖気付いたか！謝るなら今だぞー！」

「んだよ、ルキアの兄弟かなにかかよ、んなら最初からそう言えよ」

頭をかいた一護はため息を吐く

「んでルキアおばさん呼び捨て……つておい！持ち上げるな！ギャアアー!!」

ひよいつと肩に担いで猛スピードで走る。一護に悲鳴を上げる紫流。

あつという間に家に着き、

「あつもう帰ってきたのかよ」

つと自分の体が起き上がる。

名はコン。改造魂魄で色々事件はあったものの、なんだかんだ住まわせてる住人。

普段はぬいぐるみに入れている。

「どひゃあー！」

ポイツとベッドに下ろすと顎からベッドに落ちた紫流

「何しやがる！派手髪野郎！」

「おいルキア！お前の知り合いが来たぞー！」

スパンっ！つと襖が開きルキアが顔を出すと目を見開く

「なっ、紫流？何故ここに！」

「ルキア叔母さん！んでこんな派手髪の所に……もしかして彼s「断じて違う！」なんだよ」

つとルキアに遮られてつまらそうにした紫流は足を組む

「叔母さん……？甥っ子か？」

「ああ、兄様と姉様の息子だ」

近親婚……？っと思つたがさすがに口にはしなかつた。

「んでその甥っ子がなんでこんなところにいんだよ、そもそもなんでおれに刀振った！」

「いやだつて珍しい髪を見たら斬りかかりたくなるじゃん」

何を当たり前なというように首を傾げる

「なんねえよどんな教育してんだ」

つとすかさず突っ込む。

「ズラかなつて思つてさ」

「ちげえよ地毛だよ地毛！」

グイッと自分の髪を引つ張り見せるが、ふーんつと今度は興味無さそうに鼻を鳴らす

マイペースにも程がある

「紫流、そもそもどうしたのだ貴様はまだ現世任務に配属されておらぬだろう」

「勝手に来た！」

「馬鹿者！兄様と姉様に心配をかけるな！」

「んでだよ！俺だつてもう一人前の死神だぞ！それに父ちゃんが俺の心配なんかするかよ」

つーんとそっぽを向く紫流

「いいか、紫流はまだ知らぬかもしれぬが無断で現世に来た場合隠密機動が動く。紫流伝令神機は持つてきたのか？」

「持つてくるわけないじゃん追尾機能ついてるから置いてきた」

つて言つた紫流に顔を真っ青にする

「貴様……！本当に違反者になるぞ！兄様にどれだけの——」

「みんなして！父ちゃん父ちゃんうるせえ！俺は俺だ！！俺だつて1人でなんでも出来るんだ！それを証明しに来たんだよ！！」

つと怒鳴る紫流に言葉がつかえたルキア

「俺自身を見てくれるのは……お師匠さんだけだ……。みんな迷惑をかけるなとか……。もううんざりなんだよ！！」

「……先生が何番隊かわすれたのか紫流」

「つ……お、お師匠は……」

その言葉にハツとする紫流

たまにルキアの口から出る先生という言葉。

伝令神機を作ったのも先生だと自慢していた。

話の内容からお師匠と先生というのが同一人物だろう

「今戻ればまだ許されるぞ紫流！今すぐ戻るのだ」

「いやだ！戻らないぞ俺は！」

つとまた口論になりそうなところで

ふと、春の暖かい風が窓から流れると同時に

「ありや、修羅場？」

つと声がした

一護は咄嗟に振り返る

いつから？いつから居た——？

気配も感じない、虚のような霊圧も

窓枠に膝を立てて座っている男——

バチツつと目が合うと男は目を見開いた

「あは、大きくなつたな」

つと意味のわからないことを言われて思考が停止する

まるで昔から知ってるかのような口ぶり

すると、目を細めた男はギンツつと紫流を睨みつけ

紫流は肩を跳ね上げらせる

「せ、先生」

ルキアは顔を真っ青にしている

「大丈夫。ルキアのことには知っている尸魂界に報告はしないさ安心しな。今回は紫流を捕まえに来たんだ」

「お、お師匠!!俺は帰らねえぜ!」

「何故?」

「お、おれは父ちゃんを見返すんだ!一人で虚退治もできる……!」

覚悟だつてある!死ぬ覚悟で任務を遂行するんだ!!」

つと言つた瞬間空気が冷たくなった

「死ぬ覚悟……?」

「そ、そうだけお師匠!俺は……」

その言葉は続かなかつた

紫流の首筋に銀の刃

「(いつ抜いた……?)」

瞬きをしていないはずなのに、まるで映画のカットののように気づいたら紫流の首筋に斬魄刀が添えられていた

「死ぬ覚悟……?俺その言葉大嫌いなんだよね。やる気を表す表現かもしれないけど、死んだら意味ないじゃん。その言葉軽く感じる。死なないために死なないように鍛錬して生きているのにそんな言葉を使ったら……ねえ?」

紫流、戻るよ」

説明がめんどくさくなったのか途中で言葉を濁した男は
斬魄刀を鞘に収め手を差し伸べた

——が、それを勢いよく払った紫流

ポロポロと涙を流す紫流だが、それを乱雑に拭って鼻声で言い放つ

「いやだ!俺は!!戻らねえ!!」
すると。

「そうか……」

つと低く呟いた男

「お、お待ちください先生!!紫流の無礼は私がお詫びします!」

つと紫流を庇うように手を広げたルキア

「ルキア叔母さん……」

すると、冷たい空気は何処へやら

花が咲きそうな程にニパーつと笑った男

「何もしいないつて、紫流の覚悟はわかったよ。俺の殺気を感じながらも自分の意思を伝えた……うんうん、大きくなつたなあ！こりや白哉坊ちゃんも喜ぶぞ」

ポカン……つとする3人とコン

かアアア！つと言ったコンは男に飛び蹴りを食らわす

「あいたあ！」

「なんなんだテメエ！驚かせやがって!!」

つとコンがブチギレる

「まあまあ、」

足を掴んでコンを軽く抑えると男は紫流の方に向いた

「現世任務がしたいんだな？」

「ああ！俺は現世で虚を退治して父ちゃんを見返してやるんだ！」

「わかった、わかったけど内緒で行くのはどうなんだ？」

つとというと

「うっ……それは……」

「人に迷惑をかけたら？ それにいきなり人に刀を振るつちやダメって言つただろ？ なんて言うんだっけ」

つて言つたところで最初から見てたのかよつと、一護は心の中で突っ込む

「ごめん……なさい。内緒で出てきて……」

そして一護のほうに向くと不服そうな顔をしながらも頭を下げた

「いきなり刀を振つてごめんなさい」 つと謝つた

「ああ……まあ怪我してねえしいいぞ、つーかなんか先生みたいだな」

「だから先生だと言つておろう！」

机の上に座つた男。

「俺の名は浦原維助、よろしく。黒崎一護」

「お、おおう」

「とりあえず、紫流がこつちで働く為に色々手続きはやつてやる。あと白哉坊ちゃんも説得してやるよ」

「本当かお師匠！」

「ただ、その代わり」

　　つとルキアの方にむくと。ルキアは俯いた

「……私の事を話せと言うことですね」

　　こくんと維助は頷いた

ルキアは紫流に死神の力を失ったこと、一護が代行として虚を退治していることを伝えた

「死神の力を分ける……？それって違反だろ？」

「ああ……」

　　つとつぶやくルキアに顔を青くする

「……なるほどな、だからか。父ちゃんが最近ピリピリしてるわけだ……んで隠密機動のお師匠は捕まえないのか？」

「捕まえない捕まえない、確かにそういう任務は来てるけど俺はしばらく手を出さない……けれどあいつらはせつかちだそのうち追っ手を放つぞルキア」

「……分かっております先生」

「ならよし、とりあえず紫流の現世滞在の手続きをやってくるわ」

「お師匠珍しいよな、現世嫌いなのに直接来るなんて、それに霊圧も気配も感じないし……新しい機械？」

「そつ、大正解。霊圧、霊力、気配を感じさせない遮断結界機を俺の肉体に纏わせてるんだよ。それなりに制御難しいけどな」

「んで現世が嫌なんだ？」つと一護が疑問をなげかける

「そりやまあ、会いたくないやつとか会つちやいけないやつとかいるからなあ、ほら俺隠密機動だし！」

「その、隠密……なんとかってなんなんだよ」

「うーん、言うなれば裏組織？違反者の捕縛投獄監視から暗殺まで、虚退治から死神侵入者までなんでも担当する組織さ。簡単に言うとな」

つと笑う男にどこか下駄帽子に似た何かを感じる。

髪色が似てるからだろうか、それとも胡散臭い雰囲気を感じるからだろうか。

「とりあえず一旦戻るわ、紫流はルキア搜索兼、ルキアの引き継ぎの虚退治って任務担当にしとくからよろしく」

ふと窓枠に足をかけたと思えばそのまま飛び降りた。

下を覗くも誰もいない

「なんだったんだ……つーかお前ここに住むのかよ」

「ああ！住まわせろ！」

「嘘だろ」

一護は頭を抱えた

俺は断界内をゆっくり歩く。

よりよって紫流の逃げた場所が空座町とは――

喜助が居る場所もたしか空座町だったからまあ遮断装置をつけてきたのは正解だな。

腕から装置を外し懐にしまう。

黒崎一護、一心の息子がいるというのは昔から知っていた。

お祝いにと匿名でプレゼントを送ったがきつと一心は俺からだとわかっているだろうな。

帰ったら坊ちゃんの説得に手続きに―― ああ、大変だ。

その後白哉坊ちゃんを無理やりに説得させて手続きをおわらせた。

“『兄サン町に来てたんすか、穿界門開いたのに何も感じないからおかしいなあーとは思ってたんすけど……なら会いに来てくれればいいのに』”

「仕方ねえだろ、察知されたら困るだろ俺もお前も。」

俺は紫流の補助を頼むために喜助に電話していた。

「『朽木サンの息子さんねえ……話には聞いていましたけどまあ黒崎サン並に霊圧ダダ漏れツスね』」

「はは、まあ発展途上だよな。とりあえず制服用意してやってくれ」

「『えつ、学校に通わせる気ツスか?』」

「そりやその方が面白いだろ?」

「『……はあ、分かりました手続きしときます』」

「助かる、あと紫流はそこそこ鋭いからお前は会うな、会うなら夜一さんか鉄斎さんを通しな。俺とお前が兄弟だってバレる」

「『さすがにダメツスかく叔母の方は鈍かったんすけどねえ』」

「お前でもそんなんで浦原で商売してんだよ、俺が困るだろ」

「『大丈夫ツスよく商売相手はきちんと選んでますし』」

「まあ、もう今更か……黒崎一護……ね」

「『黒崎サンがどうかしました?』」

「……喜助。ルキアになにかしたんだろ」

「『そうツスね……』」

「……ルキアが罪人として捕まったら俺は規定側に着くと思う。」

“ 『わかってます』 ”

「……ならいい。なるべく時間は稼ぐが……まああまり期待はするなよ」

“ 『……はい』 ”

ツーツーツと音を立てて電話は切れる

さて、めんどくさい事になるのは確実だな……

黒崎真咲の話

黒崎一護の部屋に居候するのもなれた紫流。

「なあ、一護んで土日何してんだ、どこいつてんだ？ガッコーは休みだろ？」

ルキアを通じて浦原喜助から制服を貰った紫流が机の上に乗っかる

「だから机に座るなっーの。見舞いだよ見舞い」

「見舞い……？」

つと首を傾げる

「おふくろのだよ。」

「おふくろ……母ちゃんいたのかおまえ」

「お前デリカシーっーのねえのか……」

「すまん一護……」

つと片手で顔を抑えるルキア。

「……おふくろはずっと寝たきりなんだ。」

つと窓の外を見ながらつぶやく一護

「俺のせいなんだ」

つと静かに目を閉じた。

大好きなおふくろは笑っていて、泣いたところなんか見た事ない。

「なあ真咲。」

「大丈夫よ」

俺は廊下からリビングを覗く

泣いてはいないけどたまに辛そうな顔をする時がある。

腕を押えていて、それを親父がよく心配そうにしていた。

それは段々と酷くなり

「っ……………!!!」

「母ちゃん……………?」

酷い雨の日だった。毎日毎日雨が降って

おふくろは腕を押えて蹲る

傘がひらりと地面落ちてしまつて頑張つて拾つて立てたのを覚えている

「……………大丈夫よなんでもないわ」

そうやって作つたように笑うんだ。

どうしてなのかは分からないおふくろにも親父にも聞いてもなんでもないって言うだけ。

聞いたらダメなんだと幼いながらにそう思った。

その日増水した川の近くで女の子がフラフラと歩いていて

「あぶない!!」

柵を乗り越えて落ちそうな女の子に向かって走る

「ダメよ一護……!!」

母親の声が聞こえた瞬間

——
鬼痛おにい

デコピン

「俺の宝もんに気安くさわるな」

そう、確かに聞こえた気がした。

それから俺の記憶は無い。

気づいたら母親は集中治療室で寝ていて。泣きじゃくる俺を親父が抱きしめてたのを思い出す。

何がどうなったのかは分からない、ただ俺のせいだということは分かる

「……真咲。夏梨も遊子もでかくなつたぞ」

花瓶の水を入れ替える一心

ベッドの上には真咲が寝ていた。

「俺がもう少し早く来ればなあ」

なんて、弱音を吐くきつと真咲が起きてたらそんな事ないって説教されるんだろうな
「俺もまだまだだな、数十年鈍つてたとはいえ威力を出し切れなかった……逃がしま
うし。はっ、師範に怒られるな」

真咲の腕に刺さつて消えた刀。いや吸収された――が正しいな。

浦原喜助の話によるとあれは霊刀と言つて霊子を吸い取り纏う刀だそうだ。夏梨や
遊子が産まれてしばらくしてから真咲は腕を気にするようになった。

「なにかが暴れてる。何かは分からないけど」って言つていたのを覚えている。

俺は特殊な義骸に入っているせいとか何も感じないし、霊すら見えない。

それがもどかしかった

6月17日

その日は雨でもうすぐで一護と真咲が帰ってくるなんて思つてたら。

ドクンツつと胸がなったんだ。

同時にキーンンンつと頭に響くような耳鳴りが

「霊力……が、戻っている？」

おかしい。霊力は戻らなはずなのに自分自身の霊力が戻っていて服が死覇装に変わっていく。義骸はいつの間にか脱げていて地面に転がる

——死なない為に死なせないために

力を使え

そう、師匠の声を思い出す。

嫌な予感、そうだと虫の知らせとでも言うのだろうか。

感じるのは真咲と一護、と虚の霊圧

純血の滅却師である真咲、虚に負けるはずは無い。

のに——嫌な予感がした。

「真咲……!!一護!!」

何故かなんて二の次でそんな事より虚と2人の霊圧の元に走った。

たどり着いた時真咲は動揺していて、虚が腕を振り上げた

——触んな

触んなよ

死なない為に死なせない為に――。

もう誰も傷つけてたまるかってんだ

鬼痛おにいた

デコピン

「俺の宝もんに気安くさわるな」

デコピンの威力は落ちていて、やはりブランクがあると心の底でため息をはいた。

いつもなら一瞬で木っ端微塵にするのだが1部を吹き飛ばしただけで虚は生きていた

「くそ……死神かあ!!」

「まてごら!!」

「うっ……」

逃げようとした虚を追いかけようとした所真咲が唸りその場に蹲った

すぐに真咲に駆け寄ると虚は逃げ失せた。

「真咲! 大丈夫か、真咲!!」

「っ……腕が……なにか……うっ!!」

すると真咲の腕から青白い光が溢れ出る

「靈力……??」

それは靈子の塊のようで、なぜ腕から……つと思つたが思い当たるのは靈刀しかない。

するとまるで水が流れるように地面に流れていく靈子の塊

その先は……

「一護！」

一護は気絶して倒れていてすぐに抱きあげようとするとその靈力の塊が一護の中に消えていく。

「なんなんだ一体……!!」

一護を抱き上げた俺は塊を水を払うように触ろうとすると

「なっ……!!」

靈力が吸い取られて、死覇装から死装束ししょうそくにかわり、死神の力が失われていく。

靈子を吸い取るとは聞いていたが人の靈力まで吸い取るとは……。

すぐに2人を家に戻し、真咲の虚が呼び起こされる前に義骸に入った。

勝手に脱げた時は心臓が止まるかと思つたが繋がりは消えていなく真咲にも一護にも何も影響は見受けられない。

すぐに浦原を呼んで説明すると首を傾げた

「うーん……霊刀が溶けてお子さんに流れ込んだ……。それに勝手に義骸が脱げるとは……」

しばらくブツブツ言っていた浦原

「まあ見た感じ何も影響はなさそうツスけど。奥サンの霊刀の気配はまだ残ってます半分……。いやそれ以上がお子サンに移ったようツスね——これは仮説なんスけど

志波サン、貴方昔戦った時霊力を吸い取られたって言いましたよね」

「あ、ああ、あの変な真つ黒な虚と戦った時に」

「……もしかしたら霊刀がその時吸収した霊力をあなたに戻し、奥サンの危機を知らせ、そのおかげで貴方は一時的に死神に戻れた——。そしてその後何らかの理由で奥サンから霊刀が自分の意思でお子サンに移った……って考えるとどうツスカね」

「自分の意思で……なんだよそれ。生き物かなにかなのか？」

つと問いたですと首を横に振る

「いや、そんなはずはないツス。ただアタシが知っているものとは性能が変わっている可能性もあるんでまあなんと——

でも意思があるからこそ住処であった奥サンの危機を察知し貴方に霊力を戻し助けさせた——。それはもう意思があると結論づけてもいいと思いますけどね」

「……………一護は大丈夫なのか？」

ジツつと一護を見つめる浦原

「魂魄に影響はなさそうツスね。ただ奥サンの魂魄はとても不安定、きつと貴方の義骸が脱げた事による魂魄の結合が不安定になったせいかもしれません。それか霊刀が急に抜けたから。もしくはどちらも」

魂魄が回復するまでしばらく時間がかかると言われて。

一護はすぐに目覚めたが真咲は寝たきりだった。

そして現在に至る

「奇跡、アタシはそういう言葉好きじゃないんすけどね」

奇跡としか言えなかった。

義骸が脱げてても霊子の紐付けが切れなかったことも。

刀から一心サンの死神の力が戻った事も。

意思がある霊刀。一心サンに真咲サンの危機を知らせ霊刀を戻し助けさせた。そして何故か霊刀は2つに別れて息子サンに入り込んだ……。

調べてしまいたい今すぐに解明してしまいたい研究欲が心の中からじわじわと湧き上がってくるが抑える

さすがに人をバラす訳にはいかない

もし仮説を立てるとすれば

———もしかしたら霊刀は虚の力を抑える能力がある。

だから義骸が脱げてもリンクは切れることなくお二人の力を抑えてた？

もし霊刀にそういう力があるとすれば……

求めていたものと違うものが出来上がるのは歴史上稀にあることだが、これは……

「……………兄サン、なんていうものを作ったんスカ」

もし自分の仮説があつていとすれば

薬にも毒にもなる危険な

朽木ルキアの話と修行開始の話

「浦原維助、六番隊朽木紫流の現世滞在を承認したと聞いたが誠か」

「はい、朽木紫流を空座町重靈地じゅううれいちに配属せいじゆさせました」

「それは何故か、朽木ルキアの捜索と関係が？」

「そりやありますよ、朽木紫流は将来優秀な死神になりますし、朽木ルキアとも血縁です、霊圧の感知や捜索なら知り尽くした血縁者が有効だと俺が判断しました、経験を積ませるついでに捜索。ほら一石二鳥でしょう？」

隊首会、俺は真ん中に立って総隊長に言い訳をする。

「隠密機動を動かせばすぐなのではないか？」

「言ったでしょう？経験を積ませるのも大切だつて、優秀なものばかりに頼るといざその柱がいなくなつた時バラバラに崩れ落ちる——。いい経験になると思つたんですけどね。大丈夫もし大事になつたら隠密と偵察ドローンを動かしますよ」

「……あいわかつた、この件は主に一任する」

「ありがとうございます、総隊長」

「ふん、甘いネ。重囁違反者じゆうかいはんしゃなどつとと捕まえてしまえばいいのだヨ。席官にすらなつてもいない子供にそんな事出来ると思つてるのかネ。だいたい君の管理下である伝令神機の追尾機能が動作しないなんて怪しいネ」

つと涅がグチグチ言い始める

「だからそう焦る必要は無いだろう？逃げられるものでもないし、逃走脱走違反者は俺の隊の仕事だ指図しないで欲しいな。それに六番隊からは許可を正式に得ている、死んだら死んだで朽木紫流の能力不足。だが俺はやれると判断した。それに伝令神機の追尾機能は伝令神機が壊れたり落したりして中の充電が切れたら機能しなくなる。」

あんたのような人が少し考えれば分かることをいちいち聞いてくるなんて……疲れしているのか？」

つとと言うと顔を真っ赤にして怒り出す

「まあまあ、喧嘩しなさんな。僕も維助君には賛成だね、優秀な逸材に任せるのもいいけど、こういう機会はほとんどない。精神面や実力の向上にも繋がる。いいと思うけどねえ」

つと笠を上げた京楽隊長が笑う

ふんつと、そつぽを向いた涅

隊首会が終わつて解散になり、数週間は隠密機動を待機させる状態が続いたものの――

「まあ、そうそう上手くいくはずはなく

浦原維助、お主の功績は瀨靈廷内で群を抜いておる頭もキレるし我々も信用を置いて
いる」

「はい、光栄です」

「ハハ」は

——中央四十六室——

「だがしかし、重囁違じゅうかいはんしゃ反者を泳がせておくのは何か理由が？山本元柳齋重國から話は聞
いておるが、流石に長すぎではないか」

「すみませんねえ、少々手間取っているようで」

「やはり朽木家といえど子供に任せること自体……」っと不満の聲が聞こえてくる。

「浦原維助、偵察用小型無人機を導入せよ。朽木紫流の現世虚殲滅は続行してよし、ただ
し朽木ルキアの搜索については隠密機動を始動させよ」

「はい。わかりました」

しかたない……か、これでも随分伸ばせた方だし。

前に作ったハエ型ドローンと小型ドローンを導入し、すぐの事

「なに？空座町重霊地で多数の虚出現と大虚メノスグランデが？そして撃退を確認した——と。誰だ？」

「はっ、こちらです」

モニターに映し出されたのはオレンジ髪 の——黒崎一護。

そして朽木ルキアが映し出されていた。

なんと間の悪い……いや、どうしてこのタイミングで大虚が……？

しかたない——か。

すぐに隊首会が開かれた

「隠密機動より中央四十六室に連絡が入った、行方不明及び重囁じゅうかいはんしや違反者朽木ルキアの消息を確認。また大虚に太刀傷を負わせ虚圏に帰らせた所属不明の死神、朽木ルキアと関連があるとみて良い

よって隊長格を向かわせる、六番隊朽木白哉及び副隊長阿散井恋次は現地向かってもらう。浦原維助は別命があるまで待機せよ」

待機——ねえ。

現世へ続く穿界門の前に立つ2人に声をかけた俺

「白哉坊ちゃん。」

「……師匠」

「オレンジ髪の男、もし接敵したら生かしてあげて欲しい」

「なっ。どういうことですか！」 つと恋次がくっつかかる

「何故でしょうか私めには訳を理解できません」

「俺が見込んだから……じゃダメか？」

「……」

「どういうことですか先生！それじゃ……」

「違反にはならない、そのオレンジ髪男の死神の力がルキアのものだった場合それを没収すればいいだけだ。相手はおそらく人間、死神が人間に手出しするのは基本ご法度。

殺さなくてもいいはずだ」

「………わかりました」

「なっ、隊長!!」

「行くぞ恋次。」

恋次は渋々と言った様子で穿界門をくぐった。

「………んでいいのか惣右介」

「ああ」

木の影から出てきた惣右介はニヤリと笑った

「僕が言うど怪しまれるからね。」

「つたく、だからって俺を使うなよ」

「君も同じ意見だったのだらう？アレを殺すには勿体ないってね」

「……そうだな」

黒崎一護、滅却師と死神とのハーフ。

一心の霊力を受け継いで……いやそれ以上の霊圧の持ち主

そして何より——霊刀の気配

惣右介は気づいてないかもだけど俺は会った時に気づいた、あれは俺が作って惣右介

に盗まれた霊刀。

どうしてあの男の中にあるのかは分からない。

喜助に聞いてもそうなんスか？って言うだけ。

「……」

やっぱり俺も惣右介と変わらないな

惣右介が四十六室を皆殺しにしたと知ったのはすぐ後だった。

ちよつとこら辺は微原作沿い

俺は弱い……

白い羽織を着た男――斬魄刀を切り落とされた、見えなかった――

そしてまた――護られた

ルキアが消えて雨が降ってくる。

ああ、弱い……おれは……おれは……

「あんまり動くと死にますよん」

起きた時、身体中が悲鳴をあげた

俺は知らない和室にいて男は襖から入ってきていた。

やつば下駄帽子。どこかあの男に似ている気がした

「あんたが……俺を助けたのか」

「おや？心外ツスねえ、その言い方。それにあなたはどつちにしろ死ななかつたツスよ。

靈力は奪われてますけど。」

「どういう事だ……?」

「急所を綺麗に外されている、あの人がそんなヘマをするわけは無い。」

頭をよぎったのはあの黒髪の羽織を着た男。

助けられた……?」

「まああの人はそんな人じゃないんで第三者から頼まれた……つて感じでしょうね」

下駄帽子はまるで全てを知っているように含んだような言い方をする。

「それに、ここに直接あなたを運んだのは紫流サンツス」

「紫流が? そうだ……! あいつは今どこに? あいつの父親なんだろう? あの羽織男」

「無事ツスよ。ただ、一旦帰るそうで尸魂界にむかいました」

「そう……か石田、石田は斬られてたろ? 石田は無事なのか?」

「ええ、彼の血は沢山出てましたけど大したものじゃなかった。」

朽木さんを救えるのは彼だけだ——そう言っていましたよ」

「どうしろってんだよ……俺に……ルキアは尸魂界に帰っちまったどうやって助けろって……」

「本当に無いと思いますか? 尸魂界へ行く方法」

俺はその言葉に顔を上げる

「あるのか! 尸魂界に行く方法!! どうやるんだ!! 教えてくれ!!」

「もちろん！教えますよただ条件がひとつこれから十日間アタシと戦い方の勉強をしましよ」

「何言ってるんだよ！そんな事——！！修行でもしろって？」

「分からない人だな」

一瞬でおれは地面に倒された

杖の先が向けられる。まるで……切っ先をむけられてるかのよう

「言ってるんすよ、今の君じゃ死ぬ……と。勝てますか？今の君が彼らと戦って」

手も足も出なかった……あの男に

「今の実力じゃ尸魂界で戦うには力不足、何の役にも立たないんすよ、弱者が乗り込むそれはもう自殺だ、朽木サンを救うため？甘ったれちやいけない。」

——死に行く理由に他人を使うなよ

それから俺の地獄は始まった

死神の力も戻り、おれは浦原さんにしばかれ続けている

そしてしばらくの休憩でリングを出された

なんでリング……

腹も減ってるので遠慮なくかぶりつく

そこで疑問に思ってたことを口にした

「なあ……浦原さん。」

「なんスか？」

「斬魄刀って二本あるのか？」

「……はい??」

首を傾げる浦原さん

「俺が、あの時精神世界みたいな所に行つた時に……死神の力を見つけたっていわれ
て……その時斬魄刀の柄を引き抜いたんだ。そしたら、青い刀が一緒に出てきて」

そこで浦原さんがピクつと、反応した

「何か知ってるんだな？」

「青い刀、鏢はこれに似た物ツスか？」

紅姫と呼ばれた浦原さんの斬魄刀。

珍しい鏢の形をしているがたしかに……

「そう……だな、なんかそんな模様が刀身に刻まれてた

鏢はあつただけだよ……」

「……その刀の名は霊刀^{れいとう}。貴方の魂と融合した刀ツス。」

「霊刀……? 斬魄刀とはちげえのか？」

「うーん……似て非なるものツスね。アタシの知るものどだいぶ性能が変わってますけど。」

訳が分からなく頭を傾げる似て非なるもの……？

すると浦原さんは指を立てた

「斬魄刀は自身の魂の力を使つて作り出した靈力を刀として具現化していますが、それは全く違う物質からつくられています。性質も異なり周りの靈子を集め収束させることで戦うことが出来る刀」

「なんでそれが俺の所にあるんだ？死神はみんな持つてるもんなのか？

それになんか石田の力に似てるような」

つと問いに浦原さんは扇子を開いた

「まあ似てますよねえ、アタシも実際よくわからないんすよ。

ただ、それは貴方を助ける土台になるでしょう。貴方の斬魄刀を見た感じ靈刀は貴方の斬魄刀と結合した」

「俺の斬魄刀に……？？」

「そうツス！いやあこれ以上はなんとも。何せ事例なんて無いもんで」

「……そうか、浦原さん。なんで事例がないのにそんなことを知ってたんだ？」

つとと言うと目を細めた

「……いいツスカ、黒崎サン。あの日朽木サンが連れていかれた時羽織を着た男、貴方を斬った男は朽木白哉。」

「お、おう？」

いきなり話が変わった。

「彼の剣見えました？」

「……見えなかった」

「そうツスねえ。彼は護廷十三隊の六番隊隊長、隊長格なんス」

「隊長……」

「そして隊長格にも実力の差はある。彼も上の方ですがさらに上がいます」指を天井に向けた浦原さん

「あれより……上だって？」

見えないし、実力も分からない。あいつよりも上が……？

「まあわかりやすい例を出しましょうかね。君も会ったことあるはずツスよ、浦原維助——彼は朽木白哉の師匠にあたる」

『先生！』

『お師匠』

と呼んでいたルキアと紫流を思い出す

あの日、紫流が来た日に来た男。

浦原維助……たしかにそう名乗った。

あいつが……?!

「いいッスか、黒崎サン。浦原維助、彼には気をつけてください。もし出会うことがあれば逃亡一択。決して戦おうとしないように」

「そう……だよ、浦原……浦原って……!」

「もう分かっちゃいました? 彼は尸魂界一の技術者で剣の達人。そしてアタシの実際の兄ッス。そして霊刀の開発者でもある」

衝撃の事実が停止する。

「そ、そうだよ兄なら助けは求められねえのか!」

と言うと目を閉じて首を横に振る

「無理ッスね、彼はあれでも表向きは護廷十三隊の隊長。規定側ッス」

「そう……か」

「アタシでも勝てるかは分からない。いや、今の彼とアタシでは実力差がありすぎる。おそらく負けるでしょうね」

「そ、そんなにかよ」

「ありやビビっちゃいました？」

つと俺の顔を覗き込むようにして見下ろしてくる

「ビビってねえよ！」

「まあ、彼と対峙しようと思わずに逃げ出せば見逃してくれるかもしれませんし。さき、修行再開しますよん。早くあの一撃を出してもらわなきゃ」

指さした場所は俺が放ったとされる斬撃の跡。

「つても、いっぱいいっぱい覚えてねえんだよなあ……」

「大丈夫ツスよ。いっぱいいっぱい追い込んであげるんで」

赤い耳飾りを揺らしながら愉快そうに笑った浦原さんにため息を吐く。

楽しんでねえか？

「はあ……」

「うおーアブねえ！」

と避ける黒崎サンをみて違和感を覚える

ボクの斬撃はいずれ霊子として分解され空中に溶けるが……

その瞬間、黒崎サンの斬魄刀が光るような気がする。

彼の斬魄刀の能力はおそらく

持ち主の霊力を喰らい、斬撃そのものを巨大化して飛ばす力
「黒崎サン。1度アタシの斬撃を斬魄刀で受けてみてください」

「はっ。」

つとほかんとした彼に

——啼け 紅姫 ——

斬撃が地面を抉りながら彼の方に向かっていく

「なっ、いきなりかよ!!仕方ねえ」

彼は刀を盾のようにして受け止め

そして赤い斬撃は一瞬で刀に吸い込まれるようにして消え失せた

「なっ……なんだよこれ」

斬魄刀は青い霊子を纏う

「……元の性能は変わってないようツスね。黒崎サン、それは霊刀の力ツスよ。言った
でしょう? 貴方の斬魄刀と結合したと」

「いや、そんなこと言われてもよ……どうなるんだよこれ」

「さあ」

「さあ……」

「言ったでしよう？事例があまりないんす。限界も分からないし、ただ切れ味が良くなるのは確かっすよ〜」

「切れ味ったつてよお……」

試しにコツンつと軽く岩を叩いてみせる黒崎サン。

——— スパンツ

「うおおお！」

「おやあ」

岩は一刀両断し地面に深い亀裂が走った。

「いやあ中々便利なもんスねえ！」

「呑気か!!あぶねえだろこれ!つてあれ、さっきみてえに斬れねえ」

またコツンつと岩に切っ先が触れるが先程のようには斬れない。

「うーん、吸い取った霊子の分だけ斬れ味が良くなり、それはリセットされる……つて感じっすかね」

「……よくわかんねえな」

「まっ!とにかく貴方の力には間違いないんで、伸ばせるものは伸ばしましょ」

あれから色々試して分かったこと。

黒崎サンの霊刀の能力は霊力、つまり鬼道系のものを吸い取りその威力の分だけ斬れ

味が増す。ただ鬼道の力が強すぎると吸収しきれずに吹っ飛ばされる――。

「いやあ、面白いもんスね！わかりやすい名前でもわかりやすい能力！いやはや……」

「面白いわけあるか！しかも霊刀って今更ながらダセエ！なんなんだよ」

瓦礫の中から出てきた黒崎サン。元氣ツスねえ！

「それはアタシに言わないでくださいな、命名は兄サンなんで」

そしていずれ貴方の虚の力は……

さて、霊刀がどういう動きをするのか……

楽しみツスね

「父ちゃん!!本当にルキア叔母さんを極刑にすんのかよ!死ぬんだぞ!!」

父ちゃんは何も言わずに書類に目を通す。

「なあ!!父ちゃん!!」

「尸魂界の最終決定だ」

「何とか出来ねえのかよ!!いいのかよ……!!母ちゃんの妹で、あんたの妹でもあるんだろ!!」

「それがなんだと言うのだ」

「なっ」

「一度も俺の方をむくことなく、そう言い放つ父親。

「なんだよ……それ……なんでだよ……」

「紫流。お前にも私にも最終決定を覆す力など持つてはおらぬ」

「そこではつとする、力。そうだよ権力……！」

「お師匠に頼めば!!あの人四十六室の直属の部隊なんだから!!あの人に頼めばきつと

……」

「やめろ」

「なんで……だよ」

「師匠に迷惑をかけるな」

「ずっと書類を見たままの父親……」

「なんでだよ……なんで……」

「お前もお師匠のおかげで罪は免れた。今回は不問とするがこれ以上迷惑をかけるな」

「ぐっ」

「俺は悔しくて悔しくて、走った。」

「家族ってなんだよ……家族って。そんな……そんな！」

もし俺が……俺がルキア叔母さんの立場だったら……
父ちゃんは俺を殺したのか？見殺しに——
!!!

「朽木紫流……ね。」

「おや、藍染隊長どうなさったんです？」

「いいや、ギンなんでもないさ……すこし面白くなりそうだと思うてね」

職権乱用と旅禍の話

「ふうん……極刑ねえ」

四十六室は惣右介によって殺され催眠をかけられている。

四十六室から極刑という達しが来るはずは無い。

何を企んでいる惣右介……。

「おや、浦原隊長さんは悩んでないんやなあ、六番隊長さんも冷たいもんやったわ」

ふわりと、塀の上に座って俺を見下ろすギン

「俺に何か用か？ギン」

「おーこわ、そんな睨まんでもええやろ。」

つと両手をあげるギン

「俺忙しいんだ、何か用ならメールでも入れといてくれ」

「全くつれないなあ、そういわんでも遊びに来ただけだよ」

「ふうん……遊びに来たね」

「それなんなん？」

俺の持っている包みを指さすギン

「これは義骸だよ。朽木ルキアが使ってた、隠密機動に調査依頼が入ってたね。今から12番隊に送るんだ」

「……ふうーん」

聞いたという興味無いんか、そのままどつかに去っていった。

人の顔見に來ただけだな、白哉坊ちゃんの方にも言ったのか趣味が悪い。

義骸を送ってから思い出す。

十二番隊に言うの忘れてた事があつたな……

「碎蜂、少し離れる。後は頼んだ」

「はっ、かしこまりました」

十二番隊が少し騒がしい

「おっほお！ようやく届いたか……へへ！俺が先に見るぜ」

「これはなるほど、凄いなえ」

つと声が聞こえる。廊下の先に開いた扉から光が漏れる

部屋に向かうとさらに騒がしい声が聞こえてくる

にしても、廊下の電気ぐらいつけたらどうなんだ……

「おいこれ……みろよ……」

「なんだ……こりゃ！」

「なんです？」

阿近と女の子の声。

「こいつは局長でも、誰の作品でもねえ……！出来るやつがいるはずねえんだ」

ああ、まずい

「いるはずないって……現に」

「どういう訳がしらねえが尸魂界にあつちやいけねえもんがある！

一つだけ言えるのはこれを作った奴がもう尸魂界にいねえことだ！もしそんな技術を持っていたら

——尸魂界を永久追放されるからだ」

「(名答)」

ヒュッ……

誰かが悲鳴をあげかけた。

「……浦原維助？」

変な図体でかいヤツが俺の方に向いた。

局員達は義骸を囲んでいた

「なんで二番隊が……！困るぜ勝手に！勝手に入るのはご法度……」

つと局員が俺につめよろうとしたのをその肩を掴み阿近が止める

「ご法度？違うね、隠密機動総司令官である俺は一番隊以外の隊舎に隊首の許可なくとも入れることが許されている。」

「だからって一言声をかけてもらわなきゃ困りますよ」

そう言った阿近は冷や汗をかいていた

「そりゃ悪かった。誰もいないもんでねえ……。阿近」

「なんだよ、知り合いかよ」つと言いながらデカブツが阿近の方にむく

「ばっか、てめえ二番隊長をしらねえのか、伝令神機の開発者で浦原神機の社長だよ、俺らが使ってる機械もこいつが作ったもんだろ」

「こいつって……はは」

別の局員にこいつ呼ばわりされてる俺って。

「黙っとけてめえら、維助さんすみませんね、こいつらが」

「いーよ、それで本題だけど。その義骸今日の夜までには返してもらおうから」

「なっ！そりゃ勝手だぜ！！そんな短時間じゃ俺ら何も出来ねえじゃねえか！」

つと俺に詰め寄ってくる男

「バカやめろ！」

阿近の制止も聞かずに俺の胸ぐらを掴む

「隠密機動だか先生だかしらんが勝手すぎだ!!俺らの研究は自由だ、その権限は局長にある!!」

「やめろ!!」

「だがよ！」

阿近が俺から男を引き剥がす。

全く、ここはここで熱い連中だ

「研究が自由……ね。それは違う、俺の許可があつて初めて研究が許されてるんだよここは。隠密機動総司令官の俺が四十六室の代わりに監督する立場にある。」

「なっ」

「そうだ、落ち着け……!この人の言つてゐることは間違いねえ。俺らの研究も局長がこの人に申請し問題がないか審査してから許可を得て初めて研究ができるんだよ」

「そして、それは大切な証拠品。少し見るぐらいなら許可してやるがばらされるのはちよつとねえ」

「……なにか理由でも?放任するあなたらしくもない」

つと俺の方にむく阿近。流石俺が育てただけはある勘が鋭い

コンコンつと義骸が乗った台をノックする阿近

「義骸……これの開発者に何か？」

阿近は多分察してたんだろうな

「ああ、それは今回の事件と110年前の事件の証拠品だ、もう一度言うぞバラされちゃ困るんだ。俺が見てる間に研究とやらはさつきと済ませて夜までに返してもらおう」

「……」

「阿近なんだよ、こいつを作ったやつ知ってるのかよ」

「ああ」

「誰だよ！ 勿体ぶるなよ」

阿近は俺から目を逸らした

「浦原喜助」

その瞬間、部屋に緊張が走る

「今の局長が二代目なのは知ってるよな、これの開発者は……」

浦原喜助。技術開発局を作った初代局長だ。あの人が居なくなつた今この開発局があるのもこの人が当時頑張ってくれたおかげだ」

チラチラと視線を感じるが用意された机、そして椅子に座って働いてるのを見守るルキアの義骸をスケッチしたり成分を調べたりちゃんと言っはいるな

「……維助さん」

「ん？どうした阿近」

阿近が俺の前に座った

「義骸を取り戻しに来た……って感じですか」

「そりゃね、作らなくても、その技術を研究すること自体本来は違反にあたる、気持ちを少しくんであげただけでもありがたいと思っ欲しいよ」

「それは感謝していません、ですが俺が言ってるのはそういうことじゃない。弟さんのものだから……」

「さて、それを聞いてどうする？」

「……そうですね、答えられないものでしたね」

俺が職権乱用してるのを知って言ってるんだ、全く阿近は……誰に似たんやら

「んじゃ帰るわゝ急に悪いね」

阿近が見送りに来てくれて俺は包に包んだ義骸片手に十二番隊を後にした。

さて、後で喜助に送るかね

頭を下げた阿近は消えた維助をみて深いため息を吐いた

「つたく、あの野郎本当に持つてきやがった。」

つとひよす鶴州が残念そうにボヤク

「お前なら止めれたんじゃねえのか？ほらなんか仲良いんだろ。友達みたいな」

「友達じゃねえよ、恩師だ。二番隊……いや浦原家と隠密機動の後ろ盾があつて十二番隊がこうして研究できていることも間違いない。敵には回すな……実際、数十年前に一人の局員が捕まつてる」

「捕まつてる!?!」

その言葉にコクンつと頷く

「中央四十六室から正式に判決が下された研究があつて、研究成果・研究過程の破棄を拒否した職員が——な。」

あの人が笑つてるうちは大目に見てもらつてるが、あの人はいつでもこの局を潰せるんだ。あまり反発すんな——あの人ガチで機嫌を損ねたらめんどくさいんだからな」

「維助様」

「うん、聞こえてるよ」

壁に取り付けられた拡声器が漣靈廷中に響き渡る

“ 『西方せいほう郭外がくがい区くに歪面わいめん反応はんのう』 ”

警戒令が発動された。

うんうん、あいつら来たな。

「碎蜂二部隊と四部隊を漣靈廷防衛陣地に配置、指揮は碎蜂に一任する」

「はっ、行ってまいります」

そう言つて消えた碎蜂。

——そして次の日

“ 『隊長各位に通達！只今より緊急隊首会を招集！』 ”

伝令神機が鳴り響く——

「めんどくさいな」

○隊首室

「きたか！さあ今回の行動について弁明を貰おうか？番隊隊長市丸ギン」
隊首会では何故かギンが真ん中に立たされていた。

「卯ノ花隊長、ギンなにしたん」

「つとこそつと隣の卯ノ花隊長に聞くと」

「あら、聞いていなかったのでですか？」

「つと言われる、みんな知ってる感じか？」

「なんですの、いきなり呼び出された思うたら来ない大袈裟な……」

「つと頭を搔くギン」

「大袈裟？ふざけてんなよ」

「ズカズカと列からはみ出た更木がギンにつめよる」

「てめえ、一人で勝手に旅禍と遊んできたそうじゃねえか、しかも殺し損ねたつてどういう事だ？」

「ありや、死んでへんかつてんねや？アレいやあーてつきり死んだかと思うてんけどなあ」

「クツクツク、猿芝居はやめたまえよ、我ら隊長格が相手の魄動が消えたかなんて察知出来ないはずないだろう」

つと、ギンを指さす涅。

「またジジイ共の喧嘩が始まったよ」

つと冬獅郎が呆れたようにため息をはいた

「ふうん、なるほどギンが旅禍を逃がしたから会議してんのね」

「いややなあ、まるでボクがわざと逃がしたみたいな言い方やんな」

「そう言ってるんだヨ」

「うるせえぞ涅！今は俺がコイツと話してるんだ！すつこんでろ」

つと口論は激しさを増す。

「ぺいっ!!やめんかみつともない！」

つと総隊長がどなり3人は黙った

「じゃがまあ、今のでおぬしが呼ばれた理由がわかったかの、今回お主の命令なしの単独行動。それについておぬしからの説明を貰おうと思つての！そのための隊首会じゃ」

「ありません！」

「なんじゃと？」

ギンはヘラリと笑つてそう答えた。

「弁明なんてありません。ボクの凡ミス、言い訳のしようもないですわ」

「ちよつと市丸——」

惣右介が何か言いかけた瞬間

“ 『緊急速報！瀨靈廷内に侵入者あり！』 ”

つと、スピーカーから速報が流れる

ダツつと、更木がいち早くかけ出す

「仕方ないの……」

更木をみてため息を吐く総隊長

「隊首会はひとまず解散じゃ！各隊守護配置につけ」

みんなが一斉に隊首室をでていき

さて、俺も戻るかと廊下を歩いていると後ろから話しかけられ足を止めた

「浦原隊長」

「ん？どうした冬獅郎」

「……貴方市丸ギンと仲良かったでしたっけ」

「は？いやそんなことないけど……？？たまに話す程度かな」

「……………そうか、あいつどう思いますか」

「どう思うって言われてもなあ……」

何故冬獅郎がこんなことを聞いてきたかは分からない。

なにか怪しんでいるのか……

「まあ、俺はどうも思わないよ。好きにやってくれて感じて。みんながみんな癖強いのは知ってるだろ？ いちいち気にしてたらやってられんよ」

「はあ、予想通りの答えだった」 っとため息をはかれた

隊舎を出た瞬間目の前に碎蜂が膝をついて現れる

「維助様、旅禍は瀧霊廷の上空を覆う靈力を遮断する遮魂膜しゃこんまくを突き破り瀧霊廷内に侵入。それぞれ四方に別れたとの事」

「へえ、」

話を聞く限り本当に入ってきたみたいだな。

「とりあえず碎蜂、昨日と同じで二部隊四部隊を配置につかせる五部隊は情報管理報道相忘れんな、三部隊は動かさなくていい。お前の判断で刑軍は動かせ」

「はっ、承知しました」

シュツツと瞬歩で消えた碎蜂をみて、俺の隣の冬獅郎が口を開いた

「相変わらずだな、二番隊も」

その言葉にどういう意味が含まれているのかはまあ聞かないでおこうか。
瀧霊廷内のあちこちで靈圧の衝突が感じられる。

「どうするんですか、あんたは」

「うーん、見学？面白そうだからちよつかいはかきたいなあ」

「はあ、相変わらずですね」

踵を返して歩いていく冬獅郎

「あんまり変なことしてるとまた総隊長におこられますよ」

って言って片手を振って帰って行った

クールだねえ冬獅郎。

さて——おれは一番近くのところにも行くか。

おそらくこれが原作開始の重大事件の話だった気がする。

ああ、もう数百年前の前世のことなんで全く覚えてないよ。

歳は嫌だなあ

「飛び道具に関しては僕の方が上らしい。鎌鼬雨竜だなんて名前かつこいいとは思わないけどね、それに女性から狙うだなんてまともな誇りをもっていたらとてもできない戦い方だよ。お見事

——さようなら」

石田雨竜と井上織姫はみんなと別れてしまった後、七番隊四席と接敵していた。だが、それももう終わり。

弓を引いた瞬間——

重く重く酷く嫌な感じがした。

悪寒とでも言っている。

「やあ、メガネくん君滅却師？あっおっばい美人はっけーん！」「つ……!!（いつの間に……？僕が霊圧を感じとれなかった？）」

のほほんとした戦場では考えられないような呑気な声。

振り向いた場所には片膝立てて座っている青い瞳をニコリと細めた男が——

ちよつかいかけた話と紫流の話

「やあ、元氣そうだね」

呑氣そうに笑うこの男

「…」

なんだ…この違和感。

靈圧を感じないだけじゃない…

氣配も、現れる風すら…音すらも何も感じなかった――。

「う、浦原隊長…!」

「隊長だつて…?」

この人が隊長…?

それに浦原つて――。

「うわ、左手撃ち抜かれたの? いったそ…早く卯ノ花隊長のところ行ってきな
「で、ですが!! まだ私は! 私はやれます!」

つと懇願する男。 僕が撃ち抜いた手からはまだ血が溢れるように流れていく

スツ——と目を細めた

「なら戦う?」

「えっ。いや…その」

「ハッキリする」

「す、すみません!! 四番隊行ってきます」

「行ってらっしゃい、応援呼ぶとかはいいからね」

「は、はい!」

這いつくばるようにしながらも逃げ失せた男…まあいいかと思ひ。

隊長と呼ばれた男と向き合う

「随分仲間思いなんだね、死神というのは」

「仲間思い? 違うよ邪魔だからさ。どうせあの傷じゃまともに戦えないし」

よいしょつと言って立ち上がった男はニコリと笑う

「はじめまして、俺は浦原維助。弟がお世話になったようで」

「おとうと…!」

つと、びつくりしたような声を上げる井上さん

「やはりな…」

このマイペースさといい、どこか読めない雰囲気もそっくりだ。

「さつ、俺は名乗ったよ」

「僕は石田雨竜」

「あ、あたしは井上織ひ……め」

一瞬

目を離したわけでも、警戒を怠ったわけでも、瞬きすらしていないのに

——男は目の前から消えた

「そつかあ〜！織姫ちゃんかくかわいいなあ」

いつの間にか後ろにいたはずの井上さんの手を握って握手していた

「浦原さんの兄……と言っても味方には見えないが」

「正解。味方じゃないよ、俺はあくまで規定側旅禍は捕まえないといけない……」

「まずは井上さんから離れてもらおうか、それとも人質のつもりかい？」

「人質？なんで？人質にされるほど弱い君」

つと井上さんの顔をのぞき込むように近寄る

「あ、あたしは……」

「君たちは朽木ルキアを助けるために来たんだよね？きつと恐らく喜助か夜一さんに鍛えられた……って感じかな」

「僕は違うけどね」

井上さんから離すように弓を放つとヒョイッと避けられる

「おいおい、織姫ちゃんに当たったらどーすんの」

「僕はそんなヘマをしない、井上さん。逃げるんだ」

「いやだよ！あたしも戦える！」

「でも…」

「そうそう、それに逃げられると思うの？俺から。」

「君は強そうには見えないけどね。霊圧も感じないし」

「そりやそうだよ、隠してるもの、霊圧も気配も——」

——ねっ？

耳元で囁かれた。まただ、また…消えるように——！

飛廉脚で直ぐに距離をとる

「怖い？怖かった？わからないもの^{未知}って怖いよね。そもそも俺は職業上霊圧、気配ダダ

漏れはまずいんだよね」

「職業？死神は死神だろう」

つと僕の言葉に首を横に振って指を立てる

「死神は死神でも色々あるんだよ、例えば医療専門とか研究専門。人間にも色々いるだろ？警備する警察とか、開発する研究職についてるやつとか」

「…気配と霊圧を気づかれたらまずい…つまり暗殺とかそういう関連つて事だね」

つと言おうと手を叩く

「頭の回転早いねえ。正解。俺は隠密機動、犯罪者の拘束や監視監督、まあお掃除屋さん？」

「…分からないな、君からは敵意を感じない、捕まえようと思えばいつでも捕まえられるのに行動を起こそうとしない…時間でも稼いでいるのかい？」

「時間？いや別に俺はちよっかいかけに来ただけだよ」

「はっ？」

「だから、気になるものつてちよっかいかけたくなるでしょ？旅禍だなんてそうそう来ないからさ、ちよっかいかけに来たの」

「…付き合いきれないな」

「そう？でも君達このまま行くと死ぬけど…。本当にルキアを助けに来たんだよね」

「弱いつて言いたいのかい？」

すると、うんつと頷いて笑う

「舐めるなよ」

弓を放つ、避けられないように四方に放った。

男は動かず笑い続ける

男に触れるか触れないか―――僕の矢は消え失せた

「うーん……これが本物の滅却師の力ね。周りの霊子を収束させ操作する」
「物知りだね」

何をした？なにがおきた？どうして消え失せたのか……斬魄刀の能力か？

「んで、織姫ちゃんはメガネくんに任せつきりかい？」

「っ……！」

「井上さんは関係ないだろう、君と僕の戦いだ。それに名乗ったはずだが」

「ごめん、俺人の名前覚えるの苦手でさ、うりゅーちゃん？」

「雨竜だ!!」

ヘラヘラと笑うところは浦原さんを連想させてやりづらい

「君と僕……ね。じゃあ織姫ちゃんは何？医療係？後衛ですらないの？」

「あた、あたしも戦えます！」

「井上さん!!」

「石田雨竜。ダメだよ自分で戦うって意思表示したんだ戦わせなきや、それとも何？女は戦わせられないって？それとも……邪魔？」

「そんな事言っていないだろう！」

「ああー熱くなるなって。じゃあ戦わせればいいだろ？わっかんないなあ…守るとかフオローするとかなら分かるけど、戦力外で逃げるとか戦うとか…。戦う意思があるなら戦おう。さあ来なよ」

つばき こてんさんしゅん
「椿鬼！孤天斬盾」

私は拒絶する

変な盾みたいなのを回るように避けて勢いよく織姫ちゃんの腹に軽く蹴りを食らわす

「カハッ…！」

「井上さん!!」

直ぐに雨竜の顔面に拳を振るう

「心配してる暇…ある？」

「グッ…！」

顔を逸らして避ける雨竜だが、頬に亀裂が走った
 すぐに飛廉脚で距離を取り弓矢が飛んでくる

「ほらほら、そんなんじゃ近距離どうすんの」

「つ……！」

全ての矢を切り伏せて首筋に刀を添える

「見えなかった？でしようね。人間の動体視力に追えるほど俺の刀は遅くないよ」

「女性に容赦なく暴力を振るえるなんて、誇りはないのか」

「誇り？誇りねえ……顔は狙ってないんだけど。それに」

——甘いこと言ってるなよ

重く苦しい霊圧

バキツ……と音を立てて維助の足元の瓦がひび割れ砕けていく

「くっ……」

「井上さん……！」

霊圧に魂が押しつぶされそうになっているのをみて距離を取ろうとするが……動かない
い

「（足が……まるで縫い付けられているように……動けない……!!）」

「いいか？自分で戦うって言ったんだ。戦う意思も術すべもない女、子供をいじめるのはそりや言われて仕方ねえかもしれねえけど、戦うって言ったんだろ？」

ルキアを助けるために死なせないために、死なないために鍛錬してきたんじゃないの

か？

織姫、戦えるのか？口先だけで軽い気持ちで尸魂界に来たのか？」

「あたしは…!!!」

重い霊圧を受けながらも、膝を立て、足に力を入れて立ち上がろうとする

「井上さん!!それ以上無理すると…魂魄に影響が…!!」

「あたしは…守られるだけじゃない!!戦えます!そして朽木さんを助ける!!」
つと、しつかり維助の方を見て立ち上がった――。

「……かくー!」

今までの霊圧がなんだったのかと、ふと空気が軽くなり

維助の顔はニッコリと何事も無かったかのように笑顔になった。

「は…?」

ポカンつと、口を開けた雨竜

「だから合格だって。覚悟あるのかなーって思ってたさ」

「はああ!?!いや!今完全に殺し合う雰囲気だったろ!」

「いやいや殺し合う?誰がそんなこと言ったの:俺言っただじゃん

ちよつとちよっかい掛けに来たって」

「はあああ?!?!」

つと心底呆れたような、イライラしたような大声を出す雨竜

いや声でつつつか!

ペタンつと座り込んでしまった織姫ちゃん

「ほら、本気で危ない時に本音つて出やすいでしょ?追い込んでごめん。でも君らの戦う覚悟は伝わったよ。」

「君さつき規定側って…」

「そうだね、規定側、だからルキアを助けることは出来ないけど、君達を見逃すことではできぬ。」

「君無茶苦茶だと言われないかい!?!」

つと半ギレの雨竜

「よく言われる。ほらほら早く行かんと俺の霊圧で誰かがよってきちゃうよ」
「君のせいじゃないか!!!」

つとぶつくさ言いながら去っていった。

あー面白かった

また緊急の隊首会が開かれた。

「ついに護廷十三隊の副官の一人を欠く事態となった

副隊長を含む上位席官の邸内での斬魄刀の常時携帯及び戦時全面解放を許可する」

恋次がやられたらしい。一護に

へえ、やるじゃんそっち行けばよかったかなあ…

これは、一回目の隊首会が行われる前に遡る

「藍染隊長…本当に…本当に?」

「ああ、おかしいとは思わないかい? 急な処刑、期日も早くなっている」

「たしかに…」

紫流と藍染は向き合って話していた

「朽木白哉…僕も信じたくは無いが、朽木隊長は手段を選ばない人だ、君の母も流魂街出

身なのに貴族の掟を破り無理やりに結婚した、手段を選ばない人なのに愛する妻の妹、自分の妹でもある朽木ルキアの極刑に反対しないのか…。

期限を早めるのも止めないのも…

朽木白哉が黒幕だからだ」

「そん…な」

「さあ…これを君に、止めれるのは君しかいない」

藍染は青い鍔も柄もない刀を紫流に手渡した

「これは…?」

「それは霊刀。

君を助ける刀さ、霊力の高い四大貴族にしか扱えない刀だ。それは君の力になる。」

「…なに…を」

紫流の胸元に藍染が霊刀を突き立てる

ドロツと、黒く変色し胸に飲まれていく霊刀

スツ——つと瞳からハイライトが消えていき

そのまま紫流はフラフラと去っていく

「靈子を溜め込んだ靈刀…あれほどの高濃度の靈子体を体内に宿しても魂魄が消滅しないとは、さすがは四大貴族…」

一人残った藍染はメガネに触れ口角は上がっている

「(靈刀の性質は実に面白い。靈子を吸収するだけでは無い…意志を持った者から膨大な靈力を吸収すると靈刀に意思が宿る。そして宿り主の強い感情を増加させる力をもち、宿り主の魂魄や感情によって変化し動き始める、進化と言い換えてもいい。)」

「(今の朽木紫流の感情は朽木白哉への嫌悪と憎悪)」

大抵の魂魄は耐えきれない、耐えれたとしても靈刀が内側から魂魄を傷つけ飲み込んでいく。浦原維助のようには行かないな、まだ実験が足りない、今回はどうなるか

」

さあ……面白いものを見せてくれ朽木紫流

藍染死す？と、合わせる顔がない話

「藍染隊長！藍染隊長…!!」

集会のために赴いたら桃の悲鳴。

アレが惣右介だつて…？

みんなが唾然として、壁を見上げている。

血柱の上には遺体がある——が、あれは惣右介じゃない。

だがみんなは惣右介だと思ひ込んでいる…

惣右介の鏡花水月で間違いないな。

自分の死体を偽装…そして隊長の座を捨てる事を意味している。

惣右介…本当に何をする気だ…？

「何や朝っぱらから騒々しいことやなあ」

っと呑気な声が聞こえた。ギンが、ニコリつと笑いかける

「お前か!!」

桃は斬魄刀を抜刀しギンに振り上げた。

殺し方とかギンの斬魄刀のやり方に見せ掛けてるし――

いや、あの遺体はガチでギンが死神を殺して惣右介が鏡花水月かけたのかな。

「あーあ……」

「吉良くん……!!どうして!!」

ギンの副官、イズルがそれを受け止めた

「維助様。止めましょうか」 つと碎蜂が腰の刀を抜こうとするのを止める

「いいよ、好きにやらせとけば」

そのうち始解した桃。

あーあー……床誰が治すと思ってるんだ。

「敵として……君を処理する!!」

「おもて
面を上げる

——わびすけ
侘助

だが——それを止めたのは

「動くなよ。どっちも、捕らえろ2人ともだ」

冬獅郎が2人を刀と足で斬魄刀をあしらい止める

「総隊長の報告は俺がする！そいつらは拘置だ連れて行け、

それに浦原隊長、傍観しないで止めたらどうなんだ」

つとこつちまで流れ弾が飛んできた

「いやあごめんごめん」

「いやあすんまへんな、十番隊長さん」

「市丸…てめえ雛森を殺そうとしたな…

雛森に血イ流させたら俺がてめえを殺すぞ」

「そら怖い、悪いやつが近づかんよう、よう見張つとかなあきまへんな」

ギリツと冬獅郎がギンを睨みつけた

桃とイヅルは連れていかれ、惣右介は下ろされ四番隊に運ばれていく。

碎蜂に四番隊に説明しておいてほしいと伝えて置いた。

「お友達が死んだんにようそんな顔でできますなあ」

「そんな顔？悲しいよ惣右介が死んだら」

「ふうん…気づいてませんの？何が起きるかワクワクしてるような顔しとるよ」

そう言つて去つていく

ワクワク…ねえ…。

そんな顔してるつもりはないけど、危機感ないんだらうな俺。

その日の集会はなくなつた

あちこちで霊圧の衝突を感じる…

更木と…一護か?

しばらく屋根の上でボーっとしてると碎蜂が現れた

「ご報告します、維助様、懺罪宮せんざいききゆうにて六番隊朽木白哉と旅禍との戦闘が行われた模様」

「へえ…白哉坊ちゃんとねえ…オレンジ髪?」

「はい…ですが」

言いにくそうに口籠る碎蜂に振り返る

「どうしたの? 死んだ?」

「いえ、どちらも死んではおりませぬ…ですが」

「四楓院夜一が旅禍をつれて逃亡。」

「はっ…はは」

俺はつい、笑い声が口からこぼれ落ちる

「維助様…?」

「夜一さん、何らかの方法で霊圧隠してんな…そりゃ気づかんわ、なるほど夜一さんが

ねえ…」

「如何なさいますか、警邏隊を動かし。「いや、待機だ」ですが！」

「他になんか言つてたか？」

「あつ、逃走する際に、3日で朽木白哉より強くする…つと言つていたようです」

「へえ…なるほど…ね。さっきの命令はそのままだ、二部隊は待機。碎蜂もそつちについてくれ」

俺は土をろはらつて立ち上がる

「維助様はどちらに？」

「二番隊隊舎に——ね」

「どうして!!どうしてだよ!俺だけ連れ帰つた!!」

一護は夜一の胸ぐらをつかみあげた

「あそこに残されて生き残れる可能性が高いのは俺だ!これじゃ岩鷲も花太郎もルキアもみんな殺されちゃう!」

「自惚れるな、おぬしとて可能性は低い、あそこにおつた誰一人白哉を相手に生き残れるものなごおらぬ」

「てめえ…!!」

怒りに満ちている一護を投げ飛ばす夜一

「騒ぐな、せつかく閉じた傷をまた開ける気か」

「それならどうしてルキアじゃなくて俺を…!」

「確かに、あの時あそこにおった者の中で白哉を倒せる可能性のあるものなど皆無じゃった、じゃが3日あればお主だけはその可能性が見えてくる。そう思うたから儂はお主を連れ帰った」

夜一は斬魄刀について説明をし始めた

「1つ目の解放を始解、2つ目は…卍解。始解状態と卍解状態での同じ斬魄刀の戦闘力は一般的に5倍から10倍と考えて良い」

「10倍…?」

「始解も卍解も習得せずに隊長になったのは更木剣八ぐらいじゃな」

「あとは浦原さんの兄貴だろ?」

「なんじゃ、維助の話を知ってるのか」

つと驚いた様子の夜一

「花太郎から聞いた、始解も卍解も見たことがない隊長」刀一本で全てを制する力をもつ、尸魂界一の剣術の天才…って言ってたぜ、浦原さんの兄貴も使えねえんじゃないの

か」

それに首を横に振る夜一

「あやつは始解も卍解も習得しておる。使わないのは…まああやつのごだわりというものか」

「なんだ、夜一さんあの人と仲いいのか」

「まあ。それより、かなりの危険が付きまとうがお主には全く別のやり方で…卍解を習得してもらおう

ただ、問題があつてのう」

つと悩んだように顎に手を添える夜一

「なんだよ、問題つて？」

「お主の卍解を習得するには転神体てんしんたいという斬魄刀の本体を強制的に具現化する道具が必要なんじゃが…」

「…よくわかんねえけどその道具があれば卍解習得できんだな？どこにあるんだ」

「転神体は隠密機動の最重要特殊霊具さいじゅうようとくしゅれいぐの一つ。普通の霊具と違い隠密機動が命をかけて守っておる。」

「まで…隠密機動つて」

『んで現世が嫌なんだ?』

『そりやまあ、会いたくないやつとか会っちゃいけないやつとかいるからなあ、ほら俺隠密機動だし!』

つと、現世にきた維助が話してたのを思い出した。

「浦原維助…浦原さんの兄貴の所か!」

コクンつと頷いた

「あやつは二番隊隊長兼、隠密機動総司令官、重要霊具を開くための鍵はあやつが持っている」

「つまり、浦原さんの兄貴から貰えばいいんだろ?」

「そう簡単に言うでない、あやつは規定側、恐らくは敵じゃ」

「…つてそんな始解も正解も使わねえ様な化け物から鍵を奪えつてことかよ!!」

つと頭をガシガシと掻きむしる一護

「儂は霊具の隠し場所を探してくる、儂のいた頃よりだいぶ変わっておるようだしのお主は二番隊へ向かい鍵を盗め。常に持っているとは限らん恐らくどこかに仕舞ってあるはずじゃ」

「んな無茶な、夜一さんがいけばいいだろ?」

「儂は……」

つと目を伏せる夜一

「あやつに合わせる顔がない。」

「……」

一護が去つた後……夜一は天井を見上げた

「(お主は儂が当主になるまで幼き頃から支えてくれた。じゃが儂はそれを……その地位を簡単に捨て去つてしまった……。どんな顔をして会えばいいと言うのじゃ)」

○二番隊隊舎

二番隊正門と書かれた場所まで来たは言いものの

一護は困惑していた

「(ここだけ世界観違くねえか?)」

江戸や城がある和風の風景なのに、周りにはロボットや上空には謎の浮遊物。SFと和風が合わさつた謎の空間が広がっていた

ロボットはガシヤンガシヤンつと音を立てて一定の場所を徘徊している。

門の前にもロボットが銃口を光らせ門番のように立ちはだかつていた

「見つかったら絶対ヤバイやつだ」

ロボットには銃火器が搭載されていて、それを見て冷や汗を流す。

「(ここ本当に尸魂界だよな??)ここから侵入して遠くに見える江戸城みたいな所に向かつて…浦原さんの兄貴から鍵を奪う…と)」

「できるかつ!!!蜂の巣なるわ!」

つい大声を出してしまった——その瞬間に

ウインつと、こちらに向けて銃口が向けられる

「げっ」

ズドドドド

「ギヤアアア!聞こえてんのかよオ!!!」

ガトリングが一齐に放たれ頬にかする

「くそ、仕方ねえ強行突破だ!」

塀が崩れたのをいいことに土煙の中走り門へ向かう…が

ウイイイイン

つと音がして上をむくと、目の前に門番のロボットがこちらに銃口を向けていた
「見えるのかよ!!!」

ギヤアアアアア!!!

つと外から悲鳴が聞こえる

「やっぱり来たか…さっつ、俺のからくり屋敷へようこそ。一護」

俺は隊首室でモニターを見ながら茶を飲む。

3日で強くなる…ね。卍解を習得しないと白哉坊ちゃんには勝てないと踏んだんだろう、だから具現化をすつ飛ばす道具を取りに来ると読んでた。

夜一さんじゃなく一護が来るともね。

たどり着けるかな…?

“ 『うおおおおー!!!』 ”

「あいつ脳筋かよ」

ロボットとロボットの間をすり抜けるようにして無理やり門に侵入

ビーム

“ 『ギヤアアア!!!』 ”

転がってくる玉

“『うおおおー!!』”

落とし穴

“『ドヒャアアアアア!!!』”

光線を避けて玉を避けて

情けない叫び声を上げながら地下に落ちていった。
最近技術から古典的なものまで盛りだくさんだよ。

「はは！愉快愉快！」

いやあ、こうでなきや。

「さて、新作の機械も試したいし…」

俺の横には数々の仕掛け作動のボタンが。

試作品処分にもなるしどんどん出しちゃおう！

多分死なないでしょ、生命力高いみたいだし。

白哉坊ちゃんから生き延びたもんね。

多分——大丈夫だよな？

黒崎 V S 維助、夜一との再開…？の話

“ 『うおおおお!!!』 ”

「あいつ、やばいな」

「おーい、もう早く来てくれよおっそいなあ」

「おーい、もう早く来てくれよおっそいなあ」

“ 『てめえ!!それなら早くこの機械を止めやがれ!!』 ”

「つと俺が映っているであろうモニターに向かって怒鳴る」

「あーはいはい」

“ 『てめえ!おちよくりやがって…!!』 ”

「俺は飽きて現世の雑誌を電子化したものを読み漁る」

“ 『本当にここどうなってるんだよ!!和風にするかSFにするかどっちかにしろ!!』 ”

「いやあ、少し中を改造したらこうなったんだよね」

“ 『少し!?どこがだ!って、うおおおお!!』 ”

「一護の後ろにいたメカがロケットを飛ばし一護は間髪を容れず髪を避ける」

その先が大爆発を起こしカメラが煙に包まれる

「お、大丈夫そ?」

“ 『大丈夫なわけあるかあ!!』 ”

つと、シヤチホコのようにひっくり返った一護が起き上がる
ずつと怒鳴りばなしだなあいつ。ってかタフすぎだろ

「いやあ、色々試したいからさ。そんなにタフなら大丈夫だよね」

俺は起き上がってボタンを押す

“ 『うおおおー!!!なんか出て来やがった!』 ”

その名も…まあ。ちよつと名前出せないけど。

前世に部屋に飾ってたおもちゃを作ってみた。

まあコックピットは誰も乗ってないけど

しばらく爆発音と悲鳴が響き渡った

——— さらに一時間後

ドガアアアんと、壁を突き抜けてきた一護

全部なぎ倒してきたらしいな。

「ぜええええ……！ぜええええ！ようやく……！ついた!!」

俺は機械を停止させる

「ようこそ、俺の部屋へ、会うのは2回目かな？一護」

「ふう……さあ、鍵を渡してもらおうぜ」

汗を拭った一護が俺の前に立つ

「俺の隊舎はどう？楽しかったでしょ。あと男の子なら機械好きでしょ？」

「そんなん見てる暇なかったわ!!あんたほんと浦原さんにそっくりだな!!」

つと俺に向かってビシツ!!つと指を指してきた

「俺が喜助に似たんじゃない。喜助が俺に似たの」

「どつちでもいいわ!」

つとガラクタになったメカの腕をぶん投げてくる。

「ただ遊んでたわけじゃない。ほら傷もうないでしょ?」

「つ……!」

一護はハツつとしたように自分の体を見る

「ね?霊力の回復を促進させる機械に細胞に働きかける音波があつてー」

「あああ!よくわかんねえよ!!あんた浦原さんと一緒に話長えな!」

「なんだよ、釣れないなあ…じゃあ傷も治った事だし」

「っ…!!」

俺は一護に急接近し首筋に刀を滑らせ

斬り落とした

「俺…?死んで…ない?」

啞然として固まっている黒崎に維助は肩を優しくたたくと

全身の汗を吹き出した黒崎は後ろに飛び距離を離れた

「死んだと思った…?まあ死んだよ。さっきね」

「どういう…事だよ…ガッ!!」

心臓に痛みが走る。

胸から斬魄刀が生えていて、維助がグリツつとねじ込むように刀を突き立てる

斬魄刀を抜いた維助、バタツつとその場に黒崎が倒れ

また、起き上がる

胸元には傷は無い。

幻覚……？ちがう、痛みは……今日は体に残ってる

震える手でギュツツと胸元を握りしめ維助に振り返る

「また死んだね。」

「なに……した」

「これだよ」

懐から取り出したのは腕時計のような形の機械

「これは結界機器けっかいきき16話で喜助か勝手に使ったもの。空間凍結もこの原理を使って行われてるんだ。これは俺が百年ぐらい前に開発した機械。

まあ簡単に説明すると……膨大な霊力と引き換えにボタンを押してもう一度押すまで、または時間が切れる霊力が切れるまでに行った使ったやつやつの事象じじょうをなかつたことにする機械。」

一歩一歩と、黒崎に近寄る維助。

「ボタン押して万引きして飯食つたとしても、もう一度ボタン押したら万引きしたことも飯食つたことも無かつたことにできる。」

昔は自分以外の記憶も消えるようにしてたんだけど、これはあえて残してる。死んだ恐怖も記憶も……残るでしょ？」

あの時——浦原喜助が黒崎の斬魄刀の名を聞くために行ったように、本物の殺気。

「(ころされる!!殺されちまう!!!)」

「逃げるの? いいのそれで」

また、何度も——何度も

死を経験する

「うわあああ!!!」

己の腕が切り落とされ、地面に転がるが、次の瞬間には何事も無かったかのように腕は戻り痛みも血も残っていない

「死なない為に努力してきたんでしょ?人間つてのは1度トラウマを抱えるとまた同じことが起こらないように警戒心が上がり、また防衛本能も…ね」

ゴソツつと音を立てて維助の拳を受けた一護が壁に埋まる…が

「ほら、今度は大丈夫だったね。胸に穴あかなくて良かった良かった」

「てめえ…」

汗を流した黒崎が斬魄刀で受け止めていたのだ。

「死なないために死なないように、努力する。死つてのを間近で感じれるこの機械、重宝ちようほうしてるんだよね。まああんまり使いすぎると精神壊す人が現れるからあんまりポンポン使えないけど」

イカれている。修行で本気で刺しにかかってくる浦原喜助なんぞ優しく感じるほどに。イカれている。そう思った

傷は治るにしろ記憶はこのころ、腕が足がなくなつて、胸の痛みも、首も

反射に首に添えられた刀を弾き返す。

刀だけではない、拳や足も致命傷になる威力を持っている。

精神を研ぎ澄ませ、隙を見せるな、

隙を見せた瞬間には

「がはっ…!!」

死が待っている

ぜえ…つと、浅い呼吸を繰り返す一護、考えるよりも先に身体が動くようになる。

避けて弾いて転がって

死にたくないという強い思いが

「うん、さすがだ」

さすが才能マンの一心の息子。

息子の一護も才能がある、無意識下の警戒や反射も早くなっている。

この機械は向いているやつと向いていない奴がいる。

向いていないやつは精神が弱いやつ。

戦いが怖くなり社会復帰が望めない状態にまでなってしまうことも。

逆に向いてるやつ力の向上はすごい

死にたくないという強い思いが、自分自身をも強くする

「はい。おしまい、もういいよ」

「はっ…?」

警戒からか俺にまだ斬魄刀を向ける一護

「もう何もしないって。ほら本当に捕まえる気なら機械なんか使わないからさ。俺はさ強いやつをどうこうするのって好きじゃないんだよね。強いやつは俺とまともに戦える相手になってくれるかもしれないし…ほらほら、もう何もしないって」

斬魄刀を手放して両手を上げると

ため息を吐いてその場に蹲った一護

「ごめんねー、怖かったね。はいこれ鍵。卍解習得するんでしょ」

しゃがんで一護の前に鍵を置くと、顔を上げた

「…いいのによ」

「いいって何が？」

「お前は…規定側ってやつじゃないのか」

「うーん、そうだね規定側だけど、夜一さんが尸魂界に来ていて、そっち側にいるんなら俺もそっち側だ」

訳わかんねえ…つと言いながら立ち上がって鍵を受け取った一護

「じゃまた後でね」

一護 一護 一日目が終わって温泉に入っている一護

「あちこち身体がギシギシいつてる…はあああ…」

短い時間だったとはいえ、訓練が役に立ったのか、危機察知能力とそれを避けるまたは受ける能力が上がった一護。

黒猫の状態と一緒に温泉に入っていた夜一が口を開いた

「それにしても維助も無茶な修行をする」

身体よりも精神に来る修行…

「もう、浦原さんとの修行のほうがよくほどマシだったぜ…」

「どっちも浦原じゃが「つつこむなよ」

「夜一さん、維助さんが死神ってことはやっぱり浦原さんも死神なのか」

「ん?なんじゃ喜助のやつ言っておらんかったのか」

先代護廷十三隊 十二番隊隊長「そして技術開発局創設者にして初代局長を務めた男じゃ。」

「浦原兄弟ってなんなんだよ…」

「あやつらは似たもの同士じゃからのう」

つと懐かしむように天井を見上げる

風呂にあがり、一護は一日の疲れからか爆睡をかましていた

「………維助」

「呼んだ?」

ビクッ!!! つと肩が上がる

懐かしい気持ちになり名を呼んだだけなのに…

ゆつくりと後ろを向くと目が合う

「いす…け」

100年前と違い、袖のない羽織を着た維助

「久しぶり夜一さん、勉強部屋は俺と喜助が作ったんだよ？俺が来てもおかしくないでしよっ？」

「儂は…」

先に目を逸らしたのは夜一で維助に背を向ける

「夜一さん」

優しい声。100年前に聞いた――声。

ぐつと涙が出そうになるのをこらえる

「夜一さん」

もう一度声をかけると震える拳を握りしめた夜一

「お主は、自分を忘れて幸せになつてくれと言つておつた。じゃが儂は維助の事を忘れてたことなど一度もない」

振り返つて維助の方を向いた夜一は目に涙をためていた。

「俺は最低なやつなんだよ。やりたいことがあるからここに残った。夜一さんは地位を捨ててまで現世に行つたのに俺は、やりたい事のために残ってしまった。こんな最低なやつ忘れてくれていい」

夜一はむつとした表情をして

バシツつと維助の頬を叩いた

啞然としたように己の頬を抑える維助

「儂も！・儂のしたいようにする!!儂はお主を忘れない!!例えお主が儂以外を見ようと、儂は忘れぬ！」

ポロツつと涙を流す夜一は、維助に強く訴えかけた

「付いてこなかったからと喜助も儂も恨んでおらぬ。お主が好きのように自由にしていい時の姿が好きじゃからの。儂の方こそ、お主が支えてくれて手に入れた当主と隊長、総司令官の座を捨て去つた事の方が心残りじゃった！」

「そんなこと気にしなくてよかつたのに。俺はなんとも思つてないよ。なんなら夜一さんの後を継げたことを誇りに思つてる。

じゃあお互いに悪かつたことで：仲直りしよ」

つと、優しく夜一が握りしめていた拳を開くように触れると

ギユツつと、夜一が維助の首に腕を回した

身を少し屈めて維助もまた夜一の背中に手を回した

「ずっと…ずっと…お主の事ばかり考えておった」

肩に顔を埋めて羽織が涙で濡れていく

「俺も…黒猫見ると夜一さんを連想しちゃって」

なんじゃそれはつと呆れたような顔をして…

ふはっ！つと吹き出すように笑った

「久しぶり、夜一さん。元気そうでよかった」

「お主も…元気そうでよかったぞ」

「つてことで、俺も正解の習得手伝いに来たよん、俺霊力沢山あるからさく休まずにできるね」

軀神体の維持に必要な霊力を俺が肩代わりする事になった。

「嘘だろ…」

つとげっそりしたような一護。

「んで、夜一さんとそんな近いんだよ」

と、指摘される

「ええ？そうかな」

夜一さんは俺の腕に絡むようにしてくっついていてる。

「儂と維助は許嫁じゃからのう。近くても問題あるまい」

「へえ…いいなず…け？」

嘘だろ？っというようにこちらを見てくる

「いやあ、婚約者つての元…じゃないですね。はい。」

元つと言おうとしたらギロツつと睨まれた。

応えを聞こうかの話

「応えを聞こうか……浦原維助」

「はっ、引きこもりはもう終わり？惣右介」

俺が居なくなると騒ぎになるので（特に碎蜂）

1時間2時間ぐらい勉強部屋をあけて歩いてたら。

霊圧を感じて振り返る

「見られたらどーすんの」

「大丈夫さ、僕の姿は君の部下に見えているからね」

つと不敵に笑う

「惣右介、隊長の座まで捨てて……どっか行くつもりか？」

「そうだね、新たな世界を生み出す為に必要な場所を用意しておいたんだ、もちろん君用にもね」

「ふうん。そりゃ残念」

「……と、言うことは来てはくれないのかい」

「そうだね、現状を捨ててまでそっちに行くメリツトが見当たらない。」

すると分かってたように口角を上げた惣右介

「そうだね、100年前から薄々と感じてたさ。君の内側の黒さは——ね。でもいいの
かい？私が居なくなったら君の機械を試してくれる奴は居なくなってしまうよ」

「うーん、それはそれで困るんだよなあ」

危ない機械は惣右介に試させてたけど、他の人にはなあ、密告されたり見られたりし
たら嫌だし。

「ふっ…君は私とは違うやり方で世界を変えようとしてる。君と私は一緒だ、違うの
かい？」

「何言ってるかわかんないなあ、含んだ言い方はまどろっこしいよ。」

俺は説明は苦手だけどっと前置きして惣右介の目を見た

「俺は世界を変えようだなんて思っていない。俺は俺の好きないようにやってる、その副産
物として少し世界が変わってしまっただけ。より良い世界にしたいとか、そんなことはこ
れっぽっちも思っていないよ。ドローンだって表向きは流魂街偵察用とかだけだ俺が
かっこいいって思ったから作っただけだしね。俺は歴史を作り歴史になる。悪いけど
そっちに行ったら俺はこっちで進化が出来なくなる。って事でその誘いは丁重にお断
りするよ」

「そうか……残念だ。まあ君の力がなくてもやり遂げてみせるさ……、もし私が天に立った時——君は必然的に私のものとなる。君を超える力を得てこよう」

「はっ、そういうのは女の子に言われたいものだね。俺に今度こそ勝てるといいな、惣右介。俺は楽しみにしてるよ」

踵を返した惣右介が帰っていく。

めんどくさい工程を得て「楽」を手に入れる

機械とは進化とはそういうものだろうか？

めんどくさい^信工程^用——この百年の工程を無駄にしてまで俺はそっちには行かないよ。

俺は俺の好きなように出来れば——それでいい。

「およ、恋次？」

「先生!？」

つと驚いたような表情でこつちを見る恋次、いや驚いたのは俺だが？

勉強部屋に戻ると恋次と鉢合わせしたのだ。

「維助!」

つと、崖の上で夜一さんが声をかける。

「はいはい、変わるよ」

「悪いの」

転神体の手網を変える

「なるほどな、先生も絡んでたのか」

つと、納得したような恋次

「言つとくけど最初からじゃないからな」

斬月と戦っている一護を見ながら恋次に訂正しておいた。

「どっちも同じだろ」つとというつぶやきが聞こえたけど無視しといた。

「そうじゃ維助、朽木ルキアの処刑が明日あすになった」

「そりや急だね。俺蝶連れてないから知らんかったわ」

「じゃろうと思つてな」

「紫流もどつか行くし…つたく、」

つと頭を掻く恋次

「へえ、紫流どつか行つてんのか」

「ああ、一護達が来てから見当たんねえんだ。まあ勝手にどつか行くのはいつもの事だが…あいつルキアの事心配してたから暴れたり早とちりすると思つただけだな…」

「まあ紫流なら大丈夫でしょ。」

紫流は熱くなる性格だけどそこまで馬鹿じゃない。

多分

恋次は斬魄刀の具現化には成功しているがまだ屈服出来てないらしく、端の方で斬魄刀とやり合い始めた、騒がしいな。

しばらくして伝令神機が鳴る

「はい、維助で一す」

“ 『維助様!!どこにおられるのですか!もうお時間でございます!双極へ出立のご用意を!!』 ”

「うわ、もうそんな時間?わかった。そろそろ行くわ」

もう朝になってたらしい、やっぱり勉強部屋は時間が分かりにくいからいけない。

「じゃあ俺はそろそろ行くわ、夜一さん後で頼むな」

爆睡している一護を一目見て夜一さんに頼んでおく

「よいのか、お主から碎蜂に説明した方が早いじやろうに」

俺が夜一さんに頼んだこと、それは碎蜂を止めて欲しいという話だ。

「いや、碎蜂は勘違いしてそれを訂正し続けても今だにあんなかんじで、夜一さんと喜助を恨んでる。ちゃんと当人同士が話した方がいいだろう」

「仕方ないのう……」

つと言いながら俺を見送ってくれた

「じゃ俺も行きます」

「恋次……。白哉坊ちゃんは強いぞ」

つと言うとハツつと笑う

「知ってますよ先生の弟子ですからね。でも……だからつて臆する理由にはなんねえ、俺が隊長を止めます」

つと別方角に走って行つた。

「さてと、さつさと行くかね」

瞬歩で目の前から消えた維助

「……あやつ百年前の儂と同じぐらいの速さになったの……それにしてもこの儂をこき使うのは維助と喜助ぐらいじゃの」

“ 『兄サンは人を動かすのが上手いんすよ。さらつとね。普通の人からすれば操られてるのも分からないほど——自然にね。それっぽい理由をつけるからタチが悪いんす』

“

100年前そう言っていた喜助の言葉を思い出す。

「全くじやの…維助。」

「閃花せんか」 回転をかけた特殊な瞬歩で相手の背後を取り刺突で鎖結さけつと魄睡はくすいを破壊する…
あんたの得意技だ」

阿散井恋次は、朽木白哉と対峙していた

「先生のおかげでようやく体が慣れるまで追いついた、朽木隊長…！その剣で俺は殺せねえ」

恋次のその言葉にふつと笑いをこぼす白哉

「滑稽だな、師匠に少々指南しなんを受けただけでこの私の剣を凌いだつもりか…私が得意としているものは閃花だけではない」

「っ…!!」

殺気と靈圧に身の毛が逆立つ感覚に襲われる

—— 受けるが良い

これが師匠から受け継ぐ抜刀術、

一瞬……あの時と同じ感覚。

強い強い殺気、初めて院生の頃。維助に刀を向けた講義、手も足も出なかった。剣すら交わしていないのに殺気だけで負けた。

あの時なら動けなかったであろう。

俺は——死なない為に。ルキアを死なせない為に……!!!

「先生よりも遅せえ!!!」

副隊長として白哉の刀を見続けた恋次だからこそ出来る受け技。

足の踏み込み方も刀の振りのくせも——

隣で見続けていた——！

「絶対に——左下から右上に斬り上げる——逆袈裟ぎやくげさ」

キーンと甲高い金属音が響く

酷く重い、霊圧の衝突で恋次の手に亀裂が入り血が流れ出す
だが斬魄刀から手は離れない。

「なに……名前を呼ばずに斬魄刀を——」

始解している蛇尾丸で抜刀術を受け止めた。

見えてはいない、だが来る場所に斬魄刀を構えただけ——。

「あんたを超えるぜ、朽木白哉！」

卍

解

狒狒王蛇尾丸

「もう一度言うぜ——おれはルキアを助けに行く」

卍解した恋次の刀が白哉に向かっている

「卍解というだけの圧はある。だが——幕引きだ」

散れ——千本桜

白哉が千本桜で蛇尾丸をバラバラにする——

いや、したはずだった。

バラバラになつた骨は結合し元の形に戻る

「狒狒王蛇尾丸の刃節は俺の霊圧で繋いでる。

何を驚いてんだ？千本桜を全て躲かわしただけのこと……

全て見えてる……！幕を引こうぜ俺と……あんたの戦いにな」

片膝をついた白哉は立ち上がりふとわらう

「卍解の欠点は霊圧に比例したその巨大さにある。刀剣としての常識を超えた形状と巨大さゆえにその動きの全てを完全に把握するためには卍解を会得してなお、何十年もの鍛錬が必要だ。恋次、貴様には卍解は早すぎる。

手加減は終いだ——恋次」

斬魄刀を下に向けて呟く

「つ……」

「私にも卍解があるということをお忘れてはいまいか？」

——卍

解

散れ千本桜景嚴

せんほんざくらかげよし

処刑が始まる話

双極に着いたとき、強い霊圧の衝突を感じとつた

恋次と……白哉坊ちゃん。

ああ、卍解を使ったのか。

さて――

「維助様」

俺の隣に立つ碎蜂一人で待たせてたようで悪い事をした。

「まだルキア来てないのか。つてか集まり悪いな」

何人かの隊長格が見当たらない。

冬獅郎まで居ないのは珍しいな

そのうち、見知った霊圧に振り返る

「坊ちゃん」

「……」

俺をじっと見たあと、処刑台を見上げた

「緋真にも止められた」

「…そうか、お前はどうしたいんだ」

「……」

白哉坊ちゃんは何も答えなかった。

恋次の霊圧はまだ残ってる。殺しはしなかったようだな。

「お前の好きなようにすればいい」

ルキアが連れられ鎖に繋がれる

「最後に言い残すことは？」

俯いていたルキアが顔を上げた

「…ならば…一つだけ」

「一護達を無事に現世に返してあげて欲しいのです。」

すると総隊長が頷いた

「お主の願い通り処刑が終わったアカツキには、旅禍どもを無傷で帰らせてやろう」

「あ……ありがとうございます」

卯ノ花隊長が話してるのが聞こえた

慈悲——ね。

双極を解放せよ

膨大な霊圧が解放され双極の矛が変化していく
ルキアは抑えられ浮き上がる

白哉坊ちゃんきこっ坊は目を伏せていた

燬きこ王双極の真の姿

彼がルキアを貫く――

はずだった

「一護……？」

つと、ルキアの声が聞こえた

双極の霊圧に隠れて来たのは一護

斬魄刀一本で止めた――。

そして、浮竹隊長と京楽隊長が四楓院家に伝わる道具を使用する

夜一さんあんなのいつの間に渡してたんだ。

そして一護が双極を真つ二つにしてルキアを小脇に抱えていた

ふは……つ……ここまで成長が早いとは。

成長速度に関しては俺より上かな

刀を握って一年未満……さすが――。

つと考えていると

「維助様!!」

止めろと言うのか、碎蜂が俺に向かって叫ぶ

「がっ…!!」

だが、碎蜂は首根っこを捕まれ吹っ飛ばされる

吹っ飛ばしたのは夜一さん

任せたよ夜一さん。

「ふは、傍観かい？維助君」つと、笑いを零し俺に振り返る京楽隊長

「さて、どつちに肩入れしようかなってね」

つと肩を竦めると、笠を上げてこちらに向けて笑いかける

相変わらずだという眩きが聞こえた

「浦原維助、ここに待機せよ」

ドンツつと重い霊圧

待機命令を出したのは総隊長で、京楽隊長と浮竹隊長は遠くに離れた

さて…一護と白哉坊ちゃんが戦っているし。

夜一さんと碎蜂…

しばらく傍観するか。

「おやめ下さい！白哉様!!」

「緋真」

「ゴホツゴホツ…」

咳き込む緋真に寄り添う白哉

「お願いします…ルキアを…ルキアを。」

首を横にふる白哉

「ならぬ、掟は掟、死神となった以上掟を破れば罰せられる」

「…でも…っ」

ぎゅつと拳を握る緋真

「当主様、お時間ですご出立の用意を」

と使用人が呼びに来たのを聞いて立ち上がる。

「ああ」

緋真を一見し踵を返す白哉

「お願い…どうか…どうか…」

悲痛な声を背に

てんさざんげつ
天鎖斬月

卍解した一護と卍解した白哉。

一護に虚の仮面が現れるが青い光に包まれ消え去った。

破道の六十三雷吼炮らいこうほう

黄色い光線が一護に向かっていく

「効かねえよ！」

刀でそれを受止め——閃光は消え去る

「私の鬼道を斬った……？いや違うな吸収したのか」

卍解した一護の細身の斬月にはバチツつと雷のようなものがまとっていた

素早い動きの一護が白哉の後ろに回る

「その手はもう見たぞ、小僧」

刀を受け止めた白哉に、一護はニヤリと笑う

「見てねえよ」

「なにっ……」

バチツつと雷電が走り白哉が一護から離れる

一護がそれを逃さず黄色い雷の斬撃を放つ。

「ぐっ……」

袖布を掠め避ける白哉はふと思考を回す

「(卍解としての戦力全てを小さな刀に凝縮することで超速戦闘を可能にした卍解ではないのか……？さっきの斬撃は霊圧——いや違う。

私の鬼道だ。吸収した鬼道を斬撃として放つ——)

それが貴様の全てか——小僧」

何度も通じる技じゃない、得意の鬼道も使わずして白哉は戦える。

傷が増えたのは一護の方だった。

血を流し息が絶え絶えの一護。

一護と対峙していた白哉は手を止めた

それに眉をひそめる

「もうしめえかよ」

「なぜ…何故貴様はルキアを助けようとする」

「はあ？」

いきなりなんだと眉間にシワがよる

「逆になんで助けねえんだよ」

「罪があるものは裁かなければならぬ、それが掟だからだ。我ら朽木家は四大貴族の一

つ、我らが守らず誰が掟を守る」

「知ってるぜ、ルキアの実の姉であんたの奥さん」

その言葉にピクつと白哉の指先が動く

「あんた、そのすげーお貴族様と流魂街の住民との結婚はご法度なんだろ。その掟を破つて無理やり結婚した。あんたも守ってねえじゃねえか、掟を。」

俺はいいと思うぜそういうの、俺は掟と戦う。恩人が殺されるのに黙って見てられるかよ。あんたも…掟と戦えよ1度や2度破つても一緒だろ」

深く息を吸った一護

「死つてのは本当にあるんだ、消えちまうんだよ。あんたら死神は死んだ奴らばっか見てるから感覚薄いかも知んねえけど。」

死ぬと——後悔するんだ、何も残んねえんだ」

その言葉に、ふつと笑った白哉

初めて見る笑顔、それは優しい顔をしていた

「私はもうルキアを追わぬ。この勝負兄の勝ちだ。黒崎一護」

「つ…!!俺の勝ち?」

一護は勝利を噛み締める

白哉坊ちゃんが去って一護がふらりと倒れた

「わあああ！黒崎くん!?! って浦原さん?」

この声は――

「織姫ちゃん」

織姫ちゃんに抱きつこうとしたらスツと横から腕で制される

「なんだよ雨竜ちゃん、邪魔すんなよ」

「ちゃん付けはやめないか。それに女性にそうベタベタするのはどうかと思うが」

雨竜ちゃんのせいで倒れた一護の元に行ってしまった織姫ちゃん

まだベタベタしてないっの

その瞬間頭に響き渡る声

――天てんてい挺いっくうら空羅

『護廷十三隊各隊長及び副隊長、副隊長代理各位。緊急伝心です』

伝令神機は音にかき消されるけどこれは脳内に直接伝える鬼道。

卯ノ花隊長の所の副隊長さんか。

そして藍染の事が伝えられた、四十六室の皆殺しも――

さて、藍染。きつとここに来る

だが…それよりも先に知らない霊圧を感じとった

『それからもうひとつ!! 双極の丘に——青い刀を携えた……』

そこで声は聞こえなくなる……

——瞬間上から重い霊圧が降ってきた

落下地点は織姫ちゃんと一護の所

すぐに駆け寄り斬魄刀で弾き返す。

「嘘だろ……?」

つとその霊圧の正体を見た恋次の絶望したような声が聞こえる

俺の目の前に立つ。青い刀——

大太刀のようなデカイ霊刀を構えた

最^{ヴァ}上^{スト}級^ロ大^デ

z45》虚《／text》《／text》《／text》《text:rx45》《text:ry45》《text:r

「うらはら…:さん」

重い霊圧に顔を歪ませる織姫ちゃん

「大丈夫、俺が守るからさ一護のそばにいてあげて。俺の間合いにいれば大丈夫」
俺はそいつに切っ先を向けた

「俺の名は浦原維助、俺の相手をよろしくな」

※維助描写、注意

ヴァストローデの話

「俺は浦原維助、よろしく」

我流の構えをした維助がニヤリと笑う

ヴァストローデとは、虚の中で一番上に位置する虚の呼び名である。

大太刀を構えた少し小さなヴァストローデ。

ボサボサの白髪に目元には目隠しがされていて顔はよく分からない

「まっ……先生！」

何かを言いかけた恋次は次の瞬間の轟音によりかき消された

霊圧同士の衝突――

地が割れヒビが入っていく

「織姫ちゃん、なんか守系の技使えるんでしょ？悪いけど皆のことよろしく」

「は……はい！」

押しつぶされるような霊圧に本来なら怯えるはずなのに何故か維助の後ろは安心感があつた。

「うらは……らさん……俺も加勢を……っ」

地面に這いつくばっている一護、白哉との戦闘で疲弊している

「ばーか、その状態で戦えるかよ。援護は出来ない休んどけ」

次の瞬間地面を蹴りあげた維助は空中で刀を軸に回転し上から叩きつけるように振り落とした

それを大太刀で受け止めるが、地面が耐えきれずに割れる

「なっ……崖が……!!」

足元ギリギリで崩れた崖に青さめる雨竜

維助は被害を考えヴァストローデの腹に膝を入れ空中に吹き飛ばす

「あんな戦闘慣れしてないだろ中級より弱いぞ」

斬魄刀を肩に背負いトントントンと叩く維助。

違和感——そう、違和感を覚える。

小さな人のような体に収束した霊圧は底知れず。

力はただのヴァストローデに類似しているが、知能が見当たらない。

本能のままに暴れる下級の虚のよう

それに死覇装を着ていて――まるで死神のような――
虚が死神化したもの……か？

それとも平子隊長……平子さんと同じ死神が虚化したものだろうか。

「まあ、^{霊刀}それを持つてゐることは惣右介関連だろうなあ。

でも相手が悪かったな。さようなら――」

刀を振り下ろす――

――瞬間ピタリと手が止まった

「どうしたの恋次」

恋次の眉間スレスレで止まった斬魄刀に恋次は冷や汗を流す。

恋次が虚の前に手を広げて維助を止めたのだ。

「先生……いつ……ただの虚じゃない!! ！いつは……」

ハツつとした維助が恋次の胸ぐらをつかみ後ろに引つ張り硬化した足で虚の刀を止めた。

すぐに距離を置いて恋次を立たせる

「なんだ、あいつ知ってんのか……?」

「一瞬しか見えなかったんすけど……あいつの手甲に――」

朽木家の紋様が」

「……………まじっ?」

コクンつと頷く恋次。

そんなの全然気にしていなかった、維助はふと——ひとつの可能性が頭を過ぎる

「あの身長……………紫流と同じぐらいだよな。」

「えっ?」

恋次は虚を見つめる

「紫流から連絡は?」

「ない……………です」

「まさかあれが紫流だったりする?」

「……………」

黙りこくった恋次。

髪色も霊圧も別物……………紫流には見えない。だが——

「仕方ねえ目隠しとるか」

「なっ……………無茶ですよ! って早!」

維助は刀を仕舞うとヴァアストローデに向かう、

大太刀を薙ぎ払うようにして横に振ったヴァストローデ。

だがその刀を腕一本で止める

ギチギチつと筋肉が軋む音がヴァストローデから聞こえてくるがお構い無しに維助は顔を驚掴みするように握ると目隠しを剥ぎ取った。

「……」

拳を振るわれその手を離し恋次の隣に戻る

「おいおい……まじかよ紫流」

緋真ちゃんにも白哉坊ちゃんにも似た目。間違いない紫流がそこにいた。

焦点は合っておらず、まさに死人の目

その瞬間。パチパチパチつと拍手が聞こえた

「……惣右介」

「さすがだよ、最上位大虚の斬撃を腕一本無傷で止めるなんてね」

俺の方を見上げる惣右介はニヤリと笑う。

「なっ……ルキア!」

そう声を上げたのは恋次で

惣右介の傍にはルキアがへたり込んでいて、惣右介の霊圧に当てられていた。

「恋次。ルキアをよろしく俺はこっち何とかするから」

向かってくる紫流を吹き飛ばす。

つと、ぐつと、紫流を見たあとルキアをみて恋次はルキアの方へ飛んでいく。

さて……どうするか。殺す訳にも行かない。

これが平子隊長と一緒にやり方で虚化したなら俺はお手上げ、喜助に聞かなきゃわかんねえ。

仕方ねえ——落とすか！

俺は向かってくる紫流の霊刀を抑え引つ張りながら俺は相手をひっくり返し腕を足で押さえつけて首に腕を回す。

首の骨を砕かないように気をつけながら締め続けると暴れる暴れる。

だが赤子のように軽く抑え続けるとふつと力が抜けた。

あれ、死んでないよな？って思ったけど大丈夫だったらしい。

紫流を俺の帯で縛り付ける、まあこんなの蜘蛛の糸のようにちぎられるだろうけど念の為念の為。

織姫ちゃんの隣に下ろす。

「いやあ手こずった手こずった」

「君……戸魂界一の剣術使いなんだよな……？ほぼ力でのゴリ押しじゃないか」

つと呆れたような顔をする雨竜ちゃん

「いやあだつて斬つたら傷ついちゃうじゃん。切り傷つてお風呂入る時痛いんだよ」

「そういう問題なの……か……？」 つと頭を抱えた雨竜

「さて、惣右介。ルキアを離しなよ」

「ふっ……いいさ離してあげよう」

首輪を掴んでいた手を離すと、ルキアの胸の穴が塞がる

惣右介の手には――なるほどな

「それが崩玉……ね。喜助の」

「そうさ、君は初めて見るのかな」

地面に這いつくばっていた一護が唸る

「浦原さんの……？」

うわ、腹。パカつてきれてるじゃん瞬殺されたのか。痛そうあれ風呂しみるよ

「死神の虚化……限界を超える力を手に入れることが出来る。浦原喜助が作ったのは瞬時に虚と死神の境界を取り払う物質。名は――崩玉。彼も危険なものだと判断したんだろう。破壊を試みたが失敗した――いづれ彼が考えた方法。崩玉そのものに防壁をかけ他の魂魄の奥底に埋め込んで隠すという方法だ」

ふと、ルキアに目を向ける

「もう分かるだろう？その隠し場所に見つけたのが朽木ルキア……君さ。」
すると俺の方を見た惣右介

「最初は君を隠し場所にしようとしたんだが、それではリスクが多すぎる。そう考え浦原喜助は霊力を分解し続ける義骸を朽木ルキアに与え人間の魂魄に成り下げて崩玉の行方を永遠にくらませようとしていた」

リスク……ねえ、俺が悪用すると思つたのか。それとも……まあ喜助の考えることは何となくわかる、恐らく色々考え想定できる全てをリスクと考えたんだろうな。

あと俺が崩玉を生産し始めないかとか考えたのかな。さすがにしないって。多分

「魂魄に直接埋め込まれた異物質を取り出す方法は二つしかない。双極のように熱破壊能力で外殻である魂魄を蒸発させて取り出すか、何らかの方法で魂魄組成こんぱくせいせいに直接介入して分離させるか」

そういえば俺に喜助が埋め込んだのはなんだったんだ……？30話にて

「これは君にあげよう、もう用済みだからね」つと投げられたものをキャッチする。

ふうん、あいつ喜助魂魄に埋め込んだの取り出せないとか言いつつ作ってたんか。

「どーも、それで。紫流に何したんお前」つと親指で紫流のほうを指す

「まさか最上位大虚が失神するなんてね。私は君の研究から疑似的な霊刀を生み出した。周りの霊子を吸い取り溜め込む……だが、意思のある生物から溢れる霊子を吸い取

ると霊刀に意思が宿るといふ性質を見つけたのさ。やはり君のように霊刀は上手く作れず魂魄の方が耐えきれなくなってしまうけどね」

「勝手に人の道具パクるのやめてもらっても?」

「意志を持った霊刀……それを魂魄に埋め込むと宿り主の力の魂魄環境と感情により変化する……! そう。そして朽木紫流は進化に成功したのだ」

「……へえ進化ねえ」

楽しそうに笑う惣右介

「そう、進化……彼の強さへの執着、強い憎しみに霊刀が共鳴し、魂魄が虚のように変化した。だがそれは虚であり虚ではない、死神であつて死神でもない存在……まったく別の存在へと進化したのだ」

「とどのつまり、霊刀を埋め込んで実験したのね」

「ただ、成功したと言つても知性の問題や制御の問題なんかもあるからね、まだまだ試作段階……第1歩つてところかな」

シユツ——つと惣右介が消えすぐに現れる

気絶した紫流の襟を持つて

失神している紫流はダランつと力が抜けた状態で引きずられていた

「だが、調整するにも、もう霊刀は浦原喜助の技術を持つてしても外せないようだ。もう用済みだ、ギン」

ギンが脇差を構えた

なるほどね、道具は使えないから俺に渡したのか。

「紫流を殺すつて？させると思うの」

「君は人に執着しない、利用する為に己のためだけに動く。助けられたから、恩があるから、瀨霊廷の為にという戯言を吐きながら腹の中は真つ黒……この私ですら利用する。私利私欲の為なら手段を選ばない君に――朽木紫流を助ける意味が？弟子の子だからなんて偽りの理由はいらないよ」

「はっ、俺をなんだと思つてんの？それに少し言葉が足りなかつたな。紫流を殺すなんて――」

ふわりと桜が舞う――。

「白哉がさせると思つてんの？」

惣右介が片手に持っていた紫流は消える

「驚いたな——。私が斬られるとは……ね。朽木隊長」

己の首に浅く皮膚が裂け血が流れるのを興味深く眺める惣右介。

少し離れた場所には紫流を抱えた坊ちやんが立っていた。

「さすがは浦原維助の一番弟子。先程の阿散井くんとこの戦闘は手を抜いてたようだね。」

「なんや、早いやん。見えんかったわア」

つと呑気に目を擦る振りをするギン

スツつと自分の柄に手をかけた惣右介。だが——

「動くな、筋一本でも動かせば」

「即座に首を跳ねる」

夜一さんと碎蜂。お互いボロボロだが戻ってきたようだ。

惣右介の首筋に刀を添えていた

「そこまでよ、動かない事ねギン」

乱菊ちゃんも駆けつけ、ギンの首筋に刀を添える

そして総隊長や浮竹隊長京楽隊長も戻ってくる。

「終わりじゃ、藍染」

つと夜一さんが惣右介を睨みつけると

「終わり……ねえ」

つと口角を上げる惣右介

その時——俺の伝令神機が震える

「空間裂決反応？」

近くで虚出現時にしか鳴らない反応が起きる

「!!離れろ碎蜂！」

上からの光線が惣右介らを包む。

なるほどね——もうすでに虚側についてたわけか。

上空の空には大きな亀裂が入り

そこからおびただしい数の大虚が顔をのぞかせていた

光線は反膜、外と中は干渉不能の世界。

つまりは何も出来ない。

「地に堕ちたか……藍染！」

一歩踏み出しギリッと惣右介を睨みつける浮竹隊長。

「驕りが過ぎるぞ……、君達は止まっている。進もうとしない、現状に満足し進もうとしない。最初から誰も天になど立ってはいないのさ。」

この停滞した世界の針を動かすには誰かが天に立たなければならぬ

惣右介は髪をかきあげ、メガネを外しメガネを見つめた。

ギユツと、メガネを握る惣右介は口角を上げる

「そう……進もうとしない、歴史に名を刻み続ける――1人を除いて」

そして下を見下ろし「俺と目が合うとふつと笑った

「しばらくの分かれた。さようなら死神諸君、旅禍の少年――」

そうして空間は消え慌ただしく死神が動き始めた

「けが人を――！」

つとあつちこつち走る死神をかき分けて歩く

「坊ちゃん」

「師匠」

応急処置をされている坊ちゃん腕の中には紫流が目を閉じていた。

「……特殊な睡眠薬を入れておくから暫くは大丈夫。紫流は俺が何とかする。しばらく任せてくれないか？」

「……」

坊ちゃんは名残惜しそうに俺に紫流を渡し、フラフラと4番隊に連れられて行った。

「京楽隊長」

「ん？どうしたんだい維助君」

紫流の状況
事の顛末をだいたい分かつてる近くにいた京楽隊長に話しかけた。

「しばらく俺10日ぐらい現世に行つてくる。総隊長に適當に言つてほしい」

「ええ、僕が怒られちゃうじゃないの……それに紫流くんのことでかい？」

おれはコクンつと頷く。

「このまま12番隊にバラされるのも阻止したいし。四十六室が殺され機能してないけど、そのうち復活したら紫流が処されるかもしれない。体制が全然整つてない今、何とかしてくるよ」

「そう、わかつた君と僕の仲だしね。山爺には適當に言つておくよ」

「ありがとう、京楽隊長」

一護以来だろうか現世に来るのは……

紫流は眠つたまま。一応他の魂魄に影響が出ないように霊圧遮断マントを被せている。

俺はそのままひとつの場所に降り立った

「ボロくさ……」

ボロボロの店の前。

玄関を軽く叩く

浦原喜助との再会の話

扉をコンコンつと軽く叩くと

「はあい、今行きます」つと女の子の声聞こえた

すぐに玄関が開き黒髪の女の子が顔を出す。

「どちら様ですか……？」つと首を傾げる。

この子……なんだろう人間じゃないな。

死神でもない……

「お父さんいる？お父さんじゃないか、なんか男の人」

「えつ……と……大きい人と。大きい人がいます」

「どつちもでかいのか、じゃあ俺と似た髪の方を呼んできて」つと言うと、コクンつと頷いて奥に行つたかと思うと

「はあ〜い。どちらさん……で……ですか」

つと、目を見開いた――

「よっ！喜助」

喜助と目が合う。

「兄サン?」

「なんだよ、そんな幽霊見るような顔してーほーらお兄ちゃんだよー!」

つと思いつきり抱きつこうと飛びつくと、ヒョイと横にズレて俺の顔面が柱に衝突した。

「本物だった」

つと、聞こえた。

俺は鼻を押えながら喜助に振り向く

「ばっかやろう、お兄ちゃんの抱擁避けるとか!」

「いや、その勢いで来られるとボクの背骨が折れるんす」つと静かに突っ込む

「久しぶり喜助。元気そうだな」

「兄サンは相変わらず胡散臭いっすね」

「馬鹿野郎、今のお前の方が胡散臭いわ」

下駄に甚平とか現代に浮きすぎだろ。

「まあいいや、喜助早速で悪いけど——手伝ってくれや」

地下の研究室みたいな所に寝かせた紫流。

両手両足を繋ぎなんか色々器具を持ってきた喜助。

「来て早々面倒事を持ってこないで欲しいんすけど……だいたいボク紫流サンと面識ないんすけど」

「学校とかの手続きした仲だろ？」

「どんな仲ツスか……直接会ってるのは夜一サンぐらいツスよ」

喜助が紫流から血液を採取する。

そして俺は喜助が作業してる間に事の顛末を話す。

「なるほど。霊刀はただ虚を抑える力ではなく。宿り主の状態や感情で変化していた……宿り主が虚の力を抑えようとしていた為。結果として真咲サンの虚化も黒崎サンの虚化も抑えられている……つと。んでなんで兄サンはあんまり興味なさそうなんすか？自分で作ったものでしょ？」

後ろ向いてるのになんで俺のことがわかるのか不思議である。

「ありや、分かつちやった？」

つとと言うと呆れたように振り返った。

「見なくても分かりますよ、何年いると思ってるんすか」

そりゃ生まれた時からだもんなあ

「興味が全く無いわけじゃないけど。そういう魂魄どうこうは喜助の得意分野だろ？魂魄を進化とかはなあ……機械を取り付けてオンオフのスイッチ付けるならまだしも」

「相変わらず選り好み凄いつスね……」

「それに同じものは惣右介には作れない。あいつは頭はあるし鬼道系のものの操作は長けてるけど、機械は無理っぽいし。」

「へえ……」

「紫流の持っていた大太刀の霊刀。あれは機械で霊子を集めてる訳じゃなく。霊圧吸収石を付けて俺の霊子収束機の代用として使ってる。それに纏わせるのも俺は機械で自働一定のスピードで威力でってきちんと調節できるけど、あいつのは無理だから、あんなに馬鹿デカい大太刀になった。霊子の集結もまばらなせいで威力が出ない。」

「いやまあ、そんな話されてもボク実際に見たわけじゃないんでよくわかんないんですけど」

相変わらず説明下手つすねえ……つと言われてお前もなつて言っておいた。

「いや、ボクは説明長いだけなんで」

「同じだろ、まっ結論から言うならあいつは俺と同じ霊刀は作れないし多分操れない。出来たとしてもただ似てるだけで穴はあるし量産はできない。俺は量産ができる機械

を作れて全く同じに1mmのズレもなくできるがあいつは手作業。時間もかかるし埋め込んだものを取り出せないとなるとさらに時間がかかる……1年以内に作れても1本や2本——そんな脅威なものじゃないね」

「最上位大虚級を脅威じゃないって言えるの兄サンぐらいなんすけど」
足を組んでその上に頬杖をついた俺に眉を顰める喜助。

「正直残念なんだよね」

そういつた俺に機械に向かって作業を再開した喜助。

愚痴を聞いてやるぞって言う喜助の体制だ。

「俺は講師として強いやつを作るために頑張つて来たつもりなんだよ。俺が講師初めてから死神の死亡率も下がった。二番隊の危険だった四部隊の死亡率も下がり下がった。院で始解が出来るやつも増えてきたし優秀な人材はどんどん成長して行ってる。けど——弱いんだ」

俺はため息を吐いて天井を見上げる

ゴウゴウつと換気扇の音と喜助の作業音が響く

「死ななくなつたし少しずつ。少しずつ少しずつ成長はしてる、教え子は席官になつてるし隊長格にも、大虚の討伐報告もあるし。殺気の耐性も受け身も防御術も反撃も、戦闘能力も上がってるのに……どうして弱いんだろ。」

俺さ惣右介の霊刀の使い方見て……別にいいんじゃないかって思ったんだよね」

「……」

喜助は何も言わずに作業をする

俺は続けた

「皆の反応みてるよ、倫理に反してるみたいなの顔するけど、まあ今回の紫流みたいに無理やりやるのはちよつとあれだけ……。虚の力を抑えるどうこうみたいに利もあるし。それに目には目をつけて言うじゃん？もし惣右介が霊刀作ってきたら紫流みたいにやばいことするならこつちも俺の霊刀使って対抗すればいいと思うんだよね。力ないやつでも技術ないやつでもスパスパ斬れるし。」

肺の中の空気をすべて吐き出すように深いため息が出た。

「でもまあ、長年の勘だけ。みんな抵抗するんだよね、未知のものって怖いし惣右介の見たら危険じゃないかとかリスク考えて使わないだろうな。」

相手が拳銃を使ってきたらこつちはロケットランチャーで対抗……みたいになればいいのになあ〜」

「あまり力を持ちすぎると上の人がそれを制御出来ずに色々問題が起きるからツッよ。あまりある力は破滅をもたらしますし」

「まあ……大地が滅ぶのが先かもな。」

「んで、話変わりますけど兄サン。尸魂界帰ったらどうなるか予想ついてんすよね？」

「まあ……何らかの罰か尋問はされるかもな。けど今四十六室も居ないし。追放は出来ないと思うよ。とある法もあるし尸魂界に不利益しかないしね」

「あつ、いいきるんすね」

「当たり前じゃん、俺がどれだけ外堀埋めたと思ってるの？伝令神機の改造生産の技術の権利は俺が全て握ってる。俺がもし尸魂界から追放されるとしたら俺はそれを全て消すか持ち去るわ。そうしたらどうなると思う？」

「そうツスねえ……伝令神機という情報機関という便利なものが整ってる今、それが途端に無くなれば大混乱が予想されるでしょうね……便利なものに頼りすぎるとこうなるぞっていう本のページが作れそうツスね」

「いいように使われるだけは嫌だからね。ちゃんと設置式の機械にも俺の細工が施されてるし。阿近にも作れないと思うし……そういうリスクを考えたら多分謹慎ぐらいで済むんじゃないかな。外面はいいから俺。」

「自分で言うもんじゃないツスよそれ……」

「それに、惣右介という強大な敵ができた今。戦力を削る意味が無い。人工とはいえ最上位大虚を制圧したわけだし。」

「それに悪用されるものを作ったとか言われるのはちよつと無理があるよね」

「靈刀ツスカ？」

「そく。ただ靈力ないやつでも戦える武器、かつこい強い武器が作れないかなって思つて作つただけだ。」

惣右介が改造するなんてねえくでも、それは使用者がどうこうしただけで、製作者責められるのあんまりじゃね？」

俺は現世の文献を思い出した。

「現世で有名なノーベル。彼はダイナマイトを作つてお互いが滅亡する危険な兵器を作り。それを圧力として戦争を起こさせないようにした。」

国を守る軍事力がお互いになれば抑止力として働いて——つてね。

簡単に言えば殺傷能力を持つものを作つてしまえばそれは使用者によつて使い道が変わるんだよ。

野菜を切る包丁で人を刺すのと同じ、野菜^虚を斬るために作つたのに、犯罪者^{惣右介}が人を殺すのに使う。

それで生産メーカー側が怒られるのつておかしいよねえ」

「まあ、それとこれとは話は別つて言われて終わりでしょうね。」

「言い訳考えなきやなあ〜」

「まあ頑張つてくださいいな」

つと、他人事のように言う。まあ他人事なんだけど

「惣右介が黒幕だつてわかつてもう喜助の冤罪も解けたんじゃないの？ いいじゃん戻つてくれれば」

つとと言うと呆れたような顔を向ける

「戻りませんし、戻れませんよ。ボクは虚化の研究だけじゃなく、追放される理由としては霊圧を遮断する義骸を作ってしまったせいなんすから。禁忌事象研究の罪でね。それに涅サンが上手くやつてるようすし。ボクが行ったら彼激怒するでしょ？」

「そつかあ……綱彌代がうるさいかあ。まあ涅が喜助に局長の座を譲り渡すわけないもんな」

「兄サンが追放される事になったらここに匿つてあげるんで大丈夫ツスよ」

「そーだな……そしたら現世と尸魂界の境界を無くす機械でも作るか」

つとと言うと

「兄サンがそれを言うとしゃレにならないんでやめてください」

つてガチで怒られた。

紫流を何とかして……尸魂界に戻るのかアゝなんかめんどくさいな

まあ反省してるフリでもすれば大丈夫でしょ。

共同作業の話

「紫流はどんな感じ?」

「うーん……魂魄に霊刀が寄生してますね。根が張つてると言えばわかりやすいツスかね……無理に引き剥がそうとすれば魂魄が傷つきますし、恐らく無理でしょう」

つと、PCに資料まとめてる喜助

惣右介の言った通りだったな。

「さて――喜助久しぶりに共同作業といこうじゃん」

「懐かしいツスね」

ふつと、帽子を深く被つて笑を零した喜助。

やっぱりお前の方が胡散臭いよ

「ん……こは?」

「あつ、おきたー?紫流おはよん」

「あれ……お師匠さん？」

目を擦りながら起き上がる紫流

「あれ……お師匠がふたり……」

ぼやーつと俺らを見てそういった。

寝ぼけてんなつと言つてデコピンすると

「イツタアア!!お師匠さん!なにすんだよ」

つとおでこを抑えて涙目に

紫流の髪色は白のままだけど、それ以外は大丈夫そうだ。

「制御装置大丈夫そうだね」

「そうツスね〜」

???つと頭の上にハテナを浮かべてる紫流に説明

「つまり俺の魂魄に制御装置を埋め込んだ……?」

「そつ！魂魄の維持と安定。つまり感情をむき出しにしても霊刀に飲まれないようにしたわけ！喜助が原理と仕様を考えて俺が作った。」

つという自分の胸に手を添えてふうーんつと言った実感無いんだろうな

「藍染隊長に呼ばれたのは知ってるけど、あとは全然記憶が無い。俺死神でも虚でも無いの？」

つと言うと喜助が口を開く

「どちらでもないというよりどちらでもあるの存在と、言ったほうがいいっすかね。ただの虚化だけでは話が済まないほどに——普通なら魂魄が耐えきれず消滅してもおかしくないんすけど……まあ膨大な霊圧量とその耐久性はさすがは四大貴族ツスカね。崩玉の虚化ではなく、霊刀が宿り主の意志を尊重した結果、魂魄自体が虚と死神の境界を破り混ざりあう魂魄に進化した——って感じですかね」

ざっくり簡単に説明したんすけど。つと笑う喜助

「まだまだ未解明なことがあるので朽木サンの為に色々定期的に調べさせてもらいますよん。大丈夫大丈夫アタシ涅サンと違ってバラバラにせずとも調べられますんで」

「バラツ……!?つまり崩玉とやらも霊刀とやらも……あんたら浦原兄弟が一枚噛んでるってことか？」

俺と喜助は顔を見合せた

「そー／だな／ツスね」

「あんたら刺されても知らねえからな!？」

つと怒り出す。

「大丈夫大丈夫、刺される前に殺すから」

「そういう問題じゃねえ! つーか俺尸魂界帰れんのかよ」

「まあ、紫流が望むなら俺が何とかするよ。権力あるし」

「いや、何とかしてくんねえと困るからな! 何とかしろよ! だいたいあんたらのせいなんだから!」

「ごめん」

「軽い!!」

「じやあそろそろ俺戻るから。悪いけど喜助。紫流をよろしく」

「ええ」 つと2人の声がハモる

「なんだよ……」

「こんなボロ屋に住むの? 嫌なんだけど」

「ボロっ……!?! アタシだって生活費かかるから嫌っす!」

まあ夜一さんらの最低限の資金だけでもんな……

「はあ? 俺が住んでやるんだぞ? それがスイーツホテルでも取れや。」

「スイートホテルな。生活費は俺がだすからしばらくここに住んでくれ。一護が戻ってきたら相談していいから」

「はあ、お師匠がそこまで言うなら……。喜助おじちゃん。住んでやるからにはいい部屋よ(せよ)」

「おじつ……!?なんでアタシだけおじちゃんなんスか!!兄サンの方が年上ですからね!？」

つとギャーギャー騒ぎ出す

「お師匠の方が若く見える。髭だよお前髭!髭剃れよ!あつ腹減った喜助おじちゃんなんかくれ」

つと言いながら勝手に出ていって恐らく飯を漁りに行った

はあ……つと頭を抱える喜助

「夜一サンといい……四大貴族つてなんでこう自由なんスかね……」

「まあまあ、いいじゃんいいじゃん。喜助おじちゃん」

「殴りますよ」

ギロつと睨まれた。

「それに、なにあの女の子。趣味?」

玄関で出迎えてくれた女の子の話聞く

「そんな人を幼女趣味みたいに……」

「いや、お前女の子にあんまり興味なかったじゃん？幼女趣味なら納得だなくって。」

「ボクだって女性に興味ぐらいありますよ。失礼な」

「へえ……じゃあ彼女とか奥さんとかは？」とと言うと視線を逸らす。居ねえんだな。

「でもまあハンサムエロ店主として通してるんで現世の女性奥様からは人気でしてえ〜」

「人妻じゃねえか。それにあれだろ子供の担任がカッコイイ〜っていうような感覚だろ？もしかして喜助お前童……」「悪いっスか??！」

まじかよ……夜一さんとかに手出さなかつたのか

「ほんつつつと失礼ツスね!!手なんかだすわけないじゃないツスか。流石にそこまで落ちぶれていませんよ。」

「それこそ聞くヤツ聞いたら夜一さんに失礼だからな??」

「人の愛する人にとって意味っす!!」

「だから拗らせて幼女趣味に」ゴフツ！」

右ストレートが俺の鳩尾に入って俺は蹲る

「いいパンチ入れるようになったな喜助……んで、あの女の子は改造魂魄?」

「近いけど違いますよん。あの子は被造魂魄。成長する……ね」

「へえ。涅の所のネムって子みたいな感じか、あの子とはなしたことないけど」

「まあ近からず遠からず……似て非なるものですけどね。」

「ふうん。俺涅から聞いたことあるわ、無から魂を作り出す、夢のような計画……つてな。仮の入れ物に入れるような改造魂魄とは違う命。学び成長し替えがきかない存在。細胞分裂が成功したーとかなんとか阿近が言つてたな。」

「涅サンには内緒にしておいて下さいな。彼ボクを殺しに来そうですし」

「その口調じゃネムちゃんのこと知つてんのね。なんで尸魂界の事知つてんのかは聞かないでよくけど。そうだな、黙っておくよ。」

命ねえ……創造神みたいだな。もし人工的に人間が作れたら……つてね。」

カチャカチャと、紫流に使つた器具を片付けている喜助を眺める

「俺やつぱりどっか大切な何か欠けてるんだと思う。危機感とかそういうのじゃなくて。」

「なんスか急に」

「……多分俺はやろうと思えばなんでも出来る。技術力も、俺と橋姫がいれば——ね。多分尸魂界と現世の境界を無くす機械も作れるし、命を無限に生み出す機械も、霊刀の大量生産すらも、人間を永遠に生き長らえる存在にも改造できるはず。多分夜一さんや喜助が居なかつたら俺はやつてたと思うよ」

つと言つと手を止めた喜助。だが振り向かない

「そうツスね。きつとボクも兄サンも……似てるんすよ。ほんの少しの良心で止まってるだけ——でね。」

「新世界の神になるってか？」

「死神違いなんでやめてくださいいな。」

つと突つ込まれる。

「さて、俺はそろそろ尸魂界戻るかね。逃げたと思われちや敵わないし」

「そうツスか、では行つてらっしゃい兄サン」

「ああ、会えてよかった。定期的に遊びに来るから今度は現世の美味しい飯でも用意しとけ」

「はいはい、寿司ツスよね。用意しときますよん」

そう言つて笑つた喜助の耳に俺が卒業祝いであげた耳飾りが揺れていた。
外さなかつたんだなあ。

「浦原維助、なぜ朽木紫流を無断で現世に送つた」

ゴンツつと強く地面に杖を立てる総隊長の前に俺は立つ。

俺が帰ってきて早々に隊首会が開かれた。

「紫流を元に戻すため……ですかね？ほら最上位大虚級でしたし。尸魂界に被害被るでしよ？霊刀は霊子が多いと威力増しますから。霊子の塊の尸魂界は危険ですし現世の信用できる人に任せてますから」

「浦原喜助……か。ふむ」

つと考え込む総隊長

「そういうことは我ら十二番隊に任せればいいのだヨ、君はいつもいつも余計なことを」

つと手をワキワキさせながら怒る涅

「お前紫流の事バラバラにするだろ。ダメダメ。それに霊刀の詳細は知ってる奴が少ない方がいい」

「なんだつて？技術開発局が信用出来ないと聞こえるが？」

つと詰め寄ってくる

「そういう作り方とか詳細は知ってる奴が少ない方がいいだろ、第2の惣右介が現れるかもしれないし」

「ふん」つと、そっぽを向いた涅。

「今回の騒動の貢献により浦原維助についての研究は不問とする」

「不問だつて？ 浦原維助……いや浦原喜助。 2人のせいで瀨靈廷は甚大な被害を被つて
る。」

「言わんとしていることは分かるが、浦原喜助は追放。 もう我々がどうこうする事はできぬ、そうして浦原維助。 前四十六室の取り決めた法によりあらゆる開発が浦原維助に許可されておる。 霊刀とやらの制作も法の内。 咎めれるものではない」

今は四十六室がないから総隊長権限で罰せられるかと思つたけど大丈夫らしい。 まあ追放とか言わないのは俺が戦力になるからだろうな。

総隊長も馬鹿じゃない、俺が居なくなるとどうなるかぐらい分かつてんだらう。

ザワザワと隊首室が騒がしくなる。

「はは、なるほどね維助君。」

つと笠をあげて俺の方に笑いかける京楽隊長。

「なんだつて……？ 全ての開発研究が。 その言葉の意味は分かっているのかね」

「そうだよ、涅。 四十六室が決めたのさ。 あらゆる研究開発を行つて良い……つてね、ただし実装するかは四十六室が決める、霊刀は開発途中の物が盗まれてしまったのね。 まだ四十六室にも霊刀の事は話していなかった。 つて感じですよ、まあ管理不足は俺の責任。 なので」

外堀つてのはこういう事さ。

四十六室に媚びを売り、貢献し俺が四十六室の敵ではなく味方、なんなら幸せに安全に暮らせる四十六室中心の世界にと謳って無理やりに法を作らせた。

管理不足で無理やりに咎められるかと思っただけ。多分大丈夫、総隊長も規定側だと分かったし。

管理不足については追って連絡するとの事で、一旦解散になった。

まだ被害が多いからその修復で隊長格は大忙し。

「夜一さんはどうすんだ？ 現世に戻るのか？」

双極のあつた場所に座っている夜一さんを見つけて後ろから話しかける

「維助か：そうじゃの。今更ここに戻ったとて儂の居場所はまだあるまい」

「そんな事ないだろ？ 二番隊があるじゃないか」

つと言つたら呆れた顔をされた

「あの変貌した二番隊を譲り受けても儂はどうにも出来んで、なんじゃあのからくり屋敷は。わしのいた頃の面影がほとんど無いではないか」

「いやいや、部屋とかはちゃんとしてるし。俺の部屋はまともだよ。」

「まともなものか。それに僕は現世の生活が気に入ってての。自由で面白いぞ、四楓院家も夕四郎のやつがちやんとやってるようじゃしの」

夜一さんの言葉は気を使ってる訳ではなく、本当に現世の生活が気に入っているようだ。

藍染の反乱からちよつとして。一護らは現世に帰ることに

「さつ、俺は——」

「維助様どこへ行くのですか？」

つと、なにやら用意してる俺に碎蜂は首を傾げる

「ちよつと現世にね」

現世の話 日常&仮面の軍勢

現世の話

「全く中央の奴らがこんなに抜けてるとは思わなかったね…どうも」

「隊長、浦原維助隊長の事ですか？」

「七緒ちゃん」

隊首会が終わり屋根の上でくつろいでいると伊勢七緒が書類を持って現れる。

思い出すのは先程の隊首会

全ての開発が浦原維助に許されている

これがどれだけ恐ろしいものか恐らく四十六室は分かっていない。

あるいは、分かっている浦原維助を完全に信用し許したか――。

抜けている前四十六室の奴らはどちらも可能性がある。

だが

「参ったね…どうも」

恐らく法律ができたのは喜助君が追放されたあと――。

音も立てずにふわふわと浮いて瀟霊廷内を偵察する、無人機。

荷物を運ぶ無人機、掃除をする機械

「ねえ、西区の浦原神機の服管機買った？」

「あー！ボタン一つで亜空間にしまった服を着れるやつ？収納にも困らないし便利そうだよね、並んでたから買えなかつた」

つと話す部下の声が聞こえる

道行く死神は日常のように受け入れ、道に砂が落ちてるのを当たり前のように気にしない。

しかも十二番隊の開発研究は彼が掌握しているし。

伝令神機を作ってから――尸魂界は浦原維助に吞まれていく。

彼無しでは瀟霊廷の首が回らなくなる程に自然に溶け込み――
隊首会での彼の顔を思い出す。

口角を上げ、目を細めた彼は――。

――笑っていた

“『まあ……そりゃ、サボりたいけどせっかく任せてくれた仕事は最後まで終わらせ

たいから。責任と信用ってそう言うもんでしょう?』〃 23話にて

副隊長になった彼が言つてた言葉

信用——ね。

その頃は惣右介君と仲のいい維助君は誰にでも優しく真面目で：なんて、惣右介君に吞まれてしまうのではと考えていたが：ココ最近違うかもしれないと思ひ始めた。

「こりゃ、惣右介くんよりも厄介かもしれないな」

皆口にはしないが疑問に思っている。

惣右介くんの手引きは維助くんがしたのでは無いか：？つと

だが、彼は惣右介くんが放つた最上位大虚級と成り果てた紫流君をたつた一人で止めた。

功績と行動を考え、その説は薄くなった——が、拭いきれない。

無関係と考えるには——

「歳をとると悪いことばかり考えてしまう：何もおきなればいいけどね、どうも」

昔喜助が言つてた。あいつが部隊長になった時かな

“ 『蛆虫の巢の連中は危険分子、いきなり襲いかかってくるし、まともな会話も成り立たない者もいる：けれど、その中でも能力を活かしてあげられる場所さえ与えてあげればその危うさを大きな力に変えられるんじゃないか：っておもうんすよね。』 ”

“ 『：つまり使えるものは使うと？』 ”

“ 『兄サンそれはちよつと直球すぎる』 ”

その案はいいと思つたんだ。

使えるやつは使う――

お堅い連中、綱彌代家や四十六室、敵対すれば権力的に厄介。だが、懐に入ればこつちの物。

臆病でいつも脅えている、それに安全性や便利なものを与えたらどう？ 心強い味方つてのは輝いて見えるものさ：

そうしてそれが消えるとなると逃がさないように守り続ける――。

四十六室の居住区である清浄塔居林せいじょうとうきりんにも手は回してる、恐らくだけど俺に嘯み付いてくる後任の四十六室はいない。

いたとしても法を作らせた以上何も言えない。

綱彌代家が監視してるモニターも機械も全て俺が作ったもの。

そうして俺が消えればメンテナンスも出来ない、いずれにしても俺を守るしかない。

俺は貴族の当主で技術者で先生で隊長で四十六室の直属の隠密で。

権力、技術、信用、貢献、全てを使う。

尸魂界も現世も俺は手を入れてみたい。

虚圏には大切な友人がいるし、虚にはあまり興味が湧かないからどうでもいいけど。んで、長くなつたけど……

流魂街の連中を動かすと上のやつらは反対しないにしろ少し嫌な顔をする。そうだよ、下克上が起こつたら困るかも……って怯え続ける。

——改造魂魄のように。

でも現世のヤツらに何をしてもあいつらは怒らない。

流石に無意味に殺せば怒られるかもだけど。

貴方達の安泰のために——つとうたえば奴らは俺を信じる。

日本列島よりも広い尸魂界で——浸透できたんだ。

現世でできないはずは無い。

何代も入れ替わる人間。

新しいものがその代に一度浸透すれば次世代も——つと考え中にプルプルと懐が震える

「はあい、維助です」

“ 『維助様！朽木紫流の監視など！我ら部下に任せておけば良いのです！なぜ私を頼らなかつたのですか！』 ”

スマホから碎蜂の声が響く

「はは、何言つてんだよ碎蜂。頼つたからこそ、隊を任せたんだろ？大丈夫。隊長の仕事は怠らないよ。碎蜂は代理として適当にやってくれればいいよ。重要なものはこつちにデータ送つてくれればやるからさ。」

“ 『そ…それはそうなのですが…あの…えっと…またお電話してもいいですか？あつ！いや、お忙しいから…いーよ、分かつた。またこつちからかけるから。』 つく！ありがとうごさいます!!』 ”

つとバカでかいお礼で耳から離す。

そうして切れたスマホを懐にしまった。

カチツと左腕に着けた腕時計の横に着いたボタンを押せば。

俺は死覇装から――現世の服に変わり、髪型も変わっていく。

向かうは――。

○学校 一年三組

「夏休みもあつという間だったな」

「それ、いやああと一ヶ月欲しい」

ザワザワと騒がしい教室。

一護は頬杖をついて外を見ていた。

夏休みの出来事があつという間に感じる。

「おい、朝のホームルーム始めんで、早く席に座れ」

うーんと、朽木紫流だけか、休みは。よし、じゃー素敵なお知らせだ」

ガラツつと、閉まっていた扉が開く音がして

ふと顔を向ける

「副担任を紹介すんぞ」

教室の扉を開けて歩いてきた男。

珍しい髪色に跳ねた髪。

「うら……はらさん？」

あの帽子を外した浦原さんに見えたがどこか違う。

あんなに身長高かったか？確かに高いが……それ以上に

教卓の前に立って正面を向いてようやく気がつく——！
ガタツと勢いよく立ち上がる

「なっ…なんででめえが」

「ん？どうした黒崎。知り合いか？まあとにかく座れ」

つと担任に言われ渋々座る

「んじゃ、自己紹介どーぞー！」

「皆さんおはようございます。初めまして、本日から一年三組の副担任兼、歴史と物理を担当します。浦原維助です。どうぞ…よろしく」

あの特徴的な色の瞳、泣きぼくろ——

ニコツと笑った…浦原維助。

「んでここにいるんだよ維助さん！」

胸ぐらを掴まれる俺。

「きゃー、おそーわーれーる」

つとふざけるよ、

「ちやかすな！」つと、一護に怒られる。

屋上に呼ばれるのは女の子からが良かったな。

ホームルームが終わった瞬間に連れてこられたのだ。

後から走ってきた織姫ちゃん達

「やつほ、尸魂界ぶり〜」

つと手を振ると、ぎこちなくだけど織姫ちゃんだけが手を上げてくれた。

「さて、黒崎落ち着くんだ。きつと朽木さんの事だろう？朽木紫流。」

「そつーさすが雨竜ちゃん」

「紫流の？」

つとようやく胸ぐらが離される

「紫流は今どこにいんだよ」

「ありや、喜助から話聞いてない？喜助のところまで休ませてるよ。制御装置も作ったから大丈夫だとおもう。これまで通り通学できるよ。」

つとと言うと、ホッ…つと声が聞こえる。

「その、霊刀つてやつか…？俺のと同じやつ」

「うーん。同じではないかな？にたもの」

「じゃあなんなんだよ」

「それは…秘密」

「なっ」

怒る一護を、茶渡君が止める

「紫流の詳細は極秘なの。子供、しかも人間があんまり首突つ込まないの

あ、そういえば茶渡君ははじめましてかな話すの。よろしくね」

「あ、ああ。浦原さんのお兄さんだったか」

首をかしげられる

「そうだよ、最初浦原さんかと思った〜！そっくり！」

つと織姫ちゃんがほわほわしてる。どっちも浦原だけどね

「まあ兄弟だしねえ〜」

「義骸って髪型変えられるんだな、便利なもんだな…」

つと俺をジロジロと見る一護、近い近い。

「義骸じゃないよ、これは人間に見えるようにまあ…原理の話をするとな話が長くなるか

ら、簡単に人間に見えるように映写してるって感じかな。」

ポチツと時計のボタンを押すと一瞬で死覇装に変わり髪型も元に戻る。

「おお〜」

つと一護と織姫ちゃんがびっくりしたような声を上げた。

いやあ、この声いいよね

「どうだー驚いた？驚いた？義骸と違って、いちいち脱ぐ必要ないし、義骸って本来現世に居る死神の霊力回復用だし俺は別に必要ないからいいかなって。まあ俺まで斬魄刀見えなくなつちやうから変身戻さないと柄握りにくいんだけど。これを応用して、服なんかもポンポン変えられるよ」

「べ、便利なもんだな本当…」

スーツやラフな服に変わった俺を見て呆れたような目を一護に向けられた。

「ふふん、でしようでしょう？これは映像だけど、尸魂界では実際持つている服を亜空間にしまってボタンひとつで着替えられるような道具も販売中だよ」

「なんというか…尸魂界は現世より進んでいるんだな。江戸の街並みなのに」

つとメガネをクイツとあげる雨竜ちゃん。あ、そういえば死覇装姿は見えないのか、いや見えてるな…全ての霊力無くなったわけじゃないのか

まあ尸魂界とおれの技術はミスマッチだよね。

「まっ、とりあえず霊刀に詳しい俺と喜助で紫流の監視と制御に来たの」

「監視って…」

「まあ言い方悪いかもだけど、尸魂界であんだけ暴れたんだ。すぐには尸魂界に戻れないよ。紫流の為だからさ、もう紫流は危なくない安全ですよーって証明のために必要な

の。俺が志願したの大丈夫、任せといて。とりあえず戻りなさいな一限始まるよ」
背中を押して教室に戻らせた。

俺は空を見上げる

「さて……いつまでそこで傍観してんの？平子隊長」

「アホ。もう隊長ちやうわ、維助」

朽木紫流やつけ？隠密も大変やなつと。俺の隣に降り立つ

「元氣そうで何よりツス。禿げました？」

「アホ！ハゲとらんわ、髪切ったんや髪！」

つと自分の髪をぐいっと引つ張る平子さん。元氣そうだ。

「聞いたで、惣右介……いや藍染のこと大変やったな。」

「まあ……。友人がいなくなっちゃったのは寂しいですよね」

「呑気か、裏切られたとか思わなかったん？」

「うーん。まあ俺はまだ信じてますからきつと惣右介には何かあったんじゃないかって
ね」

つというと、げっそりしたような顔をする。

「相変わらずやな、俺が昔忠告してやったんに15話にて、まあ起きたもんはしやーないな。帯志土さん33話平子の元上司。謎の男の娘の話の事も全然掴めへんし。もう全部投げ捨てたいわあ〜」

と、頭をガシガシと搔く。

「はは、まあミトと名乗るやつはあれから情報全くありませんし。もう俺の敵じゃないですね〜。」

あんま興味無いし碎蜂に投げてるから情報わかんないんだけどさ。

「んで、平子さん。貴方それ制服ですか？」

「せや、似合つとるやろ？」つと、ネクタイを閉める。

「うーん胡散臭い」

「それあんたに言われたかないわ」

「えーしかも生徒側ですか？」

「せやで、浦原先生。明日やけどな転入は、喜助に頼んだんよ」

「なるほど〜じやあこれからは先生としてビシバシ指導できるんですね」

「ちゅーか、聞かへんの？俺が…俺らが何をしようと思えとるんか、その感じやと喜助にも聞いてへんのやろ？」

「うーん…別に興味無いかなくて。崩玉とか虚化関係かなーって予想はしてますけど。」

虚化も崩玉もあんまり興味無いし。虚化とかは喜助担当だから。まあなにか欲しい機械があれば言つて下さいな、作りますんで」

もちろん金は取りますと、付け足すと

「抜け目あらへんな」つと笑われた。

「つーことで、しばらく泊めてな！尸魂界に帰る時もあるけど、ほとんど現世だから」

「あの、兄サン。6人、夜一サンも来たら7人ツスよ？そんな部屋ありませんって」

「大丈夫大丈夫。押し入れでいいから」

「どこぞの青狸ですか??ポケットから機械出す人型の兄サンが押し入れなんか入れるわけないでしょう。身長考えてください」

「ほら、現世の金」

つと、分厚い封筒を渡すと中身を見てパチンつと扇子を閉じた喜助

「ようこそ、浦原商店へ!!さき。今からちよつと部屋開けますんで!!!お茶でもどうぞ」

先生はやっぱり先生の話

「えー、じゃあ授業始めるよ。二学期からは歴史の授業が入ってくる。日本史Ⅰいち赤い教科書の方な、そっちを出してくれ。そしてプリント配るからプリントは学校から事前に配られてるでっかい青いファイルに止めてくれ。学期終わりに出して貰うから無くなよ〜」

プリントを前から回され受け取る

「ちゃんと先生してやがる…!!」

穴埋め式で配られるプリント。分かりやすく裏面には答えと解説が書かれていて。

「裏に答えあるが、一応話はきけよ〜。ちなみにそのプリントはテストに出る部分だから。テスト対策はそのプリントをやるように」

「(テストにも配慮している…!!)」

「寝ててもいいが、見回りの先生が来た時は周りのヤツ起こしてやれ。俺が怒られる」

という声に教室が笑いに包まれる。

「はいはい、じゃー始めるぞ。」

一護は頬杖ついて話を聞く。

「なあ、一護。シャーペンかして」

「てめえまたかよ」

後ろの席の紫流が背中をつんつんして話しかけてくる。

紫流の髪色は白だが、人間が見れば黒に見えるらしい。浦原^{喜助}さんの薬？みたいなを

使ってるって聞いた。よくわかんねえけど

ホロウホロウ

つと、カバンの代行証が鳴り響き肩がビクツと揺れる

うるせえ!!

「おー、黒崎どうした？便所か？」

つと振り向いて首を傾げる。維助さん

手もあげてないのにそう言ったつとことは、便所行ったって事にしとけて事か。

「便所行つてきまーす」

つと教室を出た瞬間、走り誰もいない窓枠を乗り越え飛び降りた

「はい、じゃー続きな。つて井上さん、茶渡。まで、悪いけど便所は時間ずらせよ」

立ち上がった2人を止める

「で、でも…」

織姫ちゃんらは虚の訳を知ってるからついて行こうとしているようだ。

「悪いけど、行くんじやねえよ時間すらせよ」

「チエツ、俺だっけで行きたいのにお師匠がしばらくやめとけっけ言うから辞めてるのに。

一護のやつ」

つと、紫流のボヤキが聞こえる。

「す、すみません…」と言つて席に座る織姫ちゃんと茶渡。

行きたい気持ちは分かるが…一護1人でもなんとかなるだろ。

茶渡くんとは戦つた事ないけど…織姫と茶渡。

力をなくした雨竜は自分の力を分かっているが。

その2人は…正直言つて弱い。

行つても三席四席程度…。

ああ、これは…色々試せるのでは無いか…？

スツ…つと目を細めた平子さんと目が合う。

笑い返して見たら、目をそらされる。

「はい、担任が遅れてるようなので変わりに帰りのホームルームします。えー、明日避難訓練があるぐらいかな。ほかは…ないね。じゃあ気をつけて帰るように。井上さんと茶渡は放課後残ってくれ」

残った2人と、

「なんで一護と紫流と雨竜ちゃんまで？」

「なんだよ、居ちやダメなのかよ」つとブスくれた紫流

「いや、ただの連絡事項なんだが…。織姫ちゃんと茶渡くんは家帰って汚れてもいい服着て浦原商店に来てくれ。それだけ」

そう言つて返答も聞かずに帰る。

少し暗くなった頃。2人と――

「だからなんで一護と雨竜ちゃんまで来てんだよ」

「君が井上さんと茶渡くんに何がするんじゃないかとね」

「うわ、大所帯」

つと、俺の後ろから顔を出した紫流

「こらこら、半裸で出てこないの。紫流。さつさと服着てこい」

風呂に入つてた紫流がアイス片手に半裸でできいる
外だぞここ。

「まつ、とりあえず入りなよ。勉強部屋において」

商店の中に入り廊下を進むと。

「え、エレベーター……」つと絶句してる雨竜

「お師匠さんが作ったんだよ。人間のお前らのためにな」

和風の廊下の壁にあるのは少し異様だけど。

「ほら、早くおいで」

手招きすると、恐る恐ると言った様子で入り、紫流は慣れたように乗り込む。

10秒ほどでたどり着いた勉強部屋

なぜか、喜助まで着いてきた。

喜助は黙って崖を背にして傍観してる。

「早いのに揺れない……し、丈夫だ……一体この短期間で――」つと、ぺたぺたエレベーターを触りだした。

そして、事前に用意してあつた長テーブルの前に案内する

「織姫ちゃん、茶渡、君らは弱い。」

つとと言うとなにか言いたそうにしてくる一護と雨竜を遮るように被せる

「当たり前だよ、仕方ない。なんか特殊な能力を持っていても死神でもない人間。それで俺が武器をささげようと思って」

「武器……？」と首を傾げるふたり

「そっ！勇者が拳で魔王とかモンスターに向かわないだろ？武器があれば身の安全も守れると思ってさ。能力だけじゃなくてこういうのに頼るのも一つの手だと思うよ。」

机に並べたのは

グローブ、モーニングスター、鞭、ステッキ、斧、銃

の計6つ。

「まずはこれの説明かな。これは霊刀と似た機械を使ってる。」

「なっ」そう言った一護は己の心臓部分に手を添える、まあ待てて

「少し違うけどだいたい同じ、大気中の霊子を収束させて放つ。霊刀と違うのは収束の振動を使うわけじゃないから切れ味が良くなるわけじゃない。」

まあ……色々すつ飛ばして離すなら吸い込んだ空気をロケットランチャー並の威力にして放ってるみたいなんかじ。もちろん人間には見えないし、己の身を守るために持つときな。命を守るために他の人を守るために、特に織姫ちゃんは何かしら武器を持っていた方がいい。」

すると、

「分からないな」

つと雨竜ちゃんが口を挟む

「分からない？」

「そう、なぜ井上さんや茶渡くんに武器を渡すのか——。君にメリツトが見当たらない。尸魂界からは朽木さんの監視としてきているんだろう？ それにただの武器ではなく君が手を加えた品。本当のことを言ったらどうなんだ、守るためではないんだろう？」

そう言った雨竜ちゃんを見たあと、みんなの視線がこちらに向けられる。

俺は背を向けた

「うーん……ごめん。本当のことを言うよ、実はさ……知ってる人もいるかもだけど、俺は尸魂界で先生をしているんだ。死神見習いを教育してるって言ったらいいかな？ 才能ある人もない人も見てきた、死神界つてのはシビアでね、弱いやつは昇進しないし死ぬしかない。俺はもう……教え子が死ぬのを見たくないんだ!!」

だから、弱くても才能なくても、虚を倒し身を守る武器があればいいんじゃないかって！ そう思ったんだ。」

俺はグツと拳を握り振り返ると、びつくりしたような顔をしていた。

「だからごめん、2人を実験体にしようとしてた。けどこれが成功すれば、死人も減るん

だ！もしかしたら流魂街の霊力のない人々も死神を目指すことが出来るかもしれないし、身を守るようになるかもしれない！俺が使っても俺自身の力が強いから実験にないんだ、だから流魂街の住民と近い君たちに使ってもらっていつか、死人を減らせる世界を作りたい。」

俺はバツと頭を下げると、

「浦原先生、顔をあげてください」つと優しい織姫ちゃんの声

「浦原先生！あたしやります！！あたし尸魂界で石田くんに頼りきりだったの情けなかった。あたしは何ができるんだろうって、その武器で少しでもあたしが役に立てるようになるなら！」

つとグツと拳を握る織姫ちゃんに、茶渡くんが1歩前に出た

「浦原さん、俺も流魂街の住民が身を守れば。その礎いしづえになれるのであれば手伝います」
「ありがとう……！2人とも！こんなに武器があるのはどの種類が有効的か使いやすいかってのを見たくて色々作ってみたんだ。好きなものを持って行ってくれ」

織姫ちゃんは鞭と銃を

茶渡くんはグローブを持って行った

「持ち手にスイッチがある、それを押すと霊子を収束させ。放つことが出来る、溜め込みすぎると壊れちゃうから青くなったら直ぐに放つてね。霊力は吸い取らないから、大気

中の霊子だけね」

第二の霊刀もどきが出来ないように調節した品だ。

さて、人間に武器を与えると、どうなるのかな

扱える？身に余る？

俺の道具をどう使うのか、その未来を見てみたい。

ニヤケそうになるのをぐつと抑える

しばらくして、虚を討伐したという報告が入りはじめる。

使いこなしてる映像を見てニヤケが止まらない。

映像には鞭で虚を縛り付け銃で虚を吹っ飛ばす織姫ちゃんに

茶渡くんの元の身体能力とプラスして収束霊子を放つグローブ。

そうだ、そう。道具に頼れ、頼って頼って——無くてはならない存在へ

モニターをニヤニヤしながら眺めている兄サンをみてため息を吐く。

兄サンは全く知らない人を助けたいとか、死にゆく人を見たくないとか流魂街の住人

を助けたいとか元生徒ですら、どうでもいい人はどうでもいい。行動原理はかっこいいと面白そうと、少しの好奇心

今回は弱者に己の機械を持たせて反応をみたいだけ。

機械を使ったらどうなるのか、使った先は？どのように変化するのか。

それが楽しくて面白くて仕方ないらしい。

1度わざとらしく行動し疑わせ「実は…」っと本当のことであるかのように偽りの理由を述べみんなに信じさせる。

それらしい理由を作るのが得意な兄サンを見抜けるのはボクか夜一サンぐらいなもの。

人のこと言えないけれど、兄サンはいい性格をしている。

「初めまして、かな？黒崎真咲さん」

真っ白なシーツ。綺麗な花、毎日誰かしら見舞いに来ていることが分かる。

長い髪をシーツに広げて眠る姿、眠り姫だな。

「一心の奥さんねえ…美人さんを貰ったんだな一心のやつ」

ほんのり霊刀の力を感じる、魂魄の傷は回復してる。

つまり眠り続けているのは一護に分けた分の霊刀の分を回復させようとしているから。なんかプラナリアみたいだな。

体の機能より霊刀の回復を優先している、そこまでして何を望んでいるんだろうか。

霊子の塊の尸魂界や虚圏と違い現世での回復は全然見込めないだろう。

恐らく惣右介は盗んだ霊刀をそのまま使った。

まだ試してもないのに改造するはずは無い。つまり俺が知っている俺の霊刀だ、俺が作ったやつなら——俺が何とかできる。

魂魄関係は喜助に丸投げしてたけど機械関連なら俺が——。

俺は織姫ちゃんにあげた銃と同じものを取り出す。

セーフティを引くと銃口が青く青く染まっていく。

眩しいほど青く輝く瞬間——。

彼女の中心に押し当てた

「何年ぶりだろうな橋姫——久しぶりなのが戦闘目的じゃなくて悪いな」

まっ、戦闘には多分使わないと思うけども。

俺は橋姫を半分鞘から抜く

恨
め

橋
姫

・

黒崎真咲の話2

「なぜ逃げる!!!黒崎一護!!」

「だから!違えんだって!!一護じゃねえって!!」

街中を走り抜けるコン。後ろから顔が出た虚が追いかけて回していた

「死神になるのを待っておったが…飽きた。しまいじや」

「(だめた…!間に合わねえ)」

迫り来る拳に腕を交差し目を閉じる

だが、

「やれやれだがら言ったろ?オメーが旅行から帰ってきた時に。いつでもずつと持ち歩いておけっての」

そう言い放つ男がコンの前に立った

「なんで…だ?」

何故、なぜこの男が

「虚さんよ、悪いが一護は留守でね。代わりと言っちゃなんだが、俺と遊ばねえか？」
「おまえは……」

虚が訳が分からないという顔をする。

「俺は—— 黒崎一心。よろしくな」

「黒崎……そうかおまえ黒崎一護の親なら居場所を知っておろう、出せ黒崎一護を」

つと口角を上げる虚

それに耳をほじる一心

「しらねえよそんなんいちいち、うちは放任主義だしな」

うそつけ、つとコンが突っ込む

「あんたは相手にしなくても俺はお前を斬りにきた今度は逃がさねえぜ」

「今度はだと……？ふふふ、死神風情が……」

メキメキと骨が軋みさらに凶体がでかくなる虚

斬魄刀を取り出しニヤリと笑った

「斬魄刀のかさはすなわち霊力のかさ！そのような細枝の斬魄刀では儂は切れぬ
！」

「仮面を外し、死神の力を手に入れんとする破面あらかる、悪いな、ちよつと俺肉買いにいかねえ

と行けねえんだ、今日はすき焼きでよ……さっさと終わらせるぜ」
ザンツ

——音を切り裂き風を切り裂く。

風圧を感じコンは腕で顔を覆う

「刀振っただけでこれかよ……!」

半分にわかれた虚は呆気なく消え去った。

「基本から教えといてやろう、隊長クラスの死神は斬魄刀の大きさをコントロールしてんだよ、どいつもこいつもビルみてえなでかさの斬魄刀を振り回すことになるからな。斬魄刀のデカさで相手ははかれねえ。死神語るのはそれからだ、

坊主」

カランコロンつと、下駄の音が夜街に響く。

「討てました——? 仇」

そこには浦原喜助が杖を回し路地裏から現れる

「浦原、バカ言ってるじゃねえよ。勝手に真咲を殺すな、これは俺があの時逃がした分だ。」

「そうツスカ……」

そういった喜助が、気づいたように一心を見つめた

否——その後ろを

「お見事」

バツつとその声ができる方向へ振り向く一心。

「師範……」

「よお、老けたな一心。会えてよかったよ」

懐かしむように笑う浦原維助がそこに立っていた

「はは、俺は師範に会いたくなかったね。あんだだけ教えこまれたのに真咲一人守れなかった」

つと空を見上げる一心

「俺の方こそ合わせる顔がなかったよ。霊刀、俺のせいで悪いな。」

それに首を横に振る、一心は霊刀の詳細を浦原喜助から聞いていたようだ。

「いいや、あの刀があったから俺に霊力が戻り真咲を助けた。なかつたら今頃真咲も一護も——。きっと運命ってやつさ。それに真咲は死んじやいない、きつとすぐ起きますよ」

すると、ニコツと笑って両手を合わせた維助

「その話なんだけどき一心に——」
何か言いかけた瞬間。

パキツつと空間に日々が入り虚が顔をのぞかせた

「おいおい、一心の霊圧で寄つてきたじゃん」

「俺のせい?!?!」

肉買いに行きてえのに……と、ボヤク一心は斬魄刀を構えた

瞬間

「あら、今日はお肉なの？」

「なら早く買いにいきましょう」

「嘘だろ……?」

その聞き覚えのある声に手が震えた一心。

後ろを振り向けない

固まった一心に虚が腕を振り上げ——鋭い爪が迫る

その時一心の横を青い何か光の速さで通り過ぎた

「アモル・アルマ
霊刀」

青い光に包まれ、虚は両断される

スタツ……つと、両断した本人が地面に降り立ち、一心に向き直った
「ふふ、待たせたかしら。あなた」

泣きわめく一心が、抱きつくのは黒崎真咲。

「泣き虫になった？」

つと呑気に笑う彼女の目元にも涙が溜まっている。

「なにしたんスか？兄サン」

つと俺の横に移動した喜助が真咲ちゃんを見つめる

「霊刀の復活？見た感じ魂魄はもう傷ついてないし治ってるぽかったから、何が原因かなーって思っ、霊刀の半分が一護に流れたなら、霊刀が目覚めを邪魔してるのかなって思っ、見に行ったら、霊力の回復を待っていたようでき、現世だと……って聞いている？」

聞いというて全然話を聞いてない様子の喜助の横腹を肘でつくつと、アイタア！つと言つて横腹を手で抑える喜助

「聞いてます、聞いてますつて……んでもあの霊刀なんスカ？なんか色々むき出しじゃないツスカ」

真咲ちゃんの片手に握られた霊刀。

ネジや歯車の部品がまるで装飾のように飾られているように見える刀……いや剣に変化していた。

「まあ……うん。日本刀ではないよな、どちらかと言うと洋風の剣？あれも変異の影響かねえ……俺はあの子の魂魄にある霊刀に、収束した大気中の霊子を改造して込めただけだから。」

「……なるほど確かに兄サンの斬魄刀なら可能ツスね」

「それより……はいはい！一心！再会のところ悪いけど病院抜け出してきたんだ、そろそろ戻さんと、それに長年動かしてないからだを無理やり動かしてるから。とりあえず戻る！」

「つーか！師範！なんで真咲をこんな危ないところに連れてきてるんだよ！……ですか！！！」

「いや、真咲ちゃんが行きたいって言って聞かないから……」

「あら？一護……？」

コンに気づいた様子の真咲ちゃんは、一心から離れると尻もち着いたコンに顔を近づ

けた

「うーん……なんか……そっくりさん？」

「驚いた……」

元滅却師とはいえ、改造魂魄が入ったやつとの違和感を感じとった……？

勘というやつだろうか、鋭い人間だ。

「お、俺はコンだ。一護の……お袋さん……か？」

っと困惑した様子のコン

「そうよ。よろしくねコンちゃん。」っと笑う。

「って、早く早く。病院もどらんと大騒ぎになるぞ」

「やべえ、じゃあ俺送つてくから、後片付けよろしくお願いします〜！」っと言つて真咲ちゃんを姫様抱っこすると去つてく一心

「あいつ……この片付けやらせる気かよ」

地面が割れ壁にも亀裂が……

「任せた喜助」

「ええ！そんな!!復元つて大変なんスよ!?!」

「知つてるわそんなん。俺今から焼肉食べに行くもん、肉肉聞いたら食いたくなつた」

「あつ！ずるい！！一人だけずるい！！ボクも連れてつてください」

「やだよお前俺に肉焼かせるじゃん、つてか真咲ちゃん初めましてだけど度胸あるなあの子……しかも長年ベッド生活でしかも剣握ったこともない子が虚切り裂くつてなに……。それにあの子来る時自分で髪切ったんだぜ？邪魔だからつて。髪は女の何とかって言うだろ？」

「はは、確かに度胸ありますねえ、それに兄サンよりネーミングセンスがあるようで」

「うるせ、れいとう霊刀の方がわかりやすいだろ??」

「ううん……」

なんでそこで唸るんだよ

黒崎家

「おかああああさあああん!!!」

「遊子、夏梨……大きくなったわね」

ベッドで上半身を起こした状態の真咲に遊子が抱きつく。

「遊子。そんな大声出したら怒られるぞ。一心ここ病院」

「がりんじやん……ヒック、うっ」

ポケットティッシュを遊子に押し付ける夏梨。

「あらあら、どつちがお姉ちゃんかわからないわね。ほんと……大きくなって」

4つだった、遊子と夏梨が大きく育ったことに嬉しく思う真咲は2人をそっと抱きしめた。

「ええ話やあ」

扉に寄りかかっていた一心が袖で目を覆う

「どこの関西人だよ」

っと呆れたようにジトーっと一心をみた一護。

すると、ふと顔を上げた真咲が一護と目が合い、一護はスツと、目をそらす。

「遊子、夏梨一緒に車から母さんの荷物運ぶためのカバン取りに行こう」

「うん！行こう夏梨ちゃん」

「ええ、ヒゲ1人でやれよ」

「お父さん腰死んじやう……」

パタパタと3人がいなくなり。

一護と真咲が残される

「一護」

「お……おう」

気まずい雰囲気の中真咲は横の椅子に手を伸ばした

「おいで」

そう言われ渋々と椅子に座る一護。

「母さんね、びつくりしちやった。お父さんが老けちやったし、私も老けてた。夏梨も遊子も大きくなっちゃって——。

そして一護、貴方も大きく育って……母さん嬉しいよ」

約10年眠りについていた真咲は、世間からも家族も急に変わってしまったような感覚に陥っていた。

「俺があの時――」

そう言いかけた一護の頭を手を伸ばして撫でる真咲

「ずっと、ずっと悩んでたんだね。一護、泣き虫なのは変わらないね」

「な、泣いてねえよ」

目元に涙は見えないが、真咲は首を横に振った

「泣いてる。母さんわかるもん。」

つと綺麗な笑顔で笑いまた一護の頭を撫でた。

「大丈夫、一護のせいじゃない。本当よ？母さんは貴方を守れた事が嬉しいの。私はこうして生きてるし話せる、私の方こそ……遊子や夏梨、一人で家を守ってくれたお父さんに、妹の世話をしてくれていたであらう一護……みんなに申し訳ないよ」

「申し訳ないなんて……俺は当たり前のことよ」

「そう、当たり前前、母さんが貴方を守るのも当たり前なの。母さんが好きでやったのよ、それを責めないでちょうだい」

「つ……ああ……お袋……ごめ」

つと、謝ろうとした一護の頬を優しくつつねる真咲

「こういう時は？」

「……起きてくれて、生きててくれて、助けてくれて……」

「ありがとうお袋」

「ふふ、本当に……大きくなっても泣き虫なのは変わらないわね」

しばらくのリハビリと、身体の調子を整え退院することになった真咲

「お母さん、本当に大丈夫なの？ たった一週間だよ？」

「ええ、看護師さんが体を解ほくしててくれてたみたいで、身体は全然固まってないの。流石にいきなり固形物はきついけど……少しづつなら大丈夫よ」

夏梨と遊子に挟まれながら歩く真咲は、自分の家に帰ってきて、懐かしむように扉に触れた。

「なんだか……私は寝て起きての感覚だったけど。こうしてみると時間が経ったことがわかる。置いていかれちゃったみたい」

つと、椅子に座った真咲が呟く。

体力はあまり戻っていないせいでフラフラしていた真咲を夏梨と遊子が無理やりリビングで休ませているのだ。

せつせとご飯を作るのを見ている真咲

「そっかあ、遊子が私代わりに頑張ってくれてたのね。そうよねこのヒゲが家事なんて出来ないよね」

「ヒゲ!!母さん酷いッ!お、俺だつて自分の服を洗濯機入れるぐらいできるし!」

「それは家事とは言えません!!また靴下丸めて入れてるんじゃないでしょうね?」

「うっ」

「入れてるよこのヒゲ。」

つと、遊子と一緒に手伝つてた夏梨が話を聞いてたようで面白い放つ。

「ゴミは出さねえし、掃除もしないし。たまーに食器洗うぐらい」

「うっ……夏梨ちゅわん……」

「全く……変わらないわね。……そして。あの壁のポスター何?」

つとでかでかに貼られた真咲の写真を指さす。

「あ、あれは寂しくて!!真咲も一緒にご飯食べてる気分になつてたし。寂しかったんだもん!!」

「いい歳したおじさんがだもんとか気持ちわり。」

つとお茶を飲んでた一護が突っ込むと

「なんだとお!俺は真咲に対しては純粹無垢の乙女だぞ!」

「ダアア!アブねえお茶こぼれるだろうが!!純粹無垢とか誰がだよ気持ちわり!」

つと飛び蹴りしてきた一心の足を抑える一護

「まったく……」

つと言った真咲がポスターを剥がす

「あああ！俺の母さんがアア!!」

「私はここにいますでしょ？私じゃダメ……？」

つと言えばニヘラアつと顔を歪めた一心が

「母さんしかいません!!!母さん〜！」つと抱きつきに行こうとする首根つこを掴む一護

「グエツ！何しやがるこの野郎！」

「こつちのセリフだ！その勢いで抱きついたらお袋が潰れるだろ！病み上がりつーもんを考えろ！」

「ぐぬぬ」

つと唸る一心に、クスツと笑う

「賑やかになったわね。この家も」

「うつ……」

「どうした〜一護」

「いや、なんでも」

「そう……か、じゃあ続きやってくぞ、10ページの――」

いつもの教室、いつもの授業時間。

黒崎真咲が退院して普通の日常が戻ってきた、はずだった――

「やめろ……もう。」

白哉との戦いで一瞬でてきたあの変なやつ。

直ぐに消えちまったのに、最近はいいつが俺を呼ぶ声が聞こえる」

チラリと、維助は冷や汗を流す一護を見て。考えるように顎に手を添えた

その夜

「たーだいま。」

つといつものように浦原商店の玄関を開けて帰る

「おかえんなさーい」

つと奥から喜助が出迎えた。

「それで兄サン。ちよつとお願いが」

懐から取り出したチラシを指さす喜助

「この、最新のヒーター乾燥機付きのドラム式洗濯機がほしくてえ……！少し大きいんすけど。あたしら人数も増えたしどうかなくて……！」

「ああ……」

「そこをなんと……えっ？兄サン？」

「ああ」

「…どうかしました?」

何か上の空の維助が、自分のこめかみを人差し指で叩くのを見て、

「(ああ、何か考え込んでる癖ツスねえ……いつも機械ぐらいしか悩まない兄サンが)」

「なあ喜助。」

「はいな」

しばらく黙ってた維助が顔を上げる

「霊刀、あれって一護に吸い込まれたって言ったよな真咲ちゃんの半分」

「そうツスねえ」

「それで虚化を抑える力があると」

「まあ、ちゃんと調べられてるわけじゃないんすけど。一応」

「1つは、霊刀の抑える力より虚の力が勝つた……。もうひとつは……。魂が力を欲したため霊刀が虚の力を解放しはじめた……?」

虚と死神の境界を無くすことで絶大な力を得ることが出来る。

もしかして——つと考え始めた維助

「黒崎サンに何かありました?」

「ああ、息子さんの方だな。たまに虚の気配を感じるんだ。霊刀の力が弱くなったって

線も考えられるし、もし魂魄と感情で霊刀が変化するなら、あえてって考えてな」

「さて……どちらでしょうねえ……どちらにしても。平子サンらは動くでしょうね。」

「だろうな。まあいいか。」

「いいんすね」

「ああ、俺が首突つ込む問題じゃないなーって」

靴を脱いで上がる維助

「(考えた末にめんどくさくなくなったただけだなこの人……)」

「それと洗濯機？ヒーター式って……いいよ、俺がヒートポンプ式の洗濯機作るから。それにドラム式って掃除めんどいし、生地が痛みにくいけど洗浄力落ちるしな……後で
けえ」

「へえ、尸魂界で使ってたんすか？」

つとまるで使ってたかのような口ぶりに首を傾げる喜助

「まあな、昔の事だよ」

「まあ、兄サンの事だから洗濯機が尸魂界に普及してもおかしくないツスけど」

確かに尸魂界には洗濯機が導入されていた。

「俺が作るからいいよ、洗濯機。明日ぐらいでいいか？」

「えっ」

「とりあえず乾燥機が欲しいんだろ？電気代も全然使わねえし。縦型の洗浄力プラス容量もあるやつで乾燥付きにしてやるよ、尸魂界の連中は太陽の光の方がくとか言うからあんまり使つてない様子だけだな」

「ほんとツスか!!鉄斎さーん!」

つと喜んだ様子で奥に歩いてく喜助。

「虚……ね」

ワイシャツを脱いだ維助が呟く。

「なんつか。嫌な感じがするんだよな」

A5ランクの肉の話と、最上位大虚の話

「維助〜！」

「ゴブツ」

「あーあー……障子が、夜一サン。障子開けることを覚えましょ」

「何を言う喜助!! 儂だつてそのぐらいできるわ!」

「あの……離れてほしいんですけど」

ひっくり返つた維助の上に乗つかつている夜一^{全裸}

障子を猫の状態で破り維助に突つ込む瞬間に変身を解いたのだ。

「なんじゃ、帰つてるなら帰つてるとそう言えはいいのに、いけずじやのー維助は!! 昨日は尸魂界じゃつたる? 今日戻つてくるら……」

「ダアア!! 服を着ろ!! 痴女!」

夜一を押しつけていた羽織をぶん投げる維助。

「ち、痴女じゃと?!」

「服管機^{ふくかんき}! 服を着替えれる機械どこ行つたんだ! 服を着ろ!! あげただろ!」

「それなら、ほれっ」

谷間から服管機を取り出しボタンを押すと一瞬で服を着ている状態になる

「つたく……全裸はやめろ全裸は……思春期の男がいるんだから！」

つとチラツと目を移す維助

「「こつち見んなよ!!」 つとジン太と紫流が怒鳴った

「はいはい。」

「兄サン、お肉無くなりますよーん」

「おいこら、喜助人の皿から取るんじゃねえ！」

維助の皿からひよいひよいと自分の皿や雨やジン太に分けている喜助

「儂の分も持つてこんか！喜助！」

「ええ……！夜一サンの分なんてないッスよ……。貴方6人分一人で食べるでしょ」

「儂をなんだと思つとる……」

「はいはい。俺のあげるから」

維助が残った肉を差し出すと口を開けて食べる夜一。

慣れたような光景に誰も突つ込まない。

維助が伝令神機を操作して3分後コンコンつと扉が叩かれる

「まったく、誰ツスカねえ……」つと箸を置いて立ち上がった喜助がしばらく紙袋を持ってやってきた

「兄サン宛ツスよ多分。なんか玄関置いてありましたけど。」

紙袋となにか丸い機械を渡すと、維助が機械を懐にいれ紙袋を開けた

「ほら、追加の肉だぞ。すき焼きと言えば程よい脂の霜降り肉だろ！」

「「おおー!!」」

ジン太と雨、紫流の子供組が紙袋を覗き込んで目を輝かせる

「A5ランクだぞ。ターンと食え！ここの飯は少ないよなあ。育ち盛りがいるんだからちゃんと食わせてやれ喜助」

「えっ、アタシツスカ!?アタシはこれで十分なんすけどねえ……」

「じゃあ要らねえか！おーい喜助の分も食えるぞ〜」

「「わーい」」

「嘘！嘘ツス!!あー足りないなあアア!!!」

鉄斎が、夜一の分の皿を持ってきて席に着く

「すげえ……木箱に入ってる肉だ……!」

「どうやって買ってきたんじゃ維助」

つと鉄齋が肉を投入するのを見ながら首を傾げる。

「まあ、高級な肉を扱う肉屋で今買ってきたんだよ。」

「ほお……買ってきた？今？」

さらに頭にハテナを浮かべる夜一に懐から先程の機械を取り出す。

コインのような薄さで丸い機械。

「これは自立式映写機。」

畳の上に投げて維助が伝令神機を取り出し操作すると。ぶかぶかと浮いた機械から光が放たれ維助が現れた。

「掴めるし歩けるし動かせるし話せるAI搭載積み。戦闘とかはさすがに無理だけど、買い物程度なら出来るぞ。さっき金を持たせて買いに行かせたんだよ」

「ほお……便利なもんじゃな」

「便利は機械の代名詞！ははは！味わって食えよ！」

「肉が……！とろける!!!やべえ」

つと口にかき込むジン太

「ま、まあまあだな!!」

貴族だからか慣れているかもしれないが、あまりの美味しさに箸が止まらない紫流。すき焼きの鍋はあつという間に空になった。

お腹をポンポンと抑えながら維助の膝の上に寝っ転がる夜一。

「明日俺尸魂界に帰るから、何かあったら連絡してくれ。」

「なんじゃ。明日は1日おらんのか」

「うん、隊を放置できないし仕事も残ってるし定時連絡もあるからな。」

「まあ兄サンは現世でフラフラしていい人材じゃないスからねえ……」

トントンつとこめかみを指で叩き続ける維助に、夜一と喜助は顔を見合せた。

「いや、ダメだな。分裂する。ならあの鉾石をつかつて……」

つとブツブツ言い始めた維助に、ため息を吐いた喜助

「(まあ機械の事だろうなあとは薄々思っていましたけど)」

重要な何かかと思つたつと夜一もそんな維助を膝から見上げて同じくため息を吐いた。

「はい。問題ありませんでした。朽木紫流は通常通りの業務を行っています」

「ふむ、そうか」

定期的な隊首会、俺は並ぶ隊長達を中心に立ちホログラムで紫流の行動を映し出した。

「()数週間で虚撃破数50に整^{プラス}捕食率0。いやはや優秀だね、紫流君」

感心したように頷く京楽隊長。

「一護くんも学生ながらちゃんと言っているようだし、安定しているな」

つと浮竹隊長も乗った。

「あと数週間様子を見て、朽木紫流は隊に戻れるものと考えられます。」

「承知した、浦原維助はこれまで通り責任をもって朽木紫流を監視及び報告を忘れぬよう務めよ」

俺は元の位置に戻ると更木がボヤいた

「はっ、元最上位大虚ヴァーストロードだかなんだか知んねえけど、そんなめんどくせえやつ拘束するなり殺すなりすりやいいだろうが」

そこで白哉坊ちゃんがギロリと睨みつける

「あ？なんだよ」

つと詰め寄る更木。

「ふんっ、我々に任せておけば第二の朽木紫流が現れたとしても対応できるというのに」
涅も乗っかってくる

「また始まったよ」

つとため息混じりの眩きが冬獅郎から聞こえてきた。

「だから、お前はバラバラにグチャグチャにするだろ？研究だかなんだか知らんが人の

命は大切にしような」

「ふんっ、心にも無いことを」

「まあまあ、よしなさい。維助君が責任持ってやると言っただ、それでいいじゃないの」と、笑った京楽隊長

「そこまでじゃ、次。日番谷冬獅郎報告せよ」

「はい」

今度は真ん中に立った冬獅郎

「報告します。この一ヶ月での死神全隊員の殉職者は63、不審な死はありませんでした。登録された霊力との照合も済んでいます」

「そうか」

藍染が霊刀をつかって第二第三の紫流を作ると予想され調べ始めたもの。

機械で藍染が居なくなつてから護廷十三隊全隊員の霊力を保管し、それを死体の霊子と照合し偽物でないかを確認する。鏡花水月対策。

でも惣右介は多分死神を実験するより、虚を実験体にすると思うな、死神と虚は構造が異なる、死神で実験しまくるのは適作とは思えない。

だがしかし、惣右介は腹黒いから、仲間の絆とやらで遊んでくる可能性がある、死ん

だと思われていた友人が敵に——なんてね。

どっちも有り得るからめんどくさいな。死体の残らない隊士もたまにいるし

その時

ウインウイン

つとサイレンがなり始め、俺は壁に着いている受話器を取るとモニターに映し出される

“『申し上げます!!十二番隊より報告!空座町東部に破面の反応!数は三体!その霊
圧濃度、安定性からみて』”

成体であると思われる

ザワツとザワツと隊首室、ゴン!つと地面に立てた杖の音にざわめきが無くなる

「火急である。これより最上位大虚の討伐任務を、二番隊隊長浦原維助に命ずる。現世
に行くついでに始末してこい」

「ついでつて、まあ分かりました」

「納得いかねえ」

そう言つて前に出たのは更木

「戦いだろ?俺にやらせろよ」

「ならぬ、これは命令じゃ」

「あ??んでだよ。」

「お前が暴れると現世荒れるんだよ。瀧靈廷と違えんだ自重しろ」

「チツ」

「行け浦原維助」

「はい……直ちに」

「つたく、こうなんでタイミング悪いのかね。」

「それともこ瀧靈廷つちをどこかで見てる惣右介があえてこのときを狙っているのか……。」

「最上位大虚を倒す任務……いやあ強いといいなあ」

○現世

「ヤミーと呼ばれる最上位大虚が、井上織姫と対峙していた」

「その戦いを見て分析するもう一人の最上位大虚。」

「(時間回帰か、空間回帰か……どちらにしろ回復とは違う何か、おもしろい能力だ……」

「そしてあの武器)」

「いけっ!!」

織姫が銃を構えヤミーに放つ。

ヤミーはそれを腕で払うようにして受けるが

「あ………？」

焼け焦げたように爛れ一部が抉れていた

「痛えじゃねえか………女！」

「(ヤミーの鋼皮イェロを破り傷をつけるあの武器。女の能力——いや、違うな)」

鋼皮——霊圧による硬度な外皮、

並大抵の攻撃では傷一つつけることは出来ない。

はず——なのだが

「虚閃に似てんなあ………！いてえ、いてえじゃねえかよ!!」

「(この銃には霊子を収束させる時間が必要………！もう少し長く溜めなきゃ………！でも距離を取りすぎると茶渡くんが………！鞭むちの方はまだ精度良くないし………どうしよう！)」

茶渡は維助からもらったグローブをはめて戦ったものの、ヤミーの硬化した外皮に耐えきれず、グローブは無傷だが、反動で腕の方が損傷してしまっていた。

「ねえ、もう飽きたよ」

頬杖を着いた子供……否。破面が木から降りる
白髪の子供はボロボロなヤミーを蹴りつけると

ヤミーは吹っ飛んでいく

「何しやがるアマルゴ!!」

クア! つと起き上がったヤミーが怒鳴る

「うっさいな、遊ぶのやめなよ。来ちやうでしよ? 藍染様から言われてるでしよ迅速じんそくに
つて」

わざとらしく耳を塞ぐアマルゴと呼ばれた破面

「チツ、人工もどきが……」

またギロリとアマルゴと呼ばれた破面はヤミーを睨みつけた。

「しかたねえ、さっさと終わらせるか」

つと急接近し織姫に拳を振り上げた

——瞬間

降ふれ

もみじがさ
紅葉傘

卍解

天鎖斬月

「なんだあ?」

「紫流くん……黒崎くん……!」

ヤミーの拳に切っ先を向けた一護と、織姫の前に片手を出して守る紫流。

「紫流、井上達を頼む」

「おう。任せとけ」

「ひゃ」

織姫を横抱きにして離れた紫流

「ウルキオラ、こいつ……」

「ああ、お前の無駄な戦いでこうも簡単にあぶりだせるとは、オレンジの髪に黒い卍解。間違いない、こいつが標的だ」

「(一護が標的? んだよ、こいつら……それに)」

白髪のアマルゴの破面と目が合う紫流

ドクンツと心臓が鳴り、冷や汗が流れる

「(なんだ、この感じ)」

「ああ……君……」

つと口角が上がったアマルゴ

「同士だね」

浦原維助参戦の話

「おー、やってるやってる」

俺は上空から双眼鏡で眺める。

最上位大虚級が三体に、うちの高校のヤツらが数名やられて茶渡が負傷。そして織姫ちゃんと紫流が一体の最上位大虚と対峙……

デカイのは一護……いや、喜助と夜一さんもいるな。

もう一体は何もしないんか。

つとか思っていると、ふと喜助が上を見上げ……

俺は思わず双眼鏡から目を離した。

何メートル離れてると思ってるんだよ――

双・眼・鏡・越・し・に・目・が・合・つ・た・ぞ。

嘘だろバレた……？さすが我が弟。

そういうえば穿界門開いたら誰が来たか霊圧で探ってたっけ。

霊圧感じれないから俺だって確信したんだろうな。

仕方ない……いくか。

「夜一サン。黒崎サン、アタシの合図でここから距離を取ってください」
「何言ってるんだよ浦原さん！」

喜助の言葉に眉を顰める夜一。

「巻き込まれなくなければ離れた方がいいツスよ」

「なんだあ！怖気付いたか!?!」

つと愉快そうに笑うヤミー

ヒュウウウつと落下音が聞こえヤミーは上空を見上げる

「今ツスよ」

喜助が剣を横に払い夜一と一護が後ろに飛び抜く——瞬間

「霊刀ばーんちー！」

上空から、維助が現れヤミーの脳天に蹴りを食らわせ。

土煙と爆音とともに地が割れクレーターが出来上がる

その惨状にヒクヒクと、目元を動かす一護

「おいゴルア！俺らまで巻き添えになるところだったろ！」

つと土煙の中怒鳴ると

「ええ、ごめーん一護」

つと呑気な維助がクレーターから上がってきた

「それになんスか、霊刀ぱんちって……」

「いやあ、必殺技？ほらバトル漫画において必殺技叫ぶのはロマンだろ？」

つと維助がどうだ！とでも言うように仁王立ちすると顔を片手で抑えてうなだれる

喜助が一言――

「ダサイ」

「ダサイ?!?!」

「しかも、霊刀持っていないし、パンチじゃなくて蹴りでしょう」

「あーあー、いいの！そこはノリと勢いなの」

「たまにバカ丸出しになるのなんなんスか……弟の肩身狭くなるんでやめてください」

「なんだと！」

つとキレた維助を夜一が宥める

「チツ、やつぱ橋姫パンチの方がよかったか、つてタフだなあ……！普通のやつなら全身粉々になつててもおかしくないんだけど」

ふと後ろを振り向くと、クレーターの中から出てくるヤミー。

「くそ……クソが!!」

ブチ切れて横腹を抑えていた。

横腹は無惨に抉れていて、血がとめどなく流れ地面に大きな水溜りを作っていた。

「タフネスってやつ? アドレナリンドバドバで痛み感じない……って夜一さん。その腕」

維助を押えていた腕が青く変色しているのを見つけると、夜一はスツと、後ろに手を隠した

「いや、バレてるからどーしたんだよ」

「な、なにも? 別になんでもないぞ」

あからさまに気をそらそうとする夜一にため息を吐く

「あいつ?」

つと、親指でヤミーを指すと、目を逸らしながらもコクンつと頷いた

「そ、その霊圧硬度が思う以上にあつて……の? いや、別に儂が油断したとかそういうんでは……」

ヤミーに振り向いた維助は静かに話した

「喜助、夜一さんをよろしく。回道かけてやれ」

「はいな」

「フウーツフウーツ」と、荒い息を繰り返すヤミー。

「悪いな、女の子が怪我してる時に遊ぶのは男が廃るってもんさ！つて事で……遊びたかったけどごめんな。いや女の……子？」

「ゴルア！維助!!そこを疑問視するな!!!」

つと言う怒鳴り声に、ごめーんつと軽く謝る

無駄にでかいなあ、あの分だとちよつと血を流したぐらいじゃ死なないか…、殺すにしても状態は残しておきたい、最上位大虚なんてそうそう出会えないし、喜助が調べたそうだし。

「つて事で、その腕いただきまーす」

つと刀を振るった瞬間。

キーンつと火花を散らし何かに防がれる

「およっ..」

「遅えぞ!!アマルゴ!!」

「うっさいなあ……!!」

っと、振り上げられた足を避け距離をとる

俺の刀を腕で防ぐなんて、相当な筋力か……いや違うな。

「威力を相殺そうさいしたのか」

喜助がよく使う相殺の技、反転した鬼道をぶついたり、威力を反転させた霊圧をぶつける。高等技術だ、初対面のやつが俺の威力を相殺するとは……だが、完全に相殺出来た訳ではなく

腕から血飛沫が舞う

「およ……」 っと、自分の腕を見る子供。

俺は違和感に眉を顰める。

こいつ——

とか思っていると

「おもしろ……お師匠……」

血濡れで這いつくばってる紫流が織姫ちゃんに治療されていた

「大丈夫か？」

「そいつ……霊刀を……」

「へえ……なるほど」

「俺は藍染様のお気に入りで、アマルゴ。よろしく」

手が青い光に包まれ、その瞬間には太刀を握っていた。

「大分小さくしてみたみたいだけど、まだまだだな。実験段階ってことか……」
「俺を……そこら辺のネズミと一緒にするな!!」

何故かブチ切れて向かってきた。

実験動物みたいに言っただけでそんなブチギレるか？

「俺は浦原維助。よろしく!」

今度は相殺されぬように素早く、まるできゆうりを斬るように――

――腕を切り落とす

「う、ウアアアア!!うで!腕がアア!!」

自分の腕を抑えながら発狂する子供。

惣右介はなんでこう子供で実験するのかね、シヨタ好きだったりする？

「まあ霊刀だからなんだって話なんだよね。鬼道使うやつならまだしも、俺と剣で語り合いたいならそれなりのやつ連れてこいや」

「まだ、だ……!へへ……」

ヨダレを垂らしながらこちらを向いたアマルゴはメキメキと音を立てて

腕が再生した

「気持ち悪っ。淫かよ……」

「なんとでもいえ！」

霊刀を橋姫で受け止めると違和感を感じた

「ハア!? まじかよ」

みるみるうちに俺の霊圧硬化が……身体に纏った霊力が吸われていく。

青く青く光るそれを振りかざす

「喜助!!」

——啼け紅姫

俺は橋姫で防ぎ喜助は後ろの子らを守った。

木々がへし折れ地面が浮き上がる斬撃

「はっ……はは、ここまでの霊力とは」

つと、霊刀を頬擦りするアマルゴ。

パキツと、音を立て喜助の盾が砕け散る。

「人の霊力吸い取って収束したものを放つ……はっなるほどね」

「そうさ!! 空気を吸うように! ひとの霊力を吸い取れる!! 触れたら最後空っぽになって
終わりさ!! ハハハ!! 己の霊力のデカさが仇となる!!」

つと笑うアマルゴ。なんつーか、子供だな。

「新しい玩具を与えられた子供——」

「んだと……!!」

「いいぜ、どんどん吸い取れよ……さあ!」

わざとゆつくり振りかざした刀を霊刀で受け止められ、どんどんと霊力が自分の意思関係なく吸い取られていく

「ハハハ!!どうだ! 苦しいだろう! ふふふ」

つと可笑しそうに笑うアマルゴの顔が段々と青くなっていく

「なぜ……!! もう瀕死になってもおかしくない程に吸い取ったのに……! なぜ立ってられる!!」

俺はスルツと左手で右腕の制御装置を取った

「覚えとけ、ガキ。吸収する力、溜め込む力つてのは限度があるんだよ。水を吸い取るスポンジも、いずれ漏れ出てくる。」

俺の制御しきれていない霊力が溢れどんどんと霊刀に吸い込まれていく

「やめろ……やめろ!!」

俺は離れようとするアマルゴの腕をつかむ

霊刀からパキツ——つと音が鳴り響く

「そら……!!俺の霊圧で吹っ飛べ——」

俺は霊刀を太刀取りで奪うとアマルゴに突き刺しアマルゴを上空高く蹴りあげた
「やめろおお!!」

空中で為す術なく、アマルゴは——

青い光に包まれ吹き飛んだ

余波で地震とも言える揺れと突風が吹き荒れる

俺は素早く制御装置をつけ直した。

「やっぱり霊刀は不完全。甘いね……」

チラリと、黒髪の破面の方をむくと

「想定通りだ」つと言った。

つまり実験段階のを殺されるとわかって俺とぶつけたのか。

「まあいいや、あんたらもやる?相手するけど」

「今回は退く、我々の目的は達成された、全てが想定通りだと」

そのまま破面は黒腔に入り消えていく

全てが想定通り……ね。俺こう言う心理戦ってやつ?嫌いなんだよね。

「あーあ、靈刀を欠片もなく粉々に爆散させたのは間違いだったか……」

「はい、あーん」

「あ……あーん」

「何してるんスカ」

呆れたように大きな丼を2つ持ち足で襖を開けた喜助。

「いや、何って腕痛いだろうから食わせてあげてんだよ」

「でも夜一サンの腕は日常生活には——ゴブア」

何か言いかけた喜助にすぐさま顎を蹴りあげる夜一さん。

「うわ、痛そう」

吹っ飛んだ丼をキャッチして畳の上に置いた

「痛いぞ維助、さあ食わせるんじや！はよはよ」っと口を開ける夜一さん。

「お、おう……まあ、そのなんだ、早く来なくて悪かったな」

「よいよい、儂が瞬間状態で戦わなかったのが悪いのじやから」

アイタタ……っと言いなながら起き上がった喜助が顎を抑える

「それにしても靈刀、やはり組み込んで来たツスね。」

「まあ、だろうなって感じ……まああの感じだと隊長格でも苦戦するだろうな、霊力吸い取られて終わりだ。紫流も似たような感じでやられたんだろ。俺みたいにゴリ押しで霊力注ぎ込めるのは更木ぐらいか……」

「まあ策を講じないといけないツスね……兄サンみたいな力押しは本来通用しませんし……」

碎蜂 v s 夜一??ドタバタ装甲車の話?

「維助様く!!! って……夜一様」

「なんじゃ碎蜂。儂がいるのがおかしいのか?」

たゆんつと揺れる胸を維助の腕に押し付ける。夜一

「あの……夜一さん、碎蜂の目が死ぬほど痛いんで離れてもらっても……」

「いやじゃ」

ふいつとそつぽを向いた夜一に頬をかく

「あーまあ、とりあえず客人として入れることになったから……その。なんだ、部屋を」

「はっ……ただいま」

「あ、アタシのもよろしくお願いします!」

ひよこつと維助の背中から顔を出した――

「浦原……喜助!!」

碎蜂は刀を抜くとそれを躊躇いもなく喜助に向かって振るう

カスツ――つと前髪が軽く切れ喜助は顔を青くする

「な、なにするんスカ!？」

「こつちのセリフだ! 貴様っ! どの面を下げてここに来たのだ!」

「ええ! ちよ、夜一サンと対応違くないッスカ!」

「それで、急にいかがなさったのですか?」

つと、茶を配った碎蜂がお膳を胸に首を傾げる

「いや……実はさ」

これは——1日前に遡る

○浦原商店

「ダメじゃ維助! 共に風呂に入ろう!!」

「イヤイヤ!! 1人で入れるだろ!」

「う! で! が!! 痛くてのお……」

つと、擦り寄る夜一。

「あの……近所迷惑なので「喜助!!」……なんスカ」

心底面倒くさそうな顔をする喜助が下がろうとしたのをガシツと首根っこを掴んで止める維助。

「維助を」「夜一さんを」

「説得するのじゃ!」「止めて!!」

「はあ……何がどうなってそうなたんスか?」

「いや夜一さんが、腕痛いから風呂に入れろって」

「維助がてつどうてくれんのじゃ!!」

「だーっから雨ウルルに入れてもらえよ!」

「うっ、昨日も入れて貰ったからのう、流石に悪いと思つて!」

「だからなんで俺!あつ、そうだ一護の所の妹さんに……」

「初めましての儂がそんな事頼めるか!!」

「ですよね……あつ!じゃ喜助に!!」

「いきなりアタシにフルの辞めてもらつていいツスカ!」

そして今に至る。

「と、言うわけで。夜一さんがきかないから。じゃあ碎蜂に入れてもらおうと」
「わ、私がですか!?!」

己を指さして驚いたように飛び上がる

「同じ女だろ?夜一さんも昔からの知り合いの碎蜂に入れてもらったらいいかなって、手伝ってあげるだけでいいからさ。」

「それは分かりましたが……あの、なぜそのものも?」

つとジロツと喜助を睨みつける碎蜂

「いやあ、あはは、ちよつとこちらで兄サンにお話が……アタシが来てることは他に内密に……。特に十二番隊には……」

「頼むよ碎蜂。」

「……………分かりました。維助様の頼みであれば……」

「ここは二番隊隊舎地下

碎蜂と夜一さんは浴場へ向かった。

「はあ………まったく100年でよくここまでやりましたね」つと周りを見渡す喜助。

SF風の風景におお。つと色々見回ってる。

「いやあ、1箇所改造したら他も改造したくなつて……つておいおい、何勝手に自分の指紋を登録してやがる」

勝手に俺の伝令神機で登録し始める喜助。

指紋認証の扉に喜助が手を添えるとウィーンと扉が開いた。

「いやあ、また来た時間けてもらうのも悪いなーって」

「つたく……くれぐれも内緒で侵入すんなよ?」

ゴウウンつとエレベーターの音を聞きながらそれに乗り下る俺ら

「それにしても珍しいよな、喜助が俺の霊銃れいがん(今名ずけた)——銃の使い方を教えて欲しいだなんて」

「いやあ、使えるものは使っておこうかなと」

織姫ちゃんが使っていた銃を喜助も使ってみたいらしい。

「これは、人間がつかう銃とは違う。霊子を吸い取り放つ、また自分の霊力も使うことができるが溜め込みすぎると爆発するから適度にな」

「爆発!?!」

「当たり前だろ、あのアマルゴっていう破面見ただろ? ああなる。だから収束したら撃つかセーフティつけて収集を停止。撃つの辞めるなら横にボタンついてるから押すと空中に霊子が分解される。改造してもいいけど、壊れても知らないからな、改造したら銃が突然爆発するだなんて人間世界にもある事だし。まあ、腕が残ればいいな」

サアつと少し顔を青くして頷く喜助。改造する気だったか

「んで……あの……これは？」

「何ってこと？わかんない？ロケットランチャー……RPGだよ」

喜助は俺に渡されたロケットランチャーを肩に背負って構えている

「いやそれは分かるんすけど。ボクが欲しいのは拳銃みたいなやつでして……」

「いいじゃん強いよ、全部吹っ飛ばせるよ」

「そうツスね!!地形ごと吹っ飛ばせますね!!」

「声でつか。」

ほら、つと投げた銃を受け取る喜助

「そうそう、これツスよ」

見た目は明らかな拳銃。

「セーフティを外せば霊子が収集され、銃口に霊子が収縮する。もう一度付けければ停止。横のボタンを押せば貯めてた霊子を分解。セーフティを外しはなしにしとけば、連射出来ると思うぞ、威力は弱いけど……。威力を高めたなら青く青く眩しいぐらいまで溜

めるといい。さつきも言えば溜めすぎると……まあ、ね？腕が」
「わかってますつて。ありがとうございます、兄サン」

銃の撃ち方なんかを指南していた時

プツ——つとマイクが繋がる音が聞こえ。

“ 『閣下ー!!!前総司令官と碎蜂副隊長がー!!』 ”

つと、部下からの内線が入る。

「つたく……なんだよ。一回上行くか喜助」

「はいな」

そうして俺らはエレベーターに乗って浴場がある場所へ

んで

「何がどうしてどうなってるん？」

「そ、それがあ……急に取っ組み合いを」

お互いバスタオル一枚でギャーギャーつと取っ組み合いしてる夜一さんと碎蜂。

俺はため息混じりに手を挙げ女の部下に指示し二人を離させる

「とりあえず……」

「服を着ろ!!」

落ち着いた2人に服管機を渡しそれぞれの装束に着替える2人

「正座!!」

「むっ」

「はい……」

ムスツとした夜一さんと、しょんぼりした碎蜂が正座する。

「……」

「黙ってちやわかんないよ。何があったの」

「碎蜂が……」

「夜一様が……」

「維助を」「維助様を」

「「婚約者だ!!」」

「ああ……」

つと、壁によりかかった喜助が扇子を開くと俺に耳打ち

「ほうら、言わんこつちやない……いずれこうなると思ってたんスよ……、うやむやにし
ようとするから」

「うっ……いやそうなんだが……」

俺はため息を吐いて向き合う。

「まず……夜一さんとは破談しているはずだし……碎蜂は見かけだけという約束だ。」

「うっ」

「そ、それはそうじゃが……その……えっと……」

「ちゃんとしなかった俺も悪いが……その……言い辛いが俺は結婚を望んでいない。ま
だまだ現役だし、子供の世話も……って感じだし。立場上守るべきものが近くにいられ
ると困る。人質とか……な？」

「むう……話が飛躍しすぎるんじや。子供などまだまだ先の話じやろう？」

「まあ……その、そうなんだが。付き合う＝結婚っていうなんか。そういう感じのが
……」

「なんじや維助、最先端に行くお主が、女子おなごについては大昔の話じやの」

「おおむか……っ!? そんな……な」

俺はガクツと畳に倒れ込む

「あらら……夜一サン。兄サン凹んでますよ」

「なっ。儂のせいかな!？」

「俺はあ、女の子大好きだけど!!遊ぶのは好きだけど、その責任つてものを覚えてだなあ!一夜限りもそういう専門の女の子だけだし……遊びで付き合うつてのは……付き合うイコール最後まで責任を……つて」

「ほほう……そういう専門」

「維助様、初耳なのですが」

つと、2人が詰め寄ってくる

「し、仕方ねえだろ!部下に手を出すわけに行かねえし、他の隊はいざこざが……生徒にも手は出せねえし……!ほら俺男だし!!言わせんなよ!!」

「私めを!使ってくださいればよろしいのに!!」

「何を言ってる碎蜂!!」

顔を真っ赤にして片足ついて大声出す碎蜂に突っ込む

「そんな事を軽々しく言うんじゃないやありません!!俺らの前ならまだしも、蜂家の品を疑われるぞ!」

「うっ……!ですが……!維助様も立場というものが!」

「大丈夫大丈夫、顔も認識阻害の機械つけてるし、身分も隠してるし、髪も瞳の色も変えてるし、出された水も食事も一切口にしてないし」

「女性と遊ぶためにそこまでするんスカゴフツ」

おれが肘で付くと痛いつと蹲る喜助。

そこで

「お取り込み中失礼します」

刑軍衣装を着た俺の直属の部下が現れた

「例の脱走者の潜伏場所を特定しました。証拠も撮影済みです、軍の配置も済んでおります」

俺はスマホを取り出す

「何ページのやつだっけ」

そこで碎蜂が膝を着く

「シート73ページ、重要脱走者の3人組です。」

なるほど、俺が碎蜂に任せておいた奴か。

「前は8人中5人確保、3人が逃げた——ね」

「申し訳ございません」

「いいよ、責めてる訳じゃない、逆によく短期間で見つけた。被害もそうないし……うん」

俺はスマホを懐にしまった

「ちようどいい！せつかくだし久しぶりに共同作戦と行こう！配置した刑軍を下がらせろ」

「はっ」

そう言つて去つていく部下。

「あの、維助様……なにを？」

「いったろ……？」

ソロツ、つと忍び足で離れようとする喜助の首根つこをつかむ

「共同作戦——！つてな、行くぞ碎蜂、夜一さん、喜助」

「んで……なんスかこれ」

「何つて、見ればわかるだろ」

バキバキバキつと、木々をなぎ倒し森を駆け抜ける
そうこうしや
 装甲車

「ははは！よいよい！もつとスピードを出せ維助！」

「はいよー！」

「維助様ー!!!」

まあ、乗り心地は良くないけどな！

「試作品56号！装甲車56ちゃん！ガソリンは必要なし、操縦者の靈力で走る。木々や岩はなぎ倒せる、最大スピードは普通の死神の瞬歩の数倍の速さ！数百の高さから落ちても無傷！水上走行モードも搭載積み！大荷物運ぶ時なんかには便利だぜ！あつ、ちなみにc02は排出しないぜ！体力温存にびつたし！今回の任務地は遠いしな」

「つて言いながら使いたかつただけでしょうに」

「うるさい喜助……さあ着いたぞ東79の森林。こんな所に小屋なんか作りやがつて……まあ火を使ったからか直ぐに居場所特定出来たみたいだけど」

どんどんと距離が近くなる小屋。

「あの、兄サン！兄サン!!ちよ……あの!!まさか」

50メートル

30メートル

「維助!」つと驚く夜一さんの頭と碎蜂の頭を抑える。

「頭下げてろよ! 突っ込むぞ!!」

小屋との距離0メートル

装甲車とRPGと記憶の話

ドガアアアン

ものすごい衝撃音とと共に小屋が爆散する

そのまま通り過ぎる装甲車

ぶつかると直前に3つの黒い影が小屋から飛び出していたのを見逃さなかった

「やっぱり気づいてたし早いな、隠密機動の追っ手から逃げる速さはある」

「まあ、この車の音がうるさいってもあるでしょうけど」

「うるさい喜助」

「さて、さっさと捕まえるか」

アクセルを踏みしめて装甲車を発進させると

「どうわあ……！」

つと悲鳴の先を見ると夜一さんが上半身を車から投げて落ちかけている

「ちよ、夜一さん!？」

「落ちる!!落ちるぞー!!止めぬか!」

「夜一様!」

足が離れた夜一さんにしがみつくと碎蜂

「と、止まるんじや維助!」

「車はすぐに止まれないの!何キロ出てると思ってるんだ!それに急ブレーキ踏んだらそれこそ投げ出されるだろ!?!喜助、手伝ってやれ」

「ええ…つて兄サン!!前!前!!」

「嘘だろ…!?!」

前方からは大岩が転がってきていて。

装甲車でぶつ飛ばしたら、夜一さんと、掴んでる碎蜂まで吹っ飛ば、ハンドルをきる?いや、こんなガタガタの道だ、横転する…!?

脱走者がなんか仕掛けてたな?!

「仕方ない…喜助!!後部座席に詰んでる荷物を!早く!!」

ミラー越しに頷く喜助。

「つてこれ…!!」

「撃ち方教えたら！早く！」

「仕方ないツスね……」

喜助が後部座席から身体を出して構えたのは

ロケットランチャー

さすがは喜助、慣れない体勢に今日握ったばかりの重火器。

装甲車が小屋にぶつかった時とは比べ物にならない程の爆散により岩は砕け散った。

反動で揺れるも、夜一さんと碎蜂は元の位置に戻った。

さすが体幹ある〜

「し、死ぬかと……」

「大丈夫かー？全く乗り出すなよ。碎蜂！」

「はっ！」

碎蜂は慣れたようにモニターを操作する

「目標距離1.9、重要脱走者の1人です。斬魄刀の抜刀を確認。能力を使ったものと思われませう。」

「へえ、岩を操る……ね。洞窟作り放題じゃん」

モニターに表示された男と、登録された情報と照合する碎蜂。

「銃口固定、照準安定、いつでもいけます」

「よし、いけー！」

「まつ、まさか爆はっ…!？」

つと顔を青くさせる夜一さん

「違う違う、そんなことするわけないじゃん。拘束用だつて」

放った捕縛用のネットが男達を絡めとる

3人捕獲しスピードを緩め装甲車を止める

「なん…だこれ！」

つと暴れる男を装甲車から降りて踏みつけると、グエツと鳴いた

「うーん。56ちゃんはあとは乗り心地をどうにかしないとなあ、銃の精度はまあまあ

か…あと音がなあ…」

「まとめて資料を作成していきます」

「ありがとう碎蜂」

優秀で助かるよ

少し離れた所にてその様子を見ながら夜一と喜助が話していた。

「なんじや、碎蜂も維助に染まつてるの…いや、二番隊…隠密が…」

「はは…まあ兄サンが上に立てばこうなりますよねえ…」

「お主も大概じゃが」

「ええボクもツスカ？あんなのと一緒にしないでくださいよ…」

「あんなのだと？」

振り向いた維助に肩をビクつかせる

「地獄耳」

「てめえらが声がでけえんだよ！」

維助はポカッと、喜助の頭を殴ると

アイタア！つと、頭を押えてうずくまる

「なんでボクだけ殴るんスカ!!ボクに恨みでも!？」

つと涙目で見上げる

「逆に恨みないと思つたのかよ…俺の体を散々いじくり回しやがって…院生の頃腕の骨折つたの覚えてるからな？つておい、碎蜂」

なにかに気づいた維助が碎蜂を呼ぶと、

「維助様の…身体を…いじくり…」

つと顔を赤くして鼻を押えていた。手の隙間からは血が流れ出る

「おいこら碎蜂、変な事考えるな。思春期の中学生かてめえ……!」

頭を鷲掴みにして揺らす維助。

「とりあえず帰ろうか。縛って後ろに……のんねえな、縛りつけよ!」

装甲車の後ろに脱走者を縛り付けて走り出す。

行きとは違い今回はゆっくりだ。

「尸魂界も交通の便をなんとかすればなあ……。ほら四番隊とか瞬歩使えねえやつとかいるし、地下や地上に車とか……まあ転送装置があればいいんだけど、あれ1回体分解して再構築させるからちよつとミスると腕無くなるとかあるからまだ実装できないんだよなあ……!」

「ああ、作ってはいるスね!」

「転送とかワープとか夢だろ!人間世界の相対性理論によると——まあめちやくちや簡単に言う物質は加速を続けても光速に達することも超えることも出来ねえんだ。考えているのは1回分子レベルまで分解して再構築する。人間には無理だが……こつちの世界には時間軸が確立されてる亜空間や断界なんかもある。それを利用すれば出来るはずだよ。ただ計算できないほどの不確定要素も多くデメリットも多い身体の影響も怖いし。つて……聞いているか?」

「んー……わからん!!」

つと、腕ん組んで言つた夜一に

「ですよねー」

つと返すと、後ろから足が飛んできた。

「グハツ。俺今運転中！」

グラツと大きく揺れる車内。

「あわわ、兄サンちゃんと運転してください！」

「俺のせいか!?!」

「貴様！維助様になんという口を！」

「なんでボクだけ！」

つと泣いた振りをする喜助。

「でもまあ、空中に靈子の線路なんか作つて電車走らせてもいいし、地下でもいいけど崩れたらめんどい。音速レベルの電車とかいいなあ」

そこで思い出したかのように笑顔になる維助

「確か昔記事で見たのはチューブ列車つて時速1200キロを超えるものなんかを作ろうとしてるところもあつたな、真空にしたチューブの中に列車を走らせるんだよ。」

「空気抵抗と摩擦を極限まで減らす、ただ膨張と気圧の関係で実現は難しいだなんて記事に乗つてたなあ……」

「尸魂界で…じゃないツスよね現世でそんな記事ありましたっけ？」

つと考える喜助の声にハツとした様子の維助

「…ああ！チューブ列車。そうそう、俺の夢なんだよ、今の考えた仕様な！音速で漚靈廷回れるようにしたらいいと思うんだよね」

「なんじゃ、夢か…まあ維助なら出来そうなものだが…はたして漚靈廷全体の改造を許されるかどうか」

「ですよね…」

「はい。小テスト終了、裏返しにして後ろから回せく自分のが一番上に乗せて回すように」

「うわあああ！やべええー！」

「はい、啓吾うるさい」

叫んだ啓吾を注意すると教室が笑いに包まれる。

「はい。じゃー限界目のプリントを委員長長配って〜」

その間に丸つけをしていると、赤ペンが止まる。

「…」

50点満点の小テスト

25点黒崎一護。

途中でペンが歪んでいたり、シャーペンが折れた跡も見える。
最後まで書いていないし

「…」

帰りのホームルームの後みんなが帰る中

「黒崎、ちよつと残れ。委員長教室は俺が閉めるから」

みんなが帰ったあと一護は俯いていた。

「一護、最近成績が落ちてる。なんかあったか？」

「……」

一護は黙ったまま俯いていた。

「はあ…まあいいか、ルキアちゃん！ダメだったわ」

「ルキ…!?!」

びつくりした様子の一護が俺の方を向いたかと思うと、俺が呼びかけた方に目を移した

窓辺に立ってるのはルキアで仁王立ちして笑っている

「久しぶりだな、一護!!」

驚いた様子の一護に構わず、ルキアは一護の顔面を殴りつける

「ガブア!」

「なにしやが…」

何か言いかけた一護をもう一発ぶん殴るルキア

「なんだその!腑抜けた顔は!!来い!!」

ルキアは一護の胸ぐらを掴むとそのまま窓の外にぶん投げた。

その後をルキアが追いかける。

あれ生身の身体だけど大丈夫かね…

俺は教卓の上に頬杖つく。

「人の感情つてのは機械でどうにも出来ないから面倒くさいよね」

ルキアと冬獅郎、あと恋次に十一番隊連中が現世にきた、というより浦原商店に押しかけて、学校の登録をしろと喜助に頼んでいた。

「平子隊長、一護を頼みました」

「なんや、気づいっとったんか」

「生徒が帰ってないことぐらい分かりますって」

「なんやそれ気持ち悪つと言いなながら教室の扉から顔を出す平子さん。」

「それに隊長ちやうわ。」

つとボヤク。

「ねえ、平子さん、一護をよろしく。強くしてあげてね」

「…それはなんのためや？」

「え？なんのためってそりやもちろん。惣右介を倒すために？」

「…」

眉を顰める平子さん。

「…あんたと話すと時々気持ち悪なるわ。昔の方が、まだマシやったで」

「ほな、帰るわ。センセ」

そう言つて踵を返して帰つていく平子さん

気持ち悪い…ねえ。

俺も時々気持ち悪くなるよ。前世の記憶が混ざったりして混乱する事もあるし。前世でようやく成人か…とか思つてたのに今は20年とか目を閉じるぐらいに早く感じる。

人間の頃は死とか程遠い存在で、でもすぐ側にあつて恐ろしいものだったのに。死神

になってからは死が近く脆く、何も感じなく。ただ魂魄とは循環をするだけの砂。

死神は何百年も生きる為なのか飽きるとか進むとか多分人間の時間に帳尻ちようじりを合わせ
てるかのように酷く遅い。

だから何百年も同じ場所に通っても飽きていないし江戸のような昔の不便性で満足
している。

5年で極めれる事も死神は10年も20年もさらにそれ以上かかる。

それが死神の感覚。それが普通

だけど俺は前世の記憶を持っているからか時間の感覚的には人間に近い。

人間時代の20歳だなんてめっちゃくちや長く感じたのにその10倍以上も生きて
る。正直飽きるし疲れる。

だから俺は新しいものを作りたくて仕方ないのかもしれない。

一護にも惣右介にも期待している。

どちらが勝ってもきつと尸魂界は変わると思う

「はあ、俺も俺で面倒くさ」

破面の話と料理の話

ルキアは一護の部屋の扉を思いっきり開いた

「つておい！ 静かに開けろよ！ 壁に傷つくだろ！」

という一護の声も無視して自分の部屋かのようにベッドに座りくつろぐ。

こういう光景も懐かしっ！ と思った

「ねえーさあああん！！ ゴブア！！」

押し入れから飛び出してきたコンはルキアに抱きつこうとして思いっきり踏まれた

「ああ、ひと夏越しの出会いにも関わらず一切の戸惑いもない踏みつけああ… 最高っす

〜ねえさん！！ ブゲエ」

情けない悲鳴を上げてバタバタと暴れるコン

「しぬ、死んじやう綿がああ！」

という声に離すと

スカートの中を見たコンが一言

「白」

つと言う声にルキアは窓ガラスの方へコンを蹴り飛ばし

パリーンつと音を立てコンは屋根に転がった。

「窓おおー!!!ルキアてめえ!何しやがる!!」

「仕方なからう!私のせいだと言うのか!」

「てめえのせいだろ!!」

そうしていると――

「夏梨ちゃんシー!聞こえちゃう」

「いや、一兄に怒られても知らないからね」

つと声に、一護がピクツつとこめかみを動かすと思いつき扉を開いた

「うるせえぞゴルア!」

「「ごめんなさーい!!」」

つと、父親の一心。遊子そして母親までも

「お袋!!止めろよ!」

「だあーつて、お母さんも気になっちゃって〜きやー青春ね」

「うっせ」

そうして階段を降りていったのを確認して部屋の扉を閉めた。

「つたく、あいつらは…ヒトを餌に大盛り上がりしやがって」

「相変わらず楽しげな家族だな！つて、お袋……？母親が起きたのか？」
「ああ、ついこの前な。それでとつとと教えろよ。破面つてのが何なのか！なんで俺らが狙われてるのか！」

すると、天井からカコンつと音がした

「そいつは俺たちが教えてやろう！」

天井から4人がひよこつと顔を出した

「うおおおい！人の電気に何してやがる!!」

「んだよ、壊れたら先生にでも直してもらえよ」

「電気治してくなんて呼べるか!!」

面倒くさそうに耳をほじつてる恋次に詰め寄った。

「うるせえなあ、あの人なら快く直してくれるだろ。なんだっけ、あのぼーてい？とかくらぶ？つていう雑誌みたいな派手なやつにしてくれるだろうよ」

「いらねえよ！ミラーボールなんかつけられそうだよ！つてかなんでそんなん知ってんだよ」

いや、先生が現世の書物くれるんだよ。つと言う声に、何してんだあの人……つと突っ込む。

「とりあえず……」

恋次はルキアの取り出したスケッチブックを指さしながら説明を始める。

破面アランカルとは、仮面を外し虚と死神二つの力を手に入れた虚の1団だ。今まで数も少なく未
完成だったが。

そこに崩玉を持った藍染が接触する事で、成体の破面が誕生した。

そいつがこの間の三体だ。

「……までわかるな？」

「いや、スケッチブックがなかったらよく分かったよ。」

ルキアの持ったスケッチブックに描かれた下手な絵をみて相変わらずだと、ため息を吐く

「当初尸魂界は藍染が直接コトを起こすまでは静観するつもりだったが、十三隊も一気に3人抜けてバタバタしてたし、だが予想以上に早く成体が完成しそいつが現世に送られた事でそうも言ってもらえなくなった。そこで急遽選抜されたのが俺達だ」

選んだのは総隊長だと言う。

私もいきなり一行行って乱菊、そして付き添いに冬獅郎が。

「いや、ピックニックかよ、ってか浦原先生に頼めば良いじゃねえか」
すると。

「なんで窓ガラス割れてるんだ…？」

つと窓側から声が聞こえた

「冬獅郎！」

「日番谷隊長だ。」

そう言つて窓枠を超えると机の上に腰掛けた。

「そもそも、浦原隊長は忙しい人だ。尸魂界と現世を頻繁に行き来しているし。前回は浦原隊長が尸魂界に行っている時に狙われた。」

「へえ、そんなに忙しい人なのか」

「朽木紫流の監視。尸魂界では霊術院の講師、隠密機動に新四十六室の選抜育成。その他色々仕事がある。どうしても現世を離れることが多いんだよ」

「どつちでも先生してんのかよ」

「とにかくてめえは藍染に狙われてんだよ。黒崎一護。破面は確かに虚の面を剥ぐことで生まれる。だがその辺の虚を仮面を剥いだところで大したもんはできやしねえ。本気で尸魂界に戦争を仕掛けるつもりなら破面化の対象は自ずと大虚^{メノス}以上に限られる」

「なんだよ…メノス以上つて…まるでメノスより上がいるみてえじゃねえか」

冬獅郎は説明を始めた

大虚の中にさらに3つの階級が存在する

1つはギリアン。メノスの中で最下級。似たような見た目をしてる人間に例えるなら雑兵に近い。

2つは中級大虚^{アジュウカス}、ギリアンよりやや小さく数も少ない知能が高く戦闘力はギリアンの数倍。数の多いギリアンをまとめる存在だ。

そして3つ目は最上位大虚^{ヴァストローデ}。大きさは虚としては極めて小さく人間と同じ程度。数は極めて少なく、虚圏に数体しかないと言われている。

「そもそも、アジュウカスもヴァストローデも藍染が現れるまで見る事も聞くことすらごく希。数千人いる死神の中でも片手で数える程度しか会ったことがねえぐらいだ。ハッキリ言う。」

一護と目を合わせる冬獅郎

「この最上位大虚級の戦闘力は隊長格より上だ。もし現時点で藍染の下にこの最上位大虚級が10人以上いたら尸魂界は終わりだ。」

「で、でもよ。浦原先生はその最上位大虚になった？紫流を簡単に倒したし…この前だって…」

「いいか。あの人を宛にするな。あの方は始解すらせずにアジュウカスもヴァストローデ級も地に伏せて来た。隊長格でも敵うやつはいねえ。だが…。あの方は少しキナクせえんだよ」

そこで乱菊が口を挟んだ

「隊長！だから気のせいですって！あの人はそんな人じゃありませんって何度言ったら……」

「分かっている。ただの俺の勘だ。実際尸魂界に数え切れねえほどの功績を上げてる……ただ……」

その鋭い目に一護は息を飲む

「まるで尸魂界が、あの人に飲み込まれていくような……。藍染より恐ろしい何かを感じるんだよ」

「へブシツ……なんだ、噂か？」

「女性絡みでしょうね」

「殺すぞ喜助」

維助は喜助から渡されたテッシュユで鼻をかむ。

「にしても、紫流は元氣だねえ。帰った途端に虚退治に町を駆け回るとは」
「強くなりたいたいんでしょうよ」

相性が悪いとはいえ。コテンパンにやられたのが悔しかったんだろな、つと考える

る。

すると部屋から

「維助く!!はやく氷菓子もってこんか!!」

「はいはい、お姫様」

維助がアイスを手渡すと食べながら新聞を読む夜一

「今日何個目だよ。太つても知らねえぞ」

「あ、腹壊すつて事は心配しないんスね」

「この人がアイスなんかで腹壊すわけねえだろ」

という謎の信用。

「心配いらん!脂肪は全て胸にいくからの」

「胸…」

つと呟く喜助の耳を引っ張る維助

「てめえどこ見てやがる」

「痛い!耳飾り引っ張らないでください!!不可抗力ツス!」

「俺の部屋は無理だから!!何人いると思つてんだ」

「わーつてるよ、俺は先生の所にあたってみる。あの人の弟はてめえを鍛えたんだろ?

あの人の弟には一度会って見ておきてえんだ」

「なあ、浦原先生……維助さんは霊刀つーやつで尸魂界側に責められなかったのかよ」

「あ？霊刀……ああ、あれか」

つと恋次。見たところあまりよく分かってないようだが、そこで冬獅郎が口を出した
「尸魂界側は霊刀の件について浦原隊長を罪に問うことは無い。そういう法律があんだ
よ」

「へえ……法律。」

「言つたろ。あの人にのまれてるような気がするつてな」

その一言にどれだけの意味が含まれているかは分からない。

ルンルンで歩く乱菊の後ろを歩く冬獅郎

「（最上位大虚一体の討伐。だがあの人ならもう二体を逃がすようなヘマはしないはず。しかも一体は霊刀を体内に秘めた最上位大虚だと報告を受けた。わざわざそいつだけを殺した……深く考えすぎか偶然という可能性があるが……煮え切らない）」

その夜

「兄サン。」

「ああ、来たな」

ガチャガチャと機械をいじる維助。

地下専用維助部屋。工具や金属片やネジや釘、ボルトなんかも転がっている。知らない人から見ればガラクタの山。

ゴーグルをつけて金属を火花を散らしながら溶接している維助に声をかけた喜助
「行かないんすか？どうやらこちらを探ってるようっすけど」

「そうだな、だが俺目当てじゃないだろ。霊圧を感じ取れないはずだし。」

車の骨組みのような物の下に入り込んで作業を始める維助。

「行かないんすか。霊圧の衝突…戦ってるようっすけど」

天井を見上げる喜助。

破面。想像以上に来るのが早いし数も多い

「そーね。まあ大丈夫だろ。俺がいちいち首突っ込むようなもんじゃないし。」

「おや、珍しい。強いものに戦いを挑みまくってるような兄サンが」

呆れたように下から顔を出す維助。

「俺はそんな更木みたいなことしねえって…。俺をなんだと思ってるんだ。それに…前回の黒髪の破面みたいな強いやつならまだしも。今回は…ねえ。霊刀の反応もなし、実験体送り込んできたわけじゃないらしいし興味無いね」

「あの、本来は最上位大虚つてだけで強いはずなんすけど…」

「俺はいいや。気が乗らない。もしなんか言われたら空間凍結で忙しかったですとか言つとくわ。喜助も行く気ないんだろ？」

「まあ…首突つ込む事じゃないツスからねえ」

「一緒じゃねーか」

「いやいや、ボクはもう護廷十三隊じゃないですし。兄サンとは訳が違う。兄サンには戦う理由があればボクにはないツスよ」

「それに恋次や冬獅郎達がどれだけ成長してるか見たいしな」

また天井を見上げる喜助。

「限定解除もされてないようですし…きついんじゃないツスカ？」

げんていれいん
限定霊印

死神の中でも特に強大な霊力を有する護廷十三隊の隊長と副隊長が現世に来る際、現世の霊なるものに不要な影響を及ぼさぬよう体の一部にこの印を打つ。

死神の戦闘技術は基本的に自らの霊力を源とするものであり、更に霊力は霊体の運動能力と密接に関係しているため、結果として戦闘能力も大幅に削減される事となる。

「まあ…兄サンは運動能力が少し低下した程度でも倒したんすけど…本当に印押されてるんすかねえ」

「今回来たほとんどの最上位大虚は、弱い。そもそもあいつら最上位大虚でもなければ中級大虚ですらない。体は大人、中身は子供。力はあるも能力がない。そんなやつのために俺がなんで出向かないといけないんだか…給料増えるわけじゃないし。ボーナスよこせってんだ」

維助が空中に手を添えるとキーボードがバーチャルのように空中に出てくる。それを横にスライドさせれば、破面と戦っている死神の姿が映し出された。

「あーあ。皆怪我しちゃって…」

「無傷の方がおかしいんすよ…あーあ。布団用意するように言わなきゃ」

モニターを眺める喜助。

「あつ、限定霊印が解除されましたね」

「…そうね」霊圧が上がったのを感じる。

「まあ、なら大丈夫だろうさ」

しばらくしてモニターをみた喜助が目を見開いた

「雨…!!」

直ぐに部屋を飛び出していく喜助を見てモニターに目を移し映像を少し巻き戻す維

助

そこには雨が破面に攻撃を受けているシーンが映し出されていた

「あいつもここ100年で大切なやつらが出来たんだなあ」

朝つばらからスマホがうるさく響き、スマホを手取る

「はぁーい、なんですか？今日はどちらも非番の浦原維助です。またなんの用？モニターは夜そっちに送ったろ」

通話先は日番谷冬獅郎だった。

「『なぜ参戦しなかったんですか浦原隊長。今日はこっちにいましたよね。モニターはうちの松本が受け取りましたよ』」

つとスマホから日番谷冬獅郎の不機嫌そうな声が聞こえた。

「いやあ、気づいてただけど、ほら空間凍結に忙しくて。あんたらがバンバン霊圧ぶっぱなして戦うんだ。他の魂魄に影響出ないようにするのも仕事だからさあ…それに信じてたんだよ。俺が手を出さなくても倒せるって」

スピーカーモードにして作業を始める維助。

「『それから、今日総隊長と話しました。四十六室の地下議事堂か、大霊書回廊の捜索。中身は見れなかったらしいが恐らく二番隊…あんたの開発資料に、崩玉に付随する

資料。そして——王鍵おうけんの創成法の資料に藍染の霊圧痕が見つかつた」

「王鍵ねえ……。つまりは藍染は王鍵を使って王を殺そうつて？」

「話が早くて助かります。王鍵の創成に必要なのは十万の魂魄と半径一霊里に及ぶ重霊地」

「つまり……、空座町。」

「藍染の持つている崩玉の覚醒は四ヶ月はかかると言われた。そうして、総隊長からの命は決戦は冬。各々冬に向けて戦いの準備をせよとのこと。そうして浦原喜助にも総隊長から命が下つた」

「うわ、喜助面倒くさがりぞ」

「だからですよ、あんたが説得してください。弟でしよ」

「分かつた分かつた。言うだけ言つとく。」

「それから総隊長があんたの開発資料の閲覧許可を求めてたぞ。」

「ああ、大霊書回廊の」

「尸魂界全ての事象・情報が強制集積される場所、つまり維助の開発の歴史も詰まってる。」

「『大霊書回廊、浦原維助の情報には鍵がかかつていた。鍵をかけたんでしよう？ 藍染が何を調べたか見たいそうなので閲覧許可をと』」

「俺が調べるからいいよ。許可はしないって言つといて」

“ 『また、第二の藍染が現れるかもしれないからですか？』 ”

「そうね、いくら隊長格でも総隊長でも、見せられないよ」

“ 『……でもおかしいんですよ、大霊書回廊は四十六室の管理下。藍染が消えた後に付けたとしても、四十六室は全滅してるから鍵はつけられないはず。もしかして——」

それより前に鍵をつけてたんじゃないですか。』 ”

「へえ……」

ニヤつとわらつた維助が機械をいじつてた手を止めた

“ 『藍染にわざと……開発資料を見せていた——訳じゃないですよね？』 ”

「そんな訳ないじゃん。確かに鍵自体は昔からかけてたよ。でもあの藍染だよ？ 鍵をくぐり抜けて閲覧えつらんすることなんて可能だろ。現に誰にも気付かれずに大霊書回廊に侵入してたわけだし。だから俺が許可したわけじゃない」

“ 『……そうですか』 ”

「それに、俺の開発権限の法律には開発内容の独占も含まれてる。だから総隊長は俺に命令という形じゃなくお願いという形を取った。命令しても俺にはそれに従う義務がないからだ。」

“ 『……こうなると読んでた訳じゃないですよね』 ”

「まっさかあ！俺はそこまで頭良くないよ」

“ 『どうだか…』 ”

その後通話は切れた。

「あーあ。惣右介が俺の開発資料みたのは自分で言ってたから知ってたけど。見られた後につけたんだよなあ、まあ説明したらしたでめんどくさいし。謎の方法で鍵をくぐりぬけたってことにしとくか」

藍染に全てを押し付けることに決めた維助だった。

「んで……なにやってるんスカ兄サン」

浦原商店と書かれたエプロンをつけて可愛いバンダナを頭に着けた維助が台所にたっていた。

「なにつて……料理」

「兄サンが……?？」

「何その心底ありえないような顔」

グイツとそのほっぺを引っ張る維助。喜助はイタタタ!!!と涙目になっていた。

「なんでまた急に?？」

頬を離された喜助が頬に手を当てながら首を傾げる

「いや、機械化していいものとしてはダメなものについてちよつと悩んで」
卵を割つて溶く維助。

「機械化していいものと……ダメなもの？例えば？」

「手作業のもの。目で壊れてるか壊れてないかを判別してる物も機械で認識して弾く事もできるし。ごみ捨て掃除洗濯炊事ですらロボットがやってくれる。芸術ですらロボットで作れるけれど、それはどうなんだろうって思つて、意味があるのか。心つて奴を探してる。機械で作つた料理と手で作つた料理。効率てきには機械で作つた方が早い。けれどよく言うだろう？真心がこもつた料理だと。愛情つて物も機械に作れるのかつて。それが分かればロボットに感情と心を……つて聞いている？」

ポカーンつと口を開けた喜助に維助が目の前で手を振ると、ハツとした喜助がプツと吹き出した

「何を急にと思つたんすけど……やつぱり機械関係でしたか。」

「なんだよ……みんなで食べたら美味しいとか。心が籠つてるつてのを科学的に解明できないかな……つて」

「映画とかでも言うだろ？人形や機械に心は作れるのかつて。心が籠つてるつてのは何となく分かるんだよ？なんとなく。ほらポロポロになつてるけど頑張つて作つたんだろ？な——つて思うようなマフラーとか、ああ、心籠つてるなあ——つて。」

まあ機械に心を入れるかどうかは後にして、とりあえず機械化するものではないものを分けようかと……先に言つとくが！俺に心がないとか厨二心撥るような事じゃねえからな？」

つと前置きする維助

「似合わないツスねえ」

「お前は言葉足りないんだよ。話突然変えんなよ。この姿がか？」

喜助に振り向いた維助が首を傾げる

「兄サン家事やんないじゃないツスか。台所に立つてるのが似合わないって事ツス。今までのご飯も二番隊が作つてたでしようし……作れるんスか？」

「俺の器用さをなめんなよ。作れるっの。多分……」

「んで……何でまな板壊してるんスか？」

そこには玉ねぎと一緒にまな板を切り刻んでいた維助が。

「いやあ……包丁の切れ味が良くて」

「それ百均なんスけど。玉ねぎ切るのすら力入れないと無理なんスけど」

「百均かよ、どこでケチつてんだ」

「まな板は2万円ツス」

「たつつか!!後で弁償しまーす」

つと言いながら片付ける。維助

「卵溶くのですらめんどい。泡立て器じゃだめか？」

「泡立ててどうすんすか……」

なんだかんだちやんとオムライスができ上がる。

「ふわふわオムライスのかーんせい。昼飯なこれ。」

お皿に盛られたオムライス、人数分がようやく完成した。

「雨達に持つてきますね」

つとお膳に載せたオムライスを運んだ喜助がしばらくして戻ってきた。

キッチンに椅子を持つてくる維助と喜助

「いただきます」

「うーん、まあまあだな。」

「そうツスカ？美味しいですけど」

「どう？真心ある？」

「うーん……兄サンが頑張つて作つてくれたものですし。美味しいですよ」

「わっかんねえ……」

しばらくしてお膳と空の皿を持つてきた雨とジン太

「あの、維助さん……ご馳走様でした」

「お粗末さま」

「変なの入ってると思っただけど入ってなかったな」

つと言ったジン太に

「（こらこらジン太）」

つと軽く注意する喜助。

「まじで俺の事なんだと思ってるんだ」つと突っ込む

「あの……本当に……美味しかったです。また……作ってください」

そう言って去っていった雨

その言葉になんとも言えないものが心にジワつと広がる

雨とジン太が出ていった方向を見ながら呟く維助

「なんか……今の。俺が機械作ってそれを使った人の感想みたいなの……」

「本当そういう説明下手ツスねえ……」

ズズつと食後のお茶を飲む喜助

「機械化しようとしませんが、作ったものには心が籠もり。作った人にはそれが帰ってくる。機械化してもしなくてもどちらにもいい所があるんすよ」

「そうだなあ……。機械で作った料理を提供してお礼言われて。今の気持ちを、心の温かさを手に入れたらだろうか」

つと考えこんでいると……

「維助ー!!おかわり!!はよ作らんか!!」

つと夜一が空つぽの皿を持って台所の入口から顔を出した

「声でか。ええまた作るの?」

「なんじゃ、材料はあるじやろう?作れ!」

「ええ……仕方ないな。夜一さんも手伝って。喜助も」

「むう、仕方ないの。」

ブツブツ言いながらも冷蔵庫から卵を取り出す夜一を見て立ち上がる喜助。

「仕方ないツスねえくボクのも作ってくださいいな兄サン」

「珍し、喜助が飯をおかわりすんなんて。お前少食だろ」

「人並みって言ってもらっても?夜一サン基準にしないでくださいアイタア!なんで殴

んスカ!夜一サン!」

ゲンコツを受けた頭を涙目になりながら撫でる喜助。

「つたく……まあ……機械で作るより、手作業によるこういう工程も——いいもんだな」

「なんか言ったか維助?」

つとエプロン姿の夜一が首を傾げる

「なーんも!つて夜一さん卵握り潰して入れるのどうなんだよ」

「なんじゃどうせ潰すじゃろ」

「言い方!!それに殻入るだろ!!つてセロリ入れるな!!俺セロリだけは食べ物だと認識してねえから!!」

セロリを取り出した夜一に首を全力で横に振る維助

「何をネジを食してそうなお主が……そういえば嫌いじゃったな」

「だからお前らの中で俺なんだと思つてんだよ。つておいこら喜助!!てめえ油入れすぎだろ!!揚げ物する気か!」

タブタブつと油をフライパンいっぱいに入れる喜助の手を止めた

「ええ?こんぐらい入れないと焦げないツスカ?」

「大丈夫だわ!!てめえは限度つてもんを知れ!お前そういえば料理作ったことねえな!使用人がやつてたもんな!ここ100年も鉄斎に任せてたんだろ」

「あはよくお分かりで!」

扇子を開いた喜助が笑つたのを見てため息を吐く。

「喜助の欠点は一人で生きていけないことです」

「あつ、なんスカそれ!じゃあ兄サンの欠点は……欠点……壊滅的音痴」

「考えて出たのそれかよ。確かに音痴だけど……そういうお前は琴弾けねえだろ」

「三味線は弾けます〜!琴はいいんす!!」

「なんだそれ、あつ芸事といえは夜一さんは舞まい苦手だよな！」

「夜一サンに舞いは似合わないツスよく！盆踊りがいいところツス」

つと可笑しそうに扇子を扇ぐ喜助

「あつ、それはそう盆踊りは似合うな！」

「あはは！ゴフツ！」

その瞬間に喜助と維助の顔面に夜一の拳がめり込んだ

「顔が痛いツ!!」

「ふんっ！」

2人が顔を押えて蹲って夜一は頬をふくらませてそっぽを向いていた。

入口で隠れながらその様子を見ているジン太と雨

「なんか楽しそうだねジン太君」

「けっ。店長達はいつもあんな感じだろ」

修行の話

ざつとあらずじ

最上位大虚レベルの到来、3体のうち1体は霊刀の実験体だった、浦原維助は汚い花火をぶちまけて一体の討伐に成功する。

冬獅郎ら隊長各や副隊長各、そして十一番隊も現世に派遣され冬の決戦へむけてそれが準備を始めていた。

「なんで俺が!?!」

隣で大声を出すのは阿散井恋次。
声でか。

俺は呑気にどら焼きを食べる。

いやあ甘い物はいいよね。

なんで恋次がこう大きな声出してるかと言うと、

喜助に修行を頼んできた茶渡。その修行相手に居候してる恋次をあてがおうとしてるのだ。

「あんたに頼みにきてんならあんたがやればいいだろ?」

「いやあ、茶渡サンをあれ以上鍛えるには卍解の力が必要なんス。」

「だつたら尚更あんたがやりやいいじゃねえか! あんただつて卍解できんだろ」

するとニコ一つと笑つた喜助

「やだなあ! 一介いっかいのハンサムエロ店主のアタシが卍解なんてできるわけないでしょうに!」

「あんた今回の事の顛末しんねえのか!? あんたが昔十二番隊隊長だつたことも、崩玉作つた張本人だつーのも全部とつくの昔にバレてんだよ!!」

だから声デケエって…

知つてますよ〜と軽く返した喜助にキレル恋次を腕で制す

「ダメなんスよ、アタシじゃ。アタシの卍解は人に力を貸すとか、鍛えるとかそういうのには向いていない」

すると、バツとこつちを見る恋次

「じゃあ先生!! 先生なら良いじゃねえか! 卍解使えんだろ!」

「ええ、なんでそこで俺に振るんだよ…全くの無関係」

つと、残りのどら焼きを口に放り込むと、恋次が首を傾げた

「そういや、先生の始解も正解も見た事も聞いた事もねえな…隊長になつてるつーことは使えないわけないっすよね」

「使えるよーん。でも俺は剣一本でやってくつもり」

「それはなんか理由が…?」

「だあああつて!!その方がかつこいいじゃん!」

「はあ?!?そんな理由で使わなかつたんですか!」

つと、バンつと机を叩いた恋次の顔をおしのける、近い近い。

「そうだよ、それでやってけてるんだからいいだろ」

「うっ…言い返せねえ…じゃなくて!鍛えるなら先生の専売特許なんだろ!?!ほら、俺にだつて殴る蹴るの暴力振舞つてたじゃないっすか!」

「言い方!!でも喜助が正解の力が必要つて言つたんだろ?俺茶渡と戦つたことないから知らないし、喜助がそう言つたならそれに従うべき。喜助が俺じゃなく恋次に頼んだんだ。恋次の方が適任なんだろ?」

「うっ…」

すると、バツと、扇子を開く音が聞こえた

「じゃあ、阿散井サン…こうしましょう!三ヶ月うちで雑用をしてくれたらどんな質問

にもお答えしましよ！訊きたいことあるんスよね」

「修行の相手は雑用じやねえだろ!？」

「雑用ツスよ〜！手間も命もかけるものは同じでしょう?…それとも訊きたい事聞くのやめますか？」

「つ〜!!わーった!やっつてやる!!」

つと意気込んだ恋次。

ききたいことって何なのかねえ…。

早速修行部屋に降りてった恋次を横目に次のどら焼きを開ける

「そういえば一護も石田も学校休んでたな昨日」

「あれツスよ兄サン。黒崎サンは例の軍勢の所へ。石田さんは…まあ涅サンとの戦いで失った滅却師の力を取り戻してる所ツス。色々大変そうでしたよ」

その言い方や見に行っただな。

「ふうん…一護と平子さんついに動いたのね。斬魄刀と一体化した霊刀は虚の力を使うことを望んでいる。一護が虚化を習得したらこりや凄いや物が出来上がりそうだけど」

「そうツスねえ…滅却師に似た霊刀、死神の力、虚化。今までそんな事例はありませんから、ボクも何かどうなるのか楽しみツスよ」

隣に座った喜助がどら焼きに手を伸ばし、袋をあける

「でもまあ……最近増えてきましたね。実験体」

「そうねえ……」

実験体。藍染が霊刀の完成のために虚を使い実験をしている。

一度埋め込んだ霊刀は取り出すことが出来ないので使い捨てである、完成までは程遠いが段々と形を成してきていて、この前襲撃してきたような最上位大虚に似た軍団を度々俺に送り込んでくるようになった。

わざわざ俺に送り込むのは宣戦布告か、それとも別の何かか。ただの処分の為に送り込んだのか、よく分からないけど。

だが、第一実験体の大太刀から、汚い霊刀火花をぶちまけた太刀の虚。段々と普通の斬魄刀のように小さく硬く丈夫になっている。

ガチの実験体過ぎて、戦ってる途中に使用者本人の霊力を吸い取られて勝手に死んでくやつとかもいた。

あいつもあいつで俺対策にこうじてるわけだ

「黒崎真咲、彼女には見張りを付けてるんすよね」

「そうね。一心にも言っているし二番隊刑軍の見張りを付けてる」

黒崎真咲。俺の霊刀による魂魄結合に成功した一号。

惣右介が狙ってくる可能性を考え護衛をつけていた。まあ総隊長からの命だけど

「紫流は坊ちゃんの中で修行してるんだっけか」

「そうツスねえ……商店も静かになりました」

紫流はもう暴走することは無いので大丈夫だと俺が上に進言し、無事正式に隊復帰。

尸魂界に帰還して行つた。

「みーんな冬の決戦に向けて頑張つてんな。」

一ヶ月後、勉強部屋から飛び出していく織姫ちゃんをみた。

「なんだあれ。」

「喜助が戦線外通告を言い渡したんじゃ」

つと、勉強部屋から上がってきた夜一さんがそう言った。

「ふうん、まあ喜助がそう言うならなんか訳あんだろうな」

「相変わらず変な信用じやの」

「そうか？喜助は無意味なこととはしないからなにか訳があるんだろ。聞いてもわかんないし興味無いからいいや」

喜助は天才だ。

興味あることはとことんやり尽くし、幼い頃の家庭教師にすら分からないことは書斎

や図書館に閉じこもり調べ尽くす。

そして物質、菌などその時代不確定要素の塊だった物を己自身で確立させ、1人で薬品を作り上げたり霊子を操り新たなものを生成したりする、類まれなる才能と頭脳。

マジでよく分からない計算羅列でびっしり埋まったA4用紙見た時は鳥肌立ったね。

俺は前世のある程度の知識があるからできる物も喜助は己の考えと好奇心と行動力でそれをこなした。

そしてあの日俺が剣の天才と言われるようになった事件、中級大虚の出没。その日から喜助は備えを重要視するようになり、あらゆる可能性を考えあらゆる対処法を備える。

織姫ちゃんに戦線外通告を言い渡したということは単純に女だから心配だからとかじゃない。つてかそんなやつじゃないしな喜助は（失礼）

つまり戦場に出られちゃ困る…つまりは能力かと簡単に予想がついた。

回復ポジは前に出るべきじゃないし、もし惣右介がねらってる…狙っている…？

その可能性に備えたという事かも…？

「まつ、いいか。考えてもわかんないし」

数体の成体の反応に伝令神機が鳴り響く

出現の合図だ

「およ……早いな」

「おやまあ……大量ツスね」

恋次と茶渡の修行を見守っていた俺らはいっせいに上を見上げる

しかも、ただの破面に紛れて実験体と似た気配も感じる。

「ダメだつてんだろ!!てめえはここで休んでろ!!」

そう大きな声が聞こえ視線を移すと

「し、しかし……!」

ボロボロで立つこともままならない茶渡とそれを押え付ける恋次

それに近寄った俺は恋次の肩を軽く押すと――

「いつてええええ!!」

つと肩を押えてバタバタと地面をころげ回る

「ほら、恋次も怪我してるじゃん。お前もダメだよ」

「先生!!いや今の怪我してるところさらに押されてあんたのせいで悪化したんすけど

!?!」

「声でっか」

恋次は先程の修行で茶渡の攻撃を肩にまともにくらいそこからそれを庇うようにして戦っているし脂汗も流していたのを見逃さなかった

「後で鉄齋にでも直してもらえ。にしても」

俺が尸魂界に行っている時に攻めてくると思ったが、違うようだ。

何か——ひっかかる

「とりあえず俺と喜助で行くお前らはここで待機。さあ喜助——久方ぶりに組もうか」
「仕方ないツスねえ」

喜助は天才という話をしたと思う。

あらゆる想定に備えて——ってね。

でも喜助は俺に似た。

俺があげた周りの霊子を吸い取り放つ霊銃を懐にしまったのを見た。

今の喜助の顔、俺は長年見てるからわかる。新しいものを早く試してみたいという顔をしている。

己の発明品や新しい武器をしかも出来損ないとはいえ最上位大虚級に相当する敵との戦闘で使って試そうとは——さすが俺の弟。俺の方がよく変に見られることも多

いが、お前もお前でやばいな喜助。

「なんだそれは……！」

虚閃の二十倍の速さの攻撃——虚弾だと自慢げに話すデブ成体。

だが喜助はやられた振りをして攻撃の癖を見切り相殺して見せた

「もう効かないツスよ。いやあ！相性悪いツスねえ？」

相殺できぬように今度は最大威力の虚閃を放つが喜助はそれを片手で止める

その片手に握られていたものは——

「これは靈銃。名前はダサイツスけど凄いい機械でしてねえ……靈子で構成された攻撃はほぼ確実に吸収でき——弾丸以上の速さで放出する」

喜助は銃を構え銃口からは吸い取った靈子が固まり膨らんでいく

「虚閃——お返ししますよ」

ものすごい音と共に煙に包まれ落下していく成体を見ながら口笛を吹く

ただ靈銃で吸い取ったとしても全て吸い取れるわけじゃないしタイミングも合わせないといけない。

しかも普通の銃と似てしつかり構えないと肩が外れたりする。いつも同じ反動では

なく吸い取った量によつて反動も変わるが喜助は肩を外すこともなく平然と反動を殺した。

ミスなくこなす喜助、流石かつこいいねえ

「さて――俺もやるか」

俺は傍観していたが実は二十体程の成体、しかも霊刀を持ったやつらに囲まれていた。

ただ出来損ないだけどこの数は――

「俺は浦原維助――弟に負けたくないんでね。いい見世物になつてもらおうじゃん。よろしく」

藍染の笑い の話

「なんでせつかく作った戦力あつちに送っちゃんです？ 藍染隊長」

ウエコムンド
虚圏

宙に映し出された現世の映像を足を組み頬杖をつきながら眺める藍染惣右介

霊刀の実験体を作つては現世に送っている事に疑問を持ったギンがそう藍染に問う。

実験体としても十分な戦力、3席4席程度、人数が揃えば副隊長格や中には隊長格にも匹敵する戦闘力がある。

それをわざわざゴミを捨てるかのように現世に送っていることが不思議で仕方なかった。

「ギン、君の目から浦原維助はどう見える」

「はい？ ああ……」

いきなり何の話かと思つたが映像には浦原維助が映し出されており、霊刀の実験体と戦つていた

「まあ、昔からえらい強いと思つとりますよ。 剣術も——まあ発明家にしてはなんや脳

筋みたいなの戦い方しとりますけど」

「ふっ……。頭がいいと普通は現状に満足し保持し続ける、だが彼は違う。ここ1000年——いやそれから前から彼は進化し続けた。剣術の天才では終わらず伝令神機では終わらず——彼は歴史を作り続けている」

確かに浦原維助の発明は止まることをしらない。

伝令神機からコピー機、家電や体を蝕む病を止める機械。

改造魂魄を生成する機械。記憶置換装置からエレベーターやエスカレーター。現世にそういったものが発明される前から彼が一人で開発したもの。

技術開発局がつくる機械は現世の道具や機械を真似て作っただけの粗悪品。とてもじゃないが不便で使えない。

だが彼が作るものは違う。最先端も最先端。伝令神機なんて現世が追いつけるのか分からないほど未来をいく機械だ

チラリと藍染の顔を見たギン、藍染の顔はとても面白いものを見ているような顔。

そう——ワクワク……しているような表情

「でもあの人剣術以外で藍染隊長に勝てるんです？ほら、鬼道も使えないし。霊圧の制御装置——もの使わないと自分の霊力操作すらままならないじゃないですか」

ギンの言葉にふつ——と零すように笑う

「彼が本当に靈力操作が苦手だとしても？ 鬼道を使わないのは彼なりのこだわりさ。彼はきつと鬼道を使える、知識も技術もある、でなければ電気の靈子を作り出し操る事はどう理由つける」

そこではつとするギン

確かに尸魂界で電気という概念を作り出したのは彼だった。

現世とは違う構造で似て非なるものだが。

自分が小さい頃から現世よりも発達している瀨靈廷、流魂街とは全く違う世界で、電気や伝令神機を確実に遅延なく伝える電波の靈子も発明したのは彼だ。それを応用し現世のような家電なんかも普通にどこにでも生活に馴染んでいた。

そんな彼が靈力や靈子に無知で技術がない——？それはおかしな話

「こだわり、こだわりなあ」

こだわり——誰にでもあるこだわり。

一対一の戦闘を守るもの、手助けはしないと決めたもの

誇りを守る、ルールは絶対——等々あるが浦原維助は特にそのこだわりがつよいように見えた

「鬼道を使わないし始解も卍解もしない。まあ卍解を使わへん隊長もいてはりますけど

……藍染隊長は能力しってるんです？」

「さあ……どうだろうね」

曖昧な返事の藍染

本当に知らないのか知っているのかは分からないが。

答えるつもりはないようだ。

「(なんや、能力が知れば少しでも対策を練れる思ったんやけど)」

魂魄を削り取る機械。その詳細を知ったのは藍染が大霊書だいていしょくかいろう回廊に入った20年前。

霊刀の技術を盗み見した時47話より。チラリと彼の制作物の話を見た時だった。さすがに量が多すぎて全ては見れなかったが。たまたまみた記録がその魂魄を削り取る機械の資料。

あの日維助が渡したスプーン。21話と27話

あれは魂魄を削り取る機械。

ただのスプーンにみえてきちんとした機械。

乱菊に使用したあれは藍染に頼まれて維助が作ったもの。

藍染なら自慢げに、「私が彼に頼んで作らせたものだ」なんて言うのかと思えばそうじゃない。

藍染と維助は血判契約という取引した相手の正体をばらさないのと取引内容を話さないという契約により、藍染はいつも維助は「技術が、力がと話すのに機械のことをあまり話さないのはそういう訳らしい。」

ただ、当事者が話さなければいいわけで、その取引と資料を見た自分はあまり関係ないらしい。

機械の詳細を内緒にする訳じゃない。きつと恐らく悪いことをしようとしている商売の客を安心させ顧客を手に入れるためのただの道具。

その技術が藍染の気を引いたわけだが。

部屋を出て白く長い長い廊下を歩くギンがつぶやく

「でもそれだけや。例え頼まれたとしても――」

例え頼まれて作ったものだとしても、脅されて作ったとしても魂魄を削り取る機械を作った事実には変わらない

復讐相手には変わらないのだ――100年前から

「でも、そこまであの人にとっての理由はなんやろ」

藍染が維助にこだわる理由。

計算高く腹黒く、2手も3手も、王手すらも予想する藍染が維助にこだわるのは何故か、どうしてもギンには理解できなかつた。

『俺は友人だと思ってるよ』

数十年前そう言っていた浦原維助を思い出す

「まさか…藍染隊長もそうだななんて言わへんよな…？」

「君は本当に私を楽しませ飽きさせない」

1人になった部屋で映画を見るかのように眺め続ける藍染
数十もの霊刀の実験体を圧倒する維助。

霊刀の実験体は出来損ないの破面を使い能力を底上げ、しかも相手の霊力や己の霊力を奪い力にする。その刀は相性が良ければ隊長格をものぐ。

正直浦原維助とは相性が悪いだろう。

始解もせず鬼道も使わない彼は、霊圧硬化の霊力を吸い取り防御を崩したとしても彼には敵わない。圧倒的な力。

だが浦原維助に実験体を送ることをやめないのはきつと。彼の戦いを見たいという思いか、あるいは己の実験の成長を発明者に見せつけたいがためか、だがそれは藍染の心の内を見ないと分からないであろう

「ウジのように湧いてきやがる…」

二十かそこらだけかと思つたが黒腔からワラワラと湧いてくる

「我ながらめんどくさいものを作つたな…」

霊刀。霊子を吸い取る――。

霊子の集まりの霊力も例外じゃない。近寄れば俺の霊力で固めた霊圧硬化が剥ぎ取られる。

普通の刀ならまだしも、切れ味が良くなつた霊刀を皮膚で筋肉で受け止めるのは少し怖い、腕が飛ばされる可能性もある

まあ血濡れで戦うのもかっこいいかもしれないが無傷で制圧する方がかっこいいと俺が判断した。

すると――

「兄サン！ちよつと兄さーん」

つと喜助の呼ぶ大きな声に振り向くと

少し下の方で俺が吹き飛ばした霊刀の実験体、気絶した破面の首根つこを掴んでる喜

助が俺に向かって呼びかけていた

「なんだよ！俺！！今戦闘中！！」

ただでさえ防御力がほぼ0の俺vs多数で戦って集中してるって言うのになんだと言うんだ

「あんま暴れると町が壊れるんで！！ちよつと抑えてください」

どうやら破面を掴んだのは住宅地に飛んでったかららしい。

「建物まで気を使えって!?!この状況で!?!」

「いやあ、後処理考えたら今気をつけた方が楽ツスよ?」

なんて呑気な声が聞こえる

後片付けまで俺にやらせるつもりだったのか??

確かに年末死ぬほど大掃除するよりこまめに綺麗にしてた方が楽だけでも!

状況を考えろ喜助。俺には無理だ。

「隊長！加勢しなくていいんですか」

破面を凍らせた後、松本が冬獅郎に問う。

加勢とは少し上の方で戦っている浦原維助、二十体——いや、黒腔から出てくる破面。

どれも似たような刀を持っていてあれが報告にある霊刀。

死神の力を手に入れた虚、破面は斬魄刀のような刀を持ち更には霊刀と結合しさらなる力を手に入れている。

その人数をまるで雑魚を蹴散らすかのように戦っている

「いや、俺らが加勢したら邪魔になる。それより町の被害を抑えることに手足を動かせ。」

浦原維助に吹き飛ばされた破面が町にクレーターを作っている。

「ですが…あの人数はさすがに…！」

「あの刀は霊力、霊圧を吸い取る。鬼道も始解の能力も使えねえ——それなのに戦えるか?」

そう松本の方に振り返ると、確かに——つと呟く。

卍解をフルで使ってやつとの破面を数十体剣術と体術のみで戦うことが出来るなんて維助ぐらいなもの。

「ほうら! 日番谷サンも手伝ってくださいよ」

つと気絶した破面を放り投げる浦原喜助が声をかけた

兄があの状態だと言うのに町の方を気遣っている所で維助の信用と信頼が見える。

「浦原さん! あれいいんですか放置して!」

つと指さす松本

「あそこに混ざったら死にますよん。まあ行きたいのであれば止めませんけれど」

確かに上ではバチバチにやり合っていて混ざったら無傷では帰れないだろう。

「どうしてあの人達は私達に見向きもしないんですか？」

「藍染サンの指示でしょうね。普通の破面はアタシら相手。霊刀の破面は兄サンを牽制
——まあ普通逆の方が有効的な気がするんすけどねえ」

つと上を見上げる喜助

そう、確かに霊刀の破面を他の死神に向けた方がいいだろう

実質鬼道も始解も卍解も封じられるようなものなのだから。

喜助はつとそれに違和感を感じていた。

「まあ——いつこちらに牙を向いてくるかわからないんで警戒はしといてください」

俺が必死こいて戦ってるって言うのに後始末に取り掛かるとは薄情な奴らだ。

「まじで!!虫かよ!!」

文字通り四方八方から向かってくる切っ先。

飛び上がり身体を回転させ一人の頭を掴み集団にぶん投げる

ボーリングのように吹き飛んで地面に落下していく。

無傷のノルマがある以上これで街の被害を考えるとか無理がある

斬魄刀のようなものと霊刀が結合したものだから当然能力らしきものも飛んできて、風や炎なんか飛び交う。本当に厄介、霊刀の性能が上がっているらしくあのアマルゴ67話に登場68話で花火を散らした破面とか言うやつみたいにありつただけの霊力を込めても全てすいとってしまふ。

というか一本の霊刀に負担がかからぬように周りのやつも吸い取り始める。俺の霊力がほぼ尽きないと言つてもこれは有効打になり得ないだろう

「しゃーなし！喜助えー!!!」

下にいる喜助に聞こえるように叫ぶと呼ばれると思つていなかったのかギョツとした顔が見える

「お前の紅姫ちゃん貸せや！」

するとええ…つと心底嫌そうな声がかすかに聞こえてくる

「よそ見すんじゃねえ!!」

つとキレた破面が水平に刀を振るうのが横目で見え咄嗟に床の霊子を崩し体を反らせ避ける

あぶねえ——！前髪切れるところだった。

するとブウン!!と下から風を切る音が聞こえ咄嗟に左手を開け
飛んできたものを掴む

「ありがとう、喜助！」

始解した紅姫——喜助の斬魄刀を左手に握りしめる

「少しの間よろしく、紅姫ちゃん」

さすがに声は聞こえないが少しカタツと揺れた気がした——。

俺は破面の軍団に向き直る

「惣右介の命令だかなんだか知らんが。キリがないんでね早めに終わらせる。

改めて二番隊長、隠密機動総司令官、尸魂界一の剣術使いにして発明家。一刀も二
刀もお手の物——かつこよさとロマンを追い求める男だ、よおおお覚えて死んでけ」

「うし、刃こぼれなし」

俺は橋姫を鞘に収め、喜助の紅姫の刀身を見る

結果から言えば圧勝。やっぱ雑魚と集団は攻撃の打数増やさんと終わらんよな。

黒腔からはもうでてこなくて地面に転がった破面達。

殺しては無い、気絶はしてるけれど——。

死んでけつて言ったのにこれはどうかと思うか喜助に止められちゃったから仕方ない

俺は喜助の前に降り立ち紅姫ちゃんを差し出す

「はい。喜助あんがとさん」

「まったく——いきなり無茶言うんすから。」

「無茶はこつちのセリフだ。あの状況で町に被害出すなとか——」

そこで俺らはハツとする

反膜ネガシオンが現れ喜助が相手してボロボロに倒れているデカブツと俺が倒した奴らが包まれる

「しまった——」

そう開いた黒腔をみて呟く喜助

黒腔からはあのウルキオラと呼ばれた破面が俺らを見下ろしていた

「任務完了だ」

任務——？ 一体。

勉強部屋にて怪我をした奴らが治療されているのをぼーっとみている俺。

ギヤーギヤーつと一角が騒いでいた。うわ、いったそ

「浦原隊長。」

「なあに冬獅郎」

そう俺の後ろから呼びかける冬獅郎

「尸魂界との連絡がつかない、電波障害か？」

「さてねえ——あちちに行かないとわかんないかな。まあ現世での連絡は問題ないから。尸魂界と現世との間で何かしら起きたんだろう。そういうのに弱いからな。」

亜空間を通して通信しているからかたまに不調がでる。それでも改善された方でここ数年電波障害なんてものは起きていなかっただが——

「技術開発局に一任してるからな……とりあえずモニターあつたら。それで無理やり繋げてみるわ」

その後——電波障害を取り除き通信が整って浮竹隊長が話す内容——

「へえ、織姫ちゃんが——」

そこで全て繋がる。

喜助が織姫ちゃんを戦場から遠ざけようとした理由も

破面側に拉致、殺害されたか。

だが一護は織姫ちゃんの霊圧が手首に残っているという、その襲撃の後に

つまり

自分で着いて行つたと

破面側の襲撃準備が整つてるといふことで冬獅郎達は強制帰還、尸魂界の守護につく。

白哉坊ちゃんと更木が穿界門からルキア達を連れ戻した。

モニターに向き直る俺

「浦原維助、そなたも尸魂界に帰還せよ。元々現世に派遣したのは朽木紫流の監視のため。その任も先日解いたはずじゃ」

「そーつすね。んじゃ仕方ない、一旦戻りましょうか、まあモニターとか設備とか色々やる事あるから遅れて帰ります」

説明を端折つたが総隊長は領きプツリとモニターの画面が切れる。

「あの霊刀の破面は俺が尸魂界に向かわないようにするための匣か」

前は俺が尸魂界にいた時に襲撃にあつたから、次も尸魂界に行つてる時に起きるのかと思つていたが、これで引つかかかっていたものが取れる。

俺が喜助の店で借りてる部屋で荷物を片してると

「兄サン。ちゃんと訳を話してたほうが良かったツスね」

つと襖を開けた喜助

「お前の事だから不確定要素だと思つて言わなかつたんだろ。推測に過ぎないからつて。」

「はは、相変わらずで」

「何年お前の兄してると思つてんだよ」

「じゃあボクのしようとしてること——わかつてます?」

俺は荷物を片してる手を止め喜助に向き直る

「さてねえ——。俺はお前の頭にはついていけないからな。まあ止めないよ」

そういえばふつと笑つて帽子を下げる喜助

「いいんスカ。兄サンは規定側。あつちから待機せよ、手を出すなと命令が出た以上従わないといけない」

「そうだな、待機と尸魂界の守護をする命令は出たけど——勝手に動く奴らを止めろという命令はされてない」

「やっぱり兄サンは兄サンつすね」

きつと一護は動く。

それを喜助は手助けするつもりだ。

尸魂界に帰って1日も経たず、一護が虚圏に乗り込んだことが知れ渡る

○虚圏

コツコツと音を鳴らせ階段を降りる藍染

「侵入者は3名」

長い長いテーブルには十刃が座りその机からは石田、黒崎、茶渡が走る姿が映し出されている。

「敵襲だなんて言うから……ガキじゃないか」

「ちっ」

残念そうに頬杖をつくもの、見知った顔をみて舌打ちをするもの。

「侮りは禁物さ、彼らは旅禍と呼ばれたった四人で尸魂界に乗り込み護廷十三隊に戦いを挑んだ人間だ、侮りは不要だが。各自自宮にもどり平時と同じ行動してくれ」

するとふと一人の十刃が呟く

「あの男と戦えると思っただけだなあ」

それに反応する各々。

映像は切り替わり、数日前に数十体もの霊刀の破面を無傷で倒した維助が映し出されていた

「大丈夫さ——私の予想が正しければ彼はきつと来る」
目を細めニヤリと笑った藍染。

これだから
——
の話

「いやいや、本当に知らないですって自分。」

怪しんだ様子でギロつと睨まれる俺。

現在隊首会の最中。議題は黒崎一護一行が虚圏に乗り込んだ件について。

そしてそのついでに俺が倒した霊刀破面の話と、その後に通信……つまり電波障害が起きて井上織姫が行方不明になった時の話について。

遠回しに電波障害はお前がやったのでは？って総隊長に疑われてるのだ。

真ん中に立って必死に弁解している俺……ってことで冒頭に戻る

「本当ですって。ずっと戦ってたんですよ？最上位大虚級に霊圧高い化け物共を数十体！感謝されても疑われるなんて心外ツスね〜」

なんて言えば

「ふん、君の日頃の行いのせいじゃないかね」

つと呟く涅

「おいおい、俺が何したって？あの霊刀の化け物共倒せんのかよお前。」

「その霊刀の破面が現れたのもそもそも貴様のセイだろう？おかしなことを言うネ君は」

つと指をさされる

ド正論すぎて何も言えん。

「はあ_____」

つと深い深いため息を吐いた総隊長。

「まあ、それよりも。今は黒崎一行をどうするかじゃないですか？」

するとそこへ碎蜂が現れた

「隊首会の最中失礼します。」

「なんだ？」

俺が振り向けば顔を上げた碎蜂。

「六番隊副隊長、阿散井恋次。六番隊朽木紫流、及び十三番隊朽木ルキア。三名の霊圧が

隊舎から消えた模様です。我が隠密機動警邏隊が瀟霊廷全域に捜査範囲を広げ

そして伝令神機の追尾情報から…三名は虚圏に向かった模様」

「あヤツらめ_____」

総隊長の低い声が響く。

俺が手を上げれば下がる碎蜂。

「自体は急を要しますよ総隊長。霊刀の破面はまだ虚圏にいますと思われ。一護や紫流はまだしも。滅却師や人間。そしてルキアと恋次には荷が重いでしょう」

「ならばどうする」つと、片目を開けた総隊長。

「俺に行かせてください」

「ならぬ」

すぐさま提案は却下され

「わかっておるだろう。【罨】だと」

そう、総隊長の声が響く——そう。これは確かに罨だ

「けれど、虚圏に向かったのは十分な戦力。無駄死にさせる訳には行かない。喜助には連絡して黒腔を安定化させましたし。十二番隊の仕事も終わっていると連絡が来ています。きつと惣右介は隊長格が虚圏に乗り込んでくることを読み——その隙に——つて感じでしょう?」

「分かっておるなら言うでない。浦原維助。お主一人でも藍染惣右介と渡り合える十分な戦力。それを罨とわかっている場所に放り出すことが出来ようか」

俺は息を吸い、総隊長の目をまっすぐ見た

「俺はきつと——この隊首会にいるメンバーの中でいちばん強い」

そう言えば横目で京楽隊長が笠を下げて笑うのが見える。

「俺は惣右介に勝てる切り札になりうるだろう。けれどそれは一護達も一緒。きつと恐らくこの後に大きな戦いが現世で起きる。ならばやることはひとつ。黒崎一護一行を連れ戻し、戦いが始まる前に戻る——！例え始まってしまったとしても。絶対に間に合わせます。俺はスピードにもパワーゴリ押しも得意なんすよ。ほら総隊長もご存知でしょ？」

そう笑えば。ふむ——頷く総隊長

「お主は言い出したら聞かん。昔からの……ここで止めても無理に行くであろう、ならば仕方あるまい……」

つとようやく許可がでた。

「碎蜂、現世で俺が行くまでの隊長代理を任せる。部下に指示を出してやれ。」

「はい——」っと少し暗い表情の碎蜂の頭に手を置く

「大丈夫だ、俺が現世に行ってる間碎蜂は隊長代理として上手くやっていると報告を受けている。お前なら大丈夫だ、俺が一番信用を置いている部下だからな」

つと言えば

「はい。この碎蜂——必ずや維助様の期待に応えます」

相変わらずお固いことで。

真面目な碎蜂だから俺の隊はやって行けるのかもしれないな

そうして時間との勝負なため、数人の隊長格を連れ現世に。

「よお、数日ぶり喜助」

「待つてましたよん。もう入口は開いてあります——んでそれは？」

俺がダンボールサイズの箱を開けて出てきたのは小さな、と言ってもラジコンサイズの車

「これはあれだよ。お前も乗ったろ——？装甲車」

そういえばびっくりした様子の喜助

「そ、それがつすか!？」

「おう！装甲車の何が悪いって持ち運べない所だろ？だから、靈力を込める事で元の形

に戻るように設計したんだ。まあ例えるならばビニールの浮き輪?」

「はは…」つと乾いた笑いをする喜助と、そっぽを向く着いてきた涅。

なんでも虚圏が気になるよう、いや虚圏よりも破面のほうかな

「んで白哉坊ちゃんまで? ああ…紫流とルキアか」

「緋真に怒られた」

そう表情は変わらさずも纏う雰囲気は少し悲しそうな白哉坊ちゃん。

緋真ちゃんはいいお母さんしてるな。

そして「戦いてえ」と名乗り出た更木と卯ノ花隊長及び副隊長。

「さ、とりあえず虚圏に行くぞ!! 喜助、後は任せたからな」

「はい。ご武運を」

そう帽子を下げた喜助を横目に俺らは穴に飛び込んだ

これは少し前に遡る

カポン——つと桶が地面に滑り落ちる音が響く

「はあ——久しぶりの大浴場」

腰にタオルを巻き桶を持った維助がさつきと中に入る

ここはひとけ人気のない銭湯

「あつちでも大浴場あつたでしように」

「あんなむさ苦しい場所に行くかよ俺が。そもそも入った途端囲まれるわ」

野郎に囲まれる趣味は無いとシャワーを捻る

たしかに浦原維助は強くなるうとするものなら一度は話してみたいという人気があり、歩くだけでもそこらの隊士に話しかけられる

「だから隊長専用の風呂使ってるけど狭くてな……広くしてもいいんだがめんどくさくて」

後回しにしてたら時間たちすぎた

と、喜助の隣でシャンプーで泡立てる維助

「混浴なら別だけど」

呟く維助。相変わらずである

「まあ、ここはだあーれも来ないんで。穴場でしょう？ボクもたまに来るんすよ」

昔ながらの銭湯。設備はリホームされているものの、所々古臭い感じが出している

「じゃあ久しぶりに背中流せや」

つとゴシゴシタオルを投げられる

「はあ、仕方ないツスね」

兄の背中では傷一つない。

ただ、兄の体に傷があるのは肩だけ。

院生時代_____兄が初めて始解した日。

中級大虚に傷をつけられた肩、ボクらを守った勲章。

怪我はするが跡をのこるほど怪我をしたのはこれが最後だったなと思ひ出す。

「なんだよ、そんなに気になるか」

鏡越しに目が合う、兄はふつとわらい肩の傷を撫でる

「これよりお前らに突き飛ばされた時にぶつけた顎の方が重症だったんだぜ？」

そういえばそんな話もしていた

「まあ、夜一さんの体にも、お前の体にも傷がなくて良かったよ」

そう言つてニカツとわらう

いつも助けられ_____救われ。

ボクは、ボクらは_____彼に何をできるだろうか

「さ、次は兄ちゃんが背中流してやるから」

「ええ、いいツスよ！そんなん……ぐえつ」

無理やり回転させられ背中を流される

「本当に大きくなつたなあ喜助」

いつも、兄はそう言う。

ボクが成人の義を終えた時も、院生になつた頃も卒業した時も。

ボクが現世に追放された時も

成長した、大きくなつた：

それは兄と言うよりもはや親が子供の成長を見守るように、しみじみと口に出すのだ

「悪かつたな。俺のせいで迷惑かけて」

俺のせい。その一言にどれほどの意味が、数が含まれているのだろうか

「兄サン。きつと生きて——その時はちゃんと謝ってください。全て」

吹き出すような笑いが背中から聞こえてくる

「ふはっ……そうだな！でもそれ死亡フラグって言うんだぜ。まあ俺はそれをへし折るけどな！」

つとまたよく分からない事を言い出す。相変わらず変わらない

そう……変わらない

彼が新しいものを作る。

四十六室に入れ込み新しい法を作った時も、先生を始めた時も。

夜一サンはありえない——と言つてたがボクは納得ができた。

外堀を埋めるのが上手い兄サン。

自分の欲のためなら何でもする。

兄サンは幼い頃は反抗的で何かと反抗しサボり反感を買つてきた。

だがボクの外面の上手い使い方を見て学んだのだ

「ああ、喜助みたいにすればいいのか」

そうして出来上がったねじ曲がった兄

ボクら兄弟はお互いに影響しあい：黒いものとなつた

ボクからすれば全て想定通り

崩玉を作ったボク。

霊刀を作った兄サン。

現世に追放され、崩玉の事が公おわやけになつた今、あちらからなにも罰がないのはきつと兄

サンが手を回してくれたおかげ。

兄サンも兄サンで己で作つた法で守られ。

先生という立場から信用もそれほど崩れていない

ぐーつと足を伸ばして湯船に浸かる兄サン

これ程緩んだ顔、これ程警戒しないのはボクと夜一サンの前ぐらいか

「きつと俺はあの黒髪破面にも、惣右介にも勝てる。俺を倒せるのは条件が悪い時ぐら
いか」

つと両腕を縁に天井を見上げる

兄は本気を出さずとも恐らく劍の腕と身体能力だけで全ての破面を圧倒できるだろ
う。兄の言った通り条件を揃えなければ兄と対等には渡り会えない

「靈刀のように防御力をほぼ0にしてくるか、俺から橋姫をとりあげるか。まあ考えれ
ばいくらでも出てくるな」

靈刀の破面に余裕で勝ったのに何を言ってるんだと言いたくなるが口を噤む

「きつと——俺を殺せるのはお前ぐらいだろな」

そう言つてこちらを向いて笑う兄が自分の胸板をトントンと指さす

いつもの癖で帽子を下げようとしてないことに気づき行き場の無くなった手は頭を
搔く

「そうツスねえ——兄サンを止めれるのはボクぐらいツスね」

誰もいなくなった、勉強部屋。

「兄サン……武運を。さて、ボクも準備しますかね」

決戦の_____準備を。

勉強部屋から地上に上がると、キュツと腰紐を縛る音が聞こえる

「おや、もう準備万端ツスか？」

「バカ言っちゃいけねえよ、もう準備なんて何年も前から出来てる」

胸を張った黒崎一心_____死覇装に身を包み斬魄刀を腰にさす

「どわあ!!」

つといきなり前のめりに倒れ込む。

「動かないでつて言ったでしょ」

そう頬をふくらませ一心の背中を叩いたのは黒崎真咲。

彼女の背中には小柄な彼女には少し大きな霊刀が背負われている

「いいんすか」

「いいって？死んでしまうかもしれないってこと？この人にも止められたわ……でも」

きつと鋭い目

「息子とこの人が戦ってんのに、私がのうのうと寝てられますか。もう寝るだけ寝たんだから、寝るのはもう沢山。やらなきや」

黒崎一家は——強いツスねえ

「さて——いきましよ」

——
決戦へ

ザエルアポロの話

ドガアアン!!

「さっさとしたまえヨ」

「うるせえ…」

壁を突き破り最短距離で霊圧の衝突場に向かう装甲車
「んで俺が送迎しないとイケないんだ」

「うるさいヨ! ブツブツ…。黙って運転できないのかネ」

「へいへい」

助手席でふんぞりがえってる涅。

卯ノ花隊長も更木も近場まで送った。

バカ広い虚圏、しかも更木は方向音痴と来た。

まさかここまでパシリに使われるとは――。

「へえ――面白そうだね」

頭をコンコンっとノックしながら何かをつぶやく涅。

何かを見ているのだろう

すると――

「ネム、メス」

「はい、マユリ様」

つとなんと自分の腹を切り始める

「うそだろ……」

もうこの車乗れねえ。

「手がブレるだろう、しっかりと運転したまえ」

「無茶言うな」

何をしているか知らんがとりあえず新車を汚さないで欲しいんだが――？

まあ、何か策があるんだろう

「おっ……そろそろ着くぞ」

立派な建物が建っているが、ここだけ何故か瓦礫の山――

瓦礫に乗り上げ車体が浮き上がりブレーキをかける

「あぶな！……めーん轢くところだった」

タイヤギリギリ、なぜかボロボロで寝そべってる恋次の顔面近くに停車した。顔を真つ青にした恋次が

「せ、せんせい……」つとか細かい声を上げた。ごめんて

「誰だい。君達は」

そう振り返る破面――

なんか派手な格好だな。

「くつくく……私が誰かその質問に答える意味はあるのかネ」

スタスタと車をおりた涅と、ネムちゃん

俺はボンネットに座った

「2人ともボロボロじゃん。なしたん」

「かハッ――先生……なぜ」

ベシヤツと血を吐いた雨竜ちゃん。内蔵がやられてるらしい

「まあ、簡単に言えばあんたらを連れ戻しに？ ついでにぶっ潰しに」

「はは、先生が来てくれりゃ百人力だぜ」

つと口元の血を拭う恋次

「まあ俺は霊刀の破面相手だが――なぜか、どこにも見当たらんのかな」

「確かに——僕ら相手に仕向けた方が何倍も効果的なのに」

なにか胸騒ぎがする——もしかして入れ違いになつたか？

いや、惣右介ならきつと俺がこつちに來ることを読んでいるはず。

今まで通り俺に仕向けるはず。紫流と合流してあつちに戻らせるか？いや、白哉坊ちゃんがあつちにいる、心配は無用か…？

靈圧を感じするが、どこにも——靈刀の気配が感じられない

そういえば待て——あの時、靈刀の実験をしていたのはなんのためか。

最強の破面を作るため——？いや。それもあるだろうが違う。

靈刀は1度埋め込んだら取り返しがつかない。

安定した靈刀が完成したら惣右介は何をする？

崩玉——靈刀——まさか

そこで声をかけられふと現実に戻る

「残念だよ…とても。それで？君は何かな？」

首を傾げてこちらを見る破面。

近くには涅が血を吐いて倒れていた

「いったそ。」

ボンネットから体を起こし声をかける

「涅く助けいる?」

そう言うが返答は無い

「ああ——君知ってるよ。浦原維助——だったかな。あの霊刀の開発者だろう?」

「おや、俺の事ご存知で?」

名乗るつもりのない破面に俺は雨竜にあいつ誰?と聞く

「破面の連中が…ザエルアポロと言っていました…っ」

「へえ、ザエル君って言うんだ、よろしく。」

「ははっ、人の名を略すなんてなっていないね。君には興味があるんだ。脳を置いてつてくれないかい」

つと生々しい事を言ってくるザエル君にあーあーつと手で扇ぐ

「そーゆ、生々しいの俺好きじゃないんだよね。飯食えなくなる。内蔵やら首やら…グロ口いたらありやしない」

「はは、思ってもみない事を。苦手ならば躊躇するのが普通だ、楽しそうにしてたじゃないか…霊刀の実験体。僕はそれに関与していてね。見れば見るほど実に面白い——ソッるよ…」

両手を広げニヤアつと口が裂けそうな程に笑みを浮かべる

「そう、あんたが破面の中の研究職って感じ？ふうん。涅く戦う？戦わない？戦わないんなら俺が相手しますが」

そう言えばさつきときの辛い表情はどこへやらニヤツと笑った涅。

「馬鹿いうんじゃないヨ。勝手に手を出さないでもらおうか、君が相手をする、実験体が細切れになるじゃないか」

そうペラペラと話し始める涅にザエルアポロは

「はあ!?なぜ話せる——なぜ!」

つと振り返る

涅そっくりの人形の中。

ブチブチつと内蔵の名前が書かれたものを潰すが

涅はケロツとしている

「うるさいヤツだね。なんの能力でもないヨ」

涅は雨竜に監視する細菌を感染させていたらしい。それを通して状況把握。俺の車の中でダミーの内蔵を作り入れ替えた。

だから雨竜や恋次がやられたみたいに人形で内蔵を潰されても無事だったわけだ。

つてか、状況わかってんなら俺に報告しろよあいつ…

「僕がこの能力を見せてから1時間も経っていない!!ありえない!!そんなはず…!!出

来るはずがない！」

「出来るからここに居る訳だが」

流石は涅。

言ったら怒られる殺されるだろうが、喜助の弟子。

備えあれば憂いなし。備えてなんぼのやつだな。

「さて！いつの間そんなのつけた!!あの戦いの最中にか!?普段の生活も監視してるんじゃないだろうな!？」

雨竜お前本当は元気だろ??

ギヤーギヤーつとブチ切れながら雨竜が涅に怒鳴る

「黙れ外道」

「先に言われたアアア!!!外道はお前だろう!!!」

やっぱお前元気だろ本当は???

ネムちやんが触手みたいなのに縛り上げられる

なんだあれ、同人誌かよ

「まったく…どいつもこいつも…ピイピイうるさいことだヨ」

斬魄刀を鞘から抜いた涅

— 正解 金色正殺地蔵 —

土埃のようにボワつと膨らむ毒霧が津波のように広がる

そして正殺地蔵はザエル君をゴクンつと飲み込んでしまった

「喰われた——。ゴフツ」

涅の毒に犯された恋次は血を吐く

「阿散井！君も毒にやられてるぞ!!」

「ぐっ…なんでてめえは平気なんだ」

「僕はあの霧に1度やられている！おそらく抗体ができ…ゴフツ」

つと、雨竜も血を吐いた

「何を呑気なことを言ってるんだネ、毒の配合は1回ごとに変わるのが普通だよ」

「この野郎…つて先生はなんで無事なんだ！」

つと俺を指さす

「さあ？俺はなんかまあ…色々あつて。毒も効かないんだよね。麻酔もあと薬も。」

だから病気になるったらオワコンかもーつと言ったら

「なんでもありかよ…」つと恋次が吐血した。もう喋んなつて

「ふん。この配合じゃダメか、もつと殺傷能力をあげるべきだネ」

つと涅が俺の方を見て呟く

あれ?どきどきさに紛れて俺を殺す気だった?俺お前の味方だよな??

「はあ、俺もう行っていい?ここに霊刀の破面がないならここ来た意味ほとんどないし」
虚圏

「待ちたまえ。誰がソレ装甲車を運転すると思ってるんだネ」

「いや俺お前の専属送迎じゃねえし。つーか送つてたのはついでだし。何先輩をコキ使おうとしてんだ」

「フン。センパイイ?何をバカな事を。」

やれやれとでも言うように肩をすくめる

その時

「僕を殺したと思ったか?」

「グアツ」

触手のようなもので縛られていたネムからギシギシと身体が軋むような音が聞こえる

「教えよう邪淫妃フォルニカラスの最も誇るべき能力の名は受胎告知ガブリエール。敵に僕自身を――」

孕ませる能力だ

臍から体内に侵入し内蔵に卵を産みつける。産み付けた卵は母体の全てを奪って急速に進化しやがて母体を死に至らしめ生誕の時を迎える

ベチャツ——つと、粘液が地面に滴り落ち

ニヤツとわらつたザエルアポロがドレスのような服をなびかせ
四本の羽を広げる

「面白い能力だね！で…それだけかネ？」

そう言った涅に、足殺地蔵が襲いかかる…が、直前で破裂した
「万一私に噛み付いたら自滅するように改造してあるんだヨ」

すると、涅がスタスタとネムのほうに歩いていく

「もう飽きたヨ。浦原維助、後は君がやっていいヨ」

「ここで俺に投げんのかよ」

致し方ない——と橋姫を抜く

「はは…。君は…!!」

ザエルアポロが涅にキレるが、涅は振り向かない。本当に興味が無くなったようだ。

「さて…ザエル君。霊刀の破面がない以上俺はさっさとここから出ないとならんくてね。つてことで——さっさと死んでくれるかい」

「はは……浦原維助、君はどうして霊刀を作ったんだい？」

「んでここで霊刀の話……？そりや……何となく？」

「はは!!ははは……！何となく！そうか……！何となく……!!そんな軽い気持ちであんなものを……あんなものを作るなんて——！ははは！」

つと片手で顔を覆い全身を震わせるようにして笑い出す

「なんだよ。なんか文句あんの、お前は科学者みたいなものなんだろ？便利なものを作る、興味があるから作る。作る動機なんてそんなもんだらう？」

喜助だって、新しいものを作ってみたから……っていう軽い気持ちで崩玉作ったわけだし。

「君は——製作者でありながらアノ恐ろしさをしらない。霊子を吸い取る——なら霊子で構成された僕達は？死神は……？存在そのものを無に変える——！簡単に……！意志を持ち暴走したら……ああ、恐ろしい……！」

恐ろしいと言いながら顔を紅潮させる

「滅却師と似た者だが性質は全く違う、意志を持ち死神や虚の体も吸い取る……！はは……はは！それを簡単に……？おかしい……おかしい

は——？」

ザエルアポロの腕が吹き飛ぶ

「何が言いたいのか全く分からない。霊刀は使い用によつちや脅威だよ。そりや馬鹿でも分かる。」

スタスタとザエルアポロの方に歩けばザエルアポロは腕を押え、1歩、1歩と後ずさりする

「俺が尸魂界で法を作つてなきや俺は責任を問われて極刑だったろうな。俺は作りたくて作つた。世界を滅ぼす脅威？大歓迎。俺に敵う相手に霊刀一本でなれるのならばな。俺は歴史を作るんだよ、伝令神機、記憶置換装置、結界装置、霊刀。まだまだ足りない。なあ？足りないだろう？悪名でもなんでも歴史に刻み続けなきや…まだまだ俺は進み続けられる。」

「そうか…!!それが君の素か!!はは！藍染様よりも君の方が恐ろしいじゃないか…!!なぜ、君は進み続ける？」

「それが———かっこいいから」

ザエルアポロはグシャツと音を立て地面に倒れる

「何投与したの、涅」

「ふんっ…君には教えないヨ」

そう言つて又チ又チといやらしい音を鳴らす涅

そしてネムが復活した

「なんでだ!?今の何をして治した!?!」

つと恋次と雨竜が突っ込む

俺はザエルに振り返る

頭身が二つに分かれた遺体。

俺が斬る直前、こいつ止まったように見えた——動きを停止させる薬?それとも——
?

とりあえず涅が何かを投与したのは間違いないだろう。

「ゴフツ…先生」

「恋次。元氣そうだな」

「これのどこを見て言ってるんだあんたは!!」

内蔵を潰され、毒に犯されでもそれだけ話せるなら元氣と一緒だろ。

「先生、俺はあんたが恐ろしいよ」

「なんで?」

「…なあ先生。俺らを裏切らないですよね」

そう直球で聞いてくる恋次

「尸魂界の敵になるって事?なんないなんない。なったら製作続けられなくなるじゃ

ん」

「動機がソレかよ。」つと視線を逸らす恋次

「お金が貰えるから働く、安定した生活を送れるから働く、人を助けたいから働く。みんなの動機はこんなもんだろう？それが脅かされるから敵にはならない。おれは好きなものを好きだけ正当に作れるこの環境。捨てないよ。逆に敵になるメリットがない。俺の今の環境以上にメリットが見込めるなら、俺は喜んであんたらの敵になるよ」

頬杖をついて笑えば——ふつと笑う

「よく言うぜ」

「……浦原維助、なにぼさつとしてるんだネ。分かっているだろう」

「なんでお前はそう上からなんだよ」

惣右介の霊圧が——消えた。つまり虚圏から出ていった

そして喜助からワン切り着信。

惣右介が現れた合図

俺は屈伸する

「装甲車、その死体とか運ぶのに使うだろ。自由に使ってくれ、後でクリーニングして返せよ？」

「先生……どこに」

「一護と合流して——惣右介んとこ」

一護の所の霊圧——破面が一体。あの黒髪かな

一瞬、瞬きの一瞬でその場から消えた浦原維助。

「相変わらずはええな、先生は……」

「本当にあの人味方なんだろうな!？」

つと恋次にキレる雨竜

「あの人にはあの人なりの正義つーもんがあるんだろ。」

もし、もし浦原維助が敵になったら？

殺気だけで浅打を落とした俺——。

始解も不明卍解も不明、分かるのはありえないものを創り出す技術力と機動力、そして圧倒する力と霊圧。

総隊長が浦原維助に少しばかり甘い理由がわかる

敵になって勝てるビジョンが見えない

ウルキオラの話と惣右介の話

神などいない

願えば手を差し伸べる

そんな都合のいい物はない

神がいたならば私はここにいない

神がもしいるのであれば何を求め何を願う

私は

「願わない、もしやりたいことしたいことがあるなら自分が動けばいい！そうだろうか？
惣右介」

——— そうだ

立ち止まることで何が生まれる？否、何も生み出しはしない

混沌の中で立ち止まり飲み込まれ死を待つのみ。そんなもの私は望んではない
変えなければ私を

変えなければ世界を

願っても力は手に入らない。

動かなければ

君と対等の場に立つために

「終わりだ」

ボロボロになった隊長格が地面にたたきつけられるのが見える

副隊長も何人かがやられ治療されている

虚閃により空が光る

絶望。

白い服に身を包んだ藍染惣右介が空から光景を見下ろす

「終わりだ、本当に」

十刃

強く恐ろしい霊圧、一般隊士は恐怖し戦くおののく

霊圧だけで魂が押しつぶされてしまいそうだ。

十刃を従え長に立つ藍染惣右介に誰がかなうものか。

絶望な表情をうかべる隊士。

隣で仲間が倒れ行く

「終わりだ」

また——そう呟く

「藍染、お前……本当にやめたんやな」

かつての隊長、平子真子が刀を肩に背負う

「やめた——ね……。進化と言って欲しいな」

藍染の霊圧は以前のものとは違い禍々しく黒く重い。

一言で表現するのであれば「化け物」

「立ち止まり、気を伺うだけの偽物^{破面モドキ}。」

猿柿ひよ里の指がピクリと動く

「ひよ里」

「わーっとるわ」

そう言ったひよ里の手は震える

恐怖からじゃない。怒りだ

「私は未来をゆく、進化し続ける。君達とは関係ない話だ——君達には未来も、ましてや

終焉も訪れない。なぜなら終焉は過去の話——なぜなら君たちは百年前のあの夜。」

「死んでいるのだから」

その瞬間、血飛沫が舞う

「一人、おーしまい」

蛇のように目を細めニヤリと笑う市丸ギンが、藍染に刀を振り上げた猿柿ひよ里を切り裂いたのだ

「ひよ里!!」

それを無表情で見下ろす藍染惣右介

ほら——変わらない。

百年で、何も。何も変わってはいない

霊刀——月牙天衝

霊刀で収束させた霊子と、月牙天衝を合わせた技を藍染に向ける

「やはり…君は、君たちは——」

オレンジ色の髪が靡くと同時に、黒と青の閃光が藍染惣右介に降り注ぐ

少し前に遡る

ウルキオラは黒崎一護と対峙していたが、ウルキオラがその手を止める

「石田……！」

ヤミーを吹き飛ばした石田雨竜。

「浦原さんはどうした。浦原先生は――」

「はあ？来てねえよ」

いきなり何の話だと、一護は困惑する。

浦原維助、一護と合流すると言つて先に向かったはず

そのことを伝えるが一護は来ていないという

そんなはずは――

浦原維助の霊圧は例えるなら無

霊圧を極限まで押え気配すらも感じさせない。

霊圧感知が得意な石田雨竜でさえ、その霊圧を感じることは出来なかつた。

「まあいい、井上さんは任せてくれ」

それに頷く

「待たせたな――ウルキオラ」

ウルキオラは強い

虚化した一護を圧倒し、霊刀と結合した一護の斬魄刀を熟知し的確な攻撃を加える

速さももちろん――

「第4クァトロ以上の十刃の解放」

——鎖せ

黒翼大魔

刀剣を解放したウルキオラの姿

正しく——悪魔。

黒い羽が開き異質な霊圧

虚化の状態の一護に一撃を放つ

間一髪月牙を放ち軌道を逸らす

もし、間に合っていないならば、きつと——

「人間や死神が力を得ようと虚を真似るのは妥当な道筋——だが、それで人間と虚が並ぶことなど永久アリはしない」

虚化の全力の月牙天衝。

何をしてても相手は無傷対して一護はボロボロ。

それでも——それでも一護は瓦礫から立ち上がる

投げ飛ばされ地面を半壊しながら飛ぶ一護、それでも立ち上がり、剣を握り続ける

「黒崎一護、真の絶望を知らない。知らぬなら——教えてやろう真の絶望を」
レスレクシオン
 刀剣解放 第二階層 セクンダ エスパレード

一瞬、目を閉じていたわけでも油断していた訳でもない

一護は吹き飛び地面を割る

駆け寄る織姫

「来たか」女

手も足も出ない、それを表した現状。

一護は血を流し

胸に——孔を開ける

「いやああああ!!!黒崎くん!!!」

投げ落とされた黒崎一護に駆け寄る

どうしよう

どうしよう

どうしよう

心臓部を貫かれ倒れる一護に己の力を施す織姫

「俺変わっていい?」

押しつぶさそうなウルキオラの霊圧。

孔を開けた一護に呆然とする織姫

敵わないと分かつていながら震える足を立たせる石田の前。

その声は、その状況とは反しにつかわない

「浦原維助」か」

浦原維助

「先生……いままで……どこに」

「見ていたのだろう。ずっと」

「なっ」

ウルキオラが維助の方を見るとニコツと笑う維助が石田に振り返る

「そんなわけないじゃん。大切な生徒が痛めつけられるとこなんて——眺めるはずないでしょ。さすがに俺でもしないって。ちよつと色々あつてさ」

そんな状況で雨竜の頭をポンポンと撫でる維助。

暖かく優しい手。まるで子供をあやすように

「麻醉も……止血剤も打ちました。戦えます」

「その腕で？無理でしょ」

そう言い放つ維助。維助は一瞬で下にいる織姫の隣に雨竜を抱えて降り立つ

「織姫ちゃん悪いね。雨竜ちゃんよろしく」

返答も聞かずにウルキオラの前に再び現れた

「なぜ、手出しもせず傍観した」

「気になったから。まあ一護は死なないっしょ」

下から維助を見上げる雨竜。

治療する織姫。

おそらく会話は聞こえていないだろう

「死ぬはずがない？アレで？」

霊圧も、鼓動も感じぬというのに

「とりあえず、俺と戦わない？絶望さんよ。」

やはり——浦原維助は強い。

そう雨竜は呟く。

一護を圧倒する異質な霊圧に加えありえない脅威ともいえる戦闘力。虚化しても無傷で立っていたあのウルキオラに浦原維助は始解も卍解もせずに一撃を加えた。

その一撃でさえ、目には追えない

「虚の力を得てもない死神が、何故そこまでの力を持っている」

ウルキオラは自身の腕を吹き飛ばした浦原維助に問いかける

時間稼ぎでも、恐怖からでもない、単純な疑問

「さあ——俺はロマンを求めた結果だよ。全てを圧倒する力つてのはかっこいいものだろう?」

「理解できない」

かっこいい、ロマンだから

そんな事の為だけに始解も卍解もせず剣術と体術のみで戦うというのか

ウルキオラにはどうしても理解できなかった

ビキツと音を立て、腕を再生させる

「俺の能力の最たるものは攻撃性能じゃない、再生だ。腕一本もいだ所で俺は止まらな
い」

極大な力と引き換えに超再生能力の大半を失う破面の中でウルキオラだけが、脳と臓器以外の全ての体構造を超再生できる

「いいね、かっこいいよ。ロマンだねえ——回復し続けようやく切り落とした腕も簡単に復活させる。まさに絶望」

突如として、衝撃波を伴う大音響が響き渡る。

轟々と耳をつんざくような破壊音とと共に地面をえぐり何本もの柱をなぎ倒す。

ウルキオラの黒い虚閃を剣一本——一太刀で切り裂き距離を詰め

腕を、脚を切り落とす

瞬間的に再生するがウルキオラもわざと斬らせている訳では無い。

「舐めるな」

ランサ・デル・レランバー
雷 霆 の 槍

風を斬り音を置き去りにし急接近する維助に向け

右手に構成した霊子で出来た槍を向ける

コンマ単位の時間。避けれるはずもない

維助自身のスピードと威力により維助の体は貫かれるはずだった

だが、それをも斬り裂いた

「な……」

ありえない

死神とはいえこの速さに対応できるはずがない。

読んでいた？

いや——違う。見えていた

動体視力のみで浦原維助は対応したのだ

胴に一太刀を入れるが浅い。

維助の刀は伸びる訳では無い、確実に間合いと太刀筋を読み避けたはず。それでも浅

いとはいえ身体に傷をつける。

あの、全力の月牙天衝ですら傷のひとつもつかなかった身体に

「やはり、藍染様が言うだけはある」

そこでウルキオラの気配が霊圧が変わる

「使いたくは—— なかったのだが」

そのつぶやきは維助には聞こえなかった

瞬間バキツと音を立て体に変化する

「これは——！」

身体から突き抜けるように現れた柄を握りしめ自身から引き抜く

「霊刀—— そんな所に」

霊刀の気配。何故ここまで巧妙に隠していたのか維助には理解出来なかったが。事

実として悪魔のような戦闘力に霊刀が追加された

「はっ!!やるじゃん」

霊圧硬化は無効化され頬に傷がつく。

「まさか余波だけでこれ程とは」

ぐいっとなら頬を拭う維助。油断していたとはいえ当たってもいない、風圧だけで頬に亀

裂が入るとは

その頬は拭うだけで血が止まり傷はもう見えない
立ち上がり正面を見すえる

「霊圧硬化も無効、そして自身や周りの霊子で一護の月牙天衝並…いやそれ以上の斬撃
まで…はは！やべえなおい」

向かい狂う真つ黒な、そう、真つ黒な光を飲み込み込み境目も波も見えないような斬撃が
地を抉り向かい狂う

「ぐっ」

斬魄刀で受け止めた維助だが、あまりの重さにザッと一歩後ろに押される

「はっ!!こんなんでやられるかよ。俺のお得意は霊圧硬化だけじゃない」

己自身の霊圧を放出しウルキオラの斬撃を相殺させる

だが斬撃に隠れてウルキオラが霊刀を振りかざし漏れ出た維助の霊圧を収束して
いた。

「喰らえ」

食事を終えた霊刀は青く光り輝く

先程の斬撃なんて比にならない程に霊圧濃度は濃く濃くあがる

その瞬間耳をおかしくするほどの轟音と振動

まるで幾千の爆弾を一斉に起爆させたが如き轟音が周囲一帯に降り注ぎ、豆粒ぐらいに離れていたはずの織姫や雨竜の所にまで余波が届き織姫の体がうきあがる。

間一髪雨竜が片手で止めるが、その耳から血が流れ落ちる

あまりの霊圧に煙や炎が地面から立ちのぼりウルキオラの一振で霧を晴らすように視界が明るくなる

「なっ」

ウルキオラは絶句した。

先程まで彼らが立っていた地点は放射状に抉れ弾け飛び地面は深く抉れているのに
も関わらず、維助の間合い範囲だけが綺麗に残されていた

「何したか見えなかった？俺の自慢は剣の中でも見えない抜刀術なんだよ」

ありえない。その言葉で埋め尽くされる脳内

斬撃を飛ばした時、剣は上に伸ばしていたはず。

一瞬で鞘に収め再び抜いたとも言えるのか

「がっ」

ウルキオラの様子が変化し維助は眉を顰める

「なんだ？」

手に握っていた霊刀はカタカタと震え始め――そしてスライムのように溶けた霊刀はウルキオラを包み込む。

「はっ――！」

なにかに気づいた維助は間一髪身を後ろによじり躲す。

遙か彼方で爆音が響きわたり斬撃が爆発したことを余波で知らせる。

見えないほど遙かまで

避けたのは見えていたわけじゃない、ただの勘

姿が変わったことにより動揺をしていた維助だが数百年も戦場で立っている勘は鈍ってはいなかった。それを感じ脳で処理し身を動かす技術は一朝一夕ではいかないだろう

「あぶな……」

その一言で済ますのもどうかとは思うが身をよじった反動のまま後ろに飛び抜き再びウルキオラを見すえる

ウルキオラの目は月のような黄色で埋め尽くされ瞳孔も見当たらない。

まるで宝石の結晶が埋め込まれたかのように全身に青い結晶が飛び出していた。だが、その結晶から霊圧が放たれている。

「触れたら死ぬ…ね。」

瓦礫が結晶に触れた瞬間にスパンッと瓦礫が砂に変わる。目にも見えない高速の振動で瓦礫が切り刻まれたのだ。

維助は脳を回転させる

橋姫で受け止めたとして橋姫は耐えられるのだろうか

霊圧硬化ができない以上、刃こぼれをするかもしれない。

そして霊力を吸われすぎると今度は橋姫の復活が出来なくなり今後の戦いに影響を及ぼすだろう。

「ならやることはひとつ——！結晶に触れないようにぶん殴る」

ヒールのように踵についた結晶が甲高い悲鳴をあげたかと思えばウルキオラは維助に飛びかかっていた

「はっ…やべえな」

その目からも理性は見当たらない。

触れただけで体内からじわじわと霊力を吸われていくのを感じる。

「つしやオラア!!」

ガン!! 維助は結晶に触れないようにウルキオラの腕を掴み引つ張ると思いつきり頭突きを食らわせる

ウルキオラは吹き飛び柱を貫通させても止まらない

「ふんっ——！理性戻んねえと何がどうなるかわかんねえだろ！起きろ」

そのウルキオラに追いつき上空から蹴りを食らわす

くの字に曲がったウルキオラが地面に穴を開け爆心地のように地面が割れる。

「がはっ——！」

ようやく肺から空気を吐き出す声が聞こえ維助は降り立つ。

衝撃のせいか霊刀の結晶と思われるものは粉々に砕け散り空气中に分解され、ダイヤ

モンドダストのように虚圏とはにつかわない景色に変わる

もはや回復もままならないウルキオラが目を覚ます

その目は吞まれていなく以前のウルキオラだった。

そう、これこそが圧倒的な力

地面に倒れるウルキオラは維助を見上げた

「お前は本当に死神か？」

「そっだよ」

現世でみせた、実験段階とはいえ霊刀の破面を爆発させる霊力。

そして剣術

隊長格とはいえ、所詮は死神。

虚でもなければ破面でも、ましてや虚化の力を手に入れても、未来を予知する能力もないと言うのに。

「俺がただの死神に負けるとは——滑稽な話だ」

死の時を待っていたウルキオラ、だが

「なっ——一護！」

ハッとした維助が全力で霊圧を硬化させ全身を固める

横からの衝撃波。

「お前は——何だ」

ほぼ不意打ちという形で維助が吹き飛ばされる

宙で回転した維助が地面に降り立つ

正しく虚。

全身を虚化させ孔を開けた一護がウルキオラの前に立つ

「はっ……生きているとは」

あの状態で生きているとは——

すると一護は頭の角に靈力を収束しはじめ

虚閃

「なるほどな、容赦は無しか。もはや敗北した俺に意味は無い。やれ」

放たれるその瞬間

「一護、邪魔だ」

今度は一護が吹き飛ぶ番だった。

放たれるはずだった虚閃は一護が吹き飛んだことによりあらぬ方向に飛び

轟音と共に大爆発。その衝撃波で近くの柱が崩れ落ちた

「なぜ助けた」

倒れたままのウルキオラの前に維助が剣を肩に背負い立っている

「いやさ、俺はお前殺す気ねえし」

「なに？」

情けをかけるだけでも言うのか？そうウルキオラは眉を顰める

「違う違う。そういうのじゃないけど。お前根つからの悪人じゃないだろ？それに、敗

北したんなら殺されようが生かされようが文句ないだろ」

「…そうだな」

正しくその通り、敗北した自分は焼かれようが射抜かれようが四肢をもがれようが文

句は無い

ホロウのような雄叫びを上げた一護が刀を振るう

それは、虚化した状態の一護の何倍、そうウルキオラの何倍もの速さと威力

だが維助はまるで犬を宥めるかのように剣を硬化した指で挟むようにして止めた

「おー、よしよし一護。暴れんなって。死にかけて暴走したのかは知らんけど俺お前の敵じゃないし。」

だが、一護には理性が残っていないその言葉で止まるはずは無かった

「黒崎くん!!!」

織姫の叫びと共に、背を向けた一護に衝撃を食らわせる

織姫の持つている霊銃が放たれたのだ

けして傷をつけるものではないが、織姫は一護に一発喰らわせたのだ。

その一発。その一発で――否。織姫の声で一護の仮面が割れる

パキパキと、劣化した壁が剥がれるように全身の虚化が溶けていく

「俺―――なんで、維助さんを。おれが……」

孔が塞がった。超再生能力―――。

「おー、大丈夫!無傷」

ぐつと親指を立てる維助にほっ…と息を吐いた。

少し砂で汚れているものの傷は見当たらなかった

「黒崎くん！」

すぐに駆け寄る織姫

「さて、勝負は終わった。一護も元気。目的の織姫ちゃんも奪還成功！」

刀を鞘に収めぐーっと両手を上にのぼし伸びる維助

「殺せ、なぜ生かす」

「いやいや、もう勝負ついたろ。な？一護いいよな別に」

「あ、ああ…。その通りだ、勝負は着いた。俺は——負けたけどな」

なんてボロボロの体で頬をかく

「織姫ちゃん、時間が許す限り一護を全力で治してくれ。これから——最後の戦いが

待ってるから。」

「は、はい！」

すぐに治療をはじめめる織姫にウルキオラは問いかける

「女——俺が怖いか」

織姫は振り返り笑う

「怖くないよ」

「———そうか」

[new page]

「あつれー！一護！お師匠さんは？」

虚圏で合流した紫流はキョロキョロと辺りを見渡すと。

「あ、ああ。なんかウルキオラと話があるからって俺だけ。なんか投げ飛ばされた」

「投げ飛ばされた？」

その言葉に首を傾げる

『よーし！ある程度治療終わったな。じゃ今から投げるから〜』

『はっ!?ちよ、維助さん?!?ブベラッ』

時間の短縮だと言ってぶん投げられたのだ。

そのおかげで早く合流できた訳だが、半分地面に埋まる状態で着地したことは言わなかった。

そして、涅マユリが黒瞳を開け

同じく合流した卯ノ花と共に穴に入ることになる。

「なんだネ」

じつと、涅を見上げる一護

「いやさ、浦原さんも俺たちを見送る時ちよつと高いとこ立って喋ってたなあと、あんた技術開発局の二代目ってことは浦原さんの弟子かなんかだろ？ 似たことあるよ。やつぱり！ つーか、浦原兄弟つてすげえよな。白哉の師匠でもあんだろ？ 維助さん。」

そう言つて笑顔で穴に飛び込む

「成程……面白いネー！ 面白い男だよ黒崎一護！ 閉じ込めるのも面白いと思つたが辞めだ!! じっくりと恐怖に落としてやるヨ！」

それを横目に白哉は遠くを見る

「お師匠、何をしている」

維助の姿は見えなかった。

「new page」

虚圏の砂浜の上で、傷が治つたのにまだ地面に伏せているウルキオラに維助がしゃがみこむ

「なあ、ウルキオラ。であつてるよな？ あんた、霊刀の話知つてるだろ？」

使つてたんだからと、付け足す維助

「ああ」

維助の方を見ずにずっと上空を見上げるウルキオラ

「てつきり全員の十刃に霊刀埋め込むと思っただが：霊刀の実験体も見当たらないし。何したかわかるか？情報が欲しい」

「負けた俺がもはや隠すまい。藍染様により彼の理想の霊刀が生み出された。俺は理想の1歩手前の霊刀を埋め込まれた。」

「一歩手前だつて？」

ふつと笑うウルキオラ

「使いたくは無かつたが」

なぜ、最初から霊刀を使わなかつたのか、はじめから霊刀を使えば俺の霊圧硬化も抜かれるはず、少しでも勝機を見いだせただけははずなのに

「あれは——恐ろしいものだ。俺は霊刀に意識を呑み込まれた」

ウルキオラがこうまで言う霊刀

本当に俺と同じ霊刀なのか？

否——恐らく違うだろう。

「霊刀は意志を持ち魂魄に埋め込まれ融合する。俺の埋め込まれた不完全な霊刀は、俺自身を乗っ取りありとあらゆる霊子を吸い取り暴走させ体を破壊へともたらず。全てを呑み込み灰とするまで——な。霊刀を埋め込まれたのは4人。俺——そして」

俺はその言葉を聞いて走り出した。

「はっ…やっぱりな!!」

霊刀を体内に埋め込み融合したのは

ザエルアポロ・グランツ

市丸ギン

そして

藍染惣右介

理想の霊刀と初代霊刀の話

浦原維助、弟子である朽木白哉が隊長になった少し後。

彼は霊刀れいとうという刀を作り出した。

見た目は日本刀、だが内部には精密にまた頑丈な機械が付けられており、待機中の霊子を吸収し刀身に収束、またその霊子のひしめき合いにより斬れ味が増すという、霊力を持つていなくても戦えるような代物。

言葉で言えば簡単だが、弊害が多い。

霊子を収束し、またそれを維持する。半端な機械設計では空气中に散開、または暴発ぼうはつしてしまう。

最初に盗み出した藍染惣右介は、まず霊刀に似た物を作ることにした。

だが、その結果は失敗続き、ネジやマイクロ単位に及ぶ歯車。とてもでもないが真似もできない。形どったところで金属加工も彼の得意とするところ、特殊な鉱石を精密な単位で混ぜて作る金属。

その技術も術すべも藍染惣右介には持ち合わせていなかった。

だから浦原維助は天才だと言うのだ。

そして藍染惣右介はコピーするのを辞めた。

そう、藍染は藍染なりに考え別の方法で作ったのだ

それが疑似的な霊刀。霊刀の性質は変わらないが、鬼道や術、結界類を無理に使ったもの。

意思のある生物から溢れる霊子を吸い取ると霊刀に意思が宿るといふ性質を見つけた。

そうして要らなくなった盗み出した霊刀をホワイトという虚と混ぜ合わせ戦わせ

黒崎真咲の魂魄に溶け込んだ霊刀はかつて志波一心の霊力を吸い取っていた。それを霊刀の意思で黒崎真咲の危機を知らせ一時的に霊力を一心に戻した。

そして霊刀は回復のためか、はたまた別の理由があつてか半分に別れ、黒崎一護に溶け込んだ。

そう、魂魄に結合するのは霊刀に意思があるからこそなのだ

だが、それにも壁があつた。

魂魄が先に耐えられない、暴走、異物質と魂魄が結合することにより崩壊する体。

霊力の吸い取る力を強くしすぎると、意識が呑まれる。また自身が分解される等々リ
スクもどうしても越えられない壁もある。

数多くの破面で実験し、浦原維助と戦わせた。

そして——ようやく生まれた。

理想の霊刀

「崩玉に霊刀。私の敵など——もう居ない」

崩玉を持っていない時でも、隊長格を凌ぐ強さを持っていた藍染惣右介。

崩玉により更にパワーアップ。そして霊刀により鬼道類の攻撃を無効化した。

未だ、藍染惣右介の理想とは何なのか。それは分からないが、とても良くないことだということとは……誰にも分かった

「久しぶりだね、旅禍の少年」

虚圏で貯めた霊力と天鎖斬月の力。

だが藍染惣右介はただの結界の防御のみで受け止めた。

「だが、霊刀を使ったのはいい判断だ。霊刀と戦えるのは単純な暴力か、霊刀同士のみ……」

霊刀に霊刀をぶつける——

霊刀と戦う術は例外を除き3つ

1つ浦原維助のように単純な己自身の力で戦う。

2つ霊刀が吸収する霊子の時間、それは一瞬では無い。

一瞬で掃除機が部屋全ての埃を残らず吸い取ることが出来ぬように。限界値も吸収

時間も存在する。

つまり、一度に吸収できる量以上のものをぶつければ威力は半減するが届くと言うこと。だがこれは未知数、また失敗すればそれ以上のものが跳ね返ってくる危険もある。

3つ霊刀に収束された霊子や放たれた霊子は霊刀では吸収できない。お互いに意思があるからか混ざり合うことが無く相殺してしまう。

だからと言ってなんだ。

藍染惣右介は強かった

隊長格や仮面の軍勢総出で藍染惣右介の隙を作るも傷は付けられない。

そして鏡花水月により味方である雛森桃を傷つけてしまった。

霊刀の対処法2つめ——一か八かノ賭けに出たものがあった

流刃若火

轟々と燃え盛る炎。

身も魂も燃やすほどの圧倒的な霊圧

「ようやく総隊長のおでましか、君が倒れば護廷十三隊は文字通り崩壊する。後任の総隊長として育てればよかったものを」

そう、現れた山本元柳斎重國に目を細める

「浦原維助か、傲おごなよ小童。貴様程度おしるの力でこの儂を斬れると思うてか。」

「ふっ——靈刀の事は理解していかないのかい？」

つと笑う

「舐めるな、そのような刀一本で儂の靈圧を封じ込めれるとでも」

「ほらね」

そう言った藍染はいつの間にか、元柳斎の腹に刀を突き立てていた——だが、

「藍染惣右介捕えたり」

突き立てられた腕ごと握りしめる元柳斎

「なるほど、面白いね。君の掴んだその腕は本当に私の腕なのかい？」

「目で見るだけ、肌で感じるだけならそれもあろう、じゃが腹に刺さった斬魄刀の靈圧を
読み違うことは無い」

焔熱地獄

轟々と燃え盛る炎柱が藍染達を包み込む。

大規模の炎柱——

「皆覚悟は出来ておる、一死いっしょもつ似て大悪を誅ちかす。それこそが護廷十三隊の意気と知れ！こ

の靈圧ならばその靈刀とやらにすぐに吸われはせぬだろう！」

その目は、その覚悟は、その靈圧は惜しみなく広がっていく

靈刀に炎が取り込まれる前により膨大なものをぶつける——だが

白煙と共に炎が一瞬にして無にかえる

「私がそれを考えないわけは無いだろう？」

山本元柳齋重國が放つ技は、滅火皇子エステインデルの能力により消されたのだ。

だが一瞬にして衝撃音と共に破面は遙か彼方に飛んでいく

「あまい…甘いわい。流刃若火を封じれば儂を討てると思うてか、なぜワシが護廷十三隊の総隊長を務めてると思うておる。あやつにも、貴様にも負けはせぬ！」

藍染惣右介は無傷でそこに立っていた。

「ぐう——っ」

クレータークレーターの中心にひれ伏す山本元柳齋、

「山本元柳齋、尸魂界の歴史そのものである君は、せめて私の剣でトドメを刺そう」

刀を抜いた藍染が山本元柳斎へ刀を振り下ろそうとする——が
「舐めるなよ——小童」

焼き焦がした我が身を触媒としてのみ発動できる禁術

禁術 破道の九十六——

一刀火葬

反射的に霊刀により吸収するが、藍染の足を掴んで直接発動された破道ダメージは0ではない。

月牙天衝

一護が藍染を吹き飛ばし下がらせる

一護の斬魄刀に霊刀が宿っているせいか、一護は藍染に一太刀をいれる——が。
シウウウつと音をたて、体の傷が治っていく

「超速再生……！」

「ふっ——私が虚化などすると思うか？これは主に対する防衛本能……」

藍染の胸には崩玉が埋め込まれていた。

「君は私の探究の最高の素材だ。君は朽木ルキアと出会い、石田雨竜との戦いを経て死神としての力に目覚めた、浦原喜助との修行で霊刀の力を知り、阿散井恋次との戦いで自らの斬魄刀の力を知り、更木剣八との戦いで卍解への足がかりを、朽木白哉との戦いで虚化へと踏み出した。」

「全て私の掌の上だ」

ドクン

心臓の音が聞こえた気がした。

藍染は続ける

「1度もおかしいとは思わなかったのかい？ 出会いは運命だとも思ったのかい？ 出会いは偶然だとも？ 襲撃も偶然だとも思ったのかい？」

それ以上聞きたくはないとも言うように一護は藍染に斬りかかる

「こんなものじゃないはずだ、君の今の力は—— さあ、霊刀の力を見せてくれ。初代の破片を」

「あんたさつき言ったよな。あんたの探究の素材だ……って。なんでだ、何を根拠に確信した？」

一護の体は震え、冷や汗が肌に流れる

「最初からだよ、私は君が産まれた時から知っている

君は産まれた瞬間から特別な存在、そしてあの日更に特別になった。なぜ、君が靈刀をなぜ君が死神の力を——何故ならば君は、死神と——」

爆音と共に現れた

「喋りすぎだぜ、藍染」

黒崎一心

すぐに一護を頭突きして蹴り飛ばし距離を取った一心

「距離を取ったか、聡明な判断だ、浦原維助の弟子なだけはある」

藍染は黒崎一護に興味を持っていた、虚の力。死神の力。

そして、黒崎真咲が虚に襲われた日に一護に半分移った靈刀

そんな存在、興味を示さないわけが無い。

再び一心は藍染の元へ、一護はギンとそれぞれ戦闘を始める

藍染の胸元の崩玉から、何かが溢れでる

「物を考えず直感で名づけろ兄とは違い——崩玉とはよく名付けたものだ、正しくこれは神なるものと神ならざるものとの交わらざる地平を凌ぐ打ち崩す力だ!!」

だが、その胸を貫通する青い光——

「やはり、崩玉と霊刀のバランスは崩れるようツスね。」

「来たか——浦原喜助」

崩れたビルの上で帽子を押えた喜助が霊銃片手に藍染を見下ろす

「お久しぶりツス。藍染サン、随分——珍しい格好ツスね」

「何事も進化の途中というものは醜いものだ」

崩玉と融合した藍染の姿が変わっていく

「融合ではなく、従えた——と言ってもらおうか、君が御しれなかった崩玉を……ね」

「御しきれなかった、そうツスね……当時は」

「当時？ 実に明確な負け惜しみだ。いや、それが負け惜しみかどうかはどちらでもいいこと。君は崩玉を御する機会を—— 永遠に失うのだから」

藍染が刀で喜助の胸を貫いた—— かと思えば。

「甘いッスね」

パァンッと破裂する喜助、携帯用義骸と入れ替わっていたのだ。

六杖光牢

藍染を六つの光が拘束する。

「この程度の縛道で私を縛ってどういうつもりだい、それに霊刀…崩玉と融合し不安定とはいえ能力は変わっていない。こんなもの…」

だが、鬼道は消えず目を見開く

「あら…鬼道が消えなくて驚いちゃったのかしら」

「ふっ—— 黒崎真咲…」

藍染の胸を貫く青く光る剣。

髪をなびかせる黒崎真咲がふと笑う

「その不安定な霊刀、私の霊刀で簡単に抑え込める、甘いんではなくて？」

そして喜助の鎖状鎖縛と九曜縛に藍染は固められる

喜助は目を鋭くさせ杖を向ける

「千手の涯 届かざる闇の御手 映らざる天の射手 光を落とす道 火種を煽る風 集いて惑うな我が指を見よ 光弾・八身・九条・天経・疾宝・大輪・灰色の砲塔 弓引く彼方 皎皎として消ゆ」

その詠唱に目を見開く

「甘いッスね…鬼道は兄サンに勝てる唯一の得意技でして」

破道の九十一

―千手皎天汰炮―

真咲はその瞬間に剣を抜き飛び退き

赤い光が藍染の元へ降り注ぐ

轟々と大爆発が空中で巻き起こり、残っていたビルのガラスが衝撃波で砕け散る

「藍染サン、貴方は本当に…崩玉の力を取り込んだことで油断したんすね。霊刀も未成のようだ」

「違うね――― 霊刀は君らのためじゃない」

喜助の体から鮮血が舞う

「九十番台の鬼道ですら、躲すに値しない。」

「違いますよ、鬼道を躲さなかつたことが油断だと言っているんじゃない。昔のあなたなら、なんの策も無く僕に2度も触れさせることは無かつた」

藍染の手首から光が溢れ出る

「これは——！」

「封ツス。すべての死神の両手首にある霊圧の排出口を塞ぎました。貴方の霊刀は貴方の斬魄刀ではなく体と融合した。つまり霊子を吸い取り己の霊圧へと変換しそれは己の霊圧と合わせり膨大なエネルギーとなる。」

排出口が塞がり——貴方は己自身の霊圧で内側から焼き尽くされる」

次の瞬間雲が吹き飛び流れるほどに、轟音と光が辺り一体を包み込む

「倒した…のか？それにお袋…！その刀」

つとその光景を見て一護がこぼす

「いいえ、あれで死ぬんならただのバケモノですむ話ツス」

「一護、話は後よ——きつと出てくる」

「その通りだ」

目を離してもいないのに気配も感じていないのに。

藍染は白で全身を埋めつくした姿で真咲らの間に現れた

その場の全員がその姿にハツといきをのみこむ

「自ら開発した鬼道で内側からやく——私が相手じゃなければ、否——。崩玉を捉えた私じゃなければ、勝負は終わっていただろう。残念ながら君が作った崩玉も浦原維助が作った霊刀も理解を超えているものとなった

私の霊刀は斬魄刀ではなく魂と、体と融合した。己の意思で霊子を吸い取り己の力に変換。それは正解だ流石は浦原維助の弟なだけはある。不安定なものも肯定しよう」

胸元の崩玉に触れる藍染

「この子らは仲が悪いようだね、だがそのうち完璧に融合するだろう。そうすれば別の霊刀ですら抑え込めるようになり、霊子で形作った攻撃や防御の完全無効化、霊子を己の霊力に変換したあの攻撃を数段の力に変換し放出——黒崎真咲、君の霊刀：いいや浦原維助が作った霊刀など、とうに超えているのだ。完全に支配し飲み込まれることもない、意思があるからこそ理想の形に進化する。」

そう、別な霊刀で対処する、そして吸収を上回る膨大なエネルギーをぶつける事、その二つの弱点が無くなるというのだ。

斬魄刀の鞘を抜いた浦原喜助

「ふっ…聡明な判断だ。術が効かぬなら力で。だが浦原維助の弟とはいえ」

「甘い、何度言わせるんスカ。ボクが何度あの人の剣をみて、刀を交わしたと？ 貴方よりも何倍も彼を見てきた」

「ふっ——確かに私は君を甘く見ていたようだ」

腕が痺れるような痛みを感じ

片手で喜助の刀を受け止めた藍染が笑いを零す

後ろから一心が襲い、腕と足に鎖を繋ぐ

「なんのつもりだ——こんなもの……！ なっ 四楓院夜一」

先程まで藍染がいた場所は土煙で覆われた、上空から夜一が藍染に攻撃を食らわせたからである

「どうじゃ…少しは——」

「っ…！ 夜一サン！ 避けてください！！」

夜一のつけていた片足の鉄甲が砕け散り咄嗟に距離をとる

立ち上がった藍染は無傷であった——。

「たいていよろ 対鋼皮用に作った特性の鉄甲だったんすけどねえ……こんな簡単に壊されるとは」

「なんじゃ！ 儂が気を抜いたせいだともいいたいのか？ ん？」

「いやーそんなんじやないんすけど……」

「作り込みが甘かったせいじゃろ!!」

夜一の足に目を向けた藍染

「成程、確かに特別なもののように、私の一撃で足が無傷というのは、浦原維助の弟なだけはある」

「儂の足が特別なんじや」

「……藍染サン。１ついいっすか」

そんな藍染に喜助は鋭い目を向ける

「ずっと疑問だったんすよねえ。どうして兄サンにそこまで執着するんすか」

浦原維助の弟なだけはある

浦原維助の弟子だな

浦原維助の

確かに藍染は浦原維助のことばかりを口にしていた。

「彼は特別だからだ」

「特別？」

「初めて噂を聞いた時から、初めて会った時から初めて彼の技術を見てから。私は特別なものだと理解した。あらゆるものを手がけ、あらゆるものを生み出し、あらゆる歴史を形作り、あらゆるものを力でねじふせる。これぞ強者である特別なものだと。」

私は彼を理解し彼の思想を肯定し、彼と渡り合える力をようやく手に入れた。特別な死神を特別視するのは当たり前のことだろう?」

すると、喜助に問うように首を傾げる藍染

「なぜ、私ばかりを敵視するのか理解できないな。私は崩玉と霊刀を使い君達の敵となった…が、内側にいる浦原維助はどうだと思ふ。切つても切れない尸魂界の一部となり、法を作り味方を作り、思想を作り、外堀を埋めた彼は…敵では無い。そう言い切れるのか」

その言葉に目を見開く一護

霊刀を作った維助。藍染と知り合いの維助。

外堀を埋めている、内側から吞まれる。

確かに——— そう思えば…つと一護は思考をめぐらせる。

「私と彼はやり方が違うだけ——— そうは思わないのかい」

「弟であるボクが…兄の行動に気を使わないとでも? 知ってますよオ。貴方が兄サンを

知るずっと前から：ね。それを対策しないボクじゃない。あらゆる未来を想定している、兄を止めるのは弟であるボクの役目ツスから」

「成程」

一護はなんの話をしているのかは理解できなかった。

そう：だが、藍染と喜助は話が噛み合い自分の知らない何かを話している、それは理解できた。

「なあに、面白そうな話してんじゃん。俺の事大好きかよ2人とも」

その雰囲気合わない呑気な声が上空から聞こえる

「いやあ、弟と男に言われてもねえ：女の子に言われるならまだしも：」

よつとでも言いたげに片手を上げた浦原維助が現れたのだ。

「ようやくお出ましか——随分と遅かったじゃないか」

「本当に惣右介：？だよな、なんか姿変わったなイメチェン？いやあ、ちよつと黒腔走つてたら落ちちやつて！」

落ちれば虚圏と現世のどこもしれぬ空間に落ちて帰ってこられなくなる——はずなのだが

「いやなんでそれで戻ってこれたんすか。」

「いやあ、頑張った」

「頑張ったつてお主……」と呆れたような目を向ける。

スタツと夜一の隣に立った維助

「とりあえず久しぶりだな、惣右介。いやあ、過大評価してるところ悪いし俺が敵とか何とか言ってるけど……夜一さんと喜助がいる限り。俺はこっち側だよ」

「へえ」

2人の後ろに周り肩を組む維助

「まあ、やろうと思えば頂点にたてるだろうね。俺強いし、もう最強つてかんじ？まあ、全てを手に入れたら面白そうだなうって思ったことあるよ？そりゃ男は勇者だけじゃなく魔王にも憧れるもんだろ？」

惣右介はゲームわかんないか、つと零す維助が心底楽しそうに笑う。

「でも俺2人のこと大好きだからさあ。こっち側にこの2人がいる限りおれはこっち側、もし2人が世界の敵になるなら俺は喜んで2人につくよ。」

そして喜助が俺に埋め込んだもんはいわゆる保険だよ。とつくに気づいてるさ、そういう喜助だーいすきだぜ。」

それに、敵に回すと俺の技術見てもらう人減っちゃう。なんて言つて2人に体重かけ

る維助

「重いつス。」

うりうりと、頭を撫でる維助に心底ウザそうな顔を向ける喜助

「て、照れるじゃろ…」

大好きなんて…つと口をとがらせてそっぽを向く夜一

「そうか——なら。その手網を斬ってしまおう」

理想の霊刀——それは対維助の為に。

崩玉との融合で反発し不安定とはいえ

判明している能力だけでも——

鬼道系の攻撃の無効化、更に意識を吞まれず、霊子を確実に操り、吸収し霊力に変換し、攻撃力を上げ放出、崩玉と融合したことにより限界値は無いに等しく——。

自分で自在に操れる霊刀、オンオフも自由。意志を持っているため不意打ちすら無効化し、並の死神なら霊力を全て吸われ消滅する。

——そして維助の全てを防御する霊圧硬化も剥ぎ取る。

「はは、全力バフをかけたお前を倒す俺、かつこいいだろうなあ、そうだろうか？久しぶり

に
――
剣を交わそうか」